

相原コージ  
青柳裕介  
赤瀬川原平  
あがた森魚  
秋竜山  
東元  
安彦麻理絵  
安部慎一  
天久聖一  
荒木経惟  
安西水丸  
池上遼一  
井坂洋子  
石川浩司  
石川次郎  
石ノ森章太郎  
泉晴紀  
泉谷しげる  
イタガキノブオ  
糸井重里  
井上誠  
岩本久則  
上野昂志  
上杉清文

# ガロ曼陀羅

内田春菊  
蛭子能収  
大越孝太郎  
大槻ケンヂ  
岡崎京子  
岡留安則  
奥平イラ  
小野耕世  
勝又進  
鴨沢祐仁  
唐沢俊一  
唐沢なをき  
唐十郎  
かわぐちかいじ  
川崎ゆきお  
川本三郎  
菅野修  
喜国雅彦  
木村恒久  
木元ひわこ  
久住昌之  
黒川創  
高信太郎  
香田明子

TBSフリタニカ

『ガロ』史編纂委員会＝編

斎太郎  
呉智英  
近藤ようこ  
斉木しげる  
さいとう・たかを  
サエキけんぞう  
桜沢エリカ  
佐々木マキ  
佐々木守  
佐藤忠男  
佐藤義昭  
沢田としき  
実相寺昭雄  
篠原勝之  
志村勝紀  
白取千夏雄  
しいあがり寿  
杉浦日向子  
杉作J太郎  
スージー甘金  
鈴木鶴二  
高市真紀  
高取英  
高野慎三  
高橋聡  
滝田順子  
竹熊健太郎  
辰己ヨシヒロ  
谷弘児  
たむらしげる  
知久寿焼  
つけ忠男  
つけ義春  
土橋とし子  
津野裕子  
津山週三  
鶴見俊輔  
手塚能理子  
トオジヨオミホ  
とま雅和  
とり・みき  
長井勝一  
永井豪  
永島慎二  
長谷邦夫  
長戸雅之

GARO  
Mandala



# ガロ曼陀羅

あなたの青春は何頁から始まりますか。  
時代もあなたもガロと一緒に。  
四〇〇人も表現者の軌跡と情念。

『ガロ』史編集委員会II編

なごら健志  
根本敬  
畑中純  
花輪和一  
林静一  
原口健一郎  
羽良多平吉  
ひさうちみちお  
平口広美  
藤沢光男  
古川益三  
巻上公一  
ますむらひろし  
松沢興一  
松田哲夫  
松本充代  
マティ上原  
丸尾末広  
みうらじゅん  
みぎわパン  
水木しげる  
三橋乙郎  
南伸坊  
南端利春  
峰岸達  
村上知彦  
村瀬春樹  
村野守美  
森元博之  
矢口高雄  
夜久弘  
矢崎幸久  
安彦良和  
谷田部周次  
やまた紫  
山中洲  
山ノ井靖  
山野一  
山根貞男  
湯村輝彦  
吉田聡卓  
吉田光彦  
淀川さんぼ  
米沢嘉博  
四方田犬彦  
渡辺和博

TBSブリタニカ  
定価一八〇〇円(本体一七四八円)



ISBN4-484-91222-8 C0079 P1800E



月刊  
漫画

ガロ

7月号

カムイ伝 ⑳

赤目プロ作品  
白土三平



月刊  
漫画

ガロ

No. 30  
1968  
8月号



カムイ伝 ㉑

赤目プロ作品  
白土三平

月刊  
漫画

ガロ

No. 33  
1967  
5月号



カムイ伝 ㉒

赤目プロ作品  
白土三平

月刊  
漫画

ガロ

No. 31  
1967  
3月号  
特大号



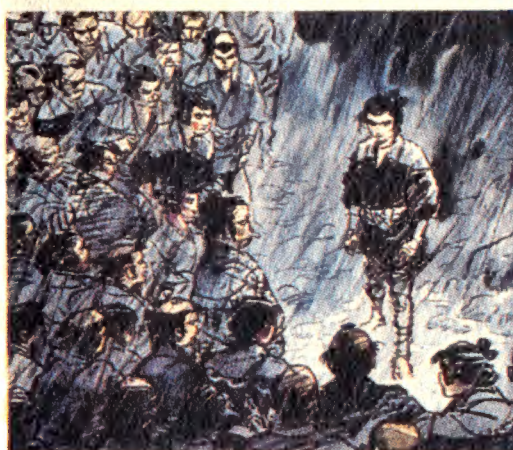
カムイ伝 ㉓ 180枚

赤目プロ作品  
白土三平

月刊  
漫画

ガロ

No. 41  
1968  
1月号



カムイ伝 ㉔  
鬼太郎夜話 ⑧

赤目プロ作品  
水木プロ製作  
白土三平  
水木しげる

月刊  
漫画

ガロ

No. 50  
1968  
9月号



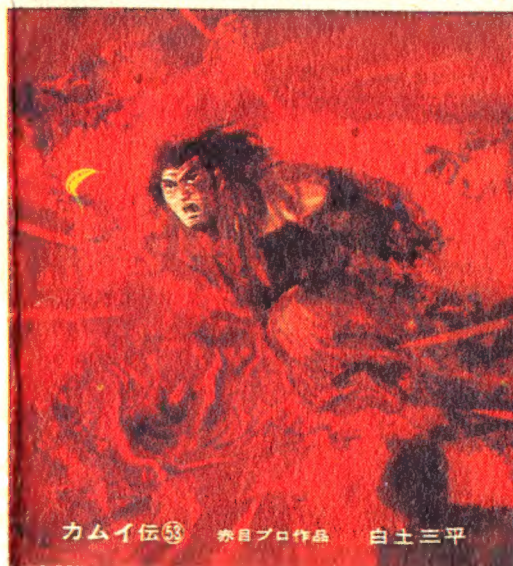
カムイ伝 ㉕  
鬼太郎夜話 ⑨

赤目プロ作品  
水木プロ製作  
白土三平  
水木しげる

月刊  
漫画

ガロ

No. 64  
1969  
8月号



カムイ伝 ㉖ 赤目プロ作品 白土三平

月刊  
漫画

ガロ

No. 60  
1969  
5月号



カムイ伝 ㉗ 赤目プロ作品 白土三平



月刊  
漫画

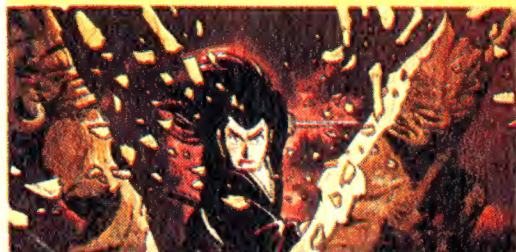
ガロ

No.2  
1964  
10月号

■白土三平傑作選集②

後編がえり  
新巻 三平

■西山寛次  
新巻 三平



月刊  
漫画

ガロ

No.1  
1964  
9月号

■白土三平傑作選集①

前編がえり  
新巻 三平

■西山寛次  
新巻 三平

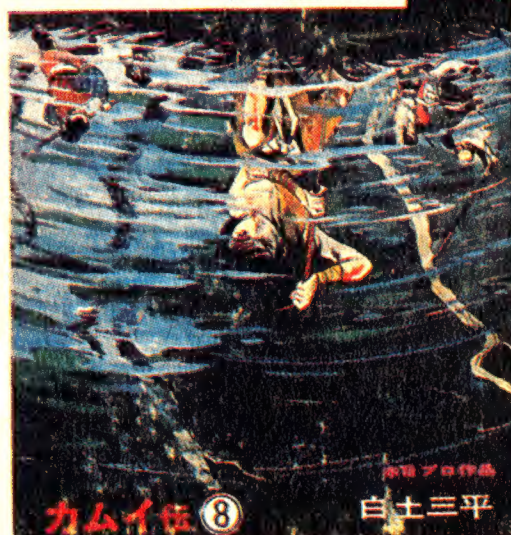


月刊  
漫画

ガロ

No.11  
1965  
7月号

JUNIOR MAGAZINE



カムイ伝⑧

赤目プロ作品  
白土三平

月刊  
漫画

ガロ

No.10  
1965  
6月号

JUNIOR MAGAZINE



カムイ伝⑦

赤目プロ作品  
白土三平

月刊  
漫画

ガロ

No.14  
1965  
10月号

JUNIOR MAGAZINE



カムイ伝⑪

赤目プロ 白土三平

月刊  
漫画

ガロ

No.12  
1965  
8月号

JUNIOR MAGAZINE



カムイ伝⑨

赤目プロ  
白土三平

月刊  
漫画

ガロ

No.16  
1966  
1月号

SENIOR MAGAZINE



カムイ伝⑬

赤目プロ作品  
白土三平

月刊  
漫画

ガロ

No.22  
1966  
6月号

SENIOR MAGAZINE



カムイ伝⑲

赤目プロ作品  
白土三平

カバーデザイン＝南伸坊



No.1 表紙Ⅱ白土三平  
朝日ジャーナルの表紙を彷彿させるデザイン。



No.2 表紙Ⅱ白土三平



No.3 表紙Ⅱ白土三平



No.4 表紙Ⅱ白土三平



No.5 表紙Ⅱ白土三平



No.6 表紙Ⅱ白土三平



No.12 表紙Ⅱ白土三平



No.13 表紙Ⅱ白土三平



No.14 表紙Ⅱ白土三平



No.15 表紙Ⅱ白土三平



No.16 表紙Ⅱ白土三平



No.17 表紙Ⅱ白土三平



No.18 表紙Ⅱ白土三平



No.19 表紙Ⅱ水木しげる



No.20 表紙Ⅱ白土三平



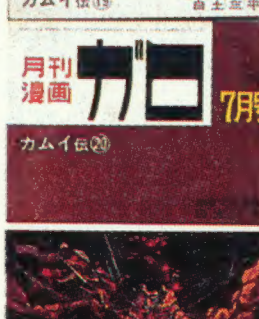
No.21 表紙Ⅱ白土三平



No.22 表紙Ⅱ白土三平



No.23 表紙Ⅱ白土三平



No.24 表紙Ⅱ白土三平



No.25 表紙Ⅱ白土三平



No.26 表紙Ⅱ白土三平



No.27 表紙Ⅱ白土三平



No.28 表紙Ⅱ白土三平



No.29 表紙Ⅱ白土三平



No.30 表紙Ⅱ白土三平



No.31 表紙Ⅱ白土三平



No.32 表紙Ⅱ白土三平



No.33 表紙Ⅱ白土三平



No.34 表紙Ⅱ白土三平



No.35 表紙Ⅱ白土三平



No.36 表紙Ⅱ白土三平



No.37 表紙Ⅱ白土三平



No.38 表紙Ⅱ白土三平



No.39 表紙Ⅱ白土三平



※2号から20号まではJUNIOR MAGAZINEと銘打たれている。



No.40 表紙||白土三平

No.41 表紙||白土三平

No.42 表紙||白土三平

No.43 表紙||白土三平

No.44 表紙||白土三平

No.45 表紙||水木しげる

No.46 表紙||白土三平

No.47 表紙||つげ義春

No.48 表紙||白土三平

No.49 表紙||白土三平

No.50 表紙||白土三平

No.51 表紙||林静一

No.52 表紙||白土三平

No.40 月刊漫画 **ガロ** 12月号

No.41 月刊漫画 **ガロ** 1月号

No.42 月刊漫画 **ガロ** 2月号

No.43 月刊漫画 **ガロ** 3月号

No.44 月刊漫画 **ガロ** 4月号

No.45 月刊漫画 **ガロ** 5月号

No.46 月刊漫画 **ガロ** 6月号

No.47 表紙||つげ義春  
「ねじ式」の発表の場となった、初の臨時増刊号。

No.53 表紙||永島慎一

No.54 表紙||白土三平

No.55 表紙||白土三平

No.56 表紙||白土三平

No.57 表紙||白土三平

No.58 表紙||白土三平

No.59 表紙||滝田ゆう

No.60 表紙||白土三平

No.61 表紙||白土三平

No.62 表紙||白土三平

No.63 表紙||永島慎一

No.64 表紙||白土三平

No.47 月刊漫画 **ガロ** 6月増刊号

No.53 月刊漫画 **ガロ** 7月号

No.54 月刊漫画 **ガロ** 8月号

No.55 月刊漫画 **ガロ** 9月号

No.56 月刊漫画 **ガロ** 10月号

No.57 月刊漫画 **ガロ** 11月号

No.58 月刊漫画 **ガロ** 12月号

No.59 月刊漫画 **ガロ** 1月号

No.60 月刊漫画 **ガロ** 2月号

No.61 月刊漫画 **ガロ** 3月号

No.62 月刊漫画 **ガロ** 4月号

No.63 月刊漫画 **ガロ** 5月号

No.64 月刊漫画 **ガロ** 6月号

No.65 表紙||白土三平

No.66 表紙||白土三平

No.67 表紙||勝又進

No.68 表紙||白土三平

No.69 表紙||白土三平

No.70 表紙||滝田ゆう

No.71 表紙||白土三平

No.58 月刊漫画 **ガロ** 4月増刊号

No.59 月刊漫画 **ガロ** 4月増刊号

No.60 月刊漫画 **ガロ** 5月号

No.61 月刊漫画 **ガロ** 6月号

No.62 月刊漫画 **ガロ** 7月号

No.63 月刊漫画 **ガロ** 7月増刊号

No.64 月刊漫画 **ガロ** 8月号

No.72 表紙||林静一

No.73 表紙||白土三平

No.74 表紙||白土三平

No.75 表紙||白土三平

No.76 表紙||池上遼一

No.77 表紙||白土三平

No.78 表紙||白土三平

No.65 月刊漫画 **ガロ** 9月号

No.66 月刊漫画 **ガロ** 10月号

No.67 月刊漫画 **ガロ** 10月増刊号

No.68 月刊漫画 **ガロ** 11月号

No.69 月刊漫画 **ガロ** 12月号

No.70 月刊漫画 **ガロ** 1月号

No.71 月刊漫画 **ガロ** 2月号

No.72 月刊漫画 **ガロ** 2月増刊号

No.73 月刊漫画 **ガロ** 3月号

No.74 月刊漫画 **ガロ** 4月号

No.75 月刊漫画 **ガロ** 5月号

No.76 月刊漫画 **ガロ** 5月増刊号

No.77 月刊漫画 **ガロ** 6月号

No.78 月刊漫画 **ガロ** 7月号



No.79 表紙Ⅱ白土三平 No.80 表紙Ⅱ楠勝平 No.81 表紙Ⅱ白土三平 No.82 表紙Ⅱ白土三平 No.83 表紙Ⅱ白土三平 No.84 表紙Ⅱ白土三平 No.85 表紙Ⅱつりたくに



No.86 表紙Ⅱ白土三平 No.87 表紙Ⅱ白土三平 No.88 表紙Ⅱ白土三平 No.89 表紙Ⅱ辰巳ヨシヒロ No.90 表紙Ⅱ白土三平 No.91 表紙Ⅱつげ義春 No.92 表紙Ⅱ白土三平



No.93 表紙Ⅱつげ忠男 No.94 表紙Ⅱ白土三平 No.95 表紙Ⅱ白土三平 No.96 表紙Ⅱ林静一 No.97 表紙Ⅱ林静一 No.98 表紙Ⅱ林静一 No.99 表紙Ⅱ林静一



No.100 表紙Ⅱ林静一 No.101 表紙Ⅱ林静一 No.102 表紙Ⅱ佐々木マキ No.103 表紙Ⅱ勝又進 No.104 表紙Ⅱふじ沢光夫 No.105 表紙Ⅱ辰巳ヨシヒロ No.106 表紙Ⅱ古川益三



No.107 表紙Ⅱ水木しげる No.108 表紙Ⅱ池上遼一 No.109 表紙Ⅱ鈴木翁一 No.110 表紙Ⅱ花輪和一 No.111 表紙Ⅱ安部慎一 No.112 表紙Ⅱ赤瀬川原平 No.113 表紙Ⅱ川崎ゆきお



No.114 表紙Ⅱ安部慎一 No.115 表紙Ⅱ永島慎一 No.116 表紙Ⅱ勝又進 No.117 表紙Ⅱつげ忠男 No.118 表紙Ⅱ花輪和一 No.119 表紙Ⅱ赤瀬川原平 No.120 表紙Ⅱふじ沢光夫



※73年度表紙デザイン(構成)=林静一







No.163 表紙 湯村輝彦 No.164 表紙 湯村輝彦 No.165 表紙 湯村輝彦 No.166 表紙 湯村輝彦 No.167 表紙 湯村輝彦 No.168 表紙 湯村輝彦 No.169 表紙 湯村輝彦



No.170 表紙 湯村輝彦 No.171 表紙 鴨沢祐仁 No.172 表紙 鴨沢祐仁 No.173 表紙 鴨沢祐仁 No.174 表紙 鴨沢祐仁 No.175 表紙 鴨沢祐仁 No.176 表紙 鴨沢祐仁



No.177 表紙 鴨沢祐仁 No.178 表紙 鴨沢祐仁 No.179 表紙 鴨沢祐仁 No.180 表紙 鴨沢祐仁 No.181 表紙 鴨沢祐仁 No.182 表紙 永島慎一 No.183 表紙 永島慎一



No.184 表紙 永島慎一 No.185 表紙 永島慎一 No.186 表紙 永島慎一 No.187 表紙 永島慎一 No.188 表紙 永島慎一 No.189 表紙 永島慎一 No.190 表紙 永島慎一



No.191 表紙 永島慎一 No.192 表紙 永島慎一 No.193 表紙 永島慎一 No.194 表紙 永島慎一 No.195 表紙 永島慎一 No.196 表紙 永島慎一 No.197 表紙 永島慎一



No.198 表紙 永島慎一 No.199 表紙 永島慎一 No.200 表紙 永島慎一 No.201 表紙 永島慎一 No.202 表紙 永島慎一 No.203 表紙 永島慎一 81年度背表紙 (デザイン 羽良多平吉)





No.204 表紙＝勝又進

No.205 表紙＝鴨沢祐仁

No.206 表紙＝こりたぐに

No.207 表紙＝永島慎一

No.208 表紙＝林静一

No.209 表紙＝安西水丸

No.210 表紙＝水木しげる



No.211 表紙＝渡辺和博

No.212 表紙＝佐々木マキ

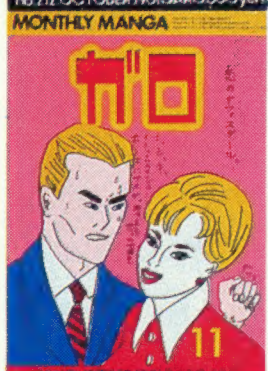
No.213 表紙＝湯村輝彦

No.214 表紙＝南伸坊

No.215 表紙＝湯村輝彦

No.216 表紙＝湯村輝彦

No.217 表紙＝湯村輝彦



No.218 表紙＝湯村輝彦

No.219 表紙＝湯村輝彦

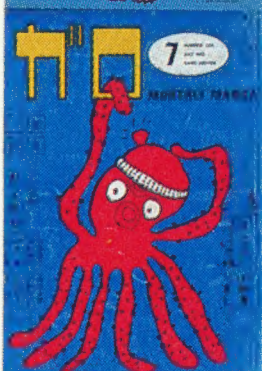
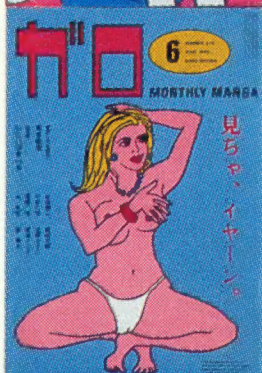
No.220 表紙＝湯村輝彦

No.221 表紙＝湯村輝彦

No.222 表紙＝湯村輝彦

No.223 表紙＝湯村輝彦

No.224 表紙＝湯村輝彦



No.225 表紙＝湯村輝彦

No.226 表紙＝湯村輝彦

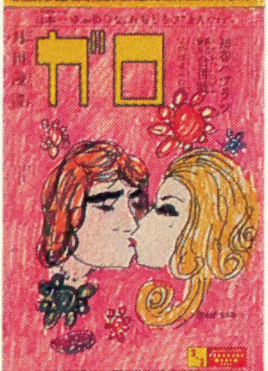
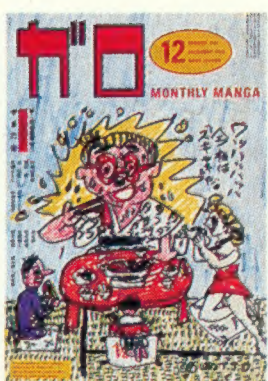
No.227 表紙＝湯村輝彦

No.228 表紙＝湯村輝彦

No.229 表紙＝湯村輝彦

No.230 表紙＝湯村輝彦

No.231 表紙＝湯村輝彦



No.230 表紙＝湯村輝彦

No.231 表紙＝湯村輝彦

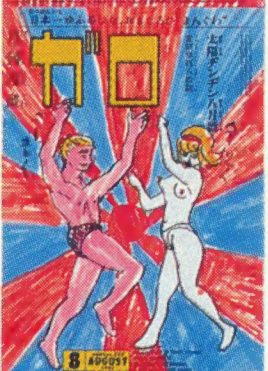
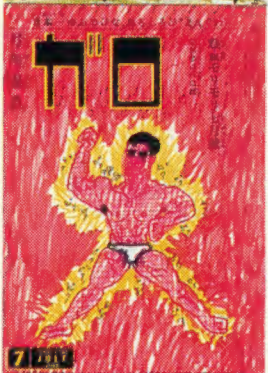
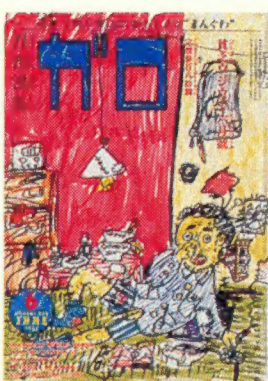
No.232 表紙＝湯村輝彦

No.233 表紙＝湯村輝彦

No.234 表紙＝湯村輝彦

No.235 表紙＝湯村輝彦

No.236 表紙＝湯村輝彦



No.235 表紙＝湯村輝彦

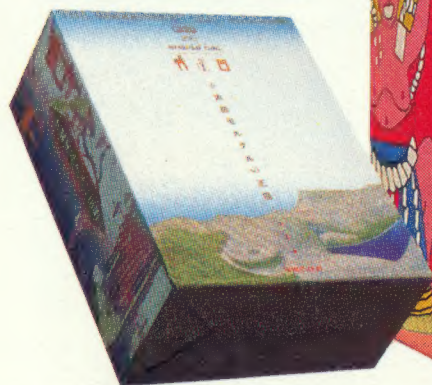
No.236 表紙＝湯村輝彦

No.237 表紙＝湯村輝彦

No.238 表紙＝湯村輝彦

No.239 表紙＝湯村輝彦

No.240 表紙＝湯村輝彦



『木造モルタルの王国』(装丁＝羽良多平吉)

82年度背表紙(デザイン＝羽良多平吉)





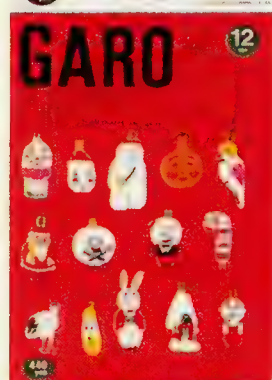
83～90年度背表紙(デザイン・構成=羽良多平吉) ※83～87年度表紙デザイン=ステレオ藤原、モノラル林



※91年度表紙デザイン＝原口健一郎



No.312 表紙＝南伸坊



No.313 表紙＝南伸坊



No.314 表紙＝井口真吾



No.315 表紙＝根本敬



No.316 表紙＝ねいじろ



No.317 表紙＝石川次郎



No.318 表紙＝丸尾末広



No.305 表紙＝南伸坊



No.306 表紙＝南伸坊



No.307 表紙＝南伸坊



No.308 表紙＝南伸坊



No.309 表紙＝南伸坊



No.310 表紙＝南伸坊



No.311 表紙＝南伸坊



No.298 表紙＝南伸坊



No.299 表紙＝南伸坊



No.300 表紙＝南伸坊



No.301 表紙＝南伸坊



No.302 表紙＝南伸坊



No.303 表紙＝南伸坊



No.304 表紙＝南伸坊



No.291 表紙＝南伸坊



No.292 表紙＝南伸坊



No.293 表紙＝南伸坊



No.294 表紙＝南伸坊



No.295 表紙＝南伸坊



No.296 表紙＝南伸坊



No.297 表紙＝南伸坊



No.284 表紙＝南伸坊



No.285 表紙＝南伸坊



No.286 表紙＝南伸坊



No.287 表紙＝南伸坊



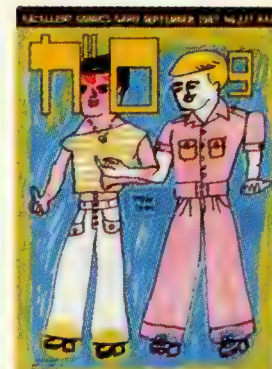
No.288 表紙＝南伸坊



No.289 表紙＝南伸坊



No.290 表紙＝南伸坊



No.277 表紙＝湯村輝彦



No.278 表紙＝湯村輝彦



No.279 表紙＝湯村輝彦



No.280 表紙＝湯村輝彦



No.281 表紙＝南伸坊



No.282 表紙＝南伸坊



No.283 表紙＝南伸坊

▼ to be continued....

※88～90年度表紙デザイン＝SHINBO'S STUDIO



# 『ガロ曼陀羅』 目次

巻頭カラー➡『ガロ』全表紙グラフィティ	
長井勝一➡はじめに	6
山中潤➡運命的な出会いに感謝を込めて	8
第1章 モーゼルの勝ちちゃん	9
村瀬春樹➡『ガロ』グラフィティ'60〜'90	10
林静一➡あの頃	13
水木しげる➡君、富み給うことなかれ	18
つげ義春➡青林堂主人	20
青柳裕介➡マンガ界の宇野重吉	23
村野守美➡二二歳の時	24
佐々木マキ➡フィクサー、ながい	26
安部慎一➡影響	28
杉浦日向子➡懐の深さに感動	30
矢崎泰久➡もし『ガロ』がなかったら	32
第2章 『ガロ』白書	33
矢口高雄➡逸脱した人生	34

小野耕世➡GAROを海外に送り続けて	37
永島慎二➡色々な人がささえた『ガロ』	40
あがた森魚➡魔の雑誌の誘惑	42
鈴木翁二➡叙場性―『ガロ』の理由	45
赤瀬川原平➡『ガロ』は長嶋茂雄かな	48
岩本久則➡『ガロ』が①番	50
久住昌之➡『ガロ』は誌名がイイ!!	51
泉晴紀➡「泉昌之」誕生の真相	53
秋竜山➡うーん、こういう漫画もある!!	54
勝又進➡『ガロ』のこと	56
佐藤義昭➡家出少年と日本文化の中心	59
佐々木守➡サンクチュアリー『ガロ』	60
実相寺昭雄➡死に至る病	61
泉谷しげる➡やっぱり『ガロ』的に!	62
サエキけんぞう➡子供を脳ミソ不良に	
させる『ガロ』に	63
さいとう・たかを➡読者として楽しんだ『ガロ』	64



第3章 カムイたちの贈り物……………65

上野昂志⇩青年マンガ黎明期から

発展の時代へ……………66

川本三郎⇩片隅の抒情……………80

長谷邦夫⇩つげ義春作品の大ショック……………82

とま雅和⇩神出鬼没の妖しい本……………83

菅野修⇩『ガロ』と20年……………84

斎木しげる⇩密やかでエネルギーシユな世界……………86

近藤ようこ⇩カムイ伝に大ショック……………88

滝田順子⇩なんのことだか自慢話……………90

第4章 異色作家の殿堂……………91

高野慎三⇩初期『ガロ』を支えた作家たち……………92

つげ忠男⇩『ガロ』忘年会参加のこと……………95

蛭子能収⇩チャンスくれた『ガロ』……………98

たむらしげる⇩純粋に『ガロ』出身者とは

言えないけれど……………101

辰巳ヨシヒロ⇩腹ペコ『ガロ』……………102

高取英⇩悪友めいたもう一人の教師……………104

マディ上原⇩『ガロ』最員の私的

恣意的『ガロ』雑感……………106

高信太郎⇩私と『ガロ』……………108

平口広美⇩ペンと女体の触感……………109

谷弘児⇩深夜の妄想―『ガロ』怪談……………110

唐十郎⇩『ガロ』という窓口……………112

篠原勝之⇩糸姫誕生……………113

古川益三⇩手さぐり歩き……………115

ひさうちみちお⇩すごい編集部……………116

川崎ゆきお⇩普通には味わえないスリル……………118

土橋とし子⇩憧れの女流漫画家……………120

南端利晴⇩前代未聞の文士劇……………122

みうらじゅん⇩『ガロ』こそ全て……………124

みうらじゅん⇩(マンガ)『ガロ』差別……………125

第5章 広がる表現形態……………129

村上知彦⇩『ガロ』的なるものを……………129

めぐって'80〜'90……………130

安西水丸⇩ぼくと『ガロ』のこと……………136

奥平イラ⇩インパクトの勝利……………137

沢田としき⇩一番身近にあった『ガロ』……………138

峰岸達⇩イラストレーターの挑戦……………139

糸井重里⇩私と『ガロ』のつながりなど……………140

湯村輝彦⇩NGになった表紙案……………142



第6章 憧れの『ガロ』	143
なぎら健彦⇩夢をありがとう	144
畑中純⇩すれちがい	146
安彦良和⇩『ガロ』持込みのこと	148
スージィ甘金⇩的確なアドバイスを	
いただき	150
とり・みき⇩『ガロ』は怖い	151
喜国雅彦⇩青春の蹉跎	152
相原コージ⇩ここは「まんが道」の時代か	154
竹熊健太郎⇩事実上の恩師	155
天久聖一⇩『ガロ』とサツマイモの由来	156
吉田戦車⇩とてもありがたい『ガロ』	158
鶴見俊輔⇩もし『ガロ』がなかったら	160
第7章 『ガロ』という名の登竜門	161
山根貞男⇩わが批評の出発点	162
佐藤忠男⇩『ガロ』へ	164
三橋乙擲⇩あの頃の『ガロ』と私	165
淀川さんぽ⇩『ガロ』表現列車は走る	168
花輪和一⇩仏様のようになりたい『ガロ』	170
丸尾末広⇩魔神ガロン	172

イタガキノブオ⇩闇鍋とロールシャツハ・テスト	174
大越孝太郎⇩『ガロ』と、私の漫画制作法	175
山野一⇩『ガロ』編集部	176
澁太郎⇩『ガロ』の手のひら	177
鴨沢祐仁⇩人知れず『ガロ』は続く	178
吉田光彦⇩きれない関係	180
森元暢之⇩GAROと僕と	182
東元⇩決定的瞬間	183
石川次郎⇩とても広い、自由な世界	184
第8章 エディトリアル・アドベンチャー	185
南伸坊⇩『ガロ』の頃	186
渡辺和博⇩夢のようなめぐり合わせ	189
手塚能理子⇩『たとえば』としての	
青林堂VS私	190
山ノ井靖⇩長い階段の頂上で	192
原口健一郎⇩表紙デザインを担当して	195
白取千夏雄⇩所沢の皆さん、	
お騒がせしました	196
羽良多平吉⇩背表紙を一曲一双の	
屏風絵に「見立て」て	198
荒木経惟⇩浪漫の曙	199



ますむらひろし	黒の病院	200
津山週三	特異な場所	201
唐沢俊一	読者がいけねえ	202
高橋聡	コミック天国?	204
唐沢俊一	&なをき (マンガ)	205
「忙人必読」	『ガロ』投稿作品入選必勝法	205
第9章	マンガ界の新陳代謝	215
米沢嘉博	時代と『ガロ』と僕と……	216
	「影響」という視点での『ガロ』史	216
杉作J太郎	『ガロ』の無サービス精神	221
夜久弘	ガロコン編集者	224
永井豪	青年漫画の先駆者	228
石ノ森章太郎	『ガロ』の未来	229
かわぐちかいじ	ヘタウマの時代	230
岡留安則	『噂』との真相	231
巻上公一	僕らの『ガロ』との関わり	232
井上誠	四畳半フォークのように	233
石川浩司	かこまれた。	234
知久寿焼	どうもすみません。	235
大槻ケンヂ	負けるな『ガロ』	236

第10章	面白主義以降のバラエティな面々	237
呉智英	ベテランもいた、怪人もいた	238
四方田犬彦	『ガロ』の最初にして	242
	最年少の読者の自画像	242
上杉清文	太っ腹の『ガロ』	248
長戸雅之	『ガロ』の発する魔力	250
内田春菊	しあわせを呼ぶ『ガロ』	252
井坂洋子	意識下に抑圧したものの	254
	発表の場	254
岡崎京子	私はこんな感じです	255
安彦麻理絵	私と『ガロ』と、	256
	今後の『ガロ』と私	256
第11章	新時代の『ガロ』	257
黒川創	老人ボケのロックンロールを……	258
松沢呉一	新時代へののかけ橋	260
木村恒久	『ガロ』という既視体験	263
根本敬	『ガロ』の存在意義	264
	しりあがり寿	266
	難解であり続けて	266
	欲しいな『ガロ』	266
松田哲夫	『ガロ』の役割	267



松本充代	『ガロ』の魅力	268
津野裕子	緊張かつ恐縮しています。	269
みぎわパン	ガロガロ言つてすみません	270
木元ひわこ	勝手な不良	271
トオジヨオミホ	『ガロ』の未来のために	272
やまだ紫	『冥利』を探して	274
藤沢光男	新鮮な時代の表現	276

池上遼一	通過点(ステップ)で あり続けて欲しい	277
桜沢エリカ	私の場合	279
ガロ編集部	今後の『ガロ』の展望	280
作家別『ガロ』掲載 全作品リスト		281



# はじめに



NAGAI, Katsuichi

## 長井勝一

【プロフィール】1921年、宮城県塩釜に生まれる。戦後、特価本の卸をするかたわら48年に足立文庫、56年に漫画社、59年に三洋社と、マンガ出版を手掛ける。62年に青林堂を設立し、64年より「ガロ」を発行。現在、青林堂会長。

青林堂を設立して、三〇年になるという。私は、今まで「何々記念」ということにさほどこだわらないでやってきたので、感慨ひとしおというわけでもない。『ガロ』は、青林堂設立以前から作品を描いてもらっていた白土三平さんに、既製の商業誌では不可能な大長編「カムイ伝」を発表してもらったために創刊した。

貸本漫画時代に活躍していた水木しげるさんたちにも手伝ってもらったが、創刊当時はまだ作家の人達も少なかった。執筆者が七人以上いないと雑誌と認めてもらえなかったのだ、水木さんには幾つも名前を変えて執筆してもらった。

つげさんはどこへ引越したのだから、連絡先が分からなかったのだ、きっとこの本を見てくれていると思って、本の中で「連絡どう」と書いたこともあった。今思うと、寡作なつげさんが、よくもあれだけ続けて作品を発表してもらったものだと思える。「カムイ伝」



次 月刊漫画 ガロ 9月創刊号

目 白土三平傑作選集①

ざしきわらし	……	(3)
赤 い 竹	……	(39)
陽 忍	……	(72)
く ぐ つ	……	(94)
不老不死の術	水木しげる ……	(114)
海原の剣(第一回)	諏訪 栄 ……	(122)
れんさい読物 動物百話①	内山賢次 …… え・諏訪栄 ……	(112)
も 吉	李 春子 …… え・岡本楓子 ……	(128)
白土三平さんのマンガ	佐藤忠男 ……	(2)
妥協を排す孤高の理想家	影 丸 ……	(131)
読者コーナー(募集)	……	(130)

の第一部が終了すると、『ガロ』の部数も急激に減って、休刊を考えたこともあったが、今になってみると、そうしなくて良かったと思う。

雑誌の方はどんどん一人歩きして、白土さんの時代とは感じが変わってしまったが、それも仕方なかったと思う。

何度か病気で死線を彷徨った末に、創立した青林堂は、貧乏の代名詞のように言われもした。

部数が減ってからは、作家の方々に原稿料を支払えないという事態になってから、もう二〇年前後にもなるが、それでも描き続けていただいたのには、本当に感謝している。

当初『ガロ大全』という題名でスタートした本書『ガロ曼陀羅』には、本当に多くの方々が協力してくださったと聞く。本書を実現していただいた執筆者の方々やTBSブリタニカの皆様に、改めてここにお礼を申し上げるとともに、『ガロ』の方も末永く愛読して参加して頂けるような雑誌であり続けるように、我々も頑張り続けたいと考えている。



# 運命的な 出会いに 感謝を込めて



YAMANAKA, Jun

## 山中潤

【プロフィール】 1961年生まれ。和歌山県出身。83年、コンピュータ・ソフトのアドベンチャーゲームコンテストでグランプリを受賞。84年に株式会社ツアイトを設立。88年、つげ義春氏との運命的な出会いにより、「ねじ式」のコンピュータゲームを制作。91年、青林堂社長就任。

学生時代から愛読していた『ガロ』に直接関わるきっかけは、調布の中華料理屋で偶然、つげ義春先生と出会ったことでした。

昔から企画を温めていた、つげ作品のコンピュータ・ゲーム化の権利を快諾していただき、以降ひさうちみちおさんのコンピュータ・ゲームなども作り、『ガロ』に広告を載せようと青林堂を訪れているうちに、現在の状況に至ったわけです。

今回の『ガロ曼陀羅』に多くの方々が協力してくださったと聞き、私たちも勇気づけられました。やはり『ガロ』以外に『ガロ』はなく、絶対になくしてはならない雑誌なのです。『ガロ』は今、低迷していた頃と比べて、徐々にではありますが、部数も増えてきました。しかし、メジャー誌で『ガロ』的な作品がヒットしている現在、改めてその存在意義が問われる時期にさしかかったのかも知れません。本書の数々の証言は、今後の『ガロ』がどうあるべきか、という指針をきつと示してくれるでしょう。運命的な出会いに感謝を込めて、関係者各位に厚く御礼を申し上げます。



3

4

1



ゆく中で、青林堂は今年で設立30周年を迎える。原稿料も出ないのに、表現者た



ちは『ガロ』に作品を発表し続ける。それほど魅力的な理由とは、彼の人柄にあるのかも知れない。

『ガロ』を知るには、青林堂のことを、さらには創始者の長井勝一氏の人柄などをまず知っておく必要がある

## 第1章 モーゼルの勝ちちゃん

2



だろう。貸本出版業界が終焉を向かえ、幾多のマンガ雑誌や出版社が生まれては消えて



# 『ガロ』 グラフィティ , 60~ , 90



MURASE, Haruki

## 村瀬春樹

[プロフィール] 1944年8月19日、横浜市生まれ。早稲田大学政経新聞学科在学中から独立プロで反戦記録映画を製作。1970年、日本のライブハウスの草分け的存在として知られた吉祥寺の「ぐわらん堂」をパートナーであり現在フリーライターの「ゆみこ・ながい・むらせ」とともに開設。500回以上のコンサートやイベントを開催し、今日のニューミュージック界に大きな影響を与えた。現在、新聞や雑誌等で活躍中のエッセイスト。

その店は四方をセピア色の板壁で囲まれていた。窓はない。三〇人分ほどの椅子とテーブル。芝居やコンサートの夥しい数のポスターを無造作に重ね貼りした天井から裸電球がぶら下がっている。

板壁には、往年のハリウッド・スターたちの大きな白黒写真のパネルが飾られていた。

『風と共に去りぬ』のクラーク・ゲイブルがポーカー・チップの前で煙草をくゆらせている。『怒りの葡萄』でトム・ジョードに扮したヘンリー・フォンダ。ジーン・ハーロウの隣では、日傘をさ

したマリーネ・ディートリッヒが長いまつげの下から無表情なまなざしで狭い店内を見下ろしていた。

ここは一九七〇年代の吉祥寺。ライブハウス「ぐわらん堂」。

カウンターの横に暗褐色のペンキを塗った本棚がある。その最上段の木製のプレートにはこう書かれている。

青林堂漫画——自由にご覧ください



そこには『ガロ』のバックナンバーがずらりと並んでいた。「フーテン」「永島慎二」「赤色エレジー」「林静一」「怪人二重面相」高信太郎、「ぬけられます」「滝田ゆう」「鬼面石」つげ義春、「しんきらり」やまだ紫、「桜画報永久保存版」赤瀬川原平と、単行本の新刊旧刊がにぎやかに背表紙を見せている。

カタッ、パタリ……。

という乾いた音に目を向けると、誰もいない床の上でアルミ製の灰皿が一枚くるくると踊っていた。まるで、キリモミ状態で墜落するアダムスキ―型円盤みたい。これはその店にいくつかあった怪奇現象のうちのひとつ「身投げする灰皿」だった。

灰皿たちは、無人の、黒い、滑らかなテーブルの表面を命あるもののように、見えない速度で移動しつづけ、やがてデコラ貼りの絶望の淵に達すると、一気に奈落の床へと身を躍らせるのだ。

マルチステレオの巨大なスピーカーからの微振動が原因だという説は誰も信じなかった。

この店の灰皿は、あまりにも売上が上がらない雨の夜更けなどには、店主の代わりに責任を感じて自殺をくわだてるのである。

ぐわらん堂はビンボーだった。青林堂に負けな

いくらいビンボーだった。ビンボーが二つの「堂」を結びつけたのだろうか？

ある嵐の午後、ぼくはぐわらん堂のスタッフといつしよに登山用のかいキスリングをかつぎ、神田神保町「木造モルタルの王国・青林堂」へ漫画の買い出しにでかけた。これが二つの「堂」の最初の出会いだった。

それ以来、「モーゼルの勝ちちゃん」こと青林堂社長長井勝一氏は、吉祥寺へたびたびやってきた。彼を「モーゼルの――」と呼ぶようになったのは、彼が満州で愛用したモーゼル拳銃を戦後秘かにもち帰り、浅草あたりではちよつとうるさかったという話を本人の口から聞いてからだだった。彼は、交通ゼネストの日には、阿佐ヶ谷から下駄を鳴らして徒歩で飲みにきた。

二つの「堂」はいろいろな交わり方をした。

あがた森魚が、後に彼を「紅白」にまで押し上げるあのヒット曲「赤色エレジー」の発表会をぐわらん堂で開いた。林静一がスペシャル・ゲストだった。

ぐわらん堂は落書きを待つ壁、さもなければ三多摩地区の若衆宿だった。鈴木翁二が、やまだ紫が、近藤よつこが原画展を開催した。高信太郎は、文字どおり、この店のトイレの壁に最初の落書き



を残していった人物だった。

鈴木翁二は『ガロ』誌上でぐわらん堂の狂乱の夜を描いた。へきあ、みなし子さんたち／星が流れたオンザロックよと、ママ（ゆみこ・ながい・むらせ）がすすめるグラスを、シバ（三橋乙椰）が、あおり、クレーンに吊されたトモ（友部正人）は、はるか夜空のてっぺんで小林旭の「流転」を歌ったのだった（一九七三年八月号「ギター壊し浮かれた」）。

漫画とフォーク以外に面白い表現は見当らん。

吉祥寺ウニタ書店の店主が、電気ブランをなめながらボヤいていたあの七〇年代。

いや、ぼくの場合『ガロ』とのつきあいは、もっと古いのだ。場所はひとつ飛びにワープして、早稲田大学キャンパス——一九六六年の冬。

学園のぐるりを天にそびえる机と長椅子のバリケードが囲んでいる。ぼくは、ズック靴に麻のヒモ、ベルトの下に『ガロ』を固く巻いて街頭デモに出撃する二二歳だった。「カムイ」の変移抜刀霞切りよ。

あちらから歩いてくる色白のふっくら太った若者は、わが友Sではないか。柔らかな髪を初期ビートルズ風の長髪にした彼は、とっくり襟の黒いセーターの胸に三色スマイルを一輪飾り、肩から大振りのハンドバッグを下げている。むろん女性用。

男物のシヨルダーなんて六〇年代にはなかったのだ。

彼が、その後、暗い部屋で中島みゆきの歌を聴きながら男性ホルモンの血中濃度を孤独に高まらせることになる呉智英になろうとは誰も予想しなかったことだ。二〇年早かった偉大なるアンドロジナス（両性具有者）。彼が今、フェミニズムさえ理解すれば偉大なる思想家になるのは間違いないのだが。

一九七〇年、ゆみこ・ながい・むらせとぼくは、最初に生まれた男の子に「タブテ」という名前をつけた。漢字で書くと「飛礫（石ツブテの意）」。むろん「カムイ伝」の人物Ⅱあの夙谷の少年にあやかっただのだ。投石の上手な若者に育ってほしいと。ぼくらガロ・チルドウレンの子供——モーゼルの勝ちちゃんにとっては「孫」にあたるタブテは、今年でも二〇歳。ぼくの青林堂コレクションの愛読者である。でも、きつと、ぼくとは違う読み方をしているんだろうなあ。

昔、『ガロ』は空腹の子供たちに知恵と勇気をあたえてきた。今、『ガロ』は満腹の子供たちに何をあたえられるのだろうか？

そんなことを思う一九九一年の春。



# あ の 頃



HAYASYI, Seiichi

## 林 静一

[プロフィール] 1945年3月7日、中国東北部に生まれる。イラストレーター。マンガ家。

62年、東映動画入社して、月岡貞夫に師事してアニメーションの製作に携わる一方で、67年に「アグマと息子と食えない魂」でマンガ家デビュー。70年に発表した「赤色エレジー」が好評を博す。CMにも進出し、ロッテの「小梅」ちゃんシリーズでは75年ベニス映画祭銅賞を受賞。

月刊漫画誌『ガロ』に作品を応募したのは、

『太陽の王子ホルス』（東映動画制作）が二度目の制作中止になり、それを機会に東映動画を辞し、師匠の月岡貞夫氏が設立した制作会社に身を置いた頃だった。

作品の内容は、二人の正義の味方が自分の正しさを主張し合い、一方の正義が死んでゆくといった内容で、応募はしたものの連載通知はこなかった（あの作品は何処にいったのでしょうか、長井さん）。

当時のぼくは、タップ（動画を描くときに必要なステンレスの道具。世界共通規格）一本をジーンズのポケットに差して、月岡さんのアシストやら、TVアニメの帯番組の原動画や、CMのアニメ部分を

制作会社から貰い仕事をしていた。

「赤色エレジー」にも書いたが、文字どおり、タップ一本、渡り鳥だった。

なかなか『ガロ』から採用通知がこないのので、二本目の応募作品を描き始めた。これで採用されなければ、漫画を描くことを諦めようと思っていた。

その二作目の題名は「わが母は」で、この作品を送ったところ、編集部から話をしたいと連絡があった。期待と不安が混ざりあった気持ちの僕は、当時僕のアシストをしていた鈴木さんを連れ、神田の編集部を訪れた。

出版社が思ったほど大きく無いことは、中学の



頃に学習研究社の仕事で感じていたから、（僕が仕事をした数年後に、学習研究社は大きなモダンなビルに移った）青林堂の狭い編集部を見ても、別段驚きはなかった。

印象的だったのは、水木しげるさんが破れ障子を吹き抜けると評した長井さんの大声と、その傍らで黙々と事務をとる奥さんや、物静かな応待の編集員高野慎三さん達との対比だった。

長井さんは、僕の作品に対して、

「あのねー、長いんだ。新人の人には勉強の為に、短篇描くよう勧めているんだがねー」

僕は採用されると思っていたから、この話に少しばかり落胆した。アニメ業界しか知らない僕は、出版界の現実を垣間見た気がした。

でも、もう一度描くよう勧める高野さんの言葉に勇気づけられ、三本目の作品に執りかかった。その作品が僕のデビューを飾った「アグマと息子と食えない魂」である。

この作品を長井さんに見せると、

「うん、載せよう。でも、来月号って訳にはいかないよ。ほら、こんなに応募がきているんだからねー」と僕に、応募作品の山を見せた。

「新人の人は、すぐ印刷された自分の作品を見たがるんだねー」

当時白土さんの「カムイ伝」で多くの読者を得部数を伸ばしていた雑誌ならでは、強気の発言であった。

僕は佐々木マキさんと同期で、『ガロ』の新世代としてデビューした。そして半年もすると、マスコミからセツトにして記事にされた。

週刊朝日のグラビアに載った、僕達の紹介記事は、「わからない漫画が流行る」だった。

あの頃は、学生運動が七〇年安保改定阻止に向かって活発化し、詩と曲を自分で書く歌手が出現し、時代は若者文化の創世期といった盛り上がりを見せていた。

NHKドキュメンタリー番組から、現在の若者として二四時間取材を迫られたり、対談、インタビューと、僕の日常はすっかり変わってしまった。何だか出版界に足を踏み入れたら、一度にマスコミ業界の中に身を置いた感じになってしまった。対談、インタビューは楽しかったが、その後の接待は、今思い出しても居心地の悪い感じが蘇る（銀座のクラブに、ジーンズと下駄ばきスタイルで接待をうけたのは、僕ぐらいかも知れない）。

飲むのは嫌いじゃなかったが、外に父親ほどの歳の運転手さんと車を待たすのは、少しも酔えた気分じゃなかった。自宅まで送ってもらった時、僕



は何度も運転手さんに頭を下げていた。

当時、活字コンプレックス派と映像コンプレックス派に作家を分けて、遊んでいたのは赤瀬川原平さんであった。僕はアニメ業界にいたので、活字の世界、出版業界の人との付き合いに内心驚き、取材の度に花とか小物をプレゼントされると、これが出版業界なのかと妙に納得してしまう毎日だった。

スポーツに例えると、映像業界はラグビーや、サッカー、バレー・ボールなどの集団競技で、活字業界は剣道、柔道、ボクシングといった、一対一の競技に似てる。個人と個人の親密な関係から、仕事が始まるといった印象をもった。

石子順造さんや上野昂志さんなど、美術評論家と云う業種の人と一対一のお付き合いも、その頃始まった。

石子さんは長井さんに負けずユニークな声の主で、喫茶店の片隅に陣取り、閉店まで休む事無く喋り続ける、不思議な人だった。

それが電話になると、

「あ、石子だけど、明日空いてる？ TBSテレビ出てよ。ガチャン！」

電話では、無駄な話は一切しない人だった。

上野さんは、都立大生の松田哲夫さんや我田大

さん連れて、僕と飲んだ。上野さんも僕も酒が好きだったから、二人でよく飲んだ。

飲んだ僕は、狛江にあった上野さんの家に酔い潰れて泊まった。評論家の家を覗く下心もあって、酔った目で本棚をジロジロと眺め回した。上野さんの奥さんは、当時ゴダールの映画に出てくるアンナ・カリナを思い出させる美人で、何で上野さんと結婚したのか、青林堂関係七不思議の一つであった（一説には異常に厚い上野さんの胸板にあるという）。

青林堂の忘年会は静かだった。

「青林堂ご一同様」と書いた座敷の前にきても、人の声すら漏れてこなかった。まだ誰も来てないのかと襖を開けると、二〇名程の人が、差しつ差されつ盃を交わしていた。

盃のカチャカチャ触れ合う音と、小声で隣の人と話す静かな忘年会に、僕は驚いた。

僕がいた東映動画の忘年会は、課長にくだ巻く奴や、「遠くへ行きたい」を大声で歌う三〇過ぎの原画補、芸大で覚えた「桃太郎」を踊る原画チーフと、メチャクチャだった。

こんな静かな忘年会を経験するのは初めてで、出版業界はやはり違うなと感心してしまった。

その中でも、新宿の飲み屋の二階で開いた忘年



会は、騒がしくも活気があり、凄かった。

二階の廊下、階段まで人が溢れ、劇画ブームに乗った出版社ならではの盛況であった。

当時『ガロ』と並んで、手塚治虫氏の『COM』が前衛漫画の二大派閥で、その『COM』の作家も来ていたと噂されるほど、何年かは忘れたが、その年の忘年会は異常な人気と熱気に包まれていた。

でも、歌ったり踊ったり、芸が披露される事はなかった。

青林堂の忘年会が、歌あり、レズビアン・ショーありに変わったのは、嵐山光三郎氏などが参加した、箱根あたりからである。

そう云った忘年会で、僕は漫画家と云う業種の人と知合った。この人達も、僕が知っているアニメーターとは、一味違っていた。

どの作家も、どこか個人競技者の雰囲気があった。

つげ義春さんは、いつも静かに呑んでいた。どこか、孤独なマラソン・ランナーと云った風貌だった。

理数系の学生であった勝又進さんは、当時僕とよく呑んだ。酔うにつれ、お互いに悪口を言い合った。勝又さんの悪口は不意に始まるから、足蹴

りありのタイ式ボクサーといえる。それでも逢うと呑みに行くから、二人とも酒が好きだったのだろう。

池上遼一さんは、水木さんのアシストになってめきめきと絵の力がつき、漫画界から期待される大型新人だった。

水木さんは不思議な人で、この人の処に弟子入りすると、皆ペンさばきが上手くなる。つげさんも水木さんのアシストをやって、断然上手くなった。

池上さんは、一気に勝負をかける武術家が似合った。

後輩の鈴木翁二さんと安部慎一さんは、本当に酒癖が悪かった。当時の新宿、酒飲みの雰囲気最後までまとめて、この二人に背負わせてしまった感がある。

でも安部さんの作品に、僕はいつも注目していた。上手い人だと思っていた。

この二人は、スタミナ不足のカンフーと云ったところか。

この若手の漫画家を最後に、新宿の飲み屋も人も変わっていった。

僕の「赤色エレジー」を歌にしたあがた森魚氏に会ったのは、新宿のローレルと云う喫茶店だっ



た。あなたの漫画から歌を作りましたと、ギターを取り出し大きな声で歌いだした。お客も何事かと振り向く中で、僕はひたすら歌が終わってくれることを願っていた。

あんなに恥ずかしく歌を聞いたのは初めてだった。

あがた氏の歌は大ヒットした。僕は紅白に出場しろと、はっぱをかけた。

「赤色エレジー」は連載当時も後も、色々な反響があった。

ある日、松田氏と新宿の「もっさん」(現在、池林房など新宿に飲み屋のチェーン店を持つ太田さんは、ここで修業をしていた)に行くと、二人の若い飲み客が「赤色エレジー」の話をしていた。松田氏と僕は顔を見合わせ、二人の話に耳を傾けながら黙々とお酒を呑んだ。僕は作品の手応えを感じて嬉しくなった。

作品を読んで同棲を始めた、読者から手紙を頂いた事もある。

「神田川」の作詞者喜多条さんから、「赤色エレジー」の風景は、神田川沿いの風景でしようと言われた。

確かに「赤色エレジー」は、僕が二〇歳の頃に住んでいた中井、下落合の「神田川」沿いの風景

だった。

当時上野さんは批評文の中で、「彼は読者を泣かせたいという、それは作者にとって何を意味するのだろう」と書いていた。

と書いていた。

「赤色エレジー」が一冊の単行本になった時、松田氏はぽつりと言った。

「一冊になると、一回しか泣けないなあ」と。

「赤色エレジー」は、二度映画化されている。一つは東映で、もう一つはあがた監督の自主映画。東映の映画を観に行った読者は、最後の一郎の、「昨日もそう思った」という台詞を映画館で合唱するのが、正しい見方なのだったと言った。

先日内田春菊さんから、相原さんの『ゴージ苑』に、エレジーのパロディが載ってる事を聞いた。『ゴージ苑』は娘と息子がファンで、よく買って読んでいた。僕も面白いから読んでいたが、自分のパロディは見えていなかった、残念。

その後イメージ・フォーラムのお富さんが企画して、若松孝二プロで映画を監督した。

その時の週刊誌の記事は、

「あの赤色エレジーの作者、桃色エレジーを撮る！」だった。

嗚呼！

(完)



# 君、



MIZUKI, Shigeru

## 水木しげる

[プロフィール] 本名、武良茂。1924年、鳥取県境港市生まれ。太平洋戦争中、ラバウルに出征し、九死に一生を得る。第2次戦後、多くの職業を経ながら紙芝居、貸本漫画の世界に入る。「てれびくん」で講談社漫画賞受賞。91年には紫綬褒章を受章。他の代表作に「悪魔くん」「ゲゲゲの鬼太郎」「河童の三平」などがある。「ガロ」では、創刊号から参加し、漫画以外にも、武良茂や東新一郎の名でエッセイやカットなどに健筆をふるう。

# 富み給うことなかれ

何年前だったかわすれたが、貸本の世界もボツボツだめになり、南方の森の人のところに行っても居候せなければならんと思っていた頃、突如として長井勝一夫婦が現われたのである。

「二人で、『ガロ』という本を出すんだ。原稿料一頁五百円出すよ」

という夢のような言葉、ぼくはその頃一頁二百円位な仕事で、しかも仕事は途切れがちだったから、あまりの嬉しさに、買ってきていたソーセージを、夫婦の前でパクパク食べてやる必要はなかったのだが、嬉しさのあまりソーセージを全部食べてしまった。

その頃は毎月一頁五百円の原稿料をくれていたから、あの貧乏時代には「命の恩人」というべきかもしれない。

まア、それにしてもよくここまで『ガロ』を続けてこられたということは「普通の人間」でできることではない。

氏は貧乏ではあったけれどもやはり「天才」のうちに入れられるべきお人であろう。もっとも『ガロ』のあの不可思議な新発明



の編集方法も、じつに金がない奴の超発明であつた。

逆に「金」があれば、平凡な雑誌と化していたであらう。

げに「貧乏」は発明の母である。

不肖、水木しげるも「ふくふく饅頭」<sup>まんじゅう</sup>の

一つも食えないといった長年の貧乏生活から、なんとか抜け出したいという一心から「鬼太郎」「悪魔くん」「河童の三平」と書き続けたのでアル。

貧乏なくして、それはなかった、といえるだろう。

げに「貧乏」は発明の母である。





# 青林堂主人



長井さんとの最初の出会いは、ぼくが大塚に住んでいた頃、出来たての白土三平さんの『忍者武芸帳』第一巻を持ってひよっこり訪ねてきたのが最初で、三洋社を始めた頃だったと思います。

白土さんのデビュー以前から、ぼくは貸本向けのマンガを描いていましたが、白土さんはよく、ぼくの作品を読んでくれていたようですので、白土さんに言われて長井さんが来たのかな、とも思いました。

それで、三洋社の『忍風』に描くようになったのです。当時はミステリー、ハードボイルドものが人気があったので、その手の作品を描いていました。

しばらくして、僕も引っ越しして、少しマングラから遠ざかっていた頃、『ガロ』の本の柱に「つげ義春さん、連絡乞う」と出ていたのを友だちの漫画家が見て、ぼくに教えてくれました。別に放浪していたわけでもなかったのですが、引っ越し先の住所が分からなかったからでしょうか。

それで長井さんのところへ出向きました。

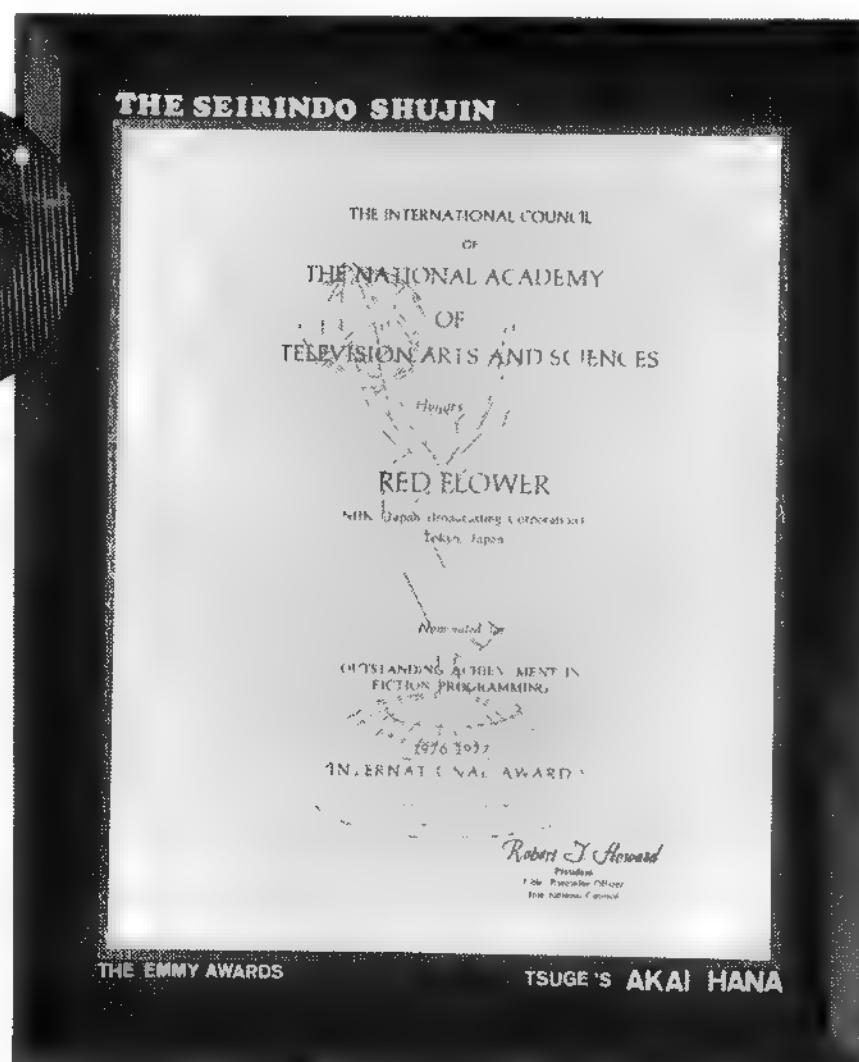


TSUGE, Yoshiharu

# つげ義春



【プロフィール】1937年10月30日、東京に生まれる。幼い時に父を亡くし、小学校卒業後はメッキ工場や中華そば屋で働く。53年、貸本単行本『白面夜叉』でマンガ家デビュー。「ガロ」65年8月号に「噂の武士」で登場。「ガロ」誌上に発表した作品で、従来のマンガのイメージを一新させた。主著に「ねじ式」「紅い花」(小学館)、「ゲンセンカン主人」「リアリズムの宿」(双葉社)、「つげ義春とぼく」「必殺するめ固め」(晶文社)などがある。9月には「つげ義春資料集成」(北冬書房)刊行予定。「無能の人」(日本文芸社)が竹中直人主演・初監督作品として映画化、9月公開予定。



白土さんが、『ガロ』を作るときのメンバーにぼくの名前も考えていてくれていたからでしょうね。

当時は、本当にこっちも苦しかったから、一か月後の原稿料の支払いも待てず、原稿と引き換えにギャラをもらおうということをやっていました。

でも、神保町の長井さんの持ち合わせがなかったときは、練馬の赤目プロに行って、白土さんに二回くらい立て替えてもらったこともありました。長井さん、白土さんにそれを返したのかな？

それが気掛かりですが、もしそのままだったら、ぼくは未だに白土さんから原稿料を借りていることになってしまっていますね。

そのついでというわけでもないのですが、一週間くらいは白土さんの手伝いをした事もあります。

「紅い花」がNHKで映像化されたことについて何か、ということなのですが、正直言って当時はあまり面白くなかったです。七〇分くらいの作品で、佐々木昭一郎さんがきれい



な映像に仕上げてくれましたが、反戦思想を作品の中に盛り込んだりしたことがふさわしくないように思っただんです。

でも、ぼくにとっても初めての経験でしたし、エミー賞という海外の賞や芸術祭参加作品の大賞をいただいた作品なので、今思えばすごいことだったのだでしょうね。

今度『無能の人』が映画になるのですが、その話があった時は、これは自分の作品ではなくてヒトの作品なんだ、と割り切れました。

今では、人様の手を経て違うものになっていくのを、逆に楽しんでいきます。

最近では、ほとんどマンガを読んではいませんが、『ガロ』はちゃんと目を通していきます。林静一さんや菅野修さんもまた描いていますしね。ぼくは、まだマンガを描ける体調ではないのですが、以前のベテランの方がまた『ガロ』に戻って盛り立てて欲しいと思いますね。





【プロフィール】 1944年12月4日生まれ。「COM」67年2月号に「いきぬき」で漫画家デビュー。69年に第2回「COM」新人賞、80年に第25回小学館漫画賞、第24回高知県出版文化賞を受賞。代表作「鬼やん」「土佐の一本釣り」「純平」など。

# アソビが界の宇野重吉

僕にとってガロ！イクオール長井さんだ。

僕は『ガロ』に作品を発表したことはない。

『COM』出身の、何の面識もない僕の初期の作品を長井さんは単行本にしてくれた。嬉しかった。長井さんに初めてお目にかかったのは、週漫（週刊漫画TIMES）で描かしてもらっている時だった。編集の花沢さんに案内してもらって青林堂に初めて行った時だ。

「ワッ！ 宇野重吉さんに似てる」と思った。温和で笑顔をたやさず、田舎者の僕にメシをおごってくれた。小さな体、その体中にファイトが満ちあふれてる方だと思った。

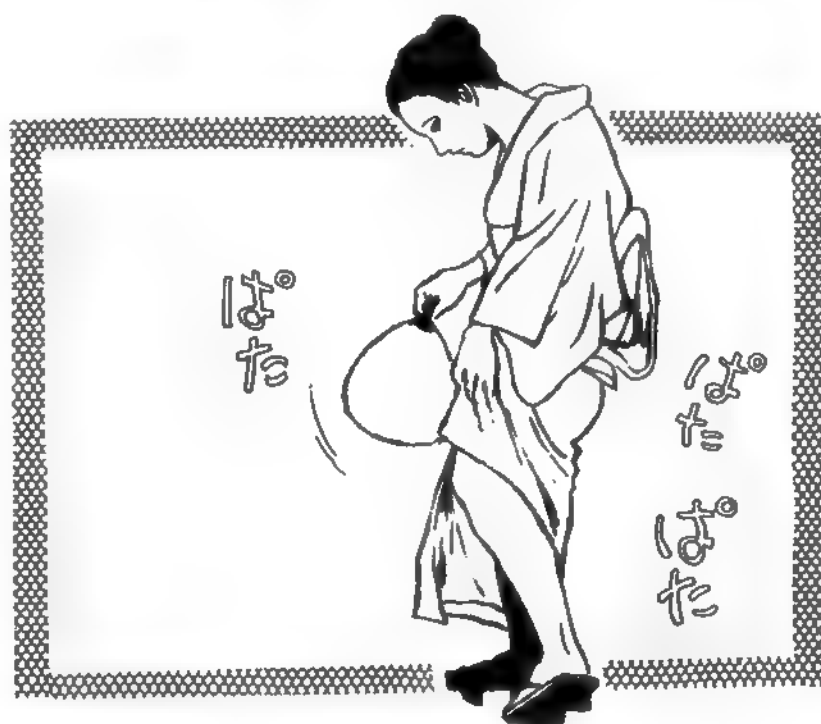
僕の住む土佐へ来てくれた事もあった。その時は、桂浜で龍馬の銅像を見ながら酒を酌み交わしてくれた。

花沢さんの結婚式の時、上京した田舎者の僕は、将棋の坂田三吉のような気持ちで席へついていた。その僕を編集長クラスの席から



AOYAGI, Yusuke

## 青柳裕介



長井さんが呼んでくれ、「これが土佐の青柳だよ」と編集長クラスの人に紹介してくれ、「こいつ、ウソつかないよ」と言ってくれた言葉を忘れない。

長井さん、本当にありがとうございました。いつまでも、お元気で。

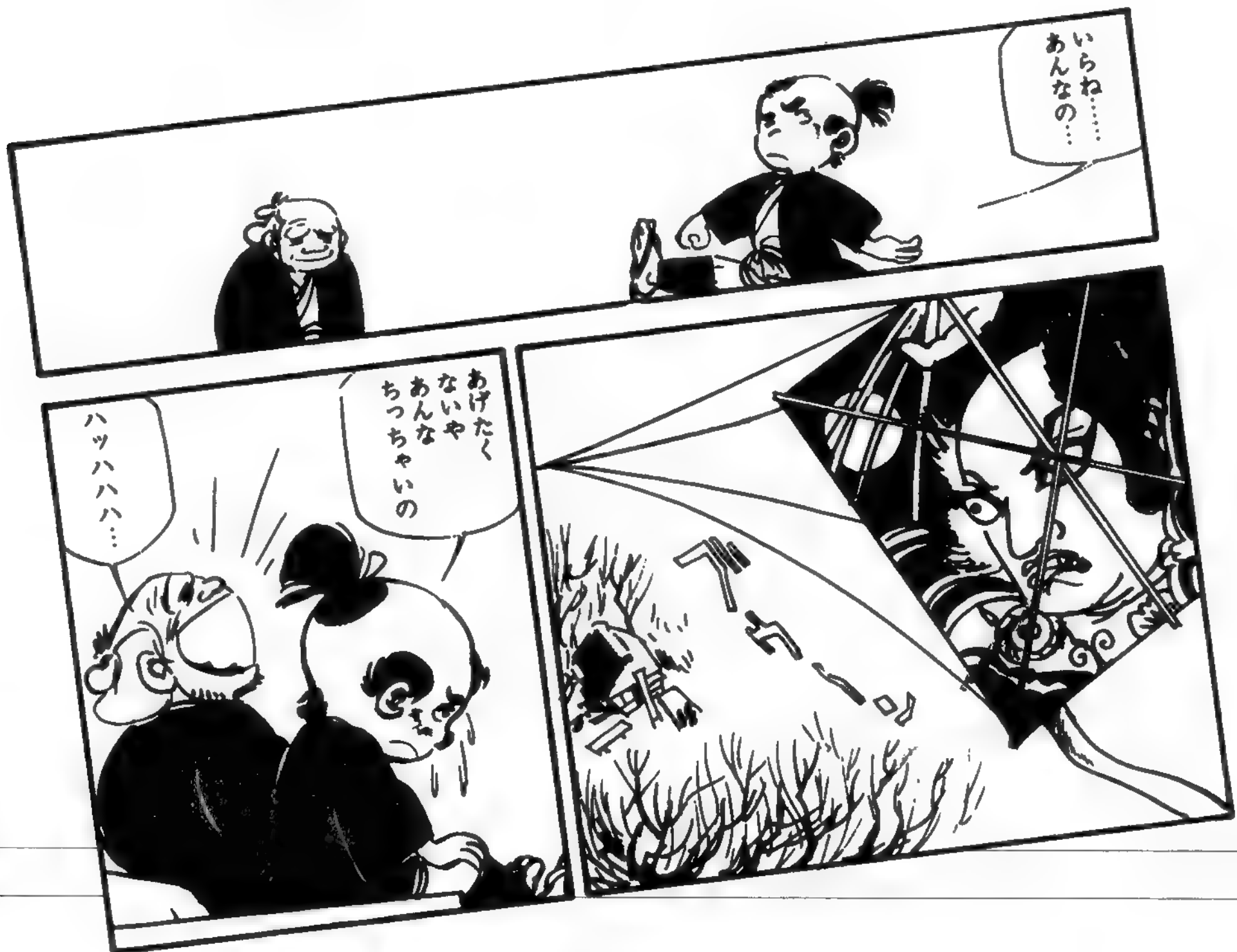


# 二二歳の時

二八年の昔のこと、ボクは青林堂を訪ねていた。木造家が並ぶうら通り、番地をたどってウロウロすること数時間。製本屋さんだらうけど、いろんな本を車に積み上げている。忙しそうだが静かだ。

白土三平著『シートン動物記』『灰色熊の伝説』、この本はどここの本屋にもなかった。発行元に行って直接求めるしかない。

発行元、青林堂。確かに、この長屋のような一角にそれはあるはず。日差しの中に、お





じさんがポツンと立っている。車を止めて、ボクは声をかけた。

「すみませんが、青林堂つちゅう本屋さん、この辺なんすけど……」

おじさんは振り向いて指差しながら、

「ここです」と答える。

ここってどこだと、ボクは思った。ここはともあんなすごい欲しくてたまらない本を出しているようなところではなかったから、ボクは面食らってしまった。ススぽけた二階屋なのだ。

「おじさん、青林堂の人……？」

ボクは若かった。生意気の盛りだった、わけもなく毎日をむさぼり生きていた。このおじさんはきつと青林堂に働いている人だろうけど、本を運んだり、掃除をしたりする人だろうと決めてしまった。くだんの本、白土三平著のものはもう残り少なく、

「私の分があるだけだ」とおじさんは言う。

「じゃあ、それ分けてよ。おじさんが持っているも仕方ない。あの本からみなぎりこぼれる熱は、このボクが受けてこそ生きるのだ」

おじさんは、じーっとボクを見ている。その目はボクの薄っぺらな有様を見透かしているような静かな表情だ。おじさんは、奥に引っ込んで本を二冊持ってきた。

「進呈しましょう」と、じっとボクを見ながら言った。随分経ってから、あのおじさんが長井さんその人と知る。

あの目で幾多の作家を送り出し、今も尚、奔放と反骨を匂わして若者を送り出している。時々、古武士のような長井さんに会うと、今でも至らなかった過日の自分が恥ずかしくしかし、無性に懐かしく思います。

MURANO, Moribi

## 村野守美

【プロフィール】1941年9月5日、大連生まれの福島育ち。60年に「少年」増刊号に「弾丸ロッキー」を発表し、漫画家デビュー。以後、虫プロダクションでアニメの演出も手掛ける。ライバルと言われていた「COM」には71年に登場。短編作品を2000本以上も発表するが、ご本人の弁によれば、「代表作なし。(老骨にムチ打って)これからです！」とのこと。



# スクサヘ なかがい



SASAKI, Maki

## 佐々木マキ

ぼくのマンガが初めて『ガロ』に載ったのは一九六六年、ぼくが二〇歳の頃だから、もう四半世紀も前のことになる。自分の描いたものが印刷されるというのは、何とも実に快感です。すっかりおもしろくなって、せっせとマンガを描いては『ガロ』に投稿していた。その翌年、二度も落ちているので、もうどうでもいいや、という気持ちで受験した美術大学に、三度目で合格してしまった。ところが、おもしろくないんだね、その学校が。ぼくはハタチのオトナだけど、まわりは一八かそこらのお嬢ちゃん、お坊っちゃんばかりで、ウ

オーホルもジャスパー・ジョーンズも知らない、何だろ、こいつらと思いました。

金もなかったしね。看板描きや家庭教師のアルバイトやって、その合間にマンガを描く。ガツコへ行ってる暇なんてなかった。

まあ、それで、学費滞納・出席不良・マンガを描いている——という理由(推測)で、二年生で抹籍処分されたんですけど。

学校は放り出されるし、すでに同棲してる女性(今の女房)はいるしで、こいつは何とかしなくちゃと思って、長井さんに、とにかく上京したいんですけど、と打診したところ、いいとも、出ておいでよ、という返事で、おまけに長井さんは、ぼくのために『朝日ジャーナル』連載の話までまとめてくれた。

半分しろつとが、いきなり週刊誌の連載だからね、苦しかった。バルザックの小説に「人生には一年生の行く教室なんてないのよ。誰だって最初からいちばん難しいことをやらされるんだわ」という科白があったと思うけど、まさにそれだった。

でも、いい経験になった。それ以後、いく



佐々木マキ

入選作品⑪

## よくあるはなし



らしんどの条件の仕事が来ても、あの時の苦しさを考えたら、こんなの物の数じゃないと思って、何とか切り抜けられるもの。

あれは一九七〇年の秋だったかな、岡山の学園祭に『ガロ』御一同様として招かれたことがある。長井さん、上野昂志さん、勝又進さん、林静一さんたちと一緒に岡山へ行った。行っただけでも、講演するわけでも、何かをやってみせるわけでもない、ひたすら飲んで騒ぐだけという結構な御招待だった。

その帰路、京都に立ち寄って、長井さんに

連れられて行った所というのが、ぼくが美大で教わった秋野不矩先生の御子息のお宅だった。それが縁となって、のちに秋野先生の紹介で、ぼくは福音館から絵本を出すことになる。本当に、どこでどうなるか判らないね。こう振り返ってみると、初めて『ガロ』に投稿した時、おもしろいので続けて描くように励ましてくれたのを含めて、長井さんは、ぼくの重大な転機に、三度大きく絡んでるところがよく判る。ぼくが長井さんをひそかにフイクサーと呼ぶ所以です。

話が始めっから脇道にそれっぱなしだったけど、ここで『ガロ』に戻ると、『ガロ』の魅力は『ルールなし・なんでもあり』の自由にあると思う。これだけは、創刊当時も現在も変わっていない。この自由さは、長井さんのひととなりの反映だろうし、唯一のポリシーなんだろうね。原稿料もフリーだし——というのは冗談だけど、プロとして多かれ少なかれ制約の中で仕事をしていると、自由っていいなと思う。自由を自由に使いこなすのは、けっこう難しいことなんだけどね。

【プロフィール】 1946年に神戸に生まれる。66年に「ガロ」入選。69年に上京し、「朝日ジャーナル」の連載を開始。72年より京都に在住。主著は「ピクルス街異聞」やエッセイ集「ぼくのスクラップブック」（筑摩書房）や絵本など多数。



# 影響



この先



自分はその小屋の  
跡継ぎになって

長井さんと会った時、長井さんはとにかく  
凄い読書量の人で、視野が広く、誰にも負け  
ない位、強い信念が有り、漫画に関しては黙  
って任せるといふ幕末の偉人の様な所のある  
人だと思った。とにかく奥が深く、機を見て  
敏という人であった。云いたい事が百有つて  
も一つ位を云って置くという具合であった。

一時期、私と妻は毎晩の様に、ごちそうに  
なった。実に人を飽きさせない人であった。永  
島慎二先生は、漫画や油絵において風雅を尊  
ぶという風であった。黙して語らず意志堅固、  
若い人に接する時も自分の仕事に関しては、  
ほとんど語らず礼儀をもって自己を叱すると  
いう風だったが、自ら若い人に飽きないとい  
う人でもある風だった。鈴木翁二は、頑固に  
自分の道を進もうという先取りの気性の人で、  
好きな作家にも余り影響を受けない、という  
風だった。こちらが見て飽きないという人で、  
思想に関しては広いという風に見受けられた。  
私は作風において、林静一さんやつげ義春  
さんに影響を受け、骨幹においては、永島慎  
二先生の人民愛、意思においては、長井さん



ABE, Shin-ichi

# 安部慎一

〔近況〕酒をやめて3年になるが、酒を呑みながら生活し、漫画を描くという形はそれまで有ったが、酒をやめて創作するという事はまだ一度も無いので、どういふものが出来るか楽しみである。「ガロ」に描くという事は、多くの作家にとって歴史に残る仕事であり、世界に通用する物になるべき筋合いである。私と妻は縫製工場という事業をしているが、「ガロ」に比べて、歴史性が無く残念である。筑豊に私と家族は住んでいるが、筑豊というのは福岡県西南部に位置する、昔の炭田地帯で、ここに暮した多くの炭鉱夫たちの生きざまは、描けば世界史の歴史に残る物である。これを三井という事業主の側から観ると、面白い物は出来ず、この点は金を中心として描かれた多くの商業誌に載った作品が面白くなく、歴史にも残らないという点に等しいのである。金で動いた物は、消えるのである。



の見識によって支えられていた。私は、見て画くという進行形であった。物をまず見て、感動したものを画面に現わすという作業で、全く飽きなかった。

今後の『ガロ』は、白土三平氏、水木しげる氏等の、これまで『ガロ』によって支えられたり、あるいは『ガロ』を支えて来た多くの作家が、競作という形で一度に登場すれば漫画史に残る『ガロ』が出来る。一冊の『ガロ』を全部競作にするのである。とすれば、私を始め今画いてない人も励みになり良い仕事が出来るチャンスとなる可能性もある。

最後に香田明子さんは、長井さんの夫人であるが、先日、私と妻が仕事の中に、「一緒に風呂に入ったのは香田さんとだけだった」と妻が語っていた。夫の生き方の邪魔をせず、良き語り相手であり、事業においては協力という心を持つ人だった。この点は、私の妻の美代子も、永島先生の御夫人である小百合さんも、翁二の女房の智子さんも同じであり、夫の生き方に従うという感じの女性達である。



SUGIURA, Hinako

# 杉浦日向子

【プロフィール】 1958年11月30日、東京生まれ。日大芸術学部に進むが、江戸文化に惹かれ、考証家・稲垣史生のもとで時代考証を学ぶために中退。80年11月号の『ガロ』に「通信室乃梅」が入選し、マンガ家デビュー。84年、処女作品集『合葬』で日本漫画家協会賞優秀賞を、88年『風流江戸雀』で文春漫画賞を受賞。エッセイ『江戸へようこそ』など、マンガ以外の著作も多い。



## の深さに感動

『ガロ』との出会いは、強いて言えば本屋の店先ということになります。

もともと私は漫画のことはあまり詳しくなかったのですが、たまたま漫画を描くこととなり、どこかに投稿してみようかと色々探している内に出会ったのが『ガロ』だったので。『ガロ』は他の漫画誌とは全然違っていましたし、私の漫画も『ガロ』以外には受け入れられそうになかったので、『ガロ』の間の広さというか、懐の深さに、

「こんな所もあるのか！」

と感動しながらその懐に飛びこんだのでした。行きあたりばったりというか、無謀というか、それ以前には『ガロ』を読んだこともありませんでした。

長井さんは、最初に伺った時には「長老」という印象で、偉くて恐い人のように見えた





羽織でも  
脱いで  
ちッと横に  
なりませんか。

……  
……  
ネ、  
アノサ。

のですが、何度かお目にかかっている間に親しくなって、生活のことに至るまで、まるで身内のように御心配いただき、私もういぶん頼りにさせていただきました。

こうして初めて描いた漫画が『ガロ』に掲載されたのですが、この時は「うわっ」という感じでものすごく恥ずかしく、また描いた時よりも冷静に自分の下手さを認識してしまっただけ、こういうものを多数刷ってはいけナイのではないかと思い、こっそり隠れて見ていました。

『ガロ』は本当に自由で、やりたいようにやれば良いし、なにも強制されないし、本人のやる気がなければ何も生まれない場所です。何かに例えるとすれば、地鶏の放し飼いでしょうか。農家の御主人が長井さんで、地鶏が走っているのをキセルふかしてニコニコ見ているイメージがあります。

経営に関しては、ドカツと売れる、というわけには行かないのですが、細く長く、倒れそうで倒れないという状態であっても、とにかく生き残ってほしい本です。





YAZAKI, Yasuhisa

矢崎泰久

## もし『ガロ』がなかったら

たいていの読者が気がつかない、ある種の記号のようなものが、雑誌にはついている。(一九九一年二月現在) 通巻ナンバー、特別運賃の許可、第三种郵便の承認、といったものがそれだ。『ガロ』は通巻「315」、特運の許可が「2343」、三種が「一九六四年一月一〇日」となっている。『話の特集』は、通巻「303」、特運「2221」、三種「一九六六年三月一八日」である。見比べていただくと分かるが、約一年後発の『話の特集』が、特運の許可だけは、遙かに早い。出版界に身を置いていると、こんな数字からも、取次店や書店との関係が見えてくる。また、様々な苦勞も分かる。

青林堂の長井勝一さんも私も、創刊以来ずっと「編集兼発行人」である。日本の雑誌界では長井さんを越える者はいないだろう。長いからいい(これはシャレではない)というわけではないが、雑誌を作り続けるということは容易なことではない。まして、儲け中心のものでなければ、尚更である。印刷紙代の支払いに追われ、その煽りで原稿料や社員の給料が遅れるという、貧乏出版社の経営者は枕を高くして眠ることなど一日たりともないのである。しかも制作現場の責任者である編集長を兼任していたら、寿命をすり減らす毎日だと思っ

て欲しい。

毀誉褒貶は世の常だが、およそまともなものを作っていて、それでいて順風満帆なんて出版社は絶対にない。この業界でも、二匹目の泥鰌(どじょう)を狙うものが勝つ。新人の発掘にしても同じである。とにかく、私が言いたいのは『ガロ』がなかったら、今現在のコミック誌の流行もなかっただろうし、漫画界の質のよい部分はもっと変貌していたに違いないということだ。これはとても恐ろしいことだけれど、たいていの人は気付いていない。

日本の文化庁などというところは、くだらないものにばかり金を出しているが、『ガロ』にウン億円の奨励金を出したらいいのだ。それくらいの価値はあると思っている。もし、本当にもし、『ガロ』がなかったら、日本の漫画界は世界に大きく遅れていただろう。

さて、私が期待しているのは、恥ずかしくて言にくいのだが、そのうち長井さんが、「もし『話の特集』がなかったら」という原稿をどこかに発表してくれることだ。誰も雑誌を作ってくれと頼んではいえないと言いかも知れないが、たかが雑誌だけれど、長井さんや私は、実は、命がけで作っているのだ。これだけは、はっきり言っておこう。

【プロフィール】1933年1月30日、東京都生まれ。早大政治学科中退。ジャーナリスト。学生時代から新聞社でアルバイトをし、59年「内外タイムス」の記者、65年雑誌「話の特集」を創刊。著書に「情況のなかへ」(70年)、「編集後記」(81年)などがある。



3

4

1



集長のそれまで培った人脈で、貸本界のベテランはもちろんのこと、マンガとい

『ガロ』は、新人を発掘し育てるため、今までにないような斬新で自由な作品の発表の場として、そのポリシー

## 第2章 「ガロ」白書



う枠を超えて、多種多様な表現手法の発表の場となったのである。

2



を頑なに守り続けてきた。その姿に惹かれてか、様々な人々が集まってきた。 長井編



# 人達

## 逸脱した



YAGUCHI, Takao

### 矢口高雄

【プロフィール】 本名、高橋高雄。1939年、秋田県生まれ。秋田県立増田高校卒業後、地元の羽後銀行に就職。70年、マンガ家を志し、同銀行を退職。同年、「鮎」（少年サンデー）でデビュー。74年に「釣りキチ三平」「幻の怪蛇バチヘビ」で講談社出版文化賞、76年に「マタギ」で日本漫画家協会大賞を受賞。

『ガロ』との出会いが無かったら、ボクの人生がこれほどまでに逸脱することは無かったでしょう。それまでのボクは、郷里秋田で銀行員をしていました。サラリーマンの中でも代表的にお堅い銀

行員で、それも在籍八年を数える中堅行員でした。そんなボクにこの年（一九六六）三度目の転勤の辞令が下りました。転勤は銀行員の宿命とも言わべきもので、気分は一新されますが、不馴れな地でのスタートはかなりのエネルギーを消耗します。それはともかくも、転勤した三度目のことです。ボクは定期預金係を命ぜられました。その隣に普通預金係のF嬢がいました。F嬢は書店の娘さんでした。しかし、その書店が銀行の真向いだったので、昼食時になるとF嬢は書店の売り物のマンガ誌をどっさり持ち込んで、読みながら食事をするのです。

四歳頃にマンガにシビレ、小学校の頃には既に「将来の夢はマンガ家」などとうそぶいたボクでしたから、F嬢の持ち込むマンガ誌に手を出さなはずはありません。

と、何気なく手にした一冊に、ボクの脳天は斧でカチ割られた様な衝激を受けました。手にした一冊は『ガロ』。

脳天をカチ割ったのは「カムイ伝」。

島抜けした夢の七兵衛がやたら漬けと称する漬け物を発明するくだりでした。

その迫力ある画面と、リアリティの横溢するストーリー運び、そしてその裏に描かれた作者の思想性は、おおよそボクがこれまでに培ったマンガ



という概念を、根底からゆさぶり、覆すものでした。

あわてて扉をめくり返し作者名を見ました。「白土三平」正直言つてへんな名前でした。おそらくペンネームだろうと思いましたが、しかし衝激<sup>ショック</sup>でした。

「八年間マンガと絶縁しているうちに、世の中がこんなに変わっていたのか！」

読み終えたボクは、思わず胸の内ですうつぶやいていました。

高校までのボクは、くるおしいばかりのマンガマニアでした。小学校の頃には、既にマンガ家を夢見るガキでした。中学生では、将来の職業という欄に堂々と「マンガ家」と記していました。もちろん、そうした「夢」は高校生になっても変わることはありませんでした。

しかし、なにしろ山の中の、世間知らずの、貧しい百姓家の小倅でした。そんな己れのスタンスが、年をとるごとに見えてきました。それは同時に、夢は夢としても、現実との間には測りようのない距離がある、と解釈するようになって、流れに身を任せるかたちで銀行に就職したのです。

銀行員となつてからは、日々の多忙のなかで、いつしか少年の日の夢を忘れていました。あれほど熱を上げたマンガも、せいぜい年賀状か暑中見

舞のカット程度になり、それに代わって小切手・手形法をひもといっていました。つまり、マンガと絶縁状態になって八年の歳月が流れていたのです。ボクの胸に、にわか少年の日の熱い炎が点火しました。マンガの炎でした。白土三平作「カムイ伝」が、まさにその導火線でした。

その日のうちにボクは文具店に走り、墨汁とペンとケント紙を買い求め、昼は銀行、夜はマンガを描く日々が続くようになりました。

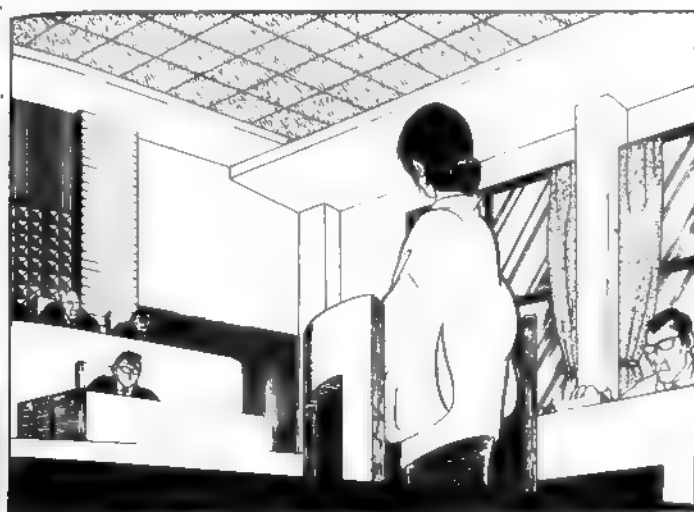
三年の歳月が流れた一九六六年正月、一本の作品が完成しました。この作品は前年九月より描き始めていたものですが、正月休みの三日間を総て費やして完成させました。「長持唄考」という作品です。

完成するや、祈りを込めて投稿しました。もちろん宛先は青林堂「ガロ」です。

待つ身はつらいものです。ボクはもう、投稿した翌日から出版社からの通知を待つようになっています。

二月も半ばを過ぎようとしていました。雪国秋田はまだ冬も真只中<sup>ただなか</sup>で、粉雪が舞っていました。仕事を終え帰宅すると、玄関の上りがまちに一通の封書が配達されていました。何気なく手にとり、送り人の名前を見てドキッとしました。青林堂からでした。





入選作品

高橋 高雄 作



銀行を辞しプロのマンガ家になろうとは夢にも思  
いませんでした。

初入選作「長持唄考」が掲載された『ガロ』が  
発売されたのは、それから一カ月ほどして、よう  
やく雪が解けはじめた頃でした。

大感激でした。

自分の作品が初めて印刷された歓びと、ボクの  
胸にマンガの炎を再点火してくれた「カムイ伝」  
と同じ本に載ったという事で、歓びも倍増でした。  
ボクはただちに青林堂に手紙を書き、その本を  
五〇冊注文しました。注文の本がわが家に届いた  
時は見事なボリュームで部屋を占拠し、女房もあ  
きれ果てていました。でもボクは平気でした。当  
時ボクは外務係と称して、銀行内の仕事ではなく、  
オートバイにまたがり、顧客を一軒一軒訪問して  
預金勧誘や集金をする係でしたので、その利点を  
活用したのです。

つまり、その本をオートバイに積んで得意先を  
訪れ売り歩いたのです。それも定価で。

なつかしい想い出です。

あれから二二年、そしてボクのマンガ家生活も  
今年で二一年になりました。しかし『ガロ』との  
出会いがなかったら、おそらくこんなにも逸脱し  
た人生は無かったかも知れません。

「初入選」でした。  
この年ボクは馬令を重ねて二九歳でした。もち  
ろん妻子もありました。しかし、まさかその翌年



ONO, Kousei

## 小野耕世



私に、ひとつ自慢できることがあるとすれば『ガロ』を創刊号から持っているということだ。そして、もつひとつ自慢できることがあるとすれば、私ほど『ガロ』を海外の人たちに送ったり紹介してきた者はいないだろう、という点だ（もつとも、ただ、好きでやっているにすぎないのだけれど）。

最近の例をあげるならば、ことし、一九九一年一月にフランスのカスターマン社から刊行されたばかりの日本のコミックスについての研究書『マンガの宇宙』のなかには、昨（一九九〇）年に出た『ガロ』のある号の表紙が、手塚治虫の作品そのほかの多くの日本のマンガについての図版とともに転載されているのを見ることができた。私が送ったのだ。

というよりも、この本には、実は私も一章を書くはずになっていた。昨年春、フランス人の編著者から私に手紙が届き、「日本のコミックスの経済」というテーマで、一章分を書いてほしいという依頼が来た。喜んでひきうけたのはいいが、なまけものの私は、マレーシアでアジアのマンガ家たちと遊んだりしているうちに、しめ切りが迫ってしまい、とうとう原稿を「落して」しまったのである。恥ずかしいはなしだ。まあ、いいわけをあえてすれば、私の一種の完全主義が、原稿を

遅らせてしまったというべきか。そして、フランス側が出版を急いでいたのは、一九九一年一月にフランスのアングレーム市で開催された恒例の国際コミックス大会が、日本のマンガの特集だったので、それに間にあわせて、フランス語による日本のコミックスについての研究・紹介・分析の本を、ともかくも刊行して売らなければならなかったからである。フランスでは、アングレームのほか、グレノーブルなどでも国際コミックス大会がさかんだが、それはいまや、街おこし運動であるとともに、国家事業であり、出版企業がそれにからんで、ビジネス戦をくりひろげているのである。国家がらみのコミックス文化のプロモーションなのだ。

私の原稿は間にあわなかったが、日本のマンガ家のデータについて、問いあわせがファックスでひんばんに来たので、いろいろ情報を伝えた。また、日本にアンダーグラウンド・コミックスの優れたものはないか、ときいてきたので、私は『ガロ』を送ったのである。『ガロ』が、いわゆる欧米でいうアンダーグラウンド・コミックスに相当するものかどうかは、私にもはっきりしない。それはどうでもいいことで、ともかく優れたコミックス誌として（まだ相手が知らなければ）、日本のマ



マンガ界に『ガロ』ありと、一冊なりとも送って、先方に現物を見せておくだけの価値はあると私は信じているのだ。だから、わがアメリカの友人、フレッド・ショットによる『マンガ、マンガ、マンガ』（講談社インターナショナル刊）に次ぐ、外国語で書かれた日本のマンガの研究書である『マンガの宇宙』には、『ガロ』が、（一九九〇年に創刊されたアート・コミックスの月刊誌『A・h・a』と共に）紹介されているのである。

しかし、私にとって、こうしたことは最初ではない。一九七〇年代のはじめ、私はアメリカの季刊研究誌『マンガ家のプロフィール』の編集者であるマンガ家のジャッド・ハードの依頼で「日本のコミックス」と題する英文の原稿を送ったことがある。これは日本における戦後のコミックス状況を記したもので、当時出ていた『ガロ』や『COM』など、多くの日本のマンガ資料を、原稿とともに、どきつとアメリカに送ったものだ。ところが、送られてきた掲載誌の私のページには、どうしたわけか『ガロ』からの図版だけが省かれていたのである。文章のなかで、私は白土三平の「カムイ伝」に触れているのに、その場面の絵は載っていないのだ。私は、表紙に百姓一揆の模様が描かれている号の『ガロ』を送っていたし、内

容にはすさまじい戦いのシーンがあるはずだった。手塚治虫そのほかの図版は載っているというのに。

私は、なぜそうなったのか考えてみた。つまり『マンガ家のプロフィール』というマンガ研究誌は（いまも続いているが）、編集方針が保守的だったのである。編集者である穏健なマンガ家は、『ガロ』を見てびっくりしたに違いない。百姓一揆の、切られた首が飛ぶ群衆場面を見て、とてもこれは自分の雑誌には載せられないと思ったのであろう。かくして、私の意気ごみだけからまわりしてしまったのだが、しかしともかく、私の文章のなかでは『ガロ』とその作家たちについて述べてあり、英文で発表されたこの種のものとして、初めての試みだったのではないかと思う。

そのころ私はNHKの教育局に籍を置き、ラジオやTVの教養番組を作っていたが、ラジオの教養特集で「ロマンの復活」（江戸川乱歩や夢野久作、久生十蘭などをとりあげたもの）、「SFの将来」（まだ新しい分野だったSFをとりあげた）、そして「現代マンガの展望」を提案・製作し（NHKの仲間は、これを私の三部作と称した）、このマンガについての番組に、『ガロ』編集・発行者の長井勝一さんに（他のマンガ家とともに）出演をお願いしたのだった。このとき私は、初めて神田の青林堂を訪ねている。



それから、いろいろなことがあり、私はNHKを離れたが、海外のコミックス界との交流は、ますます深まり、海外旅行をするたびに日本のマンガ本をスーツケースに積めていったものだが、そうした折（私も苦しい状況だった）、長井さんを訪ねると、こころよく刊行されたマンガ本を私に提供してくださったもので、それがどんなに役だち、私を上げますことになったか、はかり知れない。そして、昨（一九九〇）年の秋には、再びあるTV番組で、長井さんといっしょになり、感慨が深かった。

いまでは、海外でも日本のコミックスについてかなり知られるようになり、『ガロ』についても知っているひとは知っている。一九八〇年に、『アヴァンギャルド・コミックスの雑誌』というふれこみで、大判の国際アート・コミックス誌『RAW』を創刊したニューヨークのマンガ家、アート・スピーゲルマンは、来日して、すぐに『ガロ』に興味を示したし、『RAW』に優れた作品を発表しているマーク・バイヤーは、青林堂を訪れたことを、私に感激して語ったものだ。そして『RAW』には、もともとは『ガロ』に発表されたつげ義春のマンガのうち「紅い花」と「大場電気鍍金工場」が、その後英訳、転載されている。

スピーゲルマンの頼みで、私が作家から転載の了承を得たのだが、後者について「この工場の少年は、後に『ガロ』で活躍するようになる作者自身の姿である」といった意味の解説文が『RAW』の目次ページにそえられており、そこには『ガロ』という日本のコミックス誌への敬意がうかがえる。

長いあいだに、『ガロ』に描いているマンガ家にも、作品にも変化があった（近年では、杉浦日向子さんを発見してくれたことだけでも私は嬉しい）。しかし、日本の優れた質の高いアンダーグラウンド・コミックスを見たい、という海外からの声に対しては、私はいつも『ガロ』を送ってきた。『RAW』も、『ガロ』と共通したところもあるようで、やはり違う。よく考えると『ガロ』に相当する外国のコミックス誌を、私は思いうかべられないことに気がつく。さまざまな異色コミックス誌を『ガロ』みたいだ、と思うことはあっても、それ以上に無理に対応誌を探す必要はないという気がする。『ガロ』は『ガロ』であり、世界でも類のないコミックス誌というべきなのだろう。少くとも私にとっては、いつもその国のコミックス・ファンに紹介することを誇れる雑誌であったことが嬉しいし、これからもそうでありつづけるだろう。

【プロフィール】 1939年11月28日、東京に生まれる。国際基督教大を卒業後、NHK国際部などに在籍中、ドキュメンタリー映画「キャロル」を制作。NHKを離れた後、映画やコミックの評論家として活躍。

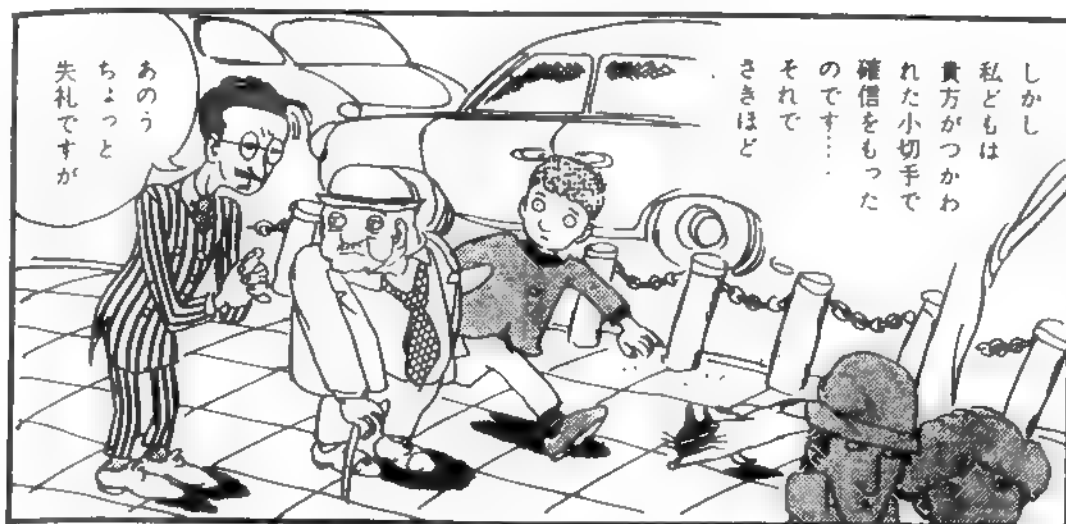


# 色々な人が ささえた 『ガロ』

『ガロ』は、私にとってあまりに身近な存在だ。私の実質的な仲人は長井さんがつとめて下さったし、南伸坊君のオニギリのような似顔絵を最初に描いたのも私だし、単行本も青林堂から出たものが一番多い。

当時の私は漫画がすべてで、どうしようもなく頭に血がのぼってしまっていた。すでに虫プロに勤務して、昼間はアニメーション、夜は漫画を描きながら、漫画が本職でアニメが内職だと思っていた。

そんな頃に『ガロ』から誘いを受けて作品を発表しはじめた。ちなみに、同時期に、師



NAGASHIMA, Shinji

## 永島慎二

【プロフィール】1937年、東京生まれ。67年5月号「仮面」で「ガロ」初登場。虫プロでアニメーションの演出も手掛ける。代表作「フーテン」「その場しのぎの犯罪」「少年期たち」など。梶原一騎原作「柔道一直線」の作画も担当。





たる手塚先生の『COM』にも発表していたが、作品の上で何らかの差をつけようと思ったことは全然ない。

私は『ガロ』に登場していたほとんどの人をすでに知っていた。彼らが漫画家としてデビューした時、私はすでに貸本漫画を描いていた。白土三平さんはデビュー当時、貸本時代の私の絵を真似て描いておられたようだ。つげ義春も後輩にあたり、彼が若木書房で描いた「白面夜叉」は私が描いてヒットした「謎の白仮面」にちなむタイトルなのだ。

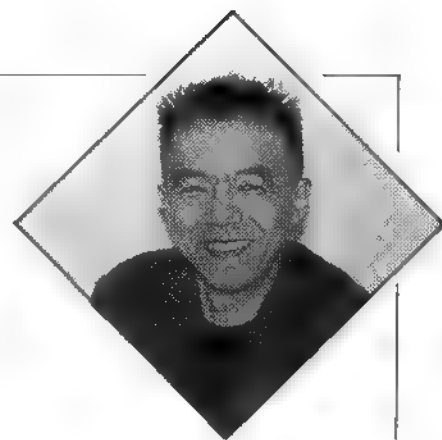
そもそも、私達貸本漫画出身者はいささか育ちの悪い人種で、その分バイタリティーにあふれている、と自負していたのだが、それをはるかに上廻るのが紙芝居出身者である。白土さんや、水木しげるさん、小島剛夕さんといった方々は、安い単価でウンと描く紙芝居を経験したことで、私達よりはるかにタフなのだ。過酷な紙芝居に比べれば漫画などは屁の河童、とばかりに、ものすごい質と量とを保てる方々である。殊に、量の点では私達は足元にも及ばない。

もちろん長井さんも、三洋社時代から知っていた。かつての長井さんは、今と違って、その辺を落ちつきなく走り廻るような、ちょっとオツチヨコチヨイな感じがあった。ひよっとしたら、作家たちより個性的であったかもしれない。今の長井さんを見るにつけ、私のこれまでつきあった人々の中で、さまざまな時代を経て、時と共に、これほど内面的に大きくなっていった人は珍しい、と思う。

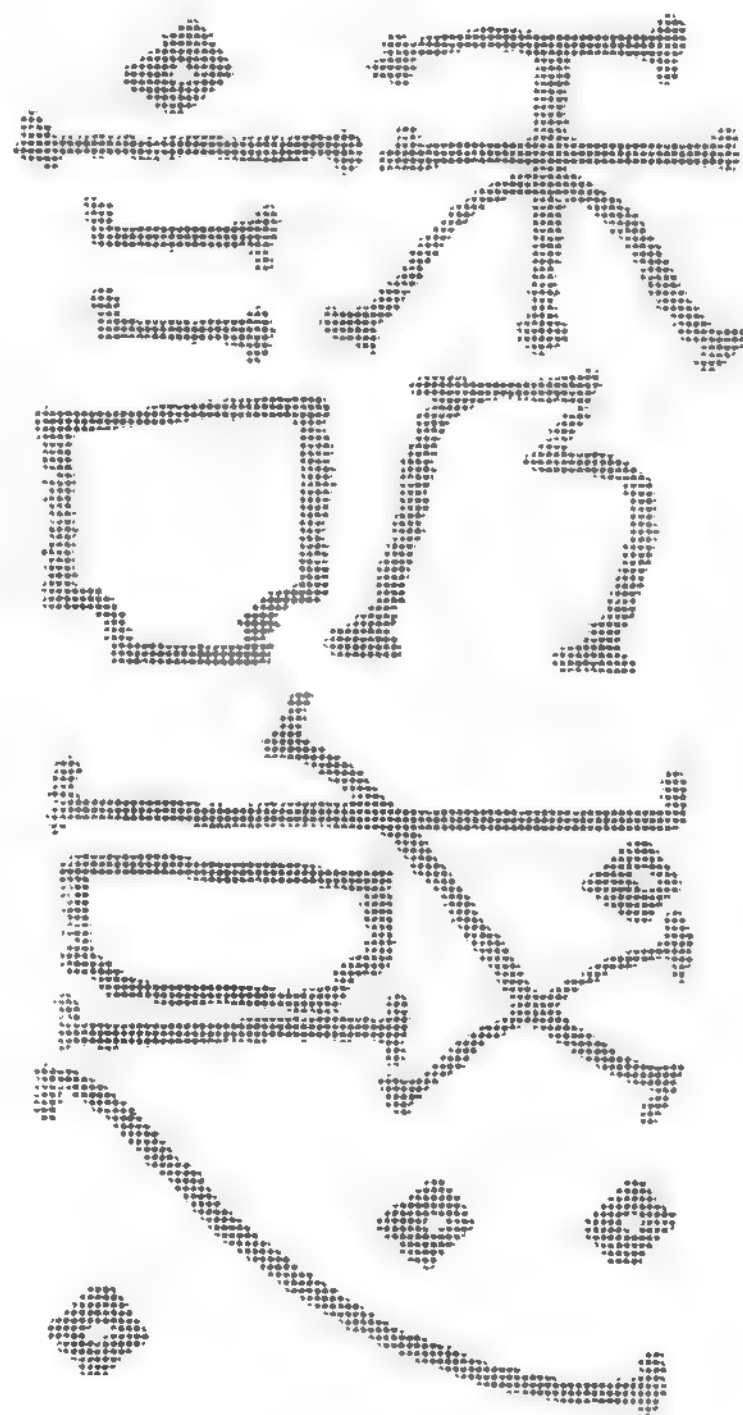
何人もの漫画家が長井さんを、『ガロ』を支えてきた。常に誰かが軸となって、『ガロ』を維持してきたのだ。白土さんの時代や、水木さんの時代や、つげの時代が、次から次へと築かれて『ガロ』を救っている。実に不思議としか言いようがない。

私にとって、『ガロ』は一番自由に、その時の描きたいものが描ける本だった。他の商業誌などとは全然違う。時代の移りゆく中で、私自身にも変化があって、いつしか漫画から心が離れてしまい、今では漫画雑誌を読むこともほとんどない。それでも、『ガロ』だけは目を通さずにいられない。





# 雑誌魔の



『ガロ』ありがとう。

いや、過去形で言う気はないけれど。

けれども、漫画のお城『ガロ』なくして、

僕の音楽も出発しなかった。不思議だ。

キンクスもビーチボーイズもデヴィ・クラ

ーク・ファイヴもボブ・ディランも、めちゃ

くちゃカッコよかった。北海道の高校生に、

東京から深夜届く電波は、一刻一刻が刺激的

だった。

その頃、東京から送られてくるアートめく

魔の雑誌が『ガロ』だった。

少年漫画雑誌『少年』や『少年画報』や

『冒険王』などで小学時代を、そして、つか

のまで廃刊になってしまった『ボーイズ・ライフ』で中学時代をすごし、やっとこさ少年漫画を卒業したばかりの高校生に『ガロ』は形容し難い魅力があった。

一般少年漫画雑誌のカラフルさとはうらはらながらも、サツカリンと着色料を倍増させたような、貸本屋マンガをイメージさせた、白土三平のイラストとレイアウトの表紙。そして、内容は井伏鱒二の世界あり、夢野久作的世界あり、久生十蘭の世界あり、稲垣足穂の世界あり、と文学青年を気取りはじめていた高校生には、えもいわれぬ魅力があった。

【プロフィール】 北海道留萌市に生まれ、小樽で育つ。鈴木慶一らと出会い、音楽活動を開始。72年に「赤色エレジー」でデビュー。その印税を使って、74年に35mm 劇映画「僕は天使じゃないよ」完成。81年に「バージン VS」を、90年に新ユニット「雷蔵」を結成。著書に、詩集「モリオ・アガタ1972～1989」、エッセイ集「童礼礼少年主義宣言」などがある。





林静一さんは、一郎というマンガ家志望のアニメーターを主人公に「赤色エレジー」を描いた。動画（アニメーション）の世界が、一コマ一コマ静止した漫画の中に描かれた。僕はその漫画の中に漫画を超越した躍動感とリズムをおぼえた。

それは劇しい誘惑だった。歌は漫画の中から幸子と一郎をひきずり出して、躍らせ恋をさせた。あの時代に、ストイックに生きた幸子と一郎はクロクロ首を持った影法師のようにサイケデリックかつ儚げだった。その存在は僕の全感覚にうったえた。僕は声にして幸子と一郎の、そしてあの時代の僕らの全呼吸の中に吸って吐いたものを吐出したい衝動を押しとどめることができなかった。

もちろん、それは林静一という一個人にとどまったことではなかった。当然つげ義春であるし、佐々木マキであるし、淀川さんぽであるし、赤瀬川原平であるし、安部慎一であるし、鈴木翁二であるし、といった『ガロ』の牙城全般にわたってのことだった。

一九六〇年代中・後半から『ガロ』に触れ、



七〇年代初頭には「赤色エレジー」によって僕はとうとう音楽の世界に足を踏み入れてしまい、それから約二〇年、音楽修業のような放浪旅のような彷徨を重ね、今はアラブの彼方からさすらってきたような〈雷蔵〉というユニットまで結成してしまった。苦難の二〇年でもあったが、本当に楽しい二〇年だった。そしてその出発の背景に音楽のみならず『ガロ』的世界が存在していたことが、不思議といえど不思議、当然といえど当然というところがわれながら、驚きである。『ガロ』こそが、何と云ったって僕を表現世界に引きずり込んだ重大な表現空間であったことには違いない。

こういう場だから言うのではないが、『ガロ』の六〇年代、七〇年代に持った空間がもう一度社会的に問い直される時が来るような気がしてならない。

決して現在の『ガロ』を軽んじていうつもりはない。あの時代『ガロ』の持っていたアート的な、社会的な、かつ反社会的な、さらに超現実的な、しかも、プリミティヴな、少

年世界的な、内省的な、静謐かつ暴力的なエネルギーは、他に比較の出来ないエロティシズムにも似たマグマだった。

あの時代だったからとか今はどうだとか言っただけではじまらない。歴史に残せとか神話化しろというのでもない。

ただあの時代の『ガロ』の持ったマグマをもう一度みんなに見て欲しい気がする。懐かしいんじゃない。今見ても、本当にびかびか稲光っている。そういうものの良さを忘却、廃棄して、現実や近未来の人間の幸福や、未来論を見つけたつもりでいるのはつまらない。とはいえ、この言い方は『ガロ』マニアのたわごとかもしれない。なおかつ、懐古趣味のための懐古趣味の次元で『ガロ』は良かったなんて言っているとおもわれるとこまってしまう。いい加減にして欲しい。

それでも、やっぱり言っておこう。

『ガロ』ありがとう、と。

長井勝一さんありがとう、漫画をたくさん描いてくれた、読ませてくれたみなさんありがとう、と。



# 叙場性

## 『ガロ』の理由



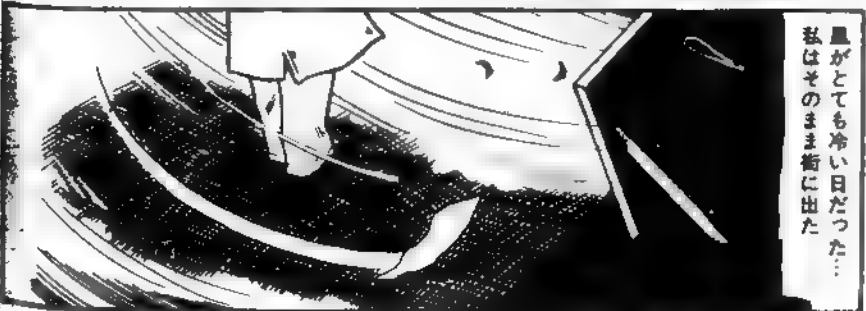
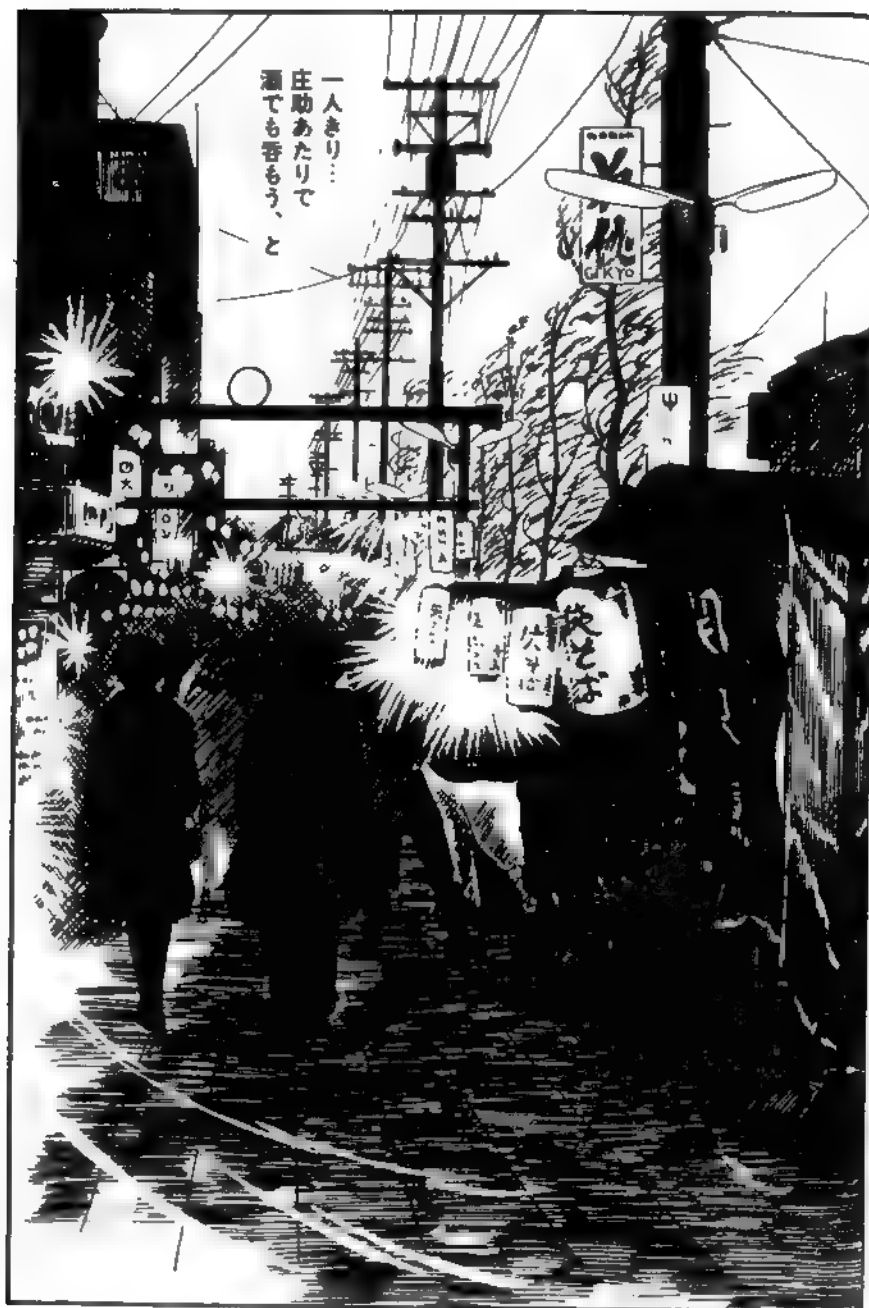
私に古川益三、安部慎一を加えた三人が『ガロ』のトリオと呼ばれた時期があった。たんに名前のうちに数を持つことと、同世代であるという事実によったに過ぎないが、あるいは読者の一部にはそこに共通する何ものかが見えたのかも知れない。

SUZUKI, Ohji

## 鈴木翁二

〔プロフィール〕1949年愛知県生まれ。高校卒業後、上京。69年「庄助あたり」でデビューした後、水木プロに約1年間勤める。あがた森魚の「日本少年」「永遠の遠国」のジャケットや、86年のコンサート「遊星の露台で」（浦河町）の舞台デザインを手掛け、同年、FM東京で「地上で眺めた月」「星の栖家」がショート・ドラマ化。91年、劇団「少年王者館」が「マッチ一本の話」を上演。主著「少年手帖」「銀のハーモニカ」の他に、近刊予定として「人魚ありき」（銀音夢書房）、「透明通信」（再刊）、「鈴木翁二作品集」、カラー作品「バス停物語」がある。





ところで七〇年代のはじめに「むこうのラムネ庵」という漫画を画いた時、さっそく誉めてくれたのがこの二人で、古川は「ムード・マンガだ!」と言って、安部は登場人物に自分と私とを当て嵌めて祝ってくれた。

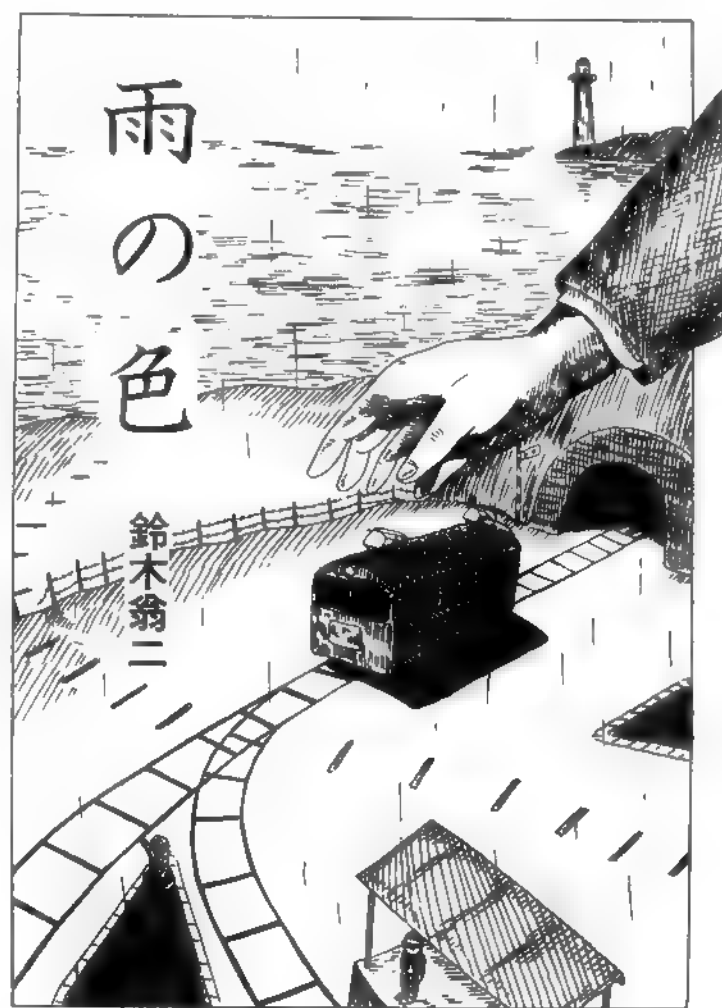
「七〇年代へのわがマニフェストとのひそかな思いと、デビュー四作めなのに処女作としての思い、とをこめて仕上げた。「場を。つまりはそれを書きつつあるところの自分という現場が、画かれつつある場自体を、画かないこと。」安部と古川が誉めてくれた。が、それだけのこと。」(オーロラ通信・No.8)

さて、ある所にそう書いた、私のそんな作物を三人が肴にしていたおり、居合わせた『ガロ』の先輩漫画家がモチアゲってくれつつ「あれマリワナでしょ」と、口をすべらせた(作中にある酒盛り中の男が煙草を啣えているので。こんな見当違いはいったいどうしたことか。私は帰りの途みちそんな読み違いがどこから来るのか考えざるをえなかったし、安部はしきりと憤慨した。私は「たんに夜だけを書きたかった」に過ぎず、連れたちはただ夜を見た



だけなのに、である。理由は次の如き事情に因ると思われる。

最近ある所から請われたアンケートの資料中にみた以下の認識と、それはそれは軌を一にするものではないか？ いわく「マンガは記号なのだから」（手塚氏）、「マンガが記号なのは今や常識」（批評家氏）。すでにカミサマであるらしい手塚氏のミコトノリに関しては、不信心者の私としては聞き流すとしても、後者が批評の側から言われたとはには信じたくない気もするが、しかし確かに先の先輩氏の言も含めてこういった正統な誤解は、当時も、そして今も常識であるに違いなく、そこで私の漫画は存在の余地も未来への可能性も若干この地上にあるというわけである。こんな常識が当時も今も私の作品行為にとつてはアンチ・テーゼにも等しく、S・Oマンガのエッセンスの全否定という御託宣として（私にとっては）受け取れるので、湿り勝ちの我が発動機を震わす格好の契機ともなるからだ。以上から『ガロ』である理由もまた明白である。



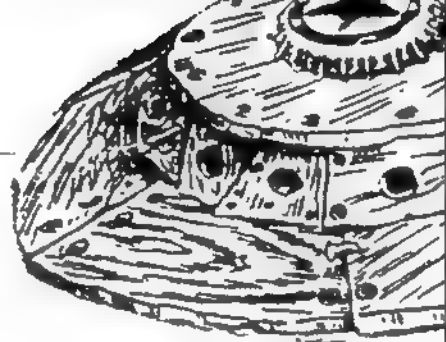
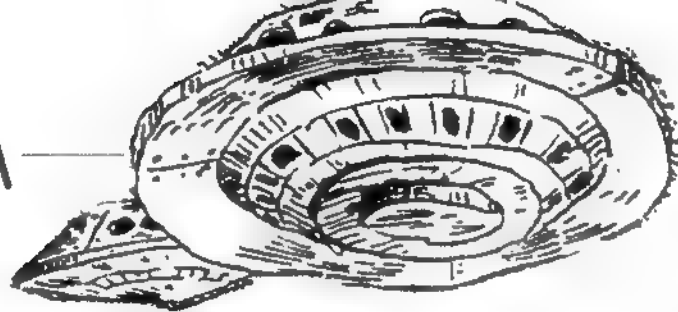
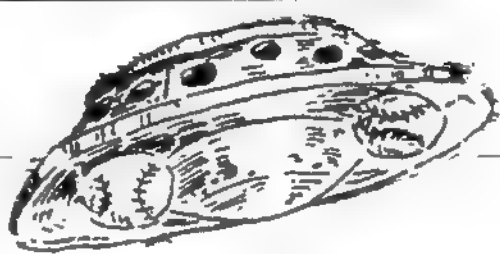
※1 絵入りのノート風なのを、という製作者の要望には時間の都合で応えられなかった。御諒承を。

※2 読者は叙場性の語に不審を抱いてはいけない。すでに死語なのか、いつ誰のなした造語なのか、誰のでもないのか、私にはわからないが、それが、自分のコード

ーのケイコーをよく言い当てているな、と私には思えるので。語の示す内実については私のこれまでの集を（おひまな方には）見て貰うとして、おりあらば『ガロ』の少学ノート上で今度は概念として述べてみたいと思う。

※3 …ところでさて、近頃また表現に関わろうとする若い世代のなかに、S・Oマンガを玩味しようとする青年達を散見できるのは、どうやら漫画家であるらしい。しかし失敗家でもある私にとっては、「あたらないようにお食べなさい」と願いつつもヨロコバシイことである。それは夜の窓から望見する碍子の発光に似る、かけがえのないヌクモリであるから。断じて失敗家！





# 『ガロ』は

# 茂雄

# かな



AKASEGAWA, Genpei

## 赤瀬川原平

〔プロフィール〕1937年、横浜に生まれる。画家・作家(尾辻克彦)。60年代には「ハイレッド・センター」など前衛芸術家として活動、70年代には「櫻画報」など独自の批評を盛り込んだイラストレーターとして活躍、81年、『父が消えた』(文春文庫)で芥川賞を受賞。70年から美学校で「絵・文字」「考現学」の講座を担当し、宮武外骨、超芸術(トマソン)の研究を行う。主著に『櫻画報大全』(青林堂、新潮文庫)、『超芸術トマソン』(白夜書房・ちくま文庫)、『東京路上探検記』(新潮文庫)などがある。学会では、長老と呼ばれている。近著は『千利休―無言の前衛―』(岩波新書)。

『ガロ』という名前がいい。

いい名前というのは造形的、音響的にいいわけだが、もう一つ、その内容の盛り上がりや輝きなどが逆流してその名前にじわじわと染み込み、名前はいつそう艶を増すということがある。

『ガロ』の由来は、白土三平のマンガに出てくる人物の名前だということである。主人公ではなくて、何かちよつとした人物らしい。でもその名前の響きがまさに『ガロ』だから

『ガロ』の名前にしたわけで、これはちよつと変な言い方だが、しかしそういうもっていき方がいかにも『ガロ』らしいと思うのである。

そんな『ガロ』の伝説を書き出すときりがないだろうが、私個人としては、『ガロ』に対しては二つの面がある。白土三平、水木し





しかしあの半田人が何故か  
半田札のこと  
この半田札とは日本銀行で通用  
するもの、いや通用しないもので  
ある。これについてはどうあるか  
日本銀行の半田札の発行所である  
の半田札を下記宛に送るこ  
と、また半田札と同様にして  
送るものがある。

記・千101 千代田区神田神保町2-20第2富士ビル3F 大日本銀行札発行所

げる、つげ義春、滝田ゆう、林静一、佐々木  
マキ、鈴木翁二、安部慎一、古川益三、淀川  
さんぽ、花輪和一、川崎ゆきお、とつづく描  
き手へのファンであった面と、もう一つは美  
学校の生徒であった沢井憲二、南伸坊、渡辺  
和博といった人々が編集者として『ガロ』に  
参入していった面である。それが時代的にも  
違ひ、自分が『ガロ』に接する感じも違っ  
てくるのである。

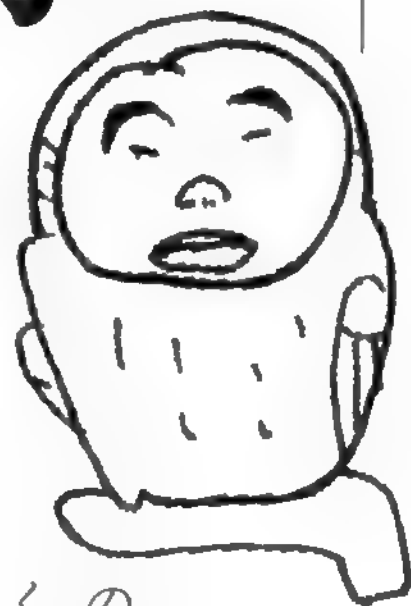
ほかにも上野昂志、石子順造、嵐山光三郎、  
安西水丸、荒木経惟、糸井重里、などなど何  
層にも人名が浮かんでくるわけで、そういう  
名前のコントラストだけでも、『ガロ』はや  
はり濃縮コンクリートジュースというか、有機農業  
の泥つき野菜というか、産地直送会員制の非  
売品というか、必発必中のパトリオットミサ  
イルというか、まあたとえだすときりがない。  
とにかく、ギネスブックに載るようなデー  
タはなにもないかもしれぬが、人がよくいう  
ように、記録には残らないが記憶に残る、あ  
の長嶋茂雄選手が、あるいは『ガロ』の近似  
値ではないのだろうか。



# 『ガロ』が 1番

IWAMOTO, Hisanori

岩本久則



もう一五年ほど前になるか、共同通信のニューヨーク支局長を務めたことのある萩原忠三さんは、『COM』と『ガロ』を持参してソ連のマンガ誌『クロコジイル』の編集部を訪れた。

『クロコジイル』の編集長は『COM』の字を一目見るなり、「日本にはコミニズムの漫画雑誌があるんですね」と言った。

この時、「我が国では自由に漫画が描けるが、貴国では如何？」と尋ねると、

「我が国でも編集部の前に若い漫画家が長蛇

の列を作り、自由に政治批判の漫画を描いてくる。ただ、編集長としては掲載しないだけです。日本でも金にならない漫画は掲載しないのだから、同じでしょう」

そこで、萩原さん、そんなことはありませんよ、と、おもむろに『ガロ』を取り出したという話を本人から聞いた。

政治的プレッシャーの中で漫画誌を継続していくのと、金にならない漫画を掲載しながら継続していくのと、どちらがシンドイのか僕には判らないが、中国の漫画新聞『風刺と幽默（ユーモア）』編集長英トウさんは、あの天安門事件の後「ともかく新聞を潰してしまつては元も子もないから」との選択をした。これもご本人から聞いた話である。こうなると『ガロ』の頑迷さは、世界で一番偉い。

ソビエトも中国も政治体制が変われば、そのプレッシャーが取り除かれる日が来ないとも限らない。なのに『ガロ』が金になる漫画を考えると、日が来るかどうかは疑わしい。

ヤッパシ、『ガロ』が一番偉いのである。

コレ理屈通ってる？

【プロフィール】1939年、高知県生まれ。海上自衛隊で10年間船乗りをした後、漫画家に転身。熱心なバードウォッチャーとしても知られる。著書に「ボクの野鳥観察日記」「鳥神話」などの多数の著書の他、青林堂刊の漫画作品集「岩本武蔵」がある。



# 『ガロ』は 誌名が



KUSUMI, Masayuki

## 久住昌之

【プロフィール】1958年東京生まれ。美学校絵文字工房にて赤瀬川原平に師事。泉晴紀とコンビを組み81年、『ガロ』にて「泉昌之」名で「夜行」を描きマンガ家としてデビューする。単行本に「カッコいいスキヤキ」（青林堂）、「ダンドリくん」（双葉社）。他にイラスト、デザイン、エッセイ、作詞作曲等の仕事もする。90年、実弟久住卓也と新コンビQ88でまた『ガロ』再デビュー。早くも2冊目単行本の『幼稚大先生タケマン』（河出書房新社）を発表。去年まで「タモリ倶楽部」で「東京トワイライトゾーン」をやった奴と言った方が一般の人にはわかりやすいか……。



!!

『ガロ』は「ガロ」っていう名前がいい。

中学生の時初めて見た時、正直言って「ナンドコレ」と思った。オトナのマンガだと思った。ヤラシイ、という意味もかなりあって。

高校の頃、カッコイイ上に頭もいい友人が読んでて、一気に『ガロ』はカッコ良くて頭のちよつとイイ、という意味でオトナのマンガになった。ボクにとって。

それからアングラ劇団的な世界を知って、「そうか、もしかしたら『ガロ』とはアングラなのか」とも少し思った。

別にその頃アングラはあまりクライとかピンボーだという風にボクは思ってた。なかった。あれもある種のオトナだと思っていた。



そういえば『ガロ』という名前はおよそコミックっぽくない。当時『COM』という雑誌もあったけど、『COM』はCOMICの『COM』でポップだ。いかにも手塚治虫な感じがする。でも『COM』はツブれた。

最近では『ばく』というのがあった。このマンガ誌も好きだったけど、『ばく』というのが、何か、ポップでもなく、アングラでもなく、ちよつと変わったおじさんて感じがした。この雑誌も残念がらなくなった。

『ガロ』は途中で一度『GARO』に変わった。

その時は、

「あ、やっぱり『ガロ』じゃ今の若いオシヤレな読者が敬遠するのかな」

と思った。もうアングラは古い。というか職業で言えば3Kみたいなものになってしまったのかなア、と思った。まア仕方が無い、これも時代だもんな、ウケを狙って『ガロガロ』とかやってもダメだろうし、歌謡曲もサビが英語になってるの多いし、『GARO』なんて、どっかのDCブランドみたいに思え

ない事もないぞ。

と思つてたら、またカタカナの『ガロ』に戻った。なんかカッコイイ気がした。潔いというか。今や、もはや、ヒネクレた意味でなく『ガロ』っていい名前だと思う。

この名前だからこそ、今までこんなに个性的で他からは絶対出てこれない魅力的マンガ家を生んできたんだと思う。やつとわかった。ボクは『ガロ』でデビューしたというのが、ちよつと恥かしい時期も正直言つてありましたが、今や一点の曇りも無く誇りに思っています。本当です。







# 「泉昌之」 誕生の真相

「泉昌之」は、ボク泉晴紀と久住昌之が二人で漫画を描くときの合名である。

ボク達が二人で描き出したのはたいした理由もないのだが、こうして一〇年も続けて来たのは、続くだけの理由があったのだろう。

久住の原作「夜行」を受け取った時「あ、これは絶対面白い」「これを劇画調で描けば必ずウケる」とボクは思ったのだった。その結果は……。他の所でも書いたように、ほとんど評価されなかった。

受け皿のなかったボク達二人の作品を載せてもらったのが『ガロ』だった。

「こんな面白いマンガがウケないわけがない」とボクは思っていたのだが、その最初の理解者が長井さんだった。

「泉昌之」という、一人であるかのような筆名で描き出したのは、長井さんは原作付きのマンガを嫌う、という南（伸坊）さんの言葉によって、長井さんをごまかすためにつけた苦しまぎれの合名であって、それから一〇年ボクを苦しめる事になるのであるが、メンドーだから省く。

ボクにとって面白いマンガとは、自分が楽しめるマンガという事であり、久住とこうして続けてきたのも、それは面白いからであった。ボク達はお互いに作者であり、読者であり、批評家である、という不思議な緊張関係の中でマンガを描き続けてきた。泉昌之は泉VS久住のバトル・ロイヤルだったのである。

近頃ボク達が別々の仕事をする事が多くなったのは、手の内を知りあった相手同士が、別の対戦相手を求めて新たな技に磨きをかける、というのに似ている。泉昌之という筆名をあえて「作・久住昌之、画・泉晴紀」と改めたのも、新たな緊張関係が欲しいからだだった。

【プロフィール】1955年2月、石川県金沢市生まれ。赤瀬川原平＝講師の美学校で知り合った久住昌之と共に、81年1月号の「夜行」でデビュー。2人で1人の「泉昌之」として91年1月までに12冊、「泉晴紀」名で「東京ズカン」など単行本4冊刊行。



# うーん、こういう 漫画もある!!



AKI, Ryuzan

## 秋竜山

[プロフィール] 1942年、静岡県生まれ。漁業や農業に従事し、郵便局勤務を経て漫画界に入り、ナンセンス漫画で新境地を開く。第16回小学館漫画賞、第21回文藝春秋漫画賞、第17回日本漫画家協会選考委員特別賞を受賞。漫画集、エッセイ集など著書多数。

「これが漫画だ!!」と、強調したがる年齢がある。いったい、何歳ぐらいの時だろうか。

自分の描く漫画が、自信が有ったり無かったりしながらも、そう言い切るといふか、言いたがる時があるものだ。はったりと笑われるかもしれないが、自分の漫画を世に出して、それで何とか生活していききたいと思っている時の、熱気のようなものあらわれだろう。

何年か経って、冷や汗をかく運命にあるのであるが、血道をあげている時は、そんな未来があることなど思いもよらない。「これが馬鹿であるかわからない。これが若さ

というものですよ!!」なんて、いいたがる人もいるが、ね。歴史ある『ガロ』を毎号眺めていると、いつまで経っても『ガロ』だね、という思いがする。そして、どの作品をとつても、「こういう漫画もある」と、いうことだ。

作者は、「これが漫画だ!!」と、言い切ることをせず、「こういう漫画もある」と、言っているように作品を通して思えてくる。後になって、それが名作であったり、冷汗作であったりするわけだ。私は「これが漫画だ!!」と、強調する作者も好きであるが、



「こういう漫画もある」と、『ガロ』に作品を発表する作者も好きだ。私の場合は「これが漫画だ!!」の方であったが、『ガロ』を初めてめくった時「へエエ!!」と、眼を丸くした。そして、こういう漫画もあったのか!!と、思った。ガロ的な漫画を構築してきたのは、描き手によるものか、長井さんによるものか、一方に決めてしまうことはできないだろう。それでは両方か、というと、そうかもしれない。でも長井さんに言わせると、もしかすると

「こういう結果になってしまったのですよ」と、いうことになるかもしれない。

長井さんの、いつもすごいと思わせることは、ガロを発刊し続ける根性にあると思う。漫画界というか漫画の歴史において、「こういう漫画もある」という世界を造り上げたことは、これは無視して漫画の歴史を語ることはできないだろう。

昔、私も『ガロ』誌上に発表させていた。太陽に住む人間達が、火の中で寒い寒いと言ってふるえているといった内容の漫画

をかなりの期間連載させていただいた。そのような漫画を『ガロ』でページをさいてくださったのも、私の思った「こういう漫画もある」という『ガロ』の性格にかなったからではなかったろうか。『ガロ』がある限り、こういう漫画もある、という漫画を発表できる場があるということだろう。これは、私が勝手にそう思い込んでいるのであって、長井さんは別のことを思っているかもしれない。でも、長井さんの気のやさしい人柄からすると、「秋さんの言う通りですよ!!」と、言ってくれるに決まっている。長井さんとお会いすると、人間的にホッとするものがある。延々と漫画の話ができる人である。私自身、漫画の話ばかりしていたい。漫画以外の話などちつとも楽しくない。漫画の話をしていて、では、ちよつと話題をかえて別の話をしようと言って、また、漫画の話を始める、という光景が好きで、私はいつもそういう中にいたいと思っている。そこに、『ガロ』が置かれてあったりしたら最高だろう。



# 『ガロ』のこと

『ガロ』はいつの時代も、さまざまな才能を吸収し増殖し続ける生命体だ。

理念を追求する細胞、男と女の関係性を思索する細胞、旅する細胞、アクションに興じる細胞、生殖にいそしむ細胞、四コマの壁に棲む腸内細菌もいたりして、極めて健康体だ。己れのパワーが落ちている時など、送られてくる『ガロ』を開けるのがためらわれる。開けたとたん、ほっかほかの内臓が飛び出して、くるることがあるからだ。

私の漫画が『ガロ』に入選したのは、一九六六年の六月号であった。

おりしも、かの日置領では蔵屋のマユ買いたたきに端を発した玉手村の一揆がぼつ発し、「カムイ伝」は盛り上がりを見せていた頃だ。カムイに拔忍になったかつての師、赤目を殺るよう指令が下されたのもこの頃だった。私は実家が農家で、子どもの頃、代掻きを



KATSUMATA, Susumu

## 勝又進

【プロフィール】 1943年12月27日、宮城県生まれ。高校卒業後上京し、日製産業に3年間勤めた後、東京教育大学理学部物理学科に進む。1年の時「ガロ」投稿し、66年6月号以降、連続入選。カスタムコミックの表紙絵も担当。主著に「勝又進短編集」「わら草子」「ふらりんこん」(青林堂)、「桑いちご」(日本文芸社)、「絵本・遠野物語」(高文研)、「木菟巷談」(風門社)などがあり、「ハンザキぞろぞろ」(PHP研究所)など絵本の挿し絵も手掛ける。



したり、牛追いをしたりしていたもんで、花巻村の正助が始めて綿作りに成功したときは感激したし、自由に生きようとする忍者カムイの行く末を見守ってもいた。

当時私は三年間勤めた商事会社を辞めて、大学に通い始めていたのだが、会社の寮では「狼少年ケン」や「宇宙少年ソラン」の表紙



のついたスケッチブックに、忍者モノを描き  
ついでいたのだった。

四コマ漫画が入選し、もっと他の作品も持  
ってくるようにというハガキをもらい、私は  
はじめて神田神保町の青林堂を訪ねた。

青林堂は『航空ファン』の二階にあつて、  
狭いはしごのような階段を上った、鳥の巢の  
ようなところだった。

『忍法秘話』や『ガロ』のバックナンバーが  
すり鉢状に積まれた底に机があつて、そこに  
長井勝一社長と水木しげるさんがいた。

「命がけで働いてはした金しかもらえねえ、  
忍者なんかになるやつのがしれないよ」と  
いうネズミ男は、カムイと並ぶ『ガロ』のス  
ターであつた。

欲望を原動力とするネズミ男の会話は小気  
味よく、所作も生氣にみちみちている。

ある時は神社に棲む神様だったり、ある時  
は夢のセールスマン、あるいは腰巻きデザイ  
ナーだったりするネズミ男の処世と失敗に、  
私は限らない愛着を覚えたものだ。

私の忍者漫画は、少年忍者や動物が障害物

リレーよろしく、やたら野山を駆けずり回る  
だけのシロモノであつた。

長井さんはカードを操るようにスケッチブ  
ックをパラパラッとめくると、四コマでいっ  
たほうがよい、ときっぱり宣託を下されたの  
であつた。

以来一〇年以上、私は四コマ漫画を描きつ  
づけた。

四コマの枠の中で、いろいろな人間に化け  
る楽しみを覚えてしまったのだ。

学園紛争でうろたえる教授やノンポリ学生、  
ゲバ棒をふるう女子学生や機動隊のおニイさ  
んなど、私は四コマの檻の中で狸であつた。

私は漫画家として『ガロ』から多くの養分  
を吸収してきたが、特にデビュー間もない頃  
に出会った人と作品に、鳥の刷込みみたいに  
深く影響されていると思う。

私の入選第一作は、つげ義春さんの「李さ  
ん一家」が発表された号に載った。

崩れかかった家に生い繁る雑草。いいなあ、  
私もあんなところで隠者の生活をしてみたい。  
わずか一二枚であんなすばらしい世界が描





けるなら、私もいつか短編を描きたいモンだと。

もうこれで、私の将来の貧乏は約束されたようなものであった。

楠勝平さんは私と同世代だが、すでに「名刀」「居酒屋」で独自の境地を確立していた。

楠さんは江戸の町医者や職人の目を通して、さまざまな死について思いを回らせている。すっきりと力強いタッチは感傷を寄せつけず、それは彼の生きる姿勢でもあった。

楠さんは「ゴセの流れ」「彩雪に舞う」という珠玉の短編を残して、持病の心臓病のために三〇歳で天逝した。

楠さんは漫画を描くことで江戸の市井に生きる人々の命と連なり、その作品群は九〇年代の今も僕らの心をとらえて離さない。

「天国で見る夢」に始まる佐々木マキさんの一連の作品は、時代の洗練された落描きだ。

シニカルなイラストのアーキーな連なりやリズムカルな反復はマザーグースやビートルズの音楽を連想させる。

林静一さんはベタと白ヌキで美しく歌舞いた絵柄で繁栄の光の中の闇を描いた。

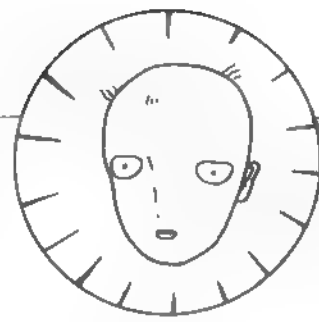
「吾が田は」は戦後日本の選択を描いた真摯にして痛烈な寓話である。

カエルのケロ吉は己が脳ミソ（知識人、指導者）と手足（労働者）の激しい問答の末、自由世界の一員になる決心をしたのだった。

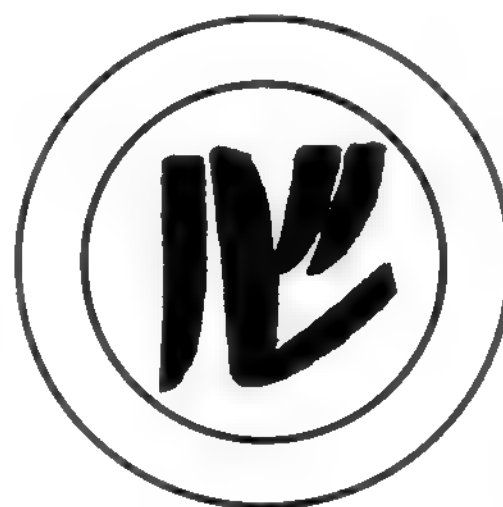
私は今も相変わらず狸のままだ。

蜂飼いや技術者や芸人や筏乗りなんかに化けて作品を描き、流れていこうと思っている。





# 家出少年と 日本文化の



初めて『ガロ』を読んだのはほんのガキの頃で、つげ義春の「チーコ」が載っていて、よく解らないなあと思っていたのだ。それは一九六六年三月号の『ガロ』だった。それでも子供ながらに文鳥が死ぬシーンが衝撃的でいつまでも引つかかっていた。そして次に『ガロ』を買ったのが、家出少年のぼくで、一九七〇年一月号の『ガロ』だった。裸電球の三畳のアパートで見たつげ義春の「やなぎ屋主人」と、始まったばかりの「赤色エレジー」をりっぱに理解できる不良少年に成長していたのだ。それから欠かさず読んできた家出少年は、『ガロ』はつまらないほうがいいと思っている（ポップにしなけりゃ売れないんでしょが）。マイナーがいいと思っている。ぼくの

ようなマイナーのマイナーが描いても恥ずかしくない『ガロ』がいい。

新生『ガロ』に、ぼくは読者として何を見たいのか——それはいつでも決まっているのだ。ぼくの見たこともない線で描かれた絵や、見たこともない描き方で描かれた絵や、見たこともない心で描かれた絵や、見たことも聞いたこともない情感のものを、こっさり見たいのだ。

なにしろそれが新しい文化の始まりなのだから（なにしろ『ガロ』は日本文化の中心だったのだ、実は）。そうしてぼくはこっさりとしておく。そして蓋をあけてみたら一〇〇万人の家出少年が『ガロ』を読んでたら実験成功です。

【プロフィール】大学中退後、『ガロ』入選。以後、フグウのため、書くべき略歴も近況もない……。90年代を駆け抜けたと思っている。（いつもそうだけど）





# サンクチュアリー『ガロ』

手元に『ガロ』がないので正確なことはわからないが、ぼくが「日本忍法伝」の連載を始めたのは『ガロ』創刊から間もなくのことだったと記憶している。忍者列伝を書いてほしいとの依頼であった。当時ぼくはTBSラジオで民放ラジオ最後の連続子ども番組となつた『戦国忍法帳』の脚本を担当していたので、そのあたりからの発想だったと思われる。はじめは古代の忍者から一回毎に時代をたどって書くつもりだったのが、とりあえず始めた聖徳太子の時代にすっかりとりこになつて、ついには忍者伝というよりも古代史ドラマのような物語になつてしまった。

小説というには余りにおそまつなものであったが、それでも、締切りの遅れがちなぼくを叱咤しつつ連載を続けて下さった長井さんをはじめ編集の方々に感謝している。にもかかわらず未完のままになっているのは、ぼくの力不足であり無責任さであると反省している。

とはいえ、当時次々と発表される古代日本

についての様々な新説や事実、胸ときめかして「日本人とは何なのか」をぼくなりについていたあの頃、やはり燃えるものがあった。若くもあつた。その意味では『ガロ』に登場した多くの若い、実験精神旺盛なマンガ家の諸君と気持ちだけは同じであつた。

現在に至っても「下手な小咄みたいなものを『ガロ』に書いてたよ」というと、びっくりする若いスタッフが多い。『ガロ』は今や神格化され、伝説化し、聖域となった感すらある。そのサンクチュアリーに参加できたことを幸せに思う。

しかし『ガロ』は発刊され続けている。おそらくこれから新しい伝説を作り続けていくことであろう。そしてそれが『ガロ』の使命でもある、といっていいのではないだろうか。『ガロ』は常に「現代」である。秀れて「現代」であるゆえに『ガロ』は「伝説」を生み続けるのである。

【プロフィール】 1936年9月、石川県生まれ。59年3月に明大文学部卒の後、TV、ラジオ、劇画、映画のシナリオを書く。

TV「コメットさん」「刑事くん」「お荷物小荷物」「赤い運命」、劇画「男どアホウ甲子園」、映画「ウルトラQ ザ・ムービー」等。



# 死に至る病



## 実相寺昭雄

JISSOUJI, Akio

『ガロ』は凄い。

『ガロ』には独特の時間があり、その時の河は、生活の尺度と違っている。いや、それは生活の浮薄な表相と対立して、意識の深層を流れている。

だから『ガロ』には、発見がある。

『ガロ』の輩出させた作家群は、いちいち個有名詞を上げないが、それぞれに夢枕獭風のサイコ・ダイバーである。記憶や潜在意識の密林を、そのダイバーたちのカンテラが照らしてゆく。私はその光明にみちびかれて、時間への旅を、つづけて来た。もちろん、その時間は、単細胞な縦軸の経過ではない。

粘着し、混在し、輪になり、溶解する時間である。それが『ガロ』を色彩する独得の水流と言えるだろう。

だから、『ガロ』はエロチックなのだ。

死、に隣接する愉悦がある。

『ガロ』に取り憑かれるということは、死に至る病なのかもしれない。

その『ガロ』病は、ほとんど治癒不能の病である。蟻地獄のようなものかもしれない。

『ガロ』は地獄だ。

私は、何故か『ガロ』というと、紫紺のインクを連想するのだが、その色は、地獄と法悦の攪拌を思わせる。単色に、夢幻の色があり、無限地獄への誘いがある。ひよっとすると、終戦後の闇市を色彩ったカストリ雑誌の綾と、カーバイトの匂いを、『ガロ』は麻薬のように封じこめているのかもしれない。

そこに、エロスの闇もある。

血の色もある。紫の血がしたたっている。

だから『ガロ』は凄い。

時空の弁間に、暗渠があり、その中に蠢く本性を表現しているものは、そうそう見当らない。

だから『ガロ』に惹かれる。

矢張り、これは死に至る病の症状だ。

でも、ひよっとすると死の彼方へもサイコ・ダイビングできるかもしれない。こころも思いは始めている。

ならば、その病は悦楽だ。

そう、『ガロ』は法悦の経典なのだ。

【プロフィール】1937年3月29日生れ、早大仏文ヲ経テ TBS-TV 入社。社外ニ出来た縁ヲ頼リニ、フリートナル。精神分裂症ノゴトク様々ナジャンルノ作品ヲモノニスル。勿論、CFノ演出モ枚挙ノ暇ガナイ。鶴ノヨウナ人間トデモ言オウカ。



IZUMIYA. Shigeru

## 泉谷しげる

【プロフィール】1948年5月11日、東京都目黒に生まれる。71年、シンガーソングライターとしてレコード・デビュー。フォークブーム全盛の火付け役の1人となる。また78年に役者デビューし、テレビ大賞および芸術祭優秀賞を受賞。同年、映画「ええじゃないか」に主演。83年、「野獣刑事」に出演し、日本アカデミー賞助演男優賞を受賞。86年、監督・美術等を手掛けたビデオ作品「デスパウダー」を発表。89年、フジサンケイグループ広告大賞タレント賞およびACC賞を受賞。数々のイラストレーションも手掛け、「COM」のぐらこんで入選。77年以降、「ガロ」にマンガ8作を発表。

# やば 『ガロ』的 に!

オイラが再びマンガ(?)にめざめたとき(七十七年から七十九年頃)、手塚治虫氏に原稿を送ったことがある。そのときの返事に「まず、『ガロ』に載せなさい」とあった。

オレの絵を後押しする奴も、『ガロ』にすることはかなり重要であるとのたまわったコトを今でもおぼえている。たしか八頁モノ、五篇ほど載せてもらい、結果はその年、イラストレーター(?)として、デビューするところまで進んでしまつた。

今年、竹中直人監督による『無能の人』が映画化になり、オイラは一シーン出演のために、多摩川の現場へ。な・な・なんと、その撮影現場に、あの、つげよしはる(思わずひらがなで呼んでしまった)が来ているではないか! オレのシーンにつげ氏も出演してもらい、いやアー気分は、まさに、『ガロ』でしたな。やっぱり、『ガロ』は、マンガ界のホームラン王だナ。



僕が『ガロ』を初めて自分のこずかいで買ったのは中一の時。ところがそれには大幅な乱丁があり、本屋に一冊しかなかったので青林堂に直接行った。声変わりしていない学生服の少年を見て長井さんはあわれに思ったのか「まんじゅうでも食うかい？」とすすめてくれ、「こんなもの！」と乱丁の『ガロ』を引き裂いた。壁は返本の山でできていた。

「音楽好きがいて、この間、あがた森魚という人が事務所に来て歌ってったよ。知ってる？」  
「知ってます。はっぴいえんどは来ませんか？」

「知らないなあ」

奥には南伸坊さんが机に同じ角度で顔を向けながら黙々と仕事をしていた。

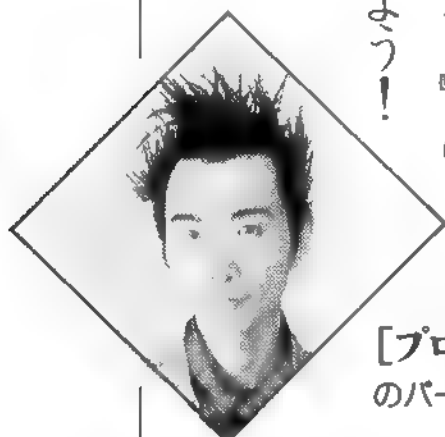
それ以前は、上の兄弟が買った『ガロ』と『COM』が転がっていたのを読んでいた。

ところが、ハイミナールを飲む、永島慎二の「フーテン」を親がみつけ、「小学生が読む漫画じゃない」と『COM』は禁止されたのだ。「カムイ伝」や「鬼太郎夜話」の日本的な『ガロ』はなぜか黙認だ。

# 子供を脳ミソ不良にさせる『ガロ』に

九〇年代の『ガロ』に望むことは、たとえばこのエピソードが物語る『COM』が瞬発的に放っていたメジャーなカウンター性。淀川さんぽや渡辺和博、そして最近ではパンチザウルスの作家達に到る子供にもおもしろいアンダーグラウンド性。それは、『ガロ』に潜在し続けているバネのようなエネルギー。このチルドレン・ジャンク・カルチャー日本においては、子供を不良に走らせるようなパワーを秘めたコミック誌がほしいのだ。『YOUNGマガジン』じゃ、つっぱりになるのが関の山だからなあ。

今、業界や編集で動いている連中には、初潮や精子を出す前に『ガロ』を読んだり、ロックを聴いたりしていたバカ者が多い。子供の脳に「ねじ式」はきまつせー。おかげ様でドラッグたよらずとも脳みそがニユルニユルした三〇歳にならしていただきました。これから、バカ者共の真価が発揮される。どこの国にもないコミックのアンダーグラウンド・カルチャーを毛唐にも認めさせて『ガロ』のインターナショナルな地位を確立しよう！



【プロフィール】1958年、千葉県市川市に生まれる。徳島大学歯学部卒。「パール兄弟」のヴォーカルをとる傍ら、作詞家、TVのパーソナリティー、エッセイストの肩書きを持つ現役の歯科医。近く、エッセイ集「歯科医のロック・2」（角川書店）刊行。



# 読者として楽しんだ

私は、長井さんがまだ貸本屋向けの単行本を三洋社で創っていた頃、『ハイスピード』などの短編集に参加させていただいた。当時は一冊の単行本に何人かの作家の短編を載せる短編集が流行しており、たくさんの貸本屋向け出版社が短編集を出していたが、今で言う「編集人」的な感覚を持っていた出版人は少なかった。本のバランスを考えて、作家をそろえて、ということをもしろ描き手である私達が考えなければならなかった。そういう中であって、長井さんは珍しく編集能力を持った出版人であった。『ガロ』が創刊されて、改めて長井さんのそういった能力を認識させられたものだ。

私にはコミック界をもっとメジャーな世界にしたいという願望があり、コミックはさらにポピュラーなものになるべきだと考えていた。したがって、『ガロ』のようにマニアッ

『ガロ』



SAITO, Takawo

さいとう・たかを

クな世界におさまってしまうコミックは、コミック界にたずさわる者としてはいささか評価し難い部分があった。

しかし、読者としては別である。コミックの王道、娯楽的な作品よりも、むしろ「変な」作品の方を、私自身の内なるマニアックな感情で楽しませていただいた。特につげ義春氏の作品は、一作一作ファンの気持ちで読んでいた。読者としての私は、『ガロ』に満足していたのである。

【プロフィール】 本名、斎藤隆夫。1936年生まれ。大阪出身。55年に『空気男爵』でデビュー。劇画のジャンルを確立する。76年『ゴルゴ13』で小学館漫画賞受賞。他の代表作に『無用ノ介』『影狩り』などがある。



1



ていく。水木しげる、つげ義春……。彼らの作品が大いなるカルチャーショック

もともと『ガロ』は、白土三平のライフワークとなる大河ドラマ「カムイ伝」の発表の場として創刊されたら

### 第3章 カムイたちの贈り物

を引き起こし、また、そこから作家や関係者たちの輪が膨らんでいくのだった。

2



しい。長井編集長も白土氏の助言を大いに取り入れ、『ガロ』の執筆者の人選を行なっ

3

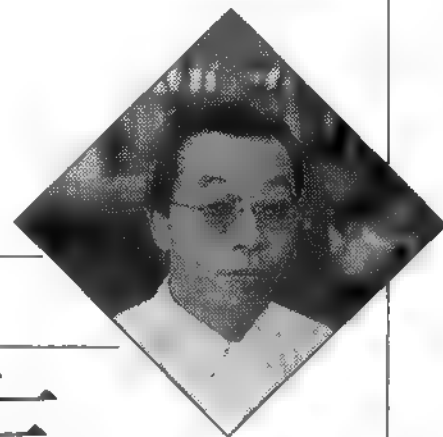
4



# 青年マンガ 黎明期から 発展の 時代へ

UENO, Kohshi

上野昂志



[プロフィール] 1941年、東京生まれ。都立大学大学院在学中の66年から、「ガロ」のコラム「目安箱」を執筆。そのまますると批評家稼業を続ける。マンガから映画、写真、文学、社会風俗と批評対象は広いが、専門は中国文学。主著に、「魯迅——その沈黙と言葉への抗い」(三一書房)、「沈黙の弾機」(青林堂)、「現代文化の境界線」(冬樹社)「映画＝反英雄たちの夢」(話の特集)、「鈴木清純全映画」(立風書房)、「肉体の時代——体験的60年代文化論」(現代書館)など。

## 東京オリンピックの年に

『ガロ』のことを、さほどマンガに詳しくない若い人と話していると、私はいつも決まってつげ義春の「李さん一家」を思いだす。というのも、彼らは、それを、古き良き昔の話だとばかり思っているからだ。そこで私は仕方なく、こわいねばならない、「それからガロがどうしたか」というと、実はまだちゃんと二階から出ているのです」と。

むろん、気がついたらいつの間にか二階に入りこんでいた李さん一家とは違って、『ガロ』の版元である青林堂のほうは、ちゃんと家主に挨拶もし、月々のものも払ったうえで二階にいるのだろうが、しかしそれにしても、会社設立以来、主は変われど自分たちは一貫して二階暮らしを続けていたというのは、これはもうエライというしかない。だが、そんなふうに、一つのライフスタイルを(仕方なく!)守ってきた『ガロ』ではあるが、いくつかの転機というべきものはあった。もっとも大きいのは、『ガロ』が創刊されて三カ月目に始まった「カムイ伝」の連載が終了したときだろうが、実は、創刊された一九六四年頃というのも、一つの転機であったのだ。

一九六四年というのは、年間の実質経済成長率



が一三パーセントになるというように高度成長が完全に軌道に乗り、東海道新幹線が開通し、モノレールが敷かれ、一〇月には東京オリンピックが開催され、それを目指しての急激な都市改造が一段落して東京のイメージが一新するというように、日本が、名実ともに戦後的な形態を脱皮していった年である。そして、いまから振り返って見れば、マンガというメディアにおいても、この戦後的な形態からの脱皮ということが、それとは意識されずに進行していたのである。それが端的に現れたのは、『ガロ』の母胎であった貸本マンガの世界であり、そこから生まれた劇画である。

貸本マンガが盛んになるのは一九五〇年代の半ばだが、その代表的な存在である『影』が、大阪の日の丸文庫から創刊されるのが一九五六年である。そして、**辰巳ヨシヒロ**、**桜井昌一**、**さいとう・たかを**、**石川フミヤス**、**K・元美津**、**佐藤まさあき**、**小森ススム**、**松本正彦**らによって「劇画工房」が発足し、「劇画」という言葉が登場するのが五九年である。その頃が、貸本マンガの最盛期ということになるが、それを専門に扱う貸本店の数がもつとも多くなるのも、この時期である。マンガ出版ということでは、戦後間もなくの赤本マンガ・ブームの時期からその頃までは、大

手出版社の出す少年・少女雑誌や、その付録に載るマンガと、貸本店向けに作られた貸本マンガとが、まったく別ルートで、子どもマンガの表裏を成していたということである。

しかし、一九六〇年を過ぎて、日本が本格的な経済成長に入るようになると、貸本店がどんどん少なくなつて、貸本マンガは急激に衰退してゆく。**水木しげる**は、のちに、東京オリンピックの前あたりが一番苦しかったと回想しているが、実際、六二―三年頃、貸本マンガは壊滅しつつあったのだ。市場を失った零細出版社は倒産し、描く場を失ったマンガ家たちは、新しい場を求めるか、マンガをやめてほかの仕事につくか、選択を強いられたのである。そんななかで、**さいとう・たかを**や**佐藤まさあき**のように、早々とプロダクションを設立して活動の場を広げていく作家も出てくるが、その一方で、貸本マンガが本当にダメになる六五―六年頃まで、そこに居残ってしまう作家たちもいる。

『ガロ』が登場するのは、そのような、戦後の子どもマンガの重要な一面を担った貸本マンガが、そこから劇画を生み出しながら、母胎としての貸本というメディアを失っていく転機に当たっていたのである。



## 一九六四年七月二四日創刊！

『ガロ』が創刊されたのは、一九六四年七月二四日である。

創刊号（九月号）は、一三〇ページで一三〇円。内容は白土三平の「ざしきわらし」、「赤い竹」、「陽忍」、「くぐつ」など四本の短編と、水木しげるの「不老不死の術」、それに諏訪栄（小島剛夕）の「海原の剣」の第一回で、あとは内山賢治の「動物百話」という読物と季春子の「も吉」という童話である。また、前後の表紙裏には、佐藤忠男と影丸というペンネームの筆者による短い白土三平論が載っていた。

白土三平の新しい作品を載せるために作った雑誌の創刊号で、肝腎の白土の作品がいずれも旧作ばかりというのは、考えてみればかなりいい加減である。いまだったら、よほど小さな出版社でもまずやらないことだろう。しかし、そういう拙速をあえてやってしまうところに、当時の長井勝一のおせりがよく現われているし、また、貸本業界から出てきて初めて雑誌を出した青林堂という出版社の性格がよく出ているといえよう。長井のおせりは、彼の病気とそのなかでの一種の回心（？）に関わっているが、くわしいことは『ガロ』編集長（筑摩書房刊）に書かれているので、

そちらを参照されたい。ここで注意を促しておきたいのは、青林堂の性格についてである。

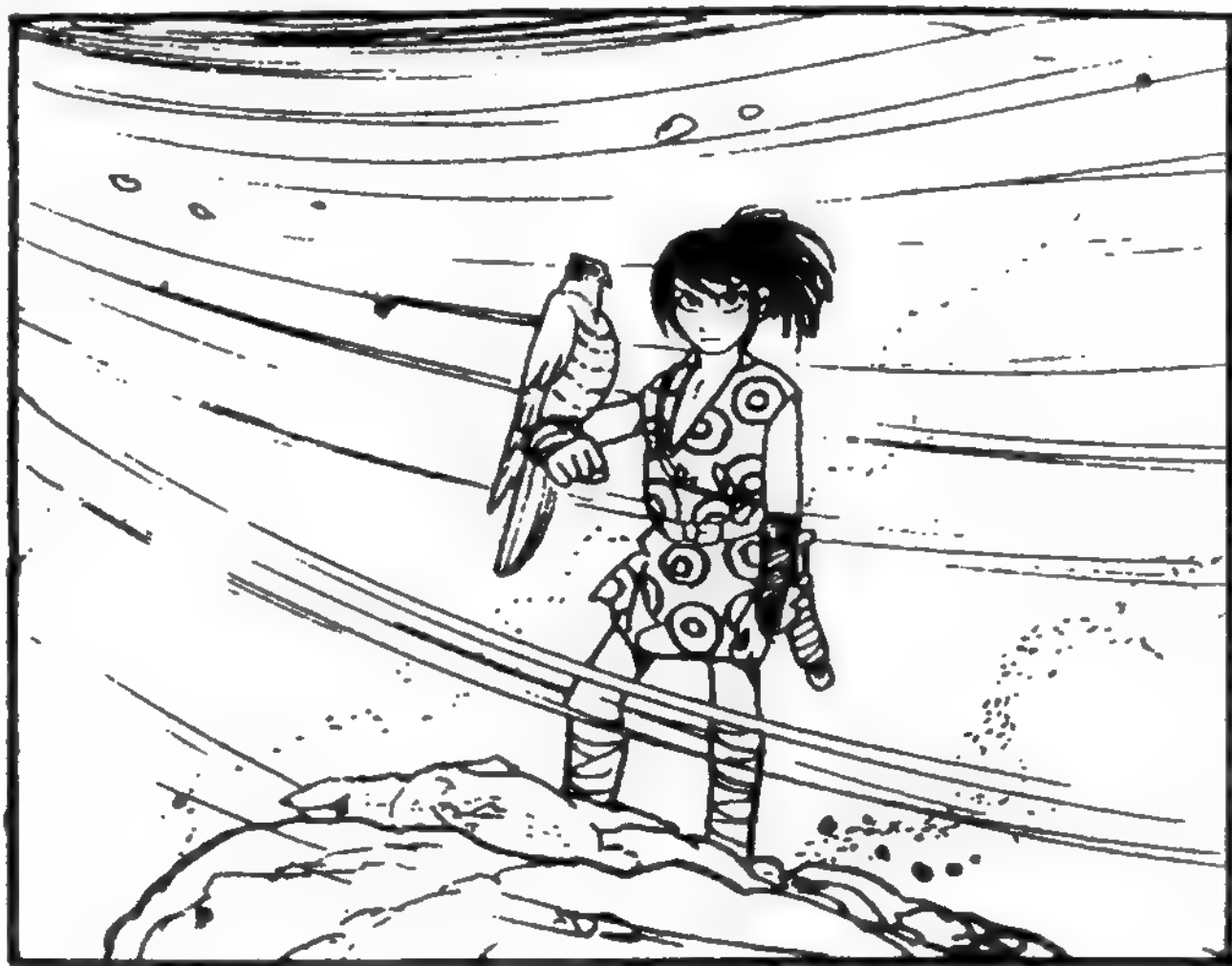
青林堂は、六二年に発足したが、初めは『サスケ』や『忍法秘話』や『テレビ小僧』、『おそ松くん』などを貸本向けの単行本として出す出版社だった。雑誌刊行のプランはそのころすでに長井の頭にあつたろうが、会社のありようは、彼がそれまでやってきた日本漫画社や三洋社の延長上にあったのだ。そしてそのことは、『ガロ』を出すようになっても、いわば貸本業界の匂いのようにして、この新しい雑誌につきまとうていたのである。私が、創刊号としてはかなりいい加減な作りといったのは、そのことを指している。それは、いつてみれば貸本の世界のいい加減さなのだ。ただし、それはたんに悪い意味だけではない。いい加減さは、また、商品としての律気さに収まらないルーズさ、そして自由さを、この新しい雑誌に与えていたからである。のちになって、『ガロ』は一般商業誌とは違う自由な、同人誌的雰囲気があるとよくいわれたが、それも、このいい加減さと無縁ではない。

ともあれ、そんなふうに大急ぎで走り出した『ガロ』に、白土三平の新作「カムイ伝」第一回が載るのは、四号目（二月号）である。一回の分量は一〇〇枚。以後、連載は八年間にわたるのだ



が、毎回の分量は後半になって少し減るものの、それまではこの一〇〇枚ペースを維持していくのである。これは単純に量の問題でいっても凄い。だが、もちろん、それは量だけのことではない。創刊号に収められた「ざしきわらし」を見てわかるように、**白土三平**という作家は短編も大変うまい人だが、やはり長編で本当の力量を発揮する作家だということは、「カムイ伝」の第一回だけを読んでも明らかであろう。

まず山や谷で動物たちが餌をとっている自然の描写から始まって、収穫に忙しい村の様子、そしてそれと対照的に領主が犬追物<sup>いぬおうちもの</sup>をして遊んでいる城中、さらに一転して村の様子、というように進んでいく場面の転換はきわめてスピーディーで、しかもその転換のなかで、江戸時代の階級構成や相互の利害や力の関係を明らかにしてゆくところは、さすがに**白土三平**である。それと、「カムイ伝」は、あとになると正助だけを追っかけていったダイナミックな展開も乏しくなり、それに応じて世界も狭くなるが、にもかかわらず、初めの頃を読み返してみると、「忍者武芸帳・影丸伝」よりもはるかに複雑で立体的な世界把握をしていたことがわかる。その点で、明らかに作者は前進していたのだ。むろん、そのことが逆に作者を縛ること





になった面もあろうが、それはやむを得ない。とにかく**白土三平**は、この「カムイ伝」にこの時期の力量のすべてをかけて頑張ったのである。そしてそれが『ガロ』の原動力になったのだ。

さて、「カムイ伝」が始まってようやく『ガロ』は、**長井**などが初めに予定していたかたちになったわけだが、この頃、『ガロ』を支えたもう一方の柱は、**水木しげる**の短編群である。**水木**は、創刊号から六七年にかけて、ほとんど毎号欠かさず力のこもった作品を発表し、それ以外にも「漫画の描き方」や「ロータリー」などのエッセイや、「イソップ式漫画講座」といった作品を描いていた。それらは、ときに世相や政治に対するあまりにも直接的な諷刺に流れる場合もあったが、その底には、生活の地平に浮き沈みする庶民の屈折した姿が、ユーモアと哀しみのなかでとらえられていたのである。そこでは、誰もが、はかない夢の梯子を登ろうとしては必ずおちてしまう。たとえば「ネコ忍」は、その頃の**水木しげる**の傑作の一つである。

**水木しげる**は、六五年の春に、講談社三賞まんが部門を受賞（**白土三平**は六三年に受賞）するが、その夏には、『少年マガジン』に「墓場の鬼太郎」の連載を始めるなどして忙しくなる。となると、

彼もまたアシスタントが必要になるわけだが、そこへやってきたアシスタントがタダ者ではない。まずは、**つげ義春**なのだ。ついで、大阪の日の丸文庫にいて、のちに『ガロ』で本格的にデビューする**池上遼一**が、また、もっとあとになると**鈴木翁二**などが、**水木プロ**でアシスタントをやるのである。ふつうアシスタントといえば、修行をかねての弟子入りというのがほとんどで、**つげ義春**のようなベテランがやるなどということは滅多にない。その滅多にないことが、当時の『ガロ』周辺で起こったというのが面白いが、面白いのはそれだけではない。**つげ**は、**水木プロ**で、主にあの細密な背景を描いていたらしいが、それが**水木マンガ**に新しいタッチをもたらすと同時に、**つげ義春**自身の作品にも、細密な風景として生かされてくるのだ。つまり、個性豊かな作家たちが、そういう関係のなかで相互に影響を及ぼし合っているのである。同じようなことは、**池上遼一**の場合にもあったに違いない。

初期の『ガロ』では、このほかに**諏訪栄**（**小島剛夕**）と**楠勝平**が描いていた。しかし、**小島剛夕**は「カムイ伝」の絵を描くようになってからは『ガロ』に描くことはなくなり、われわれが親しくその作品に接するようになるのは、「劇画ブー



ム」を迎えるようになってからの、ほかの雑誌においてである。その頃の作品にくらべると「海原の剣」は、物語も、コマの展開も拙いが、それだけに小島剛夕のロマンチズムが率直に出ている。

一方の楠勝平も、六四年の一〇月号から「仙丸」という忍者ものを連載していたが、その最終回（六五年六月号）に「しっぱいしました。長編のむずかしさを痛切に感じました」と書いたように、まだ本領を発揮していない。彼がようやく自分の世界を探りあてたと思われるのは、しばらくの沈黙のあとに、「名刀」（六六年一〇月号）を描いて以降のことである。それも、三作目の「おせん」になると、江戸庶民の暮しに材をとったその物語世界も、絵やコマ割りも、ほぼ完全に白土三平の影響を脱して、彼独自のものになる。そして以後は、病気が彼の体を冒していくのと競争するかのようにして、しかもまったく病気を感じさせない力強さで、優れた作品を次々と描いていくのである。死の直前に描かれた「彩雪に舞う」（七三年三月号）は、そのような楠勝平の頂点を示す作品であるとともに、「カムイ伝」以後大きく変貌しつつあった劇画の最後の光芒を示す作品だったといえよう。ところで、『ガロ』は、白土三平や水木しげる、それにつぎ義春や永島慎二といった貸本時代から

の作家が自分のやりたい仕事をやる場であったと同時に、さまざまな傾向の新人たちが、自分を伸ばしていく場でもあった。そのなかでもっとも早い時期に登場したのが藤沢光男とおがわあきらであるが、六五年六月号で白土三平が「マンガを描こう」と呼びかけると、それに応じて一二五篇の作品が集まり、そのなかから星川てつぷ、渡二十四、つりたくにこなどがデビューした。藤沢の作品には杉浦茂の影響が濃厚であり、おがわの作品には劇画を勉強してきたといった匂いが強いが、星川たちの作品にはほとんどそういうものが感じられなかった。手探りで描きたい世界を作り出そうといった趣がある。なかでも、渡二十四の作品がもつとも水準が高かったが、マンガを描くことに対する執着は、つりたくにこがもつとも強かったのだろう。従来の少女マンガの枠には収まらず、SFやナンセンスものに向かっていったところに、つりたは、のちの新しいマンガの傾向を先取りしていたといえるかもしれない。

また、マンガではないが、「カムイ伝」がスタートした翌月から、佐々木守の「日本忍法伝」の連載が始まった。これは、聖徳太子が忍者を使つて権力を握ろうとするところから始まる古代史の読みかえといつていい物語で、小説というにはや



や叙述が荒っぽいが、八切止夫や、のちの半村良につながる作品と比べていいだろう。こういう読物が載るところが、いかにも『ガロ』らしいのだ。いや、『ガロ』らしいといえば、一種の社会時評のコラムである。「目安箱」も同様であろう。長井や白土が、世のなかの動きに対してひとこと文句をつけるページを作ろうとして始まった「目安箱」こそ、ふつうのマンガ雑誌にはないものだからだ。これは、初めのうちは白土を初めとする赤目プロの人たちが書いていて、六六年の四月号から私がひきついだ。私は、そこに書くことでいつの間にか物書きになってしまったが、マンガとは直接かわりはないのに、『ガロ』が私の文章に及ぼした影響は大きかった。

話をマンガにもどそう。

先にあげた新人たちが登場したのに前後して、つげ義春が『ガロ』に描き始めるのだ。最初が「噂の武士」(六五年八月号)で、以後、だいたい一カ月おきぐらいのペースで作品を発表していくようになる。六六年のなかばからは、ややその間があくが、六七年に入ると「通夜」、「山椒魚」、「李さん一家」、「峠の犬」、「海辺の叙景」、「紅い花」と一気に傑作を描き続ける。実際この頃は、今月はつげ義春がどんな作品を描いているのだろうか

というのが、『ガロ』のページを開くときの楽しみだった。しかし、それ以前においても、つげの作品は、たとえば、物語を構成する人間や自然の矛盾に満ちた関係の相克が劇を構成する白土三平とも違い、また、欲望の実現と喪失が絶えず逆転しあうところに劇が生み出される水木しげるとも違った劇を作ってきたのである。それをなんといえがいいか、あえて一般化すれば、人と人との関係のずれが一瞬の隙間をあけるところに、負の劇性ともいべきものを構成してきたのである。六七年の一連の傑作は、そこに、語りを持続させる強力な話者(ナレーター)を生み出し得たところできているのだ。

そして、六八年六月に、「つげ義春特集」という増刊号が出るが、その巻頭を飾ったのが、あの「ねじ式」である。これには、例の冒頭の独特なモノローグで語られる「メメクラゲ」が、実は、作者が「メメクラゲ」と書いたのを印刷所が間違えて「メメ」にしてしまったというような逸話も含めて、さまざまな伝説がつきまとうが、それだけ一般に与えた衝撃は大きく、とくに、詩人や演劇畑の人たちの注目を集めることになった。



## 『ガロ』、大いに売り出す

つげ義春が着実に作品を発表していった六六年になると、『ガロ』もよつやく売れ出すが、またこの頃には、次々と新人たちが登場してくるのである。四コマの勝又進がまず先頭で、ついで田代為寛、池上遼一、佐々木マキ、そして林静一、彼らはいずれも六六、七年にデビューする。さらに六八年には日野日出志に仲佳子、六九年になると矢口高雄に淀川さんぽ、といった具合に続くのだ。

新人の登場によって雑誌が活気づくのは当然のことだが、この場合はたんにそれだけでなく、彼らがマンガ表現の枠をひろげていくことによって、『ガロ』そのものが、かつて白土三平が願ったような多様な実験の場になったのである。たとえば勝又の四コマは、むしろそれ自体では伝統的な形式であるが、これが劇画中心の『ガロ』に載ることとで、思わぬ異化効果を発揮する。また勝又自身が、そのなかで、従来の四コマにはなかった劇性をとりこんで、独自の短詩形ともいうべき表現を獲得していくのだ。さらに田代為寛のサイレントマンガは、とりあえずは了解ずみの意味のうえを滑っていくのであるが、佐々木マキに至ると、それはいったん個々のイメージ相互の葛藤が劇を生

み出すように再構成されていく。そこには、アメリカのポップ・アートやビートルズが存分に活用されていたのだ。また、おそらくマンガ史上初めて、紙の白さと墨の黒さをともに色として解放した林静一は、同時に、絵画やマンガが暗黙の前提にした奥行きものの厚みといったものを、紙の平面性を際立たせることで脅かした。しかも林の場合は、そういう試みをやせた前衛主義に陥いらせないようなしたたかな物語性をもって、劇の構成へと参与させたのである。

これらはいずれも、マンガ表現の可能性を大きくひろげたのだ。しかし、当時の『ガロ』が素晴らしく輝いていたのは、たんにそのためではない。彼らとともに、たとえば池上遼一や楠勝平のように正統的な劇画の手法でみずからの世界を仮構する若手があり、つげ義春があり、白土三平や水木しげるがいて、しかも相互がたがいに排除することなく、肯定しあっていたからなのである。

そして、『ガロ』の内容が充実して、それがクチコミを通じて売れ出す六六、七年頃になると、既存の出版界でも、劇画を新しい商品として積極的に押し出していこうとする動きが出てくる。その早い例は、六六年に創刊された『コミック・マガジン』（芳文社）であろうが、ここでは平田弘史



や影丸譲也といった生粋の貸本育ちの劇画作家を起用して、青年劇画誌の流行に先鞭をつけた。また、この年、一〇〇万部を突破して少年マンガ誌のトップに立った『少年マガジン』（講談社）でも、梶原一騎と川崎のぼるのコンビによる「巨人の星」の連載を開始する。さらに小学館からは、白土三平の『忍者武芸帳』が新書判で刊行されるが、その一方で、貸本を代表する日の丸文庫の『影』が休刊になる。というように、この時期、それまで子どもマンガの裏にあった劇画が表に出てくると同時に、それを担ってきた貸本出版は最終的に姿を消していくのである。

こういった動きは、六七年、六八年といっそう激しくなるが、そこで目立ったものだけをあげれば、六七年には、『週刊漫画アクション』（双葉社）が創刊され、モンキーパンチの「ルパン三世」や石森（現・石ノ森）章太郎の「009ノ1」が連載される。また少年画報社から『月刊ヤングコミック』が創刊されるかと思えば、『少年マガジン』では、さいとう・たかをの「無用之介」の連載が始まる。そして、翌年になると、『少年マガジン』で高森朝雄とちばてつやによる「あしたのジョー」の連載が始まって、いよいよマンガ熱が高まるのだが、メディアでいえば、『月刊ビッグ

コミック』（小学館）の創刊が、ここに至る流れを象徴するといっていいたいだろう。

そこでは、手塚治虫、石森章太郎など、早くから少年誌で公認された作家と並んで、白土三平、さいとう・たかを、水木しげるといった劇画界の大御所がいっせいに顔を揃えているわけだが、それはとりもなおさず、大手出版社が、劇画を新しい商品として積極的に内に取りこんでいくと同時に、マンガの読者を、子どもから青年へと拡大させる姿勢をはっきり打ち出したことを意味している。六〇年代初めまでは、子どものなかの裏文化としてあった貸本劇画がこうして表文化のなかに繰りこまれていくという現象、いわばカウンタ―・カルチュアがサブ・カルチュア化していく現象は、他のジャンルでも見られることではあるが、六〇年代後半にはそれがさまざまな領域で起こり、とりわけマンガ、劇画において典型的に現われていたのである。そして大手出版社が、貸本から生まれた劇画の成果をこうして内に取りこんだとしたら、『ガロ』のような雑誌は、いよいよ描きたいものを描く、実験的な場とならざるを得ないであろう。

だが、そういう『ガロ』に刺激されてであろうか、この『ビッグコミック』が登場する前年、手



塚治虫は、『COM』（虫プロ商事）を創刊し、「火の鳥」の連載を開始する。『COM』の創刊は、手塚のよつに、さまざまなところで描く場が保証されている大作家でありながら、なお、みずから実験的な試みを展開する自前のメディアを求めたという意味で、この作家の並外れた創作エネルギーを証するものだが、ともあれ、これが出たことによって、六〇年代末の数年は、それぞれ肌合の違う『ガロ』と『COM』の競合する時代となる。しかし、『COM』については、ほかで書く人がいるだろうから、ここではただ永島慎二についてだけ触れておこう。

永島慎二は、つげ義春などと同じよつに、若いときから貸本マンガを描いてきたベテランだが、自分が描くマンガと生き方とを重ね合わせるといふ独特なスタイルを持った作家で（また、その点で若い作家たちの信望を集めていたのだが）、六〇年代の初めにはすでに結婚して子どもまであるのに、新宿でフリーテンをしていた。その後、虫プロに入つてアニメーションをやり、六五年には、国産初のカラー・アニメ「ジャングル大帝」の演出を手がける。面白いのは、そのちょうど同じ時期に、真崎守や村野守美なども、虫プロでアニメーションをやっており、七〇年代になって『ガロ』に描く

よつになるということだ。しかし、永島慎二のほうは、『COM』の創刊と同時に「フリーテン」の連載を始め、同じ年の八月には、『ガロ』にも、それとはまたひと味違った「かかしにきいたかえるの話」を描き、以後、七〇年代にまでわたって、『ガロ』の重要な柱になるのだ。

さらに、同じ六七年には、やはり貸本時代からのキャリアのある滝田ゆうが、桜井昌一の紹介で『ガロ』に登場することになる。滝田は、いわゆる劇画調の直線的な硬いタッチとはまったく異質な、丸みを帯びたグンニヤリした線で描くところに特長があったが、それが本領を発揮するのは、翌年から連載を始めた「寺島町奇譚」であろう。

そして、その「寺島町奇譚」が始まった六八年一二月号には、つげ義春の実弟で、すでに貸本でも描いていたつげ忠男が、「丘の上でヴィンセント・ヴァン・ゴッホは」で再デビューする。

実際彼らがいつせいに、それぞれの力作を何くわぬ顔で揃えていた六七、八年の『ガロ』というのは、いま思うと夢のように幸福な時期だったという気がする。それは一人一人のマンガ家が幸福だったというのでは、むろんない。一人一人が、時代のさまざまな養分を吸いとって、それぞれのスタイルを開花させ、そつして妍を競いあふこと



がそのまま総体としてのマンガを活気づけるとい  
う、まるで嘘のような幸福がそこにあったとい  
ことなのだ。それは、少し角度をかえていえば、  
あのときはまだ、語るべき物語が、あえてそれを  
解体してみせるにせよ、またそこから身をずらす  
にせよ、信じられていたということだろう。いま  
は、それが決定的に失われているのであり、その  
ためマンガ総体の仮構力が貧しくなって、作家が  
一人一人で悪戦を強いられているのである。それ  
は、しかし、いま始まったことではない。「カム  
イ伝」の連載が終わる一九七一年頃から、すでに  
明らかになりつつある事態だったのだ。

たとえば、七〇年を境にした一、二年、『ガロ』  
でもっともよく奮闘していたのは**つげ忠男**である。  
彼の作品は、一瞥したところでは正統的な劇画と  
いうことになるが、しかし**楠勝平**がそうであるよ  
うには、決して「正統的」ではない。それはすで  
に危機を孕んで、というよりはむしろ危機を劇の  
核にすることで作品が描かれているのだ。ここ  
ではこまかい指摘はできないが、それは彼が執着す  
る風景一つをとっても明らかだろう。**つげ忠男**の  
描く風景は、通常のマンガにおける意味づけられ  
た絵からはずれているばかりか、物語の文脈から  
も逸脱して、あやうくそれ自体が一個の作品とし

て自立しようとしているのだ。つまり、物語はそ  
の風景に行き当たったところでみずからを超えよう  
とするのである。そして、その危機的動勢が、彼  
の作品の劇をかたち作るのである。むろん、**つげ**  
は、そこに物語を仮構しているわけだが、それは  
もう一步踏み出せば解体するぎりぎりのところで  
行われていたのである。そしておそらくそれが、  
時代の転換を暗示していたはずである。

## 「カムイ伝」が終わって

「カムイ伝」が終わったのは、一九七一年の七月  
号である。六四年の一二月号から始まって、あし  
かけ八年に及ぶ大連載だったが、七〇年を過ぎる  
頃は本当に苦しそうで、最後は、刀折れ矢尽きる  
という感じだった。

当時は、それは、作者が、いささか図式的な歴  
史観をあまりに強く前面に出したために失敗した  
とか、カムイより正助に比重がかかり過ぎて苦し  
くなったなどといわれ、事実そういう面もあった  
が、しかし、もう少し踏みこんで見れば、**白土三**  
**平**の、『忍者武芸帳』では可能だった「革命」に  
対するロマンチズムが、「カムイ伝」では不可  
能になったことのほうが大きかったのではないか  
と思われる。実際、作者は、作品のなかで、繰り



返し「夢」ということを語っているが、物語の枠組は絶えずそれを挫折に追い込み、最後は、まさに、その夢の廃墟を思わせる光景で終わっているのだ。いわば、**白土のロマンチズム**がリアリズムによって破られたという観があるが、その意味では、戦後の理念が現実には追い抜かれていくこの時期の状況と、「カムイ伝」の終わりは重なっていたのである。

だが、これを大きな物語の崩壊という角度から見れば、同じようなことは、他でも見られたのだ。たとえば「あしたのジョー」が、七〇年に力石徹が死んで、その追悼会なるものがファンによって開かれたあと、急速にエネルギーを失っていくのもそうだし、戦後の理念とは一線を画しているが、それでも高度成長的な技術主義を支えにしていた「巨人の星」も、やはり七一年には終わるのだ。つまり、男の作家たちによる大河ロマンの劇画は、この時期、なんらかの形で終焉を迎えるのである。そして、そのことを、「カムイ伝」がまさに終わろうとする時期に「ガロ」に連載された**水木しげる**の「星をつかみそこねる男」は、生動的な現実感覚によって照らし出してもいたのだ。むろん、その一方で、**小池一夫**と**小島剛夕**の「子連れ狼」の連載（『漫画アクション』）が始まった

りするのだが、それは**小池一夫**のように優秀な物語作者に支えられた劇画という表現形式が、大人のエンターテインメントとして生かされたということであって、それ以上ではない（これは、のちに一般週刊誌に拡大することで、より顕著になる）。それより、ここで注意すべきは、大きな物語が終わっていくその裏側で、一種私小説的な小さな物語が描かれていくようになったということである。

『ガロ』では、**安部慎一**、**鈴木翁二**、**古川益三**という、七〇年代初めに登場した新人トリオがその代表格だが、作品的にそれに先駆けたのは、**林静一**の「赤色エレジー」であろう。これは、**上村一夫**の「同棲時代」にも影響を及ぼしたが、若い男女の同棲暮らしとその挫折を主題にしたという点では、これらのマンガ周辺にはフオーク・ソングがあり、さらにその外側には、日活最後の青春映画があったといえ（ロマンポルノはそのあと始まる）、あの頃の空気が想像できよう。いわば彼らは、夢の廃墟で、みずからの生のささやかなリアリティーを探っていたのだ。そしてこの流れの延長上に、**秋山しげのぶ**や**菅野修**などが登場するし、**やまだ紫**にしても、作品の感触は違い、何より女の側から描いたという違いがあるが、共通の主題を巡っていたのである。



ただ、その一方でマンガ全体というところに視野を広げてみれば、七〇年代の初めは、少女マンガ出身の作家たちが、与えられた少女の物語という枠組を破って、みずからの物語を語り出した時期でもあるのだ。すなわち池田理代子、萩野望都、大島弓子、山岸涼子、竹宮恵子といった人たちがその代表であろうが、彼女たちは、男の作家たちが、大きな物語を語れなくなったちようどその時期に、みずからの夢を仮託する物語を紡ぎ出したのである。ここには明らかに、大きな物語から小さな物語へという変換とは異質の、転換があったのだ。

劇画が、六〇年代のマンガ表現を領導する力だったとすれば、それが可能にした大きな物語が崩れ去った七〇年代は、むしろ、劇画ほどムーブメントとしての力はなかったにしろ、彼女たちのストーリー・マンガが、マンガというジャンルを活性化したのである。それは、絵柄としては、リアリズムを目指した劇画とは対照的に、少女的なアイデアリズムを目指していたから、個々の作家の個性は別にして決定的な新しさはなかったが、マンガにおける語りを細分化したことで、マンガ表現の可能性を大きく前進させたのである。それによってマンガは、日常的な心理の微妙な屈折から

内的な幻想の大きな広がりまで、主題にすることができるようになったのだ。

では、それに対して、男たちはどうしたかといえば、七〇年代前半の『ガロ』に特徴的だったような、自己の小さな物語へ内向するという方向もあったし、一般の週刊誌に見られるような、形式としての劇画のエンターテインメント化という方向もあったが、中心にあったのは、「喜劇新思想大系」を経て「がきデカ」に至った山上たつひこのナンセンスな身振りだったといえよう。むしろ、ナンセンスといえば、六〇年代に、一種天才的な冴えを見せた赤塚不二夫がいるが、注意しなければいけないのは、その違いである。

一言でいえば、赤塚のナンセンスがきわめて健康的だったのに対して、山上のそれは、自己言及的というか、マンガが、マンガ自体のなかで絶えずみずからを裸にしていこうというところにナンセンスを求めた点で、不健康になっているのだ。だが、その「不健康」さこそ、時代が欲したものであり、大きな物語が崩壊し、それに対して批評的な位置を占めていたパロディも、もはやパロディとして成立しなくなった七〇年代半ばの、男たちがよるべき身振りだったのである。その山上が、大阪の日の丸文庫出身の作家だったことも興味深



い。が、ともあれ、そういう時代の気分は、『ガロ』にも及んでいたのだ。

むろん、『ガロ』では、それ以前からナンセンス・マンガの流れはあったし、秋竜山、岩本久則、高信太郎などのベテラン作家たちは、七〇年代初めから、それぞれ他誌では見られないような独自の作品を発表していた。だが、ここで注意を促したいのは、赤瀬川原平、川崎ゆきお、蛭子能収、平口広美、ひさうちみちお、渡辺和博、小林のりかずから、さらに八〇年代になって登場してくる根本敬、みうらじゅん、泉昌之といった系列の作家たちである。彼らを一口にナンセンスといってしまうのは乱暴ではあるが、どこかでセンスというものを嘲弄したり、無化したりするという点では共通していよう。しかも、マンガでありながらそれを自壊させようという動勢を秘めている点でも、自己言及的なナンセンスという七〇年代的特徴を示していたのである。ただ、誰もが、山上たつひこなどとは違って、何かに強いこだわりを持っていた点が、いかにも『ガロ』的だったのだ。『ガロ』には、これとは別に、花輪和一を筆頭に、谷弘児、吉田光彦などの耽美派的な系列と、ますむらひろし、鴨沢祐仁、たむらしげる、安西水丸などのメルヘン的な作品を描く作家たちがいる。

前者は、物語への志向が強く、後者はイメージへの志向が強いと一応はいえようが、作品の感触はまったく異なりながら共通しているのは、絵がきれいな点である。これは劇画的なリアルさを目指した作品や、ナンセンスを意図した作品と比べてみれば明らかだが、物語が仮構された世界を目指すのに見合って、絵もまた（具象的な絵でありながら）抽象化するのだ。そして、その向こう側に、マンガのイラスト化という現象が、七〇年代後半になって顕在化してくるのである。

もはや紙数が尽きたので、概括的ないい方しかできないが、七六年になると、南伸坊が編集長になり、「面白主義」を唱えるが、それは「カムイ伝」のような柱を失った『ガロ』における、このような多様な傾向をとりあえず一括りにすると同時に、この雑誌を、もっと多様な表現が流入する場へ開いていこうというコンセプトだったといえよう。その結果、荒木経惟の写真や、糸井重里と湯村輝彦コンビによるマンガ、さらには泉谷しげるや篠原勝之などさまざまなジャンルの人が混交する、一種のカルチュア・マガジンになるのである。

（完）



『ガロ』をもっとも熱心に読んだのは六六、七年前から七〇年ごろまで。大学生から社会人にかけてである。時代はちょうどベトナム反戦運動や大学闘争が激しかったころ。

いま当時の『ガロ』を振返ってみるとその大きな特色は「片隅の抒情」ではなかったかと思う。つげ義春をはじめとしてその弟のつげ忠男、あるいは滝田ゆう、辰巳ヨシヒロ、林静一、亡き楠勝平ら。彼らの作品にはどこか社会の片隅にいる人間の醒めた悲哀があった。世の中は東京オリンピック以後、高度成長の明るく豊かな時代になっていたが『ガロ』にはそうした明るさに背を向けるところがあった。といって反抗とか抵抗という強い姿勢ではない。暗い、隅っここのところでうずくまっていたという静かな諦念。

東京のあちこちに高層ビルが建ち高速道路が出来ている時代に『ガロ』にはまだ裏町のすげれた路地があり、木造の平屋<sup>ひらや</sup>があり、町工場があり、ガード下の暗がりがあった。「片隅の抒情」があった。忘れ去られようとする「戦後」があった。

この特色はおそらく『ガロ』のマンガ家たちに貸本マンガの出身者が多かったことと、東京の下町の出身者が多かったことが原因しているだろう。つげ義春から楠勝平にいたるまで、そこには駄菓

KAWAMOTO, Saburō

## 川本三郎



【プロフィール】1944年、東京生まれ。評論家（映画、文学、都市論など）。近著に『アカデミー賞』（中公新書）、『大正幻影』（新潮社）。つげ義春の大ファンで、つげ義春が旅した温泉や港町を旅するのをささやかな楽しみにしている。

# 片隅の



子屋や銭湯の匂いがあった。失われていく下町庶民の生活風景があった。つげ忠男の「きなこ屋のばあさん」に代表されるように日本人の昔の「顔」があった。

つげ義春はあるエッセイで、「若いころにトキワ荘に集まる少年漫画家たちに会ったが違和感を持った」と書いているが、そこにも『ガロ』の特色が出てくる。『COM』のような健全な明るさは『ガロ』にはなかった。『COM』が表通りに出ようとする向日性にあふれているとすれば、『ガロ』は裏通りに姿を隠そうとする引込み思案を特色としていた。

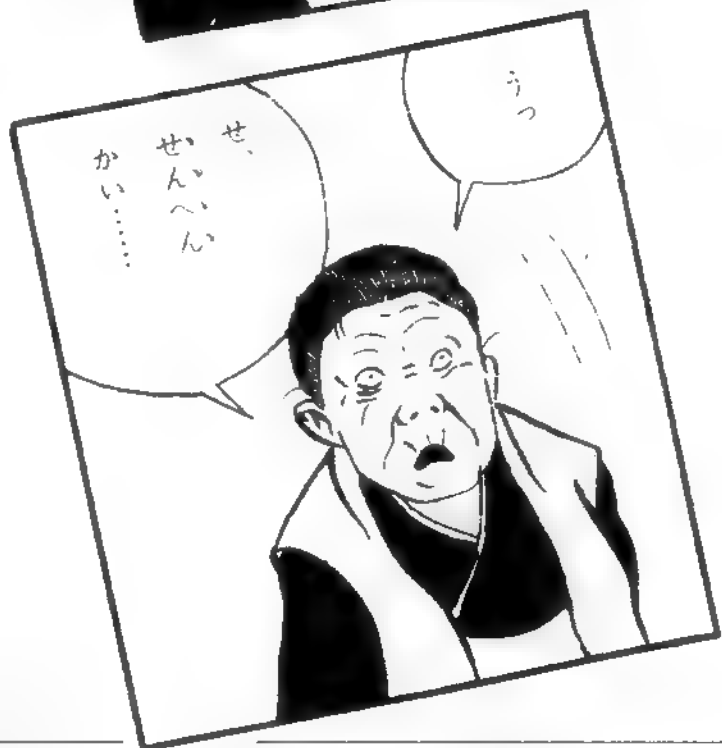
ベトナム反戦運動や大学闘争が激しかったあの時代は一見若々しく荒々しい時代に見えるかもし



れないが、当時の若者たちは他方で深い孤立感をかかえていたのだと思う。それが『ガロ』の引込み思案と共鳴し合った。

つげ義春はいうまでもなく、つげ忠男や楠勝平の作品も忘れ難い。ことに最近つげ忠男の「河童の居る川」、「或る風景」などを読み返しその東京のはずれの寒々とした風景に圧倒された。「片隅の抒情」を突き抜けた「はずれ孤独」。

ただ『ガロ』のよさはそうした自分たちの特色、素晴らしさを決して声高にいいたり、ねじくられて表現したりしなかったことだ。その点でも『ガロ』は引込み思案だった。だからいま私などが『ガロ』は素晴らしいといいたてることには内心忸怩たる想いがある。





# つげ義春 作品の 大シヨック



『ガロ』に於ける鮮烈な記憶は、何といても、つげ義春の「ねじ式」をはじめとする一連の傑作の登場だ。

その頃のぼくは、貸本屋向けの青春マンガなどを描いたあと、赤塚不二夫のアイデア・ブレーンをやっていた。新しいタイプのギャグ・マンガを描いてみたいと思っていた矢先に「ねじ式」を見せられたのである。

興奮したぼくは「ねじ式」の主人公をバカボンのパパにしてしまうというパロディを描

NAGATANI, Kunio

## 長谷邦夫

【プロフィール】フジオプロに所属し、ギャグマンガの巨匠赤塚不二夫のアイデア・ブレーンとしても活躍。過去、数多くのパロディマンガを発表し、その中には「ねじ式」「紅い花」「山椒魚」など、つげ義春作品を題材にしたものが多数ある。

き『COM』編集部に持って行った。まさか『ガロ』には持って行けない。  
これでぼくは「盗作マンガ」シリーズを描くパロディ・マンガ家になってしまったのである。結局ぼくは『ガロ』に一度も執筆せずになってしまった。  
しかし、ぼくの作品傾向を決定づけたのは『ガロ』だったということになる。その後もぼくは、つげ作品だけで一冊のパロディ集を作ろうと考えて、何編かの作品を描いたが、まだこの本は実現していない。どこかで出版してもいいというなら、是非やってみたいと今でも思っているのである。





中一の頃だったと思うが、他人<sup>ひと</sup>の家の軒下に捨ててあった廃品の中に『別冊・墓場の鬼太郎』があった。当時私は水木しげるさんの漫画は大好物だったので速やかに家に持ち帰り、御馳走になった。その独特な味とムードは期待以上だった。その『別冊鬼太郎』が月刊『ガロ』であり、私との最初の出合いである。何故『ガロ』なんだろう……？ 当時私は鬼太郎のハタケは『ガロ』だとは知らなかった。まるで焼印の様なカタ仮名の『ガロ』が目ざわりな気がした。それから『ガロ』は時々私の前に現われた。大抵意外な時に意外な所で姿を現わす。進んで買いに行っても無い事の方が多い。本屋の主人に問うと「知らない間に居て知らない間に居なくなっている、あの本は仙境からやって来るのだ」と言った（これはウソ）。とにかく『ガロ』は求めても届かない、その距離がまた、好いのだ。そのうちどこかの川辺の漂流物に紛れていたり、柳の下の廃品の中に居たり、簞笥の下敷きにされていたりしながら、また、ボソツと現われるのだと思う。そんな奥ゆかしい面もあり

# 神出鬼没の ガロ本



ながら、質は時として狂気にも似た恐さがある。

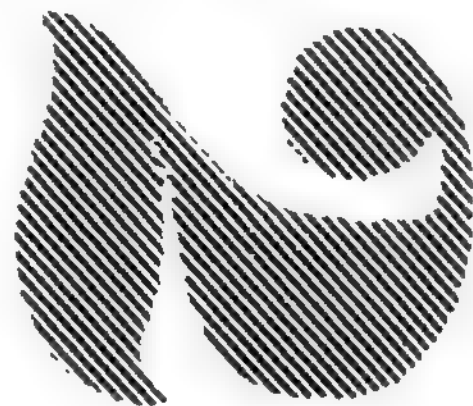
これからの『ガロ』も、仙境から漂流して来るが如し、妙に妖しい本であって欲しい。それが『ガロ』のうま味だと思う。

一九九一年二月十日

【プロフィール】 1982年10月号「愚の骨頂」で「ガロ」デビュー後、87年7月号「空中温泉」までの11作品を発表し、その後の4年間は「目下、魂の故郷で隠居しています」と嘘ぶるしかない。幻想に浸りながらも、カムバック予定。



# 『ガロ』と



# 年

私が、初めて『ガロ』に原稿を持ち込んでから二〇年に成ります。その頃は、確か南さんが編集していました。南さんは、髪を後ろで一本に束ねていました。私は、一八で田舎から上京したばかりで南さんの髪形に、まぶビックリしたものでした。そして、北冬書房の高野さんを紹介していただきました。これが、私の人生を決定的なものにしたと思います。高野さんは、私の原稿を見ながら、「あんたは、マンガの天才かも知れない」と、眼鏡を押さえながら言ったのでした。ウブな私は、天才を信じてその日から悪戦苦闘のマンガ道を歩むのです。頭の中は、マンガ



KAN-NO, Osamu

## 菅野修

〔プロフィール〕 1953年、岩手県盛岡市に生まれる。73年、『夜行』に処女作『憂鬱デス』を発表。73年6月号の『ガロ』に『星の夜の物語』入選。以後、『夜行』『ガロ』『ビックリハウス』『早稲田文学』『COMICばく』に精力的に作品を発表。主著に、『ローカル線の午後』（青林堂）、『北哭』『娼婦』『象を見た男』『犬泥棒の夜』（北冬書房）、エッセイ集『ピンクの頭』（キリン書房）などがある。





のことばかりでした。しかし、『ガロ』に作品を発表してもお金には成らないので、いろんな仕事をしてマンガを書きました。二〇年間、なんとかマンガと仕事の両立をしてきた訳ですが、このごろ思うようになってなくなりました。本来、怠け者の自分が最近ますます病的になっております。

去年は、『ガロ』に「ドクロとあんパン」という短編一作の発表に終わりました。それでは、いったい何をしていたのかと言うと、仕事（広告代理店、新聞社の営業）もマンガも手につかず、遊んでばかりいました。それでも、毎月送られてくる『ガロ』を見るたびに来月こそマンガを発表しようと考えておりました。

しかし、私の住んでいる村には、私の家から半径三キロメートル以内にパチンコ店が五軒もあるため、散歩がてら立ち寄ることが多いのです。あとはたいてい、浪曲を聞いており自分ながらだらしのないことだと思っております。

『ガロ』と共に二〇年。私の人生暗かった。歌の文句じゃないけれど、やっぱりこれから

も『ガロ』とは離れられないのだろうね。

——とはいっても、楽しい事もありました。それは、つげ義春氏と会えたことです。調布の名曲喫茶店で会ったことは、私の貧しい青春の一ページに輝かしい光を与えて下さいました。是非、今度またとりとめのないお話しがしたいと心から希望しております。

それにしても、『ガロ』から生まれた作家には、素晴らしい才能を感じます。どうして、『ガロ』だけに集結されるのでしょうか？ 私は、いつも不思議に思っておりました。多分、長井さんの魔力のおかげだと思います。

一〇年前のこと、私の結婚式にはるばる盛岡まで来て下さったのですが、式の直前で東京に急用が出来たといって帰ってしまわれたのが、長井さんらしくて、思い出す度にほのぼのとしてまいります。そんなこんなで、『ガロ』と私の二〇年。語りに語り尽くせぬ大井川。五月雨を集めて早し最上川。これからも宜しく哀愁多摩川の土手に花咲くコスモス、れんげ草。そろりそろり私も書きます良いマンガ。

（平成3年2月4日）



密やがて

# エネルギー

な世界

私は今年四一歳になった。団塊の世代、世界に類なき日本の漫画文化に浸り育った男である。さらに言えば、私ぐらい漫画をかつて読み、今も読んでいる男も少ないであろう。

『少年ジャンプ』など創刊号より今に至るまで読んでいることなどは、ほんの一例である。漫画以外の本は、読書家の方々と比べるとほとんど読んでいない。従って私の知識は総て漫画に依存していると言ってよい。現在の私の職業にとって、これが武器になっていることは事実である。

さて、『ガロ』との出会いであるが、定かではない。確か、私がよく行った貸本屋さんで借りたのが最初かと思う。中学生くらいか。

SAIKI, Shigeru

## 斎木しげる

〔プロフィール〕 静岡県浜松市出身。早稲田大学在学中より演劇活動にはげみ、俳優小劇場養成所をへて、大竹まこと・きたろうと共に、コントグループ「シティボーイズ」を結成。スピード感と、不条理・哲学・文学・社会問題等を次々とギャグで笑い倒してゆく。「コント」の枠をはずれたラジカルな笑いのスタイルを確立。最近では個々の活動でも力を発揮し、ドラマ・レポーター・司会・ナレーター等々多方面で活躍中。





大判で、紙質が良くなかったのが今でも印象的だ。

やっぱり「カムイ伝」だなあ。未だに私は忍者が好きで、TV番組で語ってしまっただけなのだが、伊賀の影丸に慣れていた私にとって、「カムイ伝」にはドギモ抜かれた。胸がときめいた。横山光輝氏の忍の技をSFに例えれば、スペースオペラ。白土三平氏の忍びの技はハードSFといえよう。例に全くなっていない？ 知らん、そんな事は。ともかく、当時友人達と日曜日のたびに遊んでいた忍者ごっこでは、私はずいぶんこの忍びの技を取り入れさせてもらった。手裏剣の投法として、風穴、三ッ角、十文字等々。菓子箱を切り、紙手裏剣を作り、学校から帰ると裏庭で人形相手にずいぶん修業したものだ。一〇m離れても、狙った所に命中させるぐらいにはなった。一八歳で上京した時TVで見た、先代引田天巧氏のトランプ投げより、私の方が遙かに優っていると思ったものだ。当時、田舎出の少年にとって、魅力的かつ恐ろしかった新宿歌舞伎町に行く時は、トタン板で作った自

慢の手裏剣を、必ず懷に忍ばせて行つたのだ。今思えば、使う機会がなくて良かったと思う。だって後々、白土氏も言っているように、生兵法はケガの元、だからだ。

青春のまっ最中であつた私には、永島慎二氏の作品群はこたえたなあ。絵が軽いタッチなぶんだけ重く響いた。大人の人生、垣間見た思いだった。

なにか妙に、勝又進氏の画風は覚えていて。正直いって、おもしろいという記憶はないのだが……。

他の諸氏について、あまり覚えていなくて申し訳ないと思うのだが、少なくともその作品群は、若き私の思想形成に重要な一助となつたことは、事実である。メジャー誌のみが漫画でなく、読者にコビることなく語る諸氏の気概こそが、まさしく漫画文化といえよう。そんな漫画が、マイナー芸人の私にとって、心の師匠なのだと思っている。

本日は良い機会を頂きました。私は、密やかでエネルギーギッシュな『ガロ』の世界に、再び浸ってみようかと考えております。





かなりの漫画マニアでも、私が『ガロ』で生まれ育った漫画家だと思っっているらしい。

正確には、『ガロ』に一回投稿して掲載してもらい、その後、当時ブームだった三流劇画誌へ行ったのだった。しばらくして、三流劇画誌での作品をまとめて、青林堂から単行本にしてもらったので、「ガロ派」の漫画家ということになったらしい。実際には、私は『ガロ』の外様漫画家である。

とはいえ、『ガロ』に投稿して、もし採用されていなかったら、私はくじけて漫画家にはなっていなかったろう。すると、今頃はオールドミスの能無しOLか。考えるだに恐ろしいことである。ついでに告白すれば、小学生の時、鉛筆で初めて、マンガらしいマンガを描いた、そのきっかけは「カムイ伝」であった。

# カムイ伝 に大ショック

KONDO, Yoko

近藤ようこ

〔プロフィール〕 1957年生まれ。新潟市出身。79年、『ガロ』に「ものろおぐ」を投稿し、入選。主著に、『遠くにありて』（小学館）、『HORIZON BLUE』（青林堂）などがある。



小学生の時から少年漫画を愛読していた。

そして「サスケ」や「ワタリ」や「カムイ外伝」が大好きだった。当時、『ガロ』という雑誌があるのは知らなかったが、小学館の単行本で「カムイ伝」の頭の部分を読んだ。ショックだった。登場人物のひとりひとりが、主人公としてのドラマを背負っていたからである。こんな漫画が描きたい、と子ども心に思った。

それ以後も、「漫画でこんなことができるのか!」と感動した経験は何度もあったが、やはり「カムイ伝」のショックが一番大きかった。結局は、私は『ガロ』では「カムイ伝」を読んでいない(「カムイ伝」が終了したのは、私が中学一年の時だと思う)。その「カムイ伝」第二部は、現在、『ビッグコミック』に連載されており、私も同誌にときどき載せてもらっている。まさか、こんな僥幸があらうとは。思いもよらぬ縁である。

『ガロ』があつてよかった。『ガロ』のおかげで、私は「カムイ伝」に出会い、漫画家になったのである。





# なんのことだが

娘から父

## 自慢話

TAKITA, Junko

滝田順子

[プロフィール] 1966年8月29日、東京都国立生まれ。女子美術短期大学卒。故・滝田ゆう氏の次女。婦人公論、日刊ゲンダイ、進研ゼミなどで活躍中のイラストレーター。

父さん、『ガロ』についての話をして下さいって。本当なら父さんがするの、今は母さんか私達がしなくちゃいけなくて。あの頃の『ガロ』はいつもステンドグラスに似たサイケデリック調のテーブルに載っていた。あれはガラス板に父さんが色をつけたんだって母さんが言ってたよ。いつもそれを眺めていた私は、近所の新聞記者の娘（これがえらいブス）に「新聞記者と漫画家とどっちが偉い？」と妙な質問をされた。私は真の正解を知っていたけれど、ねえ。だから私、ボコボコにしていたの。「寺島町奇譚」がNHKでドラマ化され、団地の婦人連は母さんに「オクサアン、ミマシタ、ミマシタワヨン、スゴイワアン。」そう、うちの父さんはスゴイノヨオン。然しどぶす謝罪せず、あのまま。ちっ!! と石蹴り蹴り帰る道、踏切カーン

カーン。父いつもと変わらず机にしがみつぎ、ペンカリカリカリカリ。『ガロ』もあのままテーブルの上。私、正解知ってるもの。

父から娘

解った!! 新聞記者!!

娘から皆々様

?

父から娘

青林堂さんにハードカバー二冊、頂いてませんと伝言よろしくね。

娘より

、とのこと。



あった。その舞台裏も、商業誌では想像出来ないユニークなものだったようだ。

第4章 異色作家の殿堂

貸本マンガ出身の作家を軸にスタートした『ガロ』は、ヤングアダルト向けのマンガ雑誌の先駆者的存在とな

それは従来のマンガの枠を破った異色作家の作品群が世の中に認知された証でも

る。60年代後半では「大学生がマンガを読む」と、セシセーショナルに取り上げられたが、



「忍者武芸帳」以来の熱狂的な白土三平ファンであった私は、一九六四年頃、『ガロ』の前身といってもいい『忍法秘話』を毎月購読しており、白土さんの求心的なロマンティズムや水木しげるさんの諧謔の精神を充分に堪能していた。間もなくして『ガロ』の創刊となるが、私は友人と連れだって、練馬のダイコン畑の中にあった白土さんのオンボロの木造アパートに四回ほど遊びに行った。

白土さんはまだ三〇歳を少しこえたばかりで、その鋭い眼差しは、野戦攻城の戦士、または、孤高の人にふさわしかった。だが、自ら冗談を飛ばしたときの笑顔は、無限のやさしさに満ちあふれていた。

同じ頃、調布の水木さんの家にもお邪魔した。

つげさんの「沼」が『ガロ』に発表された直後で、私が「沼」を絶賛すると、水木さんはわざと目を大きくむいて、「おたくも頭がだいぶおかしいね!」とあきれていた。私が青林堂を訪ね、「社員にしてくれないと放火します!」と、長井さんに迫ったのは、それから半年後のことである。私が『ガロ』の編集にたずさわったのは、一九六六年一月号から七二年二月号までの五年と少

TAKANO, Shinzo

高野慎三



【プロフィール】東京生まれ。72年、北冬書房を興す。書き下し作品集「夜行」続刊中。つげ義春、つげ忠男、林静一、鈴木翁二、伊藤重夫、菅野修、渋谷夢吉、鈴木清順、加藤泰、秋山清諸氏の著作を刊行。

# 『初期 ガロ』 を支えた 作家たち



しである。わずかの期間にすぎなかったけれども、公私ともに激動の時代であり、すべての事柄が色あざやかに記憶に残された。

あらためて『ガロ』編集員として水木宅を訪ねると、仕事部屋で黙々とペンを走らせている浅黒の青年がいた。水木さんが青年の背中を指さして、「彼が頭のおかしなつげさんですよ」と冗談まじりに、ヒヒヒツと声を低くして笑った。そのあとつげさんを正式に紹介されたが、つげさんは水木さんのとなりで顔を伏せたまま、ひと言も発しなかった。そして、あい変らず冗談をいい続ける水木さんと寡黙なつげさんのコンビは絶妙に感じられた。

やがて、つげさんは『ガロ』に、「通夜」「李さん一家」「海辺の叙景」と次々に作品を発表していった。私は、水木宅から一〇〇メートルと離れていないつげさんのアパートに度々寄った。二、三時間対座することもあったが、つげさんは、二言三言話すだけだった。つげさんだけではない。

「カムイ伝」連載中の白土さんともよく顔を合わせた。余計な話はいっさいしなかった。

「俺の目を見ろ、なんにもいうな」というわけもないのだが、そこには、話さなくても、わから

なくてはいけない”雰囲気”が漂っているようでもあった。後年、『ガロ』の作家たちを評して、

「身内の言葉でしか語り合おうとしない」との評判を耳にしたことがあったが、的外れの指摘とはいい切れない。ただそれは、白土さんやつげさんをはじめとする『ガロ』の作家の多くが、たんに口下手であった結果によるのではないか、と思う。

勝又進、楠勝平、池上遼一、つげ忠男、佐々木マキ、林静一さんたちの誰彼もきわめて寡黙であった。それは、言葉をかえて言えば、含羞のなんたるかを体得していたといえる。ともかく彼らは、己れの世界を後生大事にした。したがって、作家同士が安易に肩を組むということをしなかった。

実際、つげ義春、忠男兄弟ですら、顔を合わすのは、年に一度あるかないかだった。けっきょく、作家それぞれが、「孤高の人」「一匹狼」のイメージを抱かれるにいたったが、もとをただせば、繊細で過敏な神経を宿したそれぞれの資質の問題であった。

六九年の暮れ、『思想の科学』の「ユートピアの会」に義春さんと私が招かれ、一問一答の形式で『ガロ』の報告をおこなった。そのあとで、一昨年自死された原爆文学研究家の長岡弘芳さんが



「ガロにはニヒルな臭いがありますね」と感想をのべられていた。

そういえば、白土さんは「カムイ外伝」の抜忍、カムイの行動があまりにニヒリスティックだと周囲から批判された、と苦笑していたし、水木さんは、ニヒリズムの傾向を前面に押し出していた。

白土さんや水木さんが敗戦後の日本を凝視する過程で、懐疑の念を深くしただろうことは、各作品から充分に推察できる。その白土、水木を両軸とする雑誌に、若い懐疑派が群がるのは必然であつたろう。義春さんが二八歳、忠男さん二五歳、勝又、池上、佐々木、林、つりたくにこさんらはみな一九か二〇歳であつた。水木さんでさえ、まだ四〇を少しすぎただけだ。

その若さが、激動期とまともにぶつかった。

その頃、未来への展望は閉ざされ、絶望と破綻だけが実感として横たわっていた。勝又さんも、マキさんも、忠男さんも、いつも素足にビニールサンダルをつっかけていた。義春さんはグサグサの雪駄をはいていた。つりたさんはチビた下駄だった。揺れ動いていた時代であつたが、彼らは、「俺たち関係ないよ、どつなつたつていい!」と、いういい方をくり返していた。

『ガロ』の「つげ義春特集号」に読みふけていたベトナム反戦運動家のM君は、その一週間後に自死し、わが職場の同僚のI君は、占拠中の安田講堂に出入りし、アルバイトで来ていた大学生のW君は、内ゲバ容疑で社内で逮捕された。『ガロ』の返品の山の片隅には、赤や白や緑や黒のヘルメットが二〇、三〇と積まれていたが、それらはまた別の物語を生み出すにちがいない。



# 『ガロ』忘年会 参加のこと……



TSUGE, Tadao

## つげ忠男

〔プロフィール〕1941年、東京生まれ。中学卒業後、血液銀行に就職。60年前後、兄・義春の影響を受け、漫画を画く。以後、漫画画きとその他諸々の何者かとの間を行きつ戻りつ、或いは両方同時であったりしながら現在に至る。著書に、『つげ忠男作品集』（青林堂）、『どぶ街』『無頼の街』（踐折羅社）、『懐かしのメロディー』『雨季』『つげ忠男読本』（北冬書房）、『ささくれた風景』（日本文芸社）、『きなこ屋のばあさん』『釣りに行く日』（晶文社）などがある。

『ガロ』の忘年会に、三度だけ、わたしは出席している。

いずれも二〇年以上昔の話である。

一度目は、その年（六八年）の一二月号に初めて自分の漫画が掲載されたばかりの時だから、ほとんど駆込み乗車といった感じでの参加であった。

会場は「新宿」の何処か裏通りの、飲み屋だが、小料理だかの二階で、わたしは案内状に記された地図を頼りになんとか辿り着くことが出来た。

当時二七歳のわたしは、その時、初めて「新宿」を見たのだが、なにしろ夜だったので、ネオンばかりの街の様子なんてどこでも同じであり、噂に聞くほど面白いところのようには思えなかった。

それはともかく、初参加の『ガロ』忘年会の宴はどのようなであったか、実をいえば、わたしはハナから上がりっぱなしだったので、あまりよく覚えていない。

なんともミィーハー的だが、当日は、毎号『ガロ』に凄い漫画を描いている凄い人たちを間近に見れるということで、家を出る時からすでに上ずっていたほどだから、それは仕方がないのである。宴会はいつの間にといった感じで始まり、進行していった。

『ガロ』常連の執筆者たちは、お互い何度も顔を合わせているらしく、各人の紹介とか挨拶などといった面倒な手続きは省略したようであった。それで、兄・義春以外、誰の顔も知らないわたしは、飛び交う会話を目で追って、何処に誰が居るかを確認するより方法がなかったのだが、生憎、わた



しは終始俯いてばかりいたので、それも果たせなかったのである。

大袈裟ではなく、部屋の蛍光灯の光は、始めに一步足を踏み入れたその時からとてつもなく眩しく感じていたし、第一、あまりキョロキョロするのはみっともないと考えたのだ。

何かドジをしでかして、兄に迷惑を掛けてはならない。

そのこともあって、わたしは相当に緊張もしていたのである。

結局、わたしが知り得たのは、テーブルを挟んで真向いにドツシリと腰を据えている、今は鬼籍に入ってしまったあの滝田ゆうさんだけであった。しかし、滝田さんの方では初顔のわたしに気の向く筈もなく、周囲の編集者や兄と歓談するばかりで、こちらには目もくれない。

恰幅が良く、和服をピタリと決めた滝田さんは陽気な人であった。

よく飲み、且つ飲んだ。

そしてテレ屋のようでもあった。賑やかに談笑中のところどころで、目を伏せてしまう様子にそれが窺えたりした。そのうち滝田さんは、テーブル上にあった当時人気のサッポロジャイアントというビールの大瓶に興味を示し、「これは片手じ

や持てないだろうなア」

と、誰にともなくそういいながら、手を伸ばして挑戦しだした。その様子を眺めているうち、わたしにも興味が湧いてきた。

滝田さんが失敗して諦めたあと、わたしは控え目な調子で瓶の胴に掌を当て、指先にグツと力を込めた。

意外にアツケなく瓶が上がる。

滝田さんは小さく「オッ」と声を発し、それから、「いい手だ、これはいい手をしている」と、妙な感心のし方をした。

余計なことをしたか、そう思ったわたしは慌てて瓶を手放し、再び俯きの姿勢に戻ったのだが、あの時、滝田さんが興味を持ったのは、本当はビール瓶などではなく、長年荒仕事をしてきたような、ぶ厚くゴツイ、そして大きいわたしの手ではなかったらうか。

わたしがタバコを吸ったり、料理を啄んだりする折りにそれとなく観察していて、それで悪戯のトリックを仕掛けたのではなかったか……。

そうわたしが考えたのは、しかし何年も過ぎたずっと後のことである。うがち過ぎかもしれないが、そうであったかと思いたいのである。その方が、後年有名人となった滝田さんとの関わりを誰かに





話す時、少しは厚味が加わるではないか。

「メシが出るよオ……」

酒盛りが終わり、食事の時になって、滝田さんは渡し舟の船頭よろしく二度そう大声で怒鳴った。なんだかよく判らないが、とにかく大したものだ……。

凄い人たちの中にあって、始めから終わりまで上ずっていた新参者の、これがその夜の感想である。

そして、翌年、翌々年ともわたしは出掛けて行き、そこで、後に芥川賞作家となった赤瀬川原平さんと隣り合わせに座ったり、勝又進さんの酒豪ぶりに驚嘆したり、帰途、うしろから忍び寄って来た林静一さんに「左にスキあり」と、ポンと肩

を叩かれて楽しい気分になったり、確か三度目の時だったか、欠席した兄とは旧知の永島慎二さんが、兄に付いてのチョットしたエピソードを話し、そのことで相づちを求められてドギマギしてしまったりの忘れがたい状景を胸に刻み込んだのである。

会社勤めを捨て、漫画描きを生業としたわたしの生活はそこまで終わる。以後は再び勤めに出たり、商売をしたりしながら漫画を描くといった二足ワラジの状況の中で、時間的余裕を失っていたわたしは、『ガロ』の忘年会とすっかり縁が切れてしまうのだ。

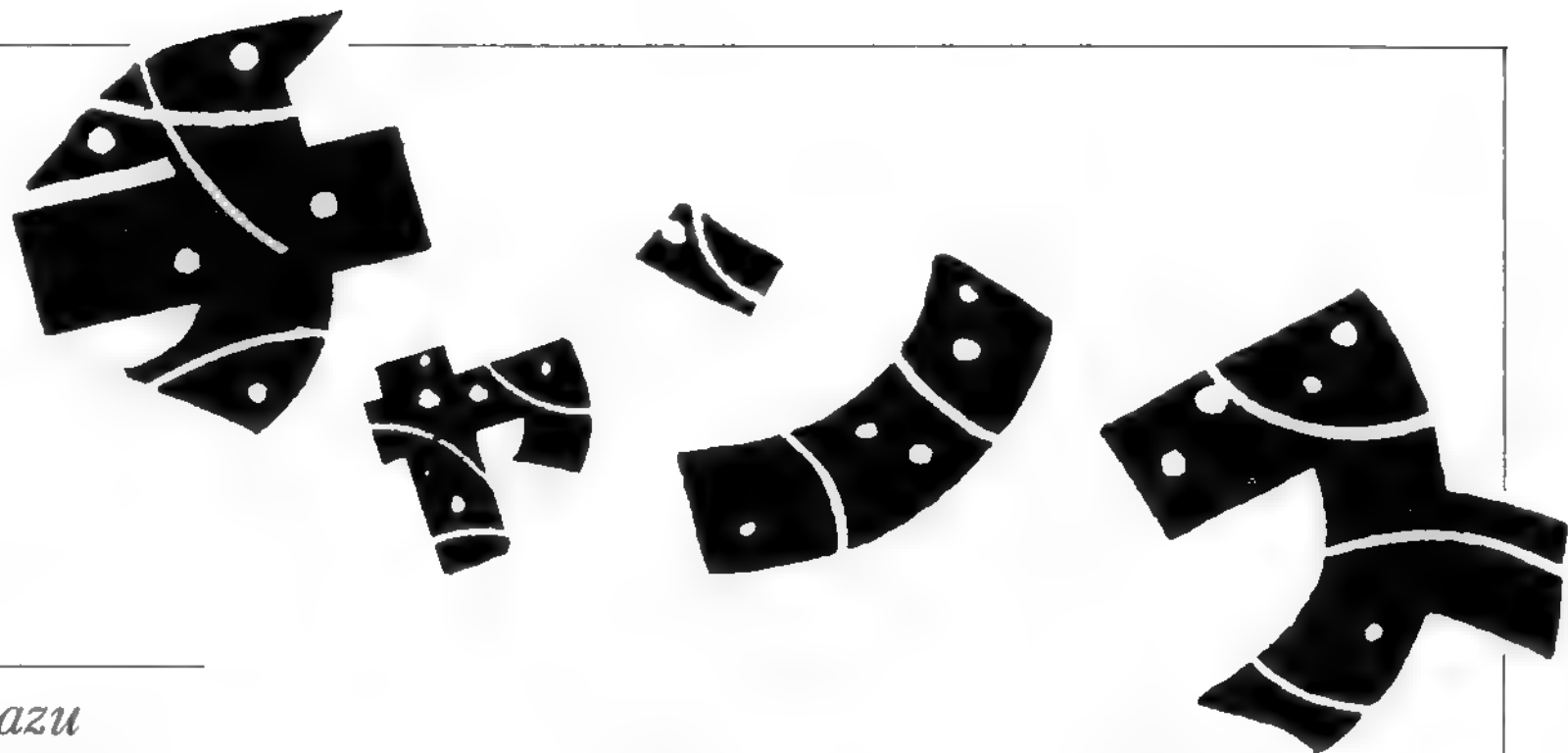
或る一時期、『ガロ』史に名を残す人たちと共に、ひとつ漫画誌にただ名を連ねていただけといったところのわたしが、『ガロ』について何かを語れるとしたら、それぐらいのことであろう。

『ガロ』に関した記事を、いつかまたどこかで書く機会でもあれば、わたしは再び同じ話を、今度は少し大袈裟に仕立ててみようかと考えている。

たとえば、勝又さんとは夜を徹して酒を酌み交わしたとか、林さんとは肩組み合い、歌うたいつつ夜の新宿を闊歩したとかといったふうにある。

漫画描きとして自慢出来るような話が、他に何も無いからね……。





EBISU, Yoshikazu

## 蛭子能収

【プロフィール】 1973年8月号の『ガロ』に「パチンコ」を発表して、マンガ家デビュー。「笑う悪魔」の異名をとる、不条理マンガ家。近年、その個性溢れるキャラクターで、映画、テレビなどにも数多く出演。テレビドラマで宮沢りえの父親役を演じ、一部から非難される。

# をくれた 『ガロ』

私は長崎の商業高校を卒業したあと看板屋に就職しました。

商業高校で美術部にいたので普通の事務職よりは少しでも絵の描ける職業をと思い看板屋に就職したのです。

その看板屋は小さな小さな看板屋で私の他に、あと一人しか従業員がいませんでした。社長もいれて計三人の看板屋だったのです。

今考えれば、この看板屋に就職したこと、そして、この看板屋で働いていた、あと一人の従業員によって私は『ガロ』と出会えたことになっています。

この従業員Yさんはマンガが好きでマンガ愛好グループなるものを作って毎月一回、日曜日に会合していたのでした。

私もそのグループに入れてもらい、会合に参加するようになりました。

そしてそのマンガ愛好グループが、模範として毎月定期購読していたのが『ガロ』だったのです。

中学、高校時代にマンガを全然読んだことのなかった私ですが、この『ガロ』を見た時は、「これは面白い」とマンガのとりこになってしまったのを感じたのです。



紙面の半分以上を迫力のある白土三平が埋め、あと残りを水木しげるや辰巳ヨシヒロ、池上遼一、つげ義春等が描いてましたが、新人もどんどん登場して、その新人の描くマンガが型式にとらわれてない自由な発想で、しかも今までにない変わった絵でも載っているということが、これはすごいと思わせたのでしよう。

特に林静一と、佐々木マキのマンガが入選としてガロに載った時は、これは『ガロ』以外のマンガ雑誌では絶対に誕生しないものだと思い『ガロ』がマンガ雑誌というより、これはもしかすると芸術雑誌の一つではなからうかと思ったものでした。

『ガロ』を読み始めて五年位たった頃、私は看板屋を辞めて東京に出て来ました。

映画に関係した仕事をしたくて青山のシナリオセンターという専門学校に通いました。しかし東京での生活は孤独で、シナリオセンターではいつも教室の端っこに坐り、誰と会話をすることもなく一年が過ぎてしまったのです。映画という職業が個人ではなく団体で創っていくものだというのは、一人も友人ができない状態では私には映画の仕事につくのは無理だと考えました。

そして次の目標をマンガに切り替えたのです。マンガは最初から最後まで一人で完成させること

ができるので、私には、これしかないという思いでした。

会社の寮で夜はセツセツとマンガを描いて、描いた作品はもちろん『ガロ』しか持ち込む所はないと思っていました。

一カ月位で一六ページ程のマンガを描き上げ、その発行元である青林堂へ向かいました。水道橋で降り青林堂のある神保町へ歩く時、その付近を歩いている学生の多さに私は驚きました。この人達が皆マンガを描いてるとしたらとても私のマンガが『ガロ』に載るのは無理だろうなと気持ちが委縮したことを覚えています。

学生の間を縫うようにして材木屋の二階にある小さな青林堂に辿り着いたのですが、その予想とはあまりにもかけ離れた小さくて地味な社内に驚きました。

そこには名物編集長と言われた南伸宏さんと長井社長と、社長の奥さんがいました。他にもう一人位いたと思うのですが忘れしました。

私は、おもむろに誰に言うともなく、多分南さんに言ったと思うのですが「あのーマンガを描いて持って来たんですけど」と言う「どうぞ」とニッコリ南さんが笑って社長の方へ私を案内しました。





私は社長の横へ坐り、マンガを渡すと、社長が眼鏡をかけて私のマンガを読み始めました。その間、私はジッと坐ったままで、恥ずかしさで、うつむいておりました。

社長は読み終わると、「うーん。絵が、ダメだね。ストーリーはいいと思うんだけど絵がこれじやまだだね。また描いてもってらっしゃい」と言いました。

それで私は皆におじぎして青林堂を出たんですが、残念というよりは、憧れの青林堂へ無事入っ

ていったという思いでホッとしたのでした。それから三カ月位後に再び私はマンガを青林堂に持ち込みました。

同じように社長が読み、そして今度は「このマンガ預つところかな」と言ったのです。そして私が帰ろうと出口まで来た時、社長が大きな声で「すみませんがね、もし『ガロ』に入選して載ったとしても、原稿料は払えないんだけど、それでもいいですか?」と言ったのです。この言葉で私は『ガロ』に入選するかも知れないと半分以上期待したのでした。そして社長の方を振り返り「ええ、お金なんて、いいです」みたいなことを言つて青林堂を出て来たのでした。

それから、一カ月位して「入選」という通知が速達で私の家に届けられました。

この時の喜びが今までの人生の中で私は一番嬉しかったんじゃないかと思っています。通知を開けて、狭い六畳のアパートで女房と一緒に飛び上がって喜んだのです。

昭和四八年の八月号の『ガロ』で入選となった『パチンコ』というマンガで私はデビューしました。それからマンガで生活するに至るのに一〇年かかりましたが、『ガロ』がなければ私はマンガ家にはなれなかったと思っています。

絵の上手下手、学歴も関係なく、誰にでもチャンスを与える『ガロ』をいつまでも大切にしたいし、永久に失くならないことを私は願っています。



# 純粹に『ガロ』出身者とは 言えないけれど

もともとマンガは自分の表現方法として一番あっていると思っていたから、暇があれば描いていました。学校を卒業する頃、二、三度『ガロ』に持込みましたが、絵柄は今とは全然違うものでした。それを南さんが気に入って「こんなマンガ載せたかった」と言ってくれたのはとても嬉しかったものです。

正直言って、自分の本当にやりたいことが煮詰っていない時期で、絵本の原稿も描き、それが認められて『ガロ』に初めて登場する前に『ありとすいか』（福音館書店）が世に出ました。が、そこでの編集の方との打ち合わせの積み重ねで本作りの大変さを知り、それが『ガロ』に持ち込んだ作品を描くのに役立ったと思います。当時、二冊目の絵本も進行中

TAMURA, Shigeru

たむらしげる

【プロフィール】 1949年、東京に生れる。桑沢デザイン研究所卒。トッパンアイデアセンターを経て、フリーに。現在、92年発売を目指して、CGイラストによるアニメーション・ビデオを制作中。「フープ博士の月旅行」「スモール・プラネット」「メタフィジカルナイツ」「はかせとおおたつまき」など、マンガ、絵本の著書多数。

でしたが、「雑誌に自分の作品が載る」ということにえらく興奮し、いつの号に載るのか、手紙で確認しました。最初は四コマでしたが、そのうち長いものも描きたくなって（フープ博士シリーズ）、先に仕上げる前に下書き段階で南さんと念入りに毎号打ち合わせをしたものです。

今後も『ガロ』という自由な発表の場は、もっと多くの人々が活用するべきですね。



# 腹ペコ『ガロ』

『ガロ』はハングリイマガジンです。飢えたマンガ家たちが集つ、腹ペコ雑誌なのです。満腹感を味わったマンガ家は、『ガロ』は必要としないのです。

東京オリンピック、東海道新幹線など、日本がやっと腹ペコ時代からの脱却を果たそうとしていた昭和三〇年代の後半、『ガロ』は雄々しいその姿を世間に現わした。

最近の若い『ガロ』の読者が、その昔『ガ

TATSUMI, Yoshihiro

辰巳ヨシヒロ

【プロフィール】昭和10年6月10日生まれ。大阪・日の丸文庫などで貸本向き専門に描き続ける。昭和42年劇画という呼称を考案し東京に出る。「ガロ」には昭和45年2月号に「さそり」で登場、その後ヤング雑誌に発表の場を移す。現在は仏教コミックシリーズ（すすき出版）に執筆中。

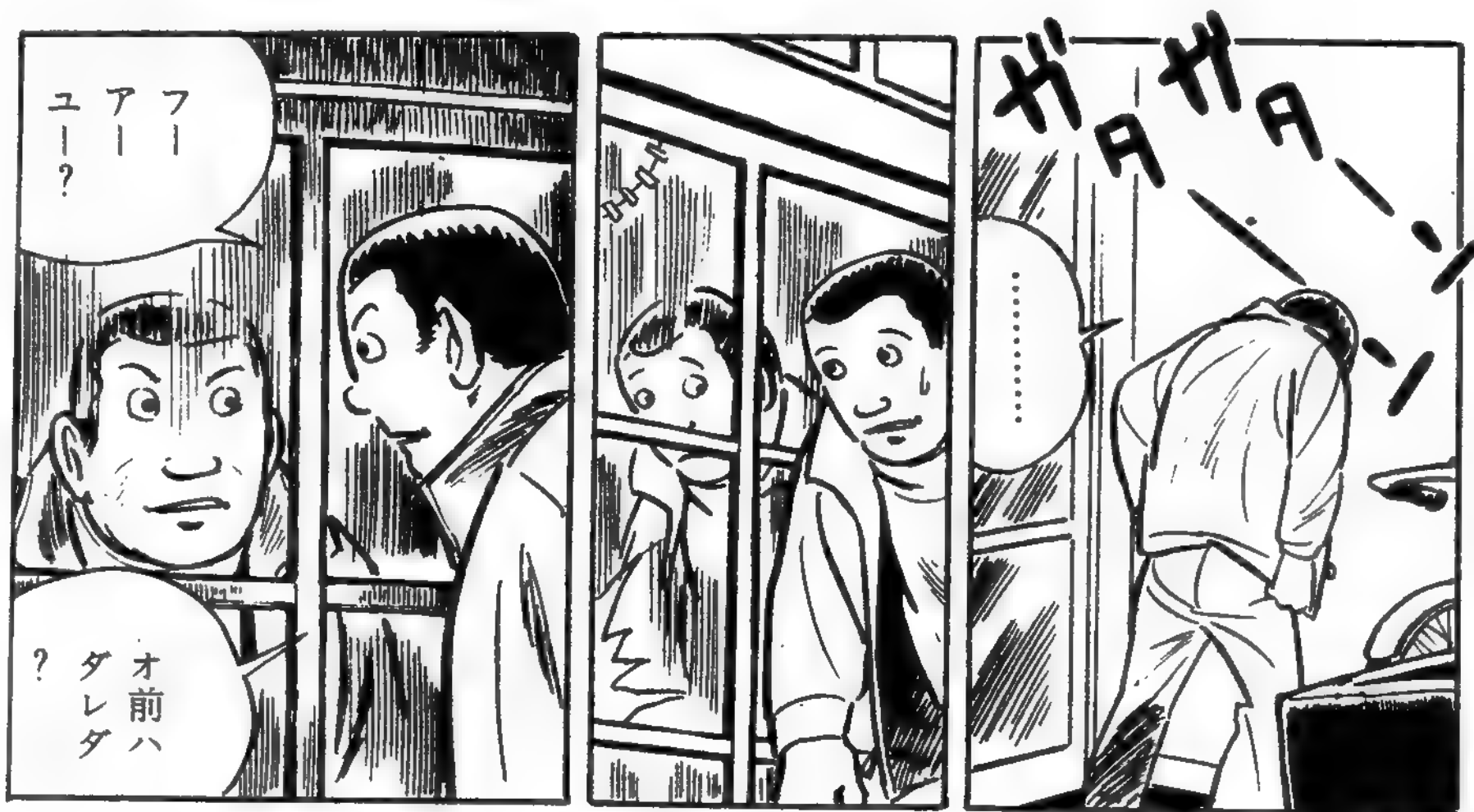


ロ』に白土三平が描いていたということ全く知らなかったと言った。「今や天上人ともいえる白土三平が、どうして貧乏雑誌になど描いていたのか……？」と、その若い読者はしきりに不思議がっているのです。

不思議がることはチットもないのです。その頃の白土三平は飢えていたのです。

ボクは昭和四五年二月号に「さそり」という短編で初めて『ガロ』に参加させてもらっ





たわけですが、ハッキリ言えば、この作品は穴うめ的なもので、某有名作家（もちろん現時点で……）が間に合いそうもないので、ひとつ描いて見てはどうかという長井社長のお言葉で急いで描き上げたように記憶している。したがって、その生煮え作品を『ガロ』に描いたという欲求不満のよつなものが、フツフツとその後に残り、「穴」とか「別れ道」といった商業誌には絶対に採用してもらえないような作品を描くハメに陥<sup>おちい</sup>ってしまった。

『ガロ』は餓狼だと考えていたから、『ガロ』に作品を描くときは、ある種の緊張感をもったのでした。

いみじくも、若い読者が貧乏雑誌と言ったように、『ガロ』は未だにハングリー精神を保持しているようです。

『ガロ』は現在まで数えきれないほどの有能作家を輩出した。しかし、その後もハングリースピリットを持ち続けている作家は、どれだけいるだろうか。確かに言えることは、『ガロ』だけは今後とも変わることはないだろうということです。



# 悪友めいた もう一人の 教師

小学生の頃から「忍者武芸帳」や「サスケ」で白土三平のファンとなっていたので、『ガロ』は創刊から期待していた。白土三平の「カムイ伝」を読みながら、中学、高校、大学へと成長していったのだ。もちろん、手塚治虫の『COM』も読んでいた。

しかし、高校のホーム・ルームで、「人生とは何か?」といったテーマで論じられた時、『カムイ伝』を読めばわかる」などといったくらいだから、僕が夢中だったのは白土三平の方であった。もちろん、単行本にもなる前

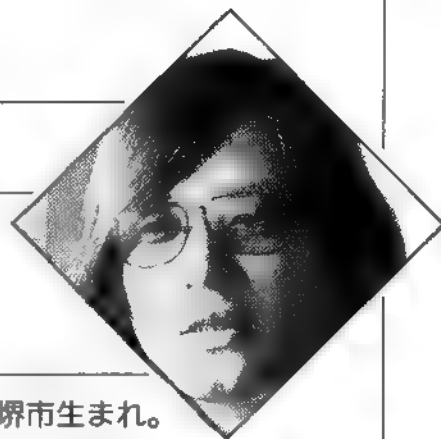
だったので、みんな、「?」といった顔をしていた。

貸本時代、「墓場の鬼太郎」も夢中だったので水木しげるも楽しんで読んでいた。ねずみ男のファンだったのだ。おそらく、中、高校生となっていく僕にとって、『COM』よりも大人の世界の『ガロ』がしっくりいったのだろう。背伸びしたい少年には「カムイ伝」やねずみ男が似合ったのだ。

同じ意味で、つげ義春の「ねじ式」や「紅い花」、林静一の「赤とんぼ」、そして池上遼一のセーラー服、つりたくにこの作品も、僕

TAKATORI, Ei

高取英



【プロフィール】1952年1月、堺市生まれ。劇作家。マンガ評論家。月蝕歌劇団主宰。大阪府立大学商学部卒業後、出版社に勤務し、「漫画エロジェニカ」編集長の一方、寺山修司のスタッフを勤める。80年にフリーとなり、演劇団・蜚蜚に戯曲を執筆。86年に月蝕歌劇団を結成し、代表となる。著書に「月蝕歌劇団」(沖積舎)、「聖ミカエラ学園漂流記」(尽立書房)、「マンガ伝」(共著/平凡社)、「女神ワルキューレ海底行」(ながらみ書房)など。TVドラマでは「いしいひさいちのなんなんだ」を脚本・監督。



には楽しいものであった。

大学の四年生の時に安西水丸と知り合って、吉祥寺の「ぐわらん堂」で、南伸坊、呉智英、高信太郎の諸氏と飲む機会のあった僕の喜びは、誰もが理解できるだろう。

その頃、面白主義と貧乏主義といわれる論争が『ガロ』誌上であって、嵐山光三郎のファンだったため、僕は面白主義の方に傾いていた。今、思つと、この論争は、八〇年代の世相をリードするものであった。

やがて出版社に就職し、劇画雑誌の編集者となって、『ガロ』執筆者にも原稿を依頼する機会を得た。川崎ゆきお、ひさうちみちおから始まって、蛭子能収、鈴木翁二、丸尾末広、森元暢之といった人たちである。インタビューの仕事では、渡辺和博、杉浦日向子などに話をうかがった。

安西水丸氏との交流は続いて、最初に出版した僕の作品集のイラスト、装幀の手をわずらわせただけでなく、僕が演劇にかかわるようになった時のポスターから、やがて、僕の劇団である月蝕歌劇団の演出を担当していた

だくこともあった。

また、吉田光彦氏にはポスター以外に舞台美術をいつも担当してもらっている。

そういえば、大学を出る頃、出版社志望の僕が、安西水丸氏に、「どこに行きたい？」と問われて、『ガロ』と応えたこともあった。水丸氏は、「生活できないよ」といったものである。僕はそれでもよかったのだが……。

大学生の頃、赤瀬川原平にも夢中であった。天下泰平ワッペンをもらったし、櫻軍団義勇軍ということになるのか。『櫻画報大全』は今も僕の本棚に輝いている。高校から大学にかけて、『ガロ』から、思想・文学・美術の一端を教えてもらったのだと思っている。六〇年代後半、カウンター・カルチャー、アングラ文化の中で『ガロ』は僕にとっては悪友めいたもう一人の教師のようなものであった。僕が演劇にのめりこみきっかけは唐十郎にあり、師事したのは寺山修司である。その頃、唐十郎は『ガロ』と交流があり、寺山修司は、長井編集長にインタビューし、『ガロ』論を書いていたのである。



# 『ガロ』最頂 の私的 恣意的 『ガロ』雑感

二〇年ほど以前、桜新町の貧乏なアパートにランドセルや宿題を打ちちゃって、路面電車玉電の線路沿いに歩いて用賀の貸本屋に出かけるのが、鍵っ子だった私の何よりの秘かな楽しみだった。途中には可愛い同級生が住んでる家もあったつけ。あの頃の用賀にはストリップ劇場があったな。で、その貸本屋で『COM』や『ガロ』に出逢い、『つげ義春特集号』も買ったんだ。「ねじ式」……小学生

の頭にはまるで理解できない漫画ながらも、何か悪魔的なモノを感じて魅了されたね。『少年マガジン』や『少年キング』は散髪屋で読む漫画で、少ない小遣いをはたいて、或いはお袋の財布からくすねた金で買う漫画本は、あくまで『COM』か『ガロ』でなくてはならなかった。そんな、ひねくれた嫌な餓鬼は二〇年後、成長して、ひねくれた嫌な、そして情けない中年となるわけだが、ガロへ



Mady UEHARA

## マディ 上原

[プロフィール] 1957年、東京都渋谷区生まれ。77年、明治学院大学仏文科中退。81年、谷岡ヤスジ氏に師事し、翌年に漫画家として独立。87年に出版した単行本「決定版」(青林堂)で、少年画報社主催の谷岡ヤスジ賞を受賞。89年、ハーバード大学出版、G・マーカス著「LIPSTICK TRACES」に漫画掲載。91年、第8回ザ・チョイス年度賞入賞。「ガロ」に「電腦サイバネKIDS」連載開始(愚作となる懸念ありしも、ここだけの話、実は気合いが入っている)。



の片想いに似た憧憬と親愛の情は持ち続けている。

最近、かつて親しかった人(悲しい言い廻しだから、今、『ガロ』に描くという行為に対する否定的な意見を聞いた。推測するに、以前『ガロ』という場でしかやれなかったマイナーにしてオリジナルな表現が、今では貪欲なメジャー誌で、次々とポップな様式としてヒットしうるとゆーような意見であろうか。或いは、それに関連して今のガロには以前ほど我儘な悪意と言うようなモノを感じさせる漫画なんて無いよ……と言う意味であろうか。そうだ。俺は我儘な悪意に満ちた濃くて骨っぽい漫画が読みたいし、出来れば描いてみたいって言う狂った変人なんだよな。中流の日常の類型の小ぎれいな可愛ぶった流行りモノの風俗とくすぐりっこしてる漫画が嫌いだよな。何言ってやがる。やっぱり『ガロ』だよ。『ガロ』なんだよ。根本敬がいるぢやねえか。花輪和一や山野一が、ひよっとしたら丸尾末広が読めるかもしれねえんだぜ。『ガロ』をなめるんじゃないやい。



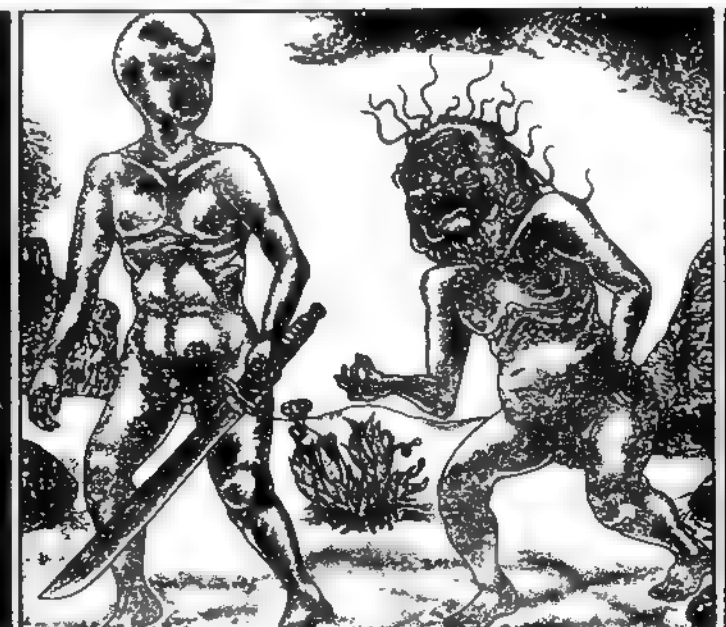
8「おめえ……何たのこしてん？」



9「見た見た 何かをやるんことさ」



10「朝た 定めし出勤か？登校か？」



12「女郎買 いしやあるめえ？」

13「……なら登校にするさ」



# 私と『ガロ』 KOH, Shintaro 高信太郎



『ガロ』とぼくの関係は大きく三つの時期に分けられる。まず第一期が読者の時代だ。中学・高校を『忍者武芸帳』を読んで育ったぼくは白土三平の大ファンだった。その白土三平の漫画からネーミングされた雑誌に、久しぶりの白土作品が連載されるとなれば、なにをおいてもである。生活は苦しかったけれど必ず毎月買って読んだ。そして水木しげる、つげ義春といった貸本漫画で親しんだ方々とも再会したのである。

第二期は執筆者としてであった。さるパーティーで偶然、長井勝一社長にお会いしたのである。まだほんのかけだしの漫画家なのに長井さんは、ぼくのことを知っていてくれた。その時に会社に遊びにくるよういわれたことに意を強くし、酔っぱらった勢いで友人とたずねていったのである。青林堂が集英社の近くにあったところだ。ぼくの初の単行本『怪人二重面相』は青林堂から出してもらった。自分の本なんて一生出ないだろうと思っていたところである。嬉しかった。しかし売り上げにはあまり協力できなかったろうと申し訳なく

も思った。その関係から『ガロ』に漫画を描かせてもらうことになっていく。南伸坊さんが編集として入社、ぼくの担当となった。しばらくして渡辺和博さんも原稿を取りにくるようになった。『ガロ』に関係のあるいろいろな漫画家と知り合い、毎日その内の誰かとドンチャン騒ぎをやっていた。あのころがぼくの一番楽しい時代だったように思う。

そして第三期が現在である。株主時代だ。ひょんなことからぼくは青林堂の株を持つことになったのだ。長いこと冗談かと思っていたのだけれど、ちゃんと総会にも呼ばれたのだから本当だ。そこで株主として、これから『ガロ』に、ひとつ注文をつけたい。それは「ガロ賞」の設定である。長い間沢山の優秀な漫画家を世に出してきた『ガロ』ならではの権威ある賞で、次の時代の漫画家を育てていってほしいと思うのだ。



【プロフィール】1944年9月19日、愛知県蒲郡生まれ。漫画家。演芸評論家。日本推理作家協会会員。63年に上京し、印刷会社、キャバレーの照明係などを経て、65年に漫画家デビュー。主書『怪人二重面相』『頭痛にコーシン』（青林堂）など。





# ペンと女体の触感



確か二八歳の時だったと思う。生まれて初めて原稿を出版社に持ち込んだのは。その出版社は『ガロ』という月刊漫画誌を発行しており、やるならここだとずーっと思っていた。一八歳で北海道室蘭から上京し一〇年。何か形を残したかった。三本目で入選したのかな。デビューが「電車を待っていた」続いて「愛のタバコ屋」そして「ギョーザ定食の昼」と二本描いて考えて。マンガで食いたい、と。当時、エロ劇画誌が異常なブームで『ガ

ロ』系の人々も誌面を賑わしていた。ここから食えるのではないかと思い、二社ほど回ってみたら幸運にも両社から原稿を依頼される。それから、なんととはなしにここまで来た感じだ。自分がかかわってきた何社かの出版社が潰れ、何誌かの本が休刊になった。

それでも『ガロ』は毎月きちんと送って来てくれる。不死身である。で、今私は何をやっているかというと、アダルトビデオの監督をやっている。月に二本程のペースだ。他にそういう現場ルポやイラストの仕事をばちばち。AV監督、この仕事は面白い。毎回毎回色んな女のコがやってくる。そういう人の体にベタベタ触ったり、変なかつこうをさせる。妙な声を出させたりまさに傍若無人のふるまいである。頭がくらくらする程興奮する。それでも『ガロ』は毎月きちんと送って来てくれる。たまにペンを持つと手が震える。小さなイラストを一点描くのこのさまだ。ペンが紙に引っかかり直線さえギザギザだ。女のコの体を触る時はこんなことないのに。それでも『ガロ』は……。

【プロフィール】 1950年3月11日、北海道伊達市に生まれる。高校卒業後上京。76年、美学校に入り、赤瀬川原平に師事。卒業とともに奮起して『ガロ』に持ち込み。主著『お札の先生』『コスモスの丘』（青林堂）など。映画、AV出演作多数。



# 深夜の妄想

TANI, Hiroji

谷弘児

『ガロ』  
ホラー  
怪談

『ガロ』について語れといわれても、一体、何を語ったらよいのでしょうか。

今、私の手元には、創刊号から第七六号までの『ガロ』があります。

六〇年代の『ガロ』。『ガロ』は暗いといわれます。六〇年代の『ガロ』は確かに暗い。どのページも、どのページも、黒くぬりつぶされ、ぐちゃぐちゃに描きこまれ、醜い顔をした人物がボロを身にまとい、汚物の中をはいまわっているようです。

絶望、孤独、汚濁、貧困、病氣、残虐……。

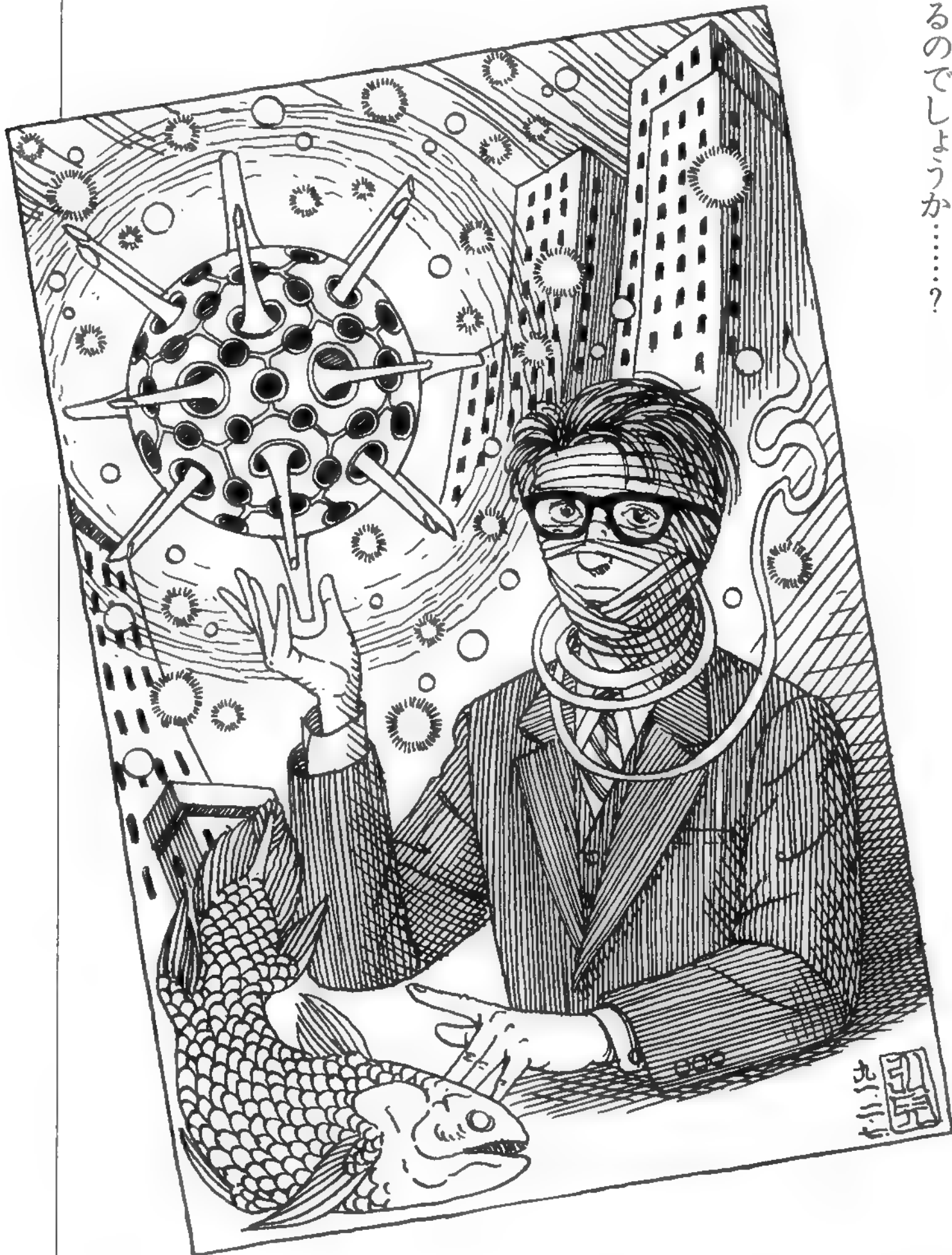
漫画家たちは、これでもかこれでもかと、暗さ汚さを競い合っているかのようです。若者たちは何を思っこのような漫画を描き、このような漫画を読んでいたのでしょうか……。

さて、ホコリまみれの『ガロ』から目を離し、今の日本を見回します。今、私たちの回りには、六〇年代の『ガロ』とはまるで異質な世界があります。しかし、それは本当なのでしょうか……。六〇年代の『ガロ』を読み、六〇年代の『ガロ』を描いた人々が、今の日本のの中に、散らばり、ひそかに生きながらえていることを忘れてはなりません。彼らは今、何を思い、何を考えて、このように変・わ・り・果・て・た、九〇年代の日本に生きているのでしょうか……。その心の中に……ああ！ 暗い情念（じょーねん！）と怨念（おんねん！）を抱いて、そのドス黒いかたまりを、この飽食の世の中で、人知れずひそかに、はぐくんではいるのではないのでしょうか……。過剰な栄養を与えられた黒い怪物は、人々の目のとどかない所で少しずつ、少しずつ、大きくなっているのではないのでしょうか！



……深夜にひとり、六〇年代の『ガロ』を  
 見ていると、恐しい妄想<sup>おもひ</sup>がわいてきて……あ  
 あ、私は不眠症になってしまひそうです……  
 ここ数年の『ガロ』を、私は見ていません。  
 『ガロ』は変わりましたか？ 『ガロ』は明  
 るくなりましたか？ 『ガロ』は売れて……  
 （あ、この話はやめましょう。これからの『ガロ』  
 はどうなるのでしょうか……？）

私も近いうちにまた、『ガロ』に描いてみ  
 たいと思っています。九〇年代の『ガロ』に、  
 私はどんなふうを迎えられるのでしょうか  
 ……。私——六〇年代の洗礼を受けた「いに  
 しえの者」を、『ガロ』はあたたかく迎えて  
 くれるでしょうか……。  
 おしまい



【プロフィール】 1953年、横浜生まれ。本名、大谷弘行。「ガロ」70年2月号でデビュー。以後、「ガロ」以外には、「漫画オリ  
 ンピア」「銀星倶楽部」「幻想文学」などに作品を発表。（ああ／ 私のマンガは表通りを歩いたことがありません…。）



# 『ガロ』という窓口

二〇代の頃から『ガロ』を読んでいた。つげ義春さんが活躍していた当時だった。貸本屋全盛の中で、「カムイ伝」なども読んでいた。小説よりも劇画の方が、はるかに現代を伝えていたからだ。

二五、六歳の頃、状況劇場の劇団員の中につげさんの「紅い花」に熱中した男がいて、彼に「紅い花」が載った『ガロ』を見せられた。私は「紅い花」論を書き、それは『ガロ』のつげ義春特集号に掲載された。

その後、状況劇場にいた女優の一人が失踪した。あちこち行方を探したが杳として知れない。彼女はつげさんの漫画を好きになった末、つげさんを訪ねて行き、一緒に住むようになっていた。現在の奥様である。いかに、その頃の若者にとって、『ガロ』がバイブルであったか！

七〇年代に入って、状況の変化と共に『ガロ』も変貌したが、嵐山光三郎さんの文章な



KARA, Juro

## 唐十郎

〔プロフィール〕1940年2月11日、東京都浅草生まれ。明治大学卒。作家・演出家・俳優。劇団状況劇場を結成し、69年に新宿で紅 TENT を張って公演。同年「少女仮面」で岸田戯曲賞受賞。83年に小説「佐川君からの手紙」で第89回芥川賞受賞。87年に劇団唐組結成。

ど、なかなか面白かった。

七五年には自らの原作で「糸姫」を発表した。篠原勝之と、絵と文章の二人三脚をやってみようと創り上げて、『ガロ』に売りこんだものだ。これも良いものであった、と思う。かつて、『ガロ』は窓口だった。その時代をどうとらえてよいか分らない若者に、メジャーではないものの、青っぽい印画紙にその時代のシャドウを写し取って見せる窓口だった。ちょうど、つげさんの漫画に電柱の影が横たわっていたように。

そして現在、状況が変わって行く中で現代の窓口がどうなっていくのか、私は大変楽しみにしている。



# 糸姫誕生

オレの数多い仕事歴のほとんどが無残な経済状態だったのだが、その中でも短い期間の劇画描きというのがあった。

その頃オレはまだ唐十郎が座長をやっていた『状況劇場』の舞台美術を担当していた。赤テントの芝居小屋でお馴染みの都市を駆け巡った劇団だった。銭もないまま、ただ軀だけは頑丈なオレは苛立っていた。昼間は稽古場に行ってる団員たちの部屋は留守だったから、ケント紙とインクを持ち込み劇画を描き始めた。夕方、稽古が終わって戻ってくる団員とすぐにエン会が始まるのだが、また明日の朝になればビンボーな一日が始まった。酔っぱらっちゃってもう朝なんて来なくてイイトさえ思っていたものだ。それでもやっぱし確実に朝が来た。仕方なくてまたコマ割りを



SHINOHARA, Katsuyuki

## 篠原勝之

【プロフィール】1942年札幌生まれ。鉄のゲージツ家「クマさん」は、17歳にて上京し、60年、武蔵野美術学校入学。2年後、デザイン会社に勤務。その後、絵本作家として独立し、70年には「銭湯的浴場絵画家」を名乗り、72～78年は状況劇場で舞台美術などを担当。退団後、エッセイ『人生はデーヤモンド』（角川文庫）を著す。処女小説『嵐の中をアカ犬が走る』（角川文庫）では、中央公論新人賞にノミネート。その他の著書に、『デーヤモンド・ヘッド』（新潮社）、『放屁庵退屈日記』（角川文庫）、『クマさん タコを食らう』（青山書房）、『ケンカ道』（祥伝社）、ラジオドラマ化された『アイアン・チャイルド』（NESCO）などがある。







しては絵を描き続けた。そんな日々がズーツと続くうち、短い劇画が出来上がった。それが「におい横丁」である。

すると座長の次の戯曲が書き上がり、ポスターや舞台を作るオレにも台本が渡された。「糸姫」だった。団員たちは各自戯曲分析したりするので、自分の部屋に戻っちまいエン会の人々はいなくなった。仕方ないからオレも静かに「糸姫」を読み始めた。

頭蓋内がコマ割りの思考になってたから、オレは早速ケント紙を風呂敷に包んで酒場のニヨシヨウの部屋を尋ねたものだ。

今度は夜昼逆になった。夕方にニヨシヨウが店に出掛けるのと入れ違いにオレは「糸姫」を描き出すのである。明け方、彼女が戻ってくる前にオレは巷に消え、昼間は公園で台本を読み夕方を待った。一〇〇枚はたっぷり描いた。座長の許可を戴きオレは銭にするコトにした。以前から付き合いのあった、まだ青林堂の編集者だった南伸坊に売りつけたのだ。大した銭にはならなかったが、劇団一派とヤキトリ屋で飲み切った。



# 手さぐり 歩き



FURUKAWA, Ekizo

## 古川益三

【プロフィール】1950年10月21日、滋賀県に生まれる。69年7月号「野風呂」でデビュー。まんが専門店経営のかたわら、4色フルカラーの描き下ろし単行本を執筆中。トライアスリストとして世界選手権に2度出場。トライアスロン誌にまんが実践記を連載中。トライアスロンの描き下ろし単行本がこの春出版予定だったが、没。(どこかで出して下され〜)

一言でいって、キャパシティの大きな雑誌でした。なんでもかかしてくれたし、ほとんどクレームもなかったし。

それだけに、良い人はグングンのびたし、だめな奴(私みたいの)は、落るべき所に落ちましたけど。

それでも私にとっては、とてもありがたい本でした。

二三年前にはじめて青林堂に原稿持って行ったのですが、その時出してもらったお茶の味は忘れません、

あれからずい分たちましたが、まるでまったく闇の中を手さぐりで歩いて来たようです。

そろそろ自分なりに満足のゆく作品がかけられるかなと思っているのですが、才能のなさを努力でカバーするには年を取り過ぎたのかも



しれません。

四〇歳になって、ちよつと弱気な古川でした。



僕が初めて『ガロ』の編集部へ行ったのは二〇歳すぎくらいの頃だと思う。若気のいたりと申しましょうか、メジャー誌にないユニークな面白さというものと一人よがりをお勘違いして、ひどくつまらないマンガを持ち込んだ。私小説のつもりプラスシュルレアリスムふうとゆう若気のいたり具合だった。その時はたまたま社長の長井さんがおられて見ても



HISAUCHI, Michio

## ひさうちみちお

〔プロフィール〕1951年京都生まれ。本名・久内道夫。河合玲デザイン研究所終了後一年間自宅2Fで喫茶店営業後また一年間植木販売員等したのち上京。1976年『ガロ』に「パースペクティブキッド」でデビュー。単行本は「アポクリファ」（ブロンズ新社）、「百万人のマスチゲン」『オシャカ』（青林堂）、「夢の贈物」（東京三世社）、「福音書」（双葉社）、「義経の赤い春」（角川書店）、「正しいお変態本」（KKベストセラーズ）。



編集部

す

く



らったのだが「これはあなたのお友達とかが見れば面白いかもしれないけど、あなたを知らない人にとってはね……」とゆう、誠に正しい御批判をいただいたのだった。

二度めに行った時は京都から出てきて東京で一人暮らししてる時だったが、まだ若気はいったまままで、今度は南伸坊さんにいろいろ御指導いただいた。以前は林静一さんや佐々木マキさんのマネをしていたが、その頃は安部慎一さんや鈴木翁二さんのマネをしていた。東京に住んでた時だったからそれ以後何度も持ち込みをしてその都度教えてもらい、仮に自分が自分の線を持っていると言わせてもらうなら、それはその頃に出来たものだろう。僕の前で南さんが「こおゆう表現はちよっと通俗的だからこっちのコマのこおゆう線をもっと伸していった方が良いんじゃない」と親切に教えて下さるとそれを拝聴してる僕の背後からスツと指が出てきてボソツとひとこと「これ良いよ」と渡辺和博さんである。すごい編集部を持ち込んでるなどとは、その時はまだ分らなかったものであった。





# 普通には 味わえない

僕は「入選作品」と表紙に自分で墨書きしたおそまつな漫画を投稿し、才能があるかも知れないという事で、他の人の反対を押し切って長井さんが入選印を押してくれた。生まれた子供が間引きされ、闇に葬られようとしているのを、一人の老人が手を差し伸べてくれたのである。命を与えられた僕はその後『ガロ』でどんどん育っていった。

大阪から上京して青林堂に着いた時、長井さんはロッカーの中から洗面器を取り出して「疲れてるだろう」と言っつて、いっしょに銭湯へ連れていってくれた。

『ガロ』も一応は商売で出している雑誌なの



KAWASAKI, Yukio

## 川崎ゆきお

〔プロフィール〕1951年生まれ。兵庫県伊丹市出身。71年「うらぶれ夜風」ガロ入選。上京する引越費ないまま大阪在住非社会人生活を継続。代表作「獵奇王シリーズ」「ライカ伝」「夢伝説」「大阪もののけ紀行(文章)」現在比較的入手しやすい単行本は「レトロ帝国の逆襲」(河出書房新社)、「悪いやつほどよく走る」「夢伝説」(青林堂)、「大食もののけ紀行」(白水社)、処女単行本「獵奇王」はブレイガイドジャーナル社がなくなったためビレッジプレスに在庫がある。連絡先はチャンネルゼロ社の単行本の裏で確認できる。現在、「人間星占い」という裏のない占いの本を書いている。出版予定は未定。また、小説獵奇王を執筆中。これも出版予定はなし。2年ほど前に98パソコンを買ってJGや花子でパソコン漫画を書いたりしている。





だが、僕の場合一度も管理された事がない。メジャー誌ではストーリーの段階からチェックを受け、さらに絵コンテで綿密な品質管理が行われ、それをパスしなければ本番の原稿にペン入れできない。つまり品質管理を経て原稿ができる。

そんな会社へいつているような書き方ができるのなら、僕は社会人になれる資格が十分ある。会社に行くのが嫌なので、漫画家になろうとしていたのに、会社より厳しいチェックを受けるのなら話が違うのではないかと思いたくなる。

僕は『ガロ』で野放しの状態で育ったので、妙な世界に入り込んで、普通の漫画とは違うものになってしまった。もっとも今でもまともに絵は書けない。漫画そのものをまともに書けないタイプなので、漫画を書くという展開は、普通の漫画家には味わえないスリルがある。

永年に渡って『ガロ』は僕に紙面を開放してくれた。そして今でもそれは継続中なのである。そんな事ができる雑誌は他にない。僕

も異常だが、『ガロ』も異常である。





絵を描く事を生業なりわいとしてゐる私は例にもれず絵を描くのが大好きな子供で、広告の裏とかに毎日描きまくっておりました。そんな私を見て親や親戚は「この子は漫画家になるんやろねえ」とか話していた。本人もかなりその気だったが、小学校六年の時にやはり漫画家を目指してたであろ、う絵の上手な子に「漫画家は同じ顔を何回もそれもいろんな方向から描けらんとなれへんのやで……」と言われてダメだと思ってあきらめた。ところがそれから約十年後、ヒョンなことから『コミックアゲイン』でデビューした。ピューピュー。

そして女流漫画家を目指して上京した。うそうそイラストレーターとしてがんばろうと上京した。

でも上京四カ月後、漫画の殿堂「青林堂」へ持ち込むという勇氣ある行動をとることになる。えらい暑い日、ダラダラとガマ蛙のようぬ汗をかきかき材木屋の二階を目指した。階段やおどり場には『ガロ』が山積みで青林堂の気配は暗かった。部屋には男の人が二人

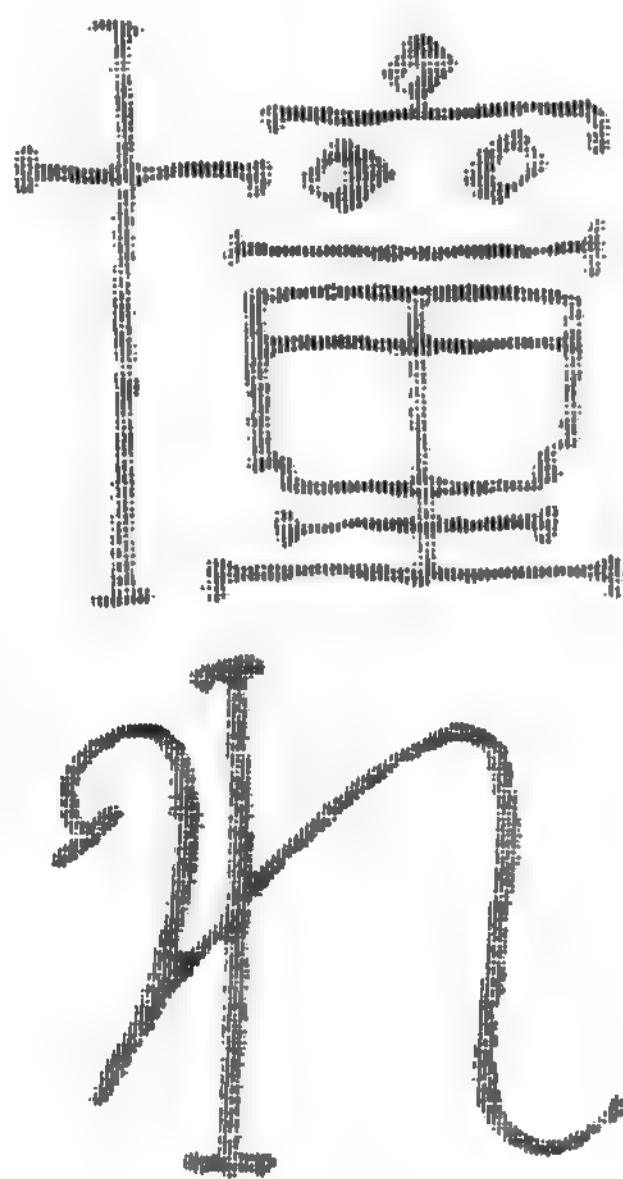


TSUCHIHASHI, Toshiko

## 土橋とし子

[プロフィール] 1960年、和歌山県に生まれる。80年、浪速短期大学デザイン美術科を卒業後、日グラフィックスにてアシスタントとして仕事を始め、チャンネルゼロの人たちや関西の漫画家さんたちと知り合いになる。84年、フリーのイラストレーターとして、東京で仕事を始める。漫画作品は同年、『コミック・アゲイン』で初出。

# の女流漫画家





一回目の持ち込みは長井さんのアドバイスを聞く貴重な体験と引き替えに終わった。あのひさうちさんも一回目はダメだったんだよとか南伸坊さんと文子さんからイロイロとアドバイスしてもらって次回への意欲がメラメラ燃え上がった。

あの戦う漫画家（私が勝手につけた）根本敬さんからも「あれ……けっこう好きですよ」と言われてとてもうれしかった。

やっぱり漫画家って憧れます。また描いてみたいし、その時は『ガロ』に載せてもらいたいもんだとやっぱり憧れている。青林堂、万歳!!

5月13日(内)18日(外) 南青山のスパ・スミリーで、南川先生と澤月先生あつりといふ話をきく。ガロウ讀者の比喩は様トンドン来てをーだいねッ。名古屋はワガロ見てますし、ですからぬきょとよつ♡♡♡♡♡



# 前代未聞の文士劇



MINAMIHATA, Toshiharu

## 南端利晴

【プロフィール】1951年2月5日生。1980年、大阪市にてまんが専門店わんだ〜らんど開業。「社長」である南端裕子との共著に『遊ぶ本屋』（新文化通信社・1986年）がある。本人は「店主」。



ひさうちみちお脚本による「実演・不幸」は、一九八二年一月二四日、大阪のスタジオあひるで上演された。元ネタは『宝島』に連載された「不幸」と『ガロ』掲載の「やさしい出会い方教室」で、その頃プレイガイド・ジャーナル社から発売された『山本さん家に於るアソコの不幸に就て』の発行記念イベントとして、チャンネルゼロとわんだ〜らんどで共同制作した。当時ぼくは、まんが専門店の仕事の一環と称して『わんだ〜らんど通信』というミニコミを出しており、発想としてはその立体版を目指したものだ。実現へと運ぶにあたって、けいせい出版のコミックス編集者でありながら、演劇舎螳螂（とうろう）を率いていた小松杏里さんとの出会いが大きかった。彼が演出し、彼の劇団からも二名出





演してくれた。が、やはり特筆すべき点は、ひさうちみちおさん、川崎ゆきおさん、南伸坊さん、村上知彦さんといった非・演劇人による文士劇だったことだろう。セリフを覚えていた出演者がなく、首からぶら下げた色紙に書かれた各々のセリフを読みながらの演劇もどきは、ばかばかしくも異様だった。非常にウケた。ぼくも出演者のひとりだったが、何が悔やまれるとって、その舞台を自分の目で見れなかったことがいまでも残念でならない。当日は立ち見客も出る大盛況だった。

後日この演劇は、キャストをさらにグレードアップさせ、新宿紀伊國屋書店の「ガロ展」会場でも上演した。青林堂、けいせい出版、ブロンズ社の共催として実現した。その手伝いのため、小道具というには少し大きすぎる「飯ごう」を車に積んで、深夜の高速道路を東京へと向かった記憶も今となれば懐かしい。

(了)

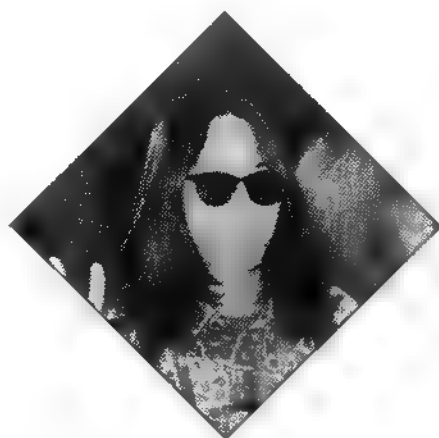


# 『ガロ』こそ全て

MIURA, Jun

## みうらじゅん

〔プロフィール〕1958年京都生まれ。武蔵野美術大学卒。“ガロ”で大学3年時「ウシの日」でデビュー。著作に「単になんぎなうし」(青林堂・絶版)、「見ぐるしいほど愛されたい」(講談社)、「学園ハニワものハニーに首ったけ」(河出書房新社)、「ボクとカエルと校庭で」(青林堂)、「カリフォルニアの青いバカ」(JICC出版)、「オレに言わせりゃTV」(角川書店)、「ハニワうしかエル」(マガジンハウス・6月頃)などがある。最近、バンド“大島渚”のセカンドアルバム(6月中旬)のためレコーディング中。間寛平氏の“カルマは急に止まらない”という曲の作詞をし、レコード大賞希望。



湯村さんと糸井さんのコンビで連載されていた「ペンギンごはん」を読んだ時、「まいった!」と思った。未だに僕は読み返したりする事があるが、その驚きは少しも変わらない。今、自分が何とか仕事をやっていけるのもたくさんアドバイスをして頂いた糸井さんや口数は少ない人だけど、「あんた、もっと描けばあり」って言って下さった当時の編集長・渡辺和博さんのお陰だと思っている。

糸井さんは四年ほど前「もっおまえは一人でやっていけ」と言われ、僕は旅に出された気がした。「カマボコ板にフェルトペンで書いたような看板でもやっていい」と温かい言葉で送り出された気がした、勝手に。

でも、どこかで糸井さんは僕の仕事に「バカ!」と言いながらも見守って下さっていると思っている、勝手に。だから僕は手を抜く事は出来ない。一番優しくてコワイ人だから。

『ガロ』は僕にそんな出会いを与えてくれた貴重な雑誌だ。いつまでもガンバツて下さい!



「ガロ」の版元、青林堂は、神田神保町裏の文林堂ビル二階で一九六二年にスタートを切った。文林堂はヒコキ雑誌「航空ファン」の版元である。元家主の戸田氏によると「漫画が売れて波に乗ると景気が良かったし、駄目になるとたちまち困まっちゃう会社だね」

# ガロ差別

みうら じゅん



ぼくはこの時――



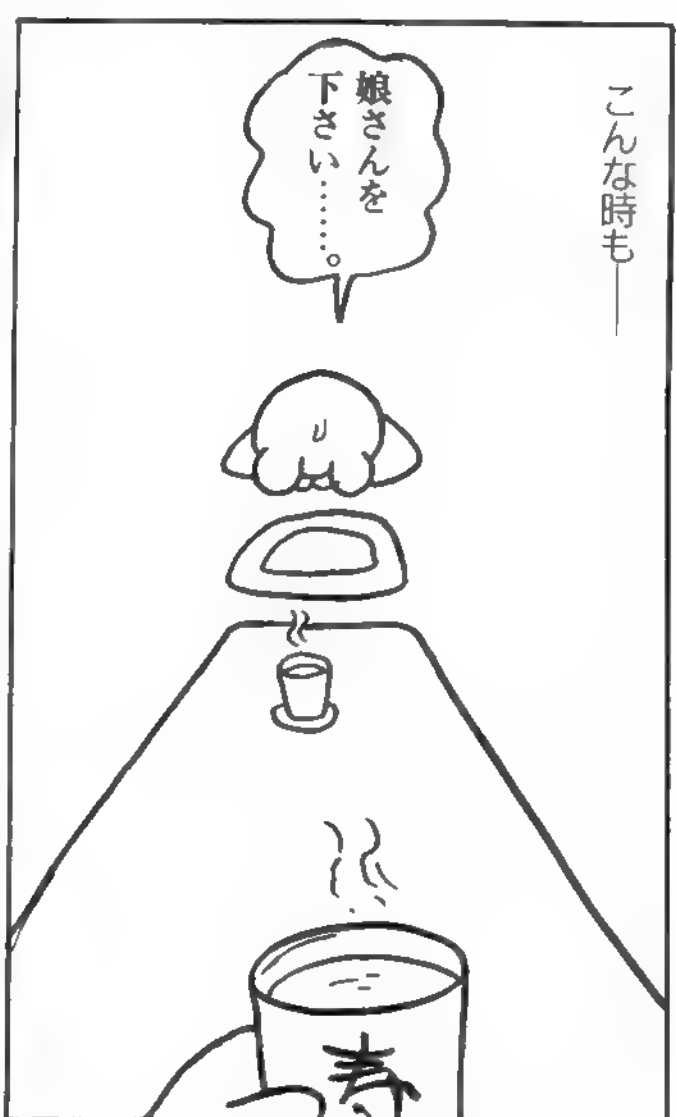
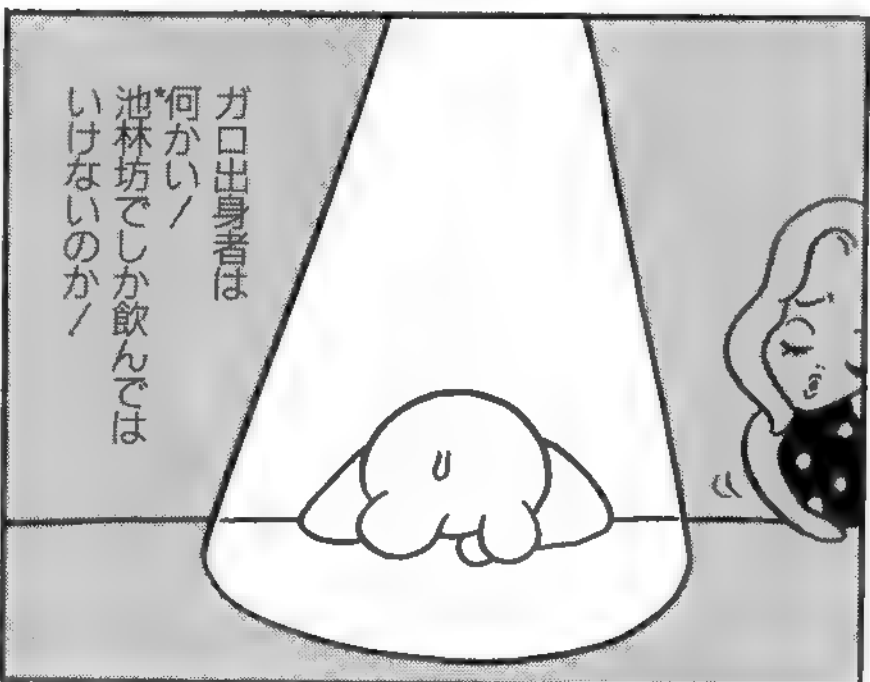
「売り出し前の水木しげる氏や白土三平氏が通っていたのも覚えています。長井さんには先見の明があったんだね」と語る戸田氏。しかし、一九七一年には、文林堂の業務拡張に伴って、神田猿樂町の文房具店の、これまた二階に最初の移転をせざるを得なかった。





# 嗚呼、青林堂流転③

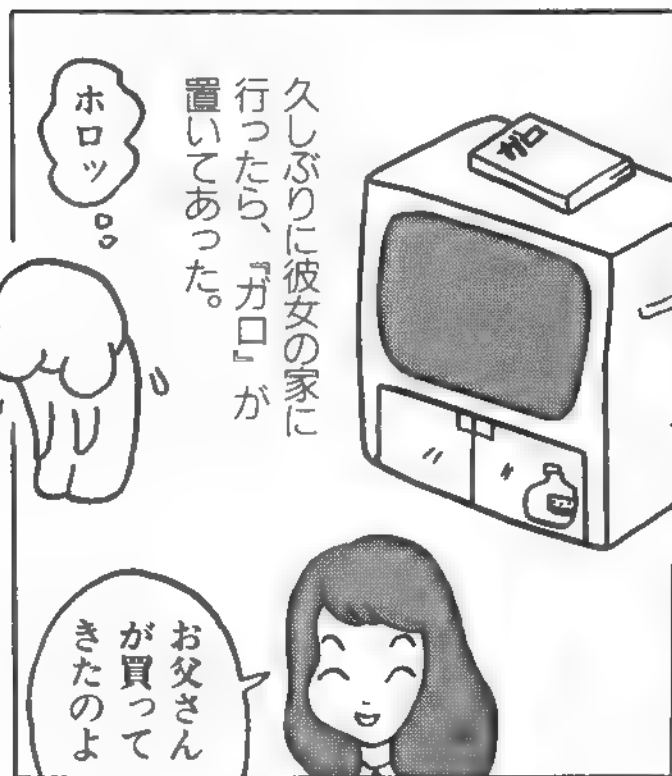
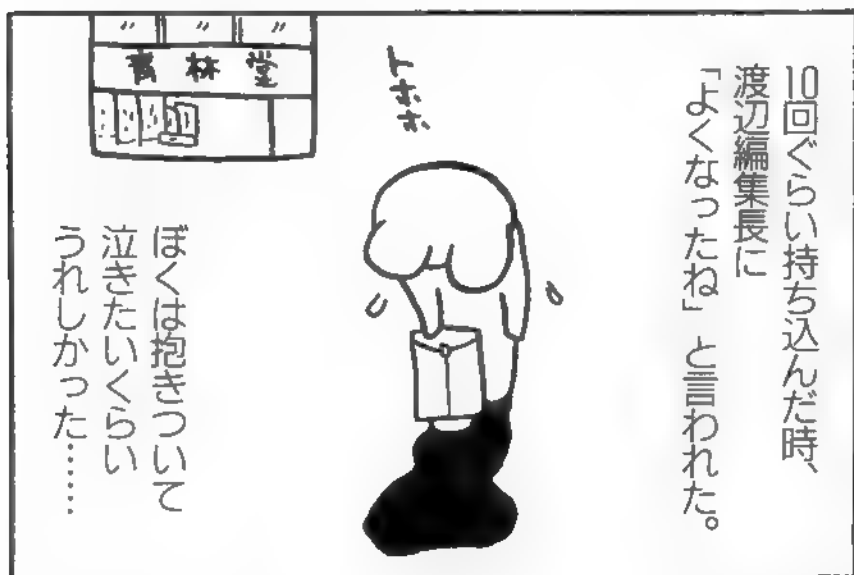
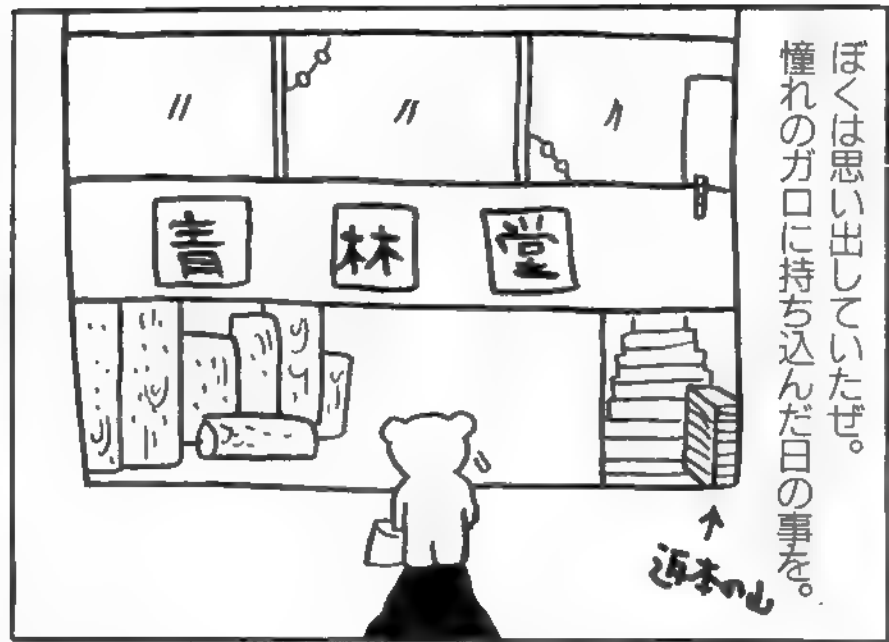
猿楽町時代は短く、七二年に現在の場所、材木置場の二階に移転する。持ち込み投稿者が口をそろえて「見つからなかった」とこぼす場所である。その後九〇年に代々木分室（マンションの一室）に一部を移して、青林堂は現在に至っているのだった。





# 嗚呼、青林堂流転④

ここまで見て来てお分かりのように、「雑誌社の二階、文房具店の二階、材木置場の二階と、だんだん原料に近づいています。ここから先はもう無い」とおっしゃるのは南伸坊氏。果たして、末は熱帯雨林か再生紙工場か。ともかくも、青林堂はまだ二階にいるのです。





3

4

1



作品を発表した。様々な表現者たちが『ガロ』誌上をキャンバスに、思い思いの



表現方法を模索する。カルチャーマガジンと化した『ガロ』に月刊漫画という冠詞は似合わないのか。

## 第5章 広がる表現形態

「カムイ伝」がひとまず終了し、柱が消えたかのように思われた『ガロ』にも、次々とユニークな人材が集ま

2



り、『ガロ』を支えてきた。イラストレーターもマンガを描き出し、写真家も誌上で多様な





MURAKAMI, Tomohiko

## 村上知彦

[プロフィール] 1951年、神戸生まれ。関西大学社会学部卒業。スポーツニッポン新聞大阪本社文化部、「プレイガイドジャーナル」編集長などを経て、現在評論家、編集者。著書に「黄昏通信 同時代まんがのために」(プロンズ社)、「情報誌的世界のなりたち」(思想の科学社)、共・編著に「マンガ伝」(平凡社)、「マンガ批評大系」全4巻・別巻1 (平凡社) など。

# 『ガロ』的なる ものを めぐって '80~'90

八〇年代の『ガロ』について語られた文章を読んだ記憶がほとんどない。『ガロ』についての物語はたいてい、七一年七月の「カムイ伝」第一部

終了あたりを境に急速に要約的になり、八〇年代初頭の杉浦日向子の登場付近でぶつんと途切れている。たまに、意外なところで『ガロ』の名を耳にすると「昔『ガロ』という雑誌がありましたか……」などとすっかり過去形で語られていたりして、意気消沈することもある。

確かに『ガロ』の八〇年代は「物語」として語られるには、あまりに混沌としていてつかみどころがない。『ガロ』自身は六〇年代、七〇年代と変わらず、いや、ある意味ではそれ以上に独特でありつづけているにもかかわらず、どう独特なのかと改めて問われると、先の一六年と異なり一言では答えにくい。それは必ずしも『ガロ』自身の責任とはいえないかもしれない。八〇年代以降、日本のまんが界自体が混沌とした拡大と拡散の過程を歩み続けており、『ガロ』もまたそれを、おそらく最も純粋な形において体現しているにすぎないともいえるからだ。『ガロ』の混沌を語ることは、すなわちまんがの混沌を語ることである。そのような意味で、八〇年代においても『ガロ』は正しく『ガロ』であり続けた。

八〇年代に入っただけの頃の『ガロ』は、まだ七〇年代の雰囲気の色濃く引きずっていた。渡辺和博、ひさうちみちお、奥平イラ、沢田としき、



たむらしげる、安西水丸といった七〇年代末期からの新しい描き手よりむしろ、古くからの村野守美、永島慎二、鈴木翁二、古川益三、勝又進、高信太郎、秋竜山といった名前の方が目についた。それがすっかりさま変わりするのは、八〇年代に入って二、三年の間のことだ。前述のように混沌としてつかみどころがない「八〇年代『ガロ』」のイメージが定着するのは、実際には八〇年代もなかばにさしかかった頃だったようだ。

八〇年代の『ガロ』を特徴づける作家を挙げよと求められたら、まず思い浮かぶのが蛭子能収、根本敬の二人である。彼らは七〇年代なかば、イラストレーション界の流行と並行する形で『ガロ』を席卷した渡辺和博、湯村輝彦らのいわゆる「ベタウマ」路線を継承しながら、それをさらに進化、発展させた八〇年代『ガロ』に独特の反社会、非リアリズム、不条理まんがの系譜をつくりあげたといえる。

蛭子能収のデビューは意外に古く、七三年八月号の「パチンコ」にさかのぼる。ギャンブルや、サラリーマン生活の無常さを主題とする作品を七六年まで継続的に発表したのち、一時プツリと『ガロ』誌上から姿を消し、八一年「地獄のサラリーマン」などで再登場したときは、意味ありげ

な不条理劇から全く無意味なナンセンス不条理へと変身をとげていた。八〇年代を通じてコンスタントに『ガロ』に作品を発表するほか、エロ劇画誌、若者雑誌など他誌でも活躍。その特異に温厚な人柄からエッセイスト、イラストレーター、タレントなどとしてマスコミに登場する機会も多く、八〇年代『ガロ』のイメージ・リーダー的役割を果たしたといえる。

根本敬は八一年九月号「青春むせび泣き」でデビュー。無能で内向的なさえないサラリーマンの家父長、村田さんを主人公とする連作でたちまち頭角を現わす。最初、短編中心に描いていたが、八五年から八八年にかけて長編「天然」を連載、続けて八九年「タケオの世界」、九〇年「ミクロの精子圏」とたて続けに長編の力作を発表し、長編作家としての地位を確立する。人に忌み嫌われる汚いもの、グロテスクなもの、惨めなものを、美化することなくありのままに、しかしある種の愛情をもって描くスタイルは特異である。根本敬も自販機雑誌など多方面で活躍し、また歌謡曲評論などまんが以外での活動でも知られている。

この二人の作家のイメージ的影響下に、八〇年代の『ガロ』は、山野一、マディ上原、杉作獣太郎（J太郎）、みぎわパン、石川次郎、山田花子



らの「汚らしくて品のないまんが」の牙城のような観を呈していた。その作品群が本質的に、良識的な評価を拒むような性質のものであったことと、彼らの多くが短編作家であり、記憶に残るような有名作品を生み出しえなかったことが、この時期の『ガロ』自体の一般的な印象を希薄にしている原因ともなっていることは否定できない。

だが、子細にながめると、これらのなかからも数多くの秀作が生まれていることに気づく。マデイ上原の八七年の単行本『決定版』にまとめられた四コマ作品の実験性は、いまながめても充分新しいばかりか、ますます輝きを増して見える。根本敬にしても、「タケオの世界」を収めた『怪人無礼講ラバイ』（九〇年）などの単行本でようやく作品への正当な評価が始まったばかりだといえる。彼らの主要な活躍舞台としての、八〇年代『ガロ』への評価が定まるのは、もう少し先のことになるだろう。

もうひとつ忘れてはならないのは、**やまだ紫**、**近藤ようこ**、**杉浦日向子**を始めとする女性作家の活躍ぶりである。むしろ一般的に印象に残っているのは、こちらのイメージの方であるかもしれない。だが、ぼくの見るところでは、これは必ずしも『ガロ』に特殊な現象ではなかったのではない

かと思う。七〇年代のなかば頃から、それまでの少女まんがのイメージを塗り替える女性まんがたちがあらわれ、八〇年代の始めには少女まんが誌ばかりではなく、男性誌にも女性まんが家の登場が目立つようになった。そういった状況のなかで、『ガロ』がこれまでに持っていた女性まんが家を特殊視しない側面が、花開いていったのだといえる。

『ガロ』はすでに六〇年代においてつりたくにこという、当時としては特異な作風の女性作家を世に出している。六〇年代に『COM』でデビューした**やまだ紫**にしても、『ガロ』への登場は七年と古い。その**やまだ紫**が、結婚、育児による休筆期間をへて、「ときどき陽溜りで」で再登場したのが七八年一二月。七九年の「性悪猫」では猫に託して、母であり女であることの喜びと痛みを巧みに表現し、八一年の「しんきり」では家庭という日常のなかに、人間としての大切なものを日々発見する精神のドラマを編みあげた。この二作品が読者の評価を受けたことによって、一般商業誌とは違った意味での女性作家の登場、活躍の場としての、八〇年代『ガロ』のもうひとつの方向づけもなされたのだといえる。

**やまだ紫**の再登場に続けて、七九年五月「もの



ろおぐ」でデビューした近藤ようこは、はじめ女性心理の情念的な部分を観念的に扱う作品が多かったが、次第にドラマ的な広がりや深みを獲得していった。民話、民俗学にも精通し、日本中世を舞台とした作品も多い。八〇年十一月「通言室乃梅」でデビューの杉浦日向子は、遊女や青年武士たちを主人公に、江戸末期を生活感ゆたかに描いて注目を集めた。考証家・稲垣史生氏に師事したというその描写は本格的だ。同時に、やわらかな絵柄とゆったりとした時間感覚が読むものをほっとさせた。八〇年代なかばには、折からの江戸ブームで一躍時の人となり、エッセイ、イラスト、さまざまなインタビューや取材にと、八面六臂の活躍ぶりとなった。

この三人に続いて『ガロ』では、八〇年代を通じて森下裕美、松本充代、芳賀由香、内田春菊、津野裕子、桜沢エリカ、鳩山郁子、大黄菜春子、ヤマダリツコといった女性作家たちが、続々とデビュー、ないしは登場している。作風も作家も違う彼女たちを「女性」というだけでひとまとめに論ずることはもちろん出来ないが、その存在が八〇年代『ガロ』を特徴づけるものとして、常に印象的であったことは否定できない。

八〇年代の『ガロ』を語るとき、もうひとつ忘

れてならないのが、みうらじゅんと泉昌之の存在だろう。彼らは、七〇年代『ガロ』の後期、白土三平「カムイ伝」終了後の南伸坊編集時代に花開いた「面白主義」のエッセンスを、純粋な形で受け継いだ作家たちといえる。

みうらじゅんは八〇年一〇月号「ウシの日」でデビュー。彼はまた、渡辺和博の直接の影響下にあると思われるヘタウマ風の絵と、極私的「ナサケナイ話」の描き手として登場した。みうらじゅんを特徴づけるのは、関西風の笑いのセンスとサービス精神である。「ウシ」「はにわ」「なんぎ」などのキーワードで、たちまち些末な身近の話や、幼時から現在までにいたるメディアの中の流行にまつわる話題を、流行の装いを持って気のきいた笑い話にまで仕立てあげてしまった。多種多様なジャンルにわたるマニアックな収集癖が、みうらじゅん自身をもメディアの向こう側に送り込んだ。八三年五月号「夜行」でデビューした泉昌之は、知られるとおり泉晴紀、久住昌之の合作ペンネームである。美学校赤瀬川原平教場の同期生だった二人は、赤瀬川、南伸坊とつながる『ガロ』面白主義の、直系の後継者であるといっている。泉晴紀の絵には赤瀬川原平の細密画の影響が顕著だし、久住昌之の原作のアイディアの源は、後に「路上



観察学」と呼ばれた日常見過ごしがちな街の変なものに注目する視線と共通だ。デビュー作「夜行」は、夜行列車に乗り込んだ一人の男が、駅弁を食べ終えるまでの心理的葛藤を、劇画的リアリズムで描いたものだが、「弁当のおかずをどのような順序で食べ終えるか」という、どうでもいいようなテーマを、あくまでリアリティをもって描き終えたことで不思議な共感呼び、いまにいたるまで名作として語り継がれている。

この二人など、『ガロ』だけにとどまらない活躍をしただけにかえて、『ガロ』の作家というイメージが希薄になってしまっているときえいえる。むしろ『ガロ』との強いつながりを感じさせるのは、みうらじゅんなら「恥づかしい話してみよう」、あるいは久住昌之が単独で担当した「クスマのお楽しみ箱」などの連載コラムにおいてであったかもしれない。この、まんが以外の連載記事の充実こそは、実は八〇年代の『ガロ』を特徴づける、最も八〇年代『ガロ』らしい部分だったかもしれない。そのような特色を『ガロ』に与えたのは、もちろん渡辺和博の退社後『ガロ』の編集長格だった手塚能理子の功績である。以前より荒木経惟「浪漫写真」の担当者だった手塚は、みうら、久住の前記コラムに加えて、八五年までに

上杉清文・手塚能理子コンビの「ラッキー・カムカム」をスタートさせ、以後も八六年にみうらじゅん「こいつってキテるよね」、八七年四方田犬彦「犬も歩けば」、八八年久住昌之「絵にも描けない泉」など、今日まで続くコラム路線を作り上げた。

それらは、嵐山光三郎、糸井重里、上杉清文など、面白主義の時代の『ガロ』読物の系譜を引き継ぐものというよりむしろ、『ガロ』の伝統としての読物ページの復権だったのではないか。佐々木守の小説「日本忍法伝」の昔から、鈴木清順のエッセイ、そしてもちろん上野昂志の「目安箱」と、『ガロ』の読物はまんがとはまたひと味違った、『ガロ』という雑誌の特色を象徴的に表すページだったのである。だとすれば、それが雑誌全体のイメージをも決定づけた「面白主義の時代」が特殊だったのであり、八〇年代の『ガロ』のコラムのありようは、内容がいかに八〇年代的に変化していることを除けば、ある種の伝統回帰であったのだともいえる。

八〇年代の『ガロ』が生み出した作品で、これまであげたもの以外の主なものを、新人の作品を中心に追ってみよう。

花輪和一、谷弘児、吉田光彦らにみられた懐古



趣味やマニエリスムへの傾きの強い作品傾向は、丸尾末広、東元、高山和雅、大越孝太郎らに受け継がれている。なかでも高山和雅は『ガロ』には珍しく物語性の強いSFを描く作家である。長編『ノアの末裔』は未完成ながら本格SFとして読みごたえも充分だ。

ひさうちみちおの影響を受けたと思われるみうらじゅん、森下裕美、森元暢之は、それぞれ扱うテーマも作風も目指す方向も全く異なっているのが面白いが、なかでも「反省しない犬」などの森元暢之は、内向的性格のもたらす精神的悲劇を描いて読者の心をゆさぶるものを持っている。

内田春菊、桜沢エリカ、マディ上原、杉作獣太郎、とり・みき、唐沢俊一&なをきといった作家たちは『ガロ』出身ではないが『ガロ』で重要な仕事をした。なかでも内田春菊は「南くんの恋人」「波のまにまに」など彼女自身の代表作ともいえる作品を残しているし、とり・みき、唐沢俊一&なをきも、他誌でも活躍しながら『ガロ』により純化した実験的ともいえる作品を発表し続けた。

久住昌之が泉春紀ではなく実弟・久住卓也と組んだQBB名義の作品も、泉昌之のときとはまた違った久住昌之の個性が表れて面白い。QBBで

は主に幼時体験が作品化されているのだが、それが幻想的な観念のリアリティとして再現されているため、児童文学にも似た一種のファンタジーとして読めるのが特徴だ。

新人以外では、ひさうちみちおが八八年から九〇年にかけて連載した長編「托卵」が印象に残る。ヨーロッパの偽史に托して差別の本質を語る。その手つきは手慣れており破綻がない。近藤ようこ「HORIZONE BLUE」（八八・九〇）も力作だった。わが子に手をかけてしまった女性が、カウンセリングを受けながら自らの心の奥底にある母親との確執を覗いてゆく過程の緊張感と、それを受け容れたときの開放感が印象だった。

以上が、八〇年代の『ガロ』を概観したときに特徴として抽出できるものである。七〇年代後半から見えていた、多様化・拡散化の傾向がいつそう強まり、他方では一般商業誌やテレビ、マスコミ、音楽など他メディアへの越境、相互交流が盛んになって、逆説的に『ガロ』の独自性が薄まったような印象を与えている。しかし相対的にはともかく、広がりとして考えた場合、八〇年代に『ガロ』が広い意味でのまんがとその周辺文化に与えた影響は、七〇年代までと比べてもむしろ大きくなっているといっているのではないだろうか。



# ぼく 『ガロ』のこと



ANZAI, Mizumaru

## 安西水丸

『ガロ』に漫画を描くことを勧めてくれたのは嵐山光三郎だった。当時ぼくは彼といっしょに『ガロ』誌内で「真実の友」というペーシを持っていた。ぼくの受持ちは主にカットで、「真実の友」の隅っこに「しんじつ大王」という奇妙な四コマ漫画を描いたりもしていた。

た。

はじめてストーリー漫画を描いたのは、やはり嵐山光三郎の原作で、「怪人二十面相の墓」というタイトルで前後二回に分けて連載した。多分、『ガロ』誌のなかで、原作者別で漫画を描いたのはぼくがはじめてだと思う。三回目からは自分でストーリーも書いた。約三年間、休みなく毎月一六ページのストーリー漫画を描いた。担当者は、今をときめく南伸坊、渡辺和博だった。編集者にはめぐまれたとおもっている。漫画を描くに当ってはいつも丸ペンを使用した。おかげで丸ペンをマスターできた。ストーリー漫画を描くことは映画を作っているような気分があって楽しかった。漫画を描くことで学んだことは多い。『ガロ』に描いて思ったことは、根強い『ガロ』ファンのいることだった。『ガロ』のなかには、一般の漫画誌にない胸に刺し込んできた情感があることだとおもふ。これはとても重要なことだ。時代はどう変わっても、人々は『ガロ』、あるいは『ガロ』的なものを求めている。

【プロフィール】 1942年7月、東京生まれ。AB型。日大芸術学部美術科卒。電通、ADAC(N.Y.のデザインスタジオ)、平凡社でA.D.を勤めたのち、フリーとなる。著書に、「青インクの東京地図」「POST CARD」「朱色の島バリ」「手のひらのトークン」「冬の電車」などがある。



# インパクト の勝利



OKUDAIRA, Ira

## 奥平イラ

【プロフィール】 1956年、姫路生まれ。79年にマンガ家としてデビュー。「80年代は、アート・ディレクションや、ビデオやパフォーマンスやらと、いわゆるビジュアル関係全般で活動してきました私ですが、90年代に入ってから再び本腰を入れて、マンガを描き始めました。特に最近では、コンピューター・グラフィクスによるデジタル・コミックスをあちらこちらに発表しておりますので、よろしくね。「ガロ」にもまた描きたいなあーと、思う今日この頃。」

私が初めてちゃんと描きあげた「モダンヴァーズ」というマンガを抱えて、『ガロ』編集部に至る暗い階段をドキドキしながら登

っていったのは、たしか二二才の春であった。今から一二年前のことだ。その日の私が、どんな格好をしていたのか、よくは憶えていないのだけれど、その時私の作品に目を通してくださった渡辺和博氏に言わせると、相当ハデな格好だったようだ。なにしろその当時の私は、たんなるパンクなお兄ちゃんだった訳で、髪はツンツン、蛍光ミドリのパンツに、ピンクモヘアの穴あきセーター、勿論胸には数個のバッヂ付き、てな感じではなかったかと思う。渡辺氏は、メタリックムラサキのパンツであったと記憶されているようだが、あいにく私はそれを所持していた記憶がないので、これは氏の記憶違いだと思われる。ま、なんにしても、その作品よりもその時の格好の方が、氏にはインパクトをもって映ったらしく、おかげで私の作品はなんとか無事掲載される事となった。思えばそれが私にとって、マンガ家並びに、いわゆるギョーカイデビューとあいなった訳だからして、ハデな格好はしてみるものだ、という教訓を改めて心の中で噛みしめてみる今日この頃である。



一九七九年の『ガロ』二月号に、はじめて描いたコミックス「こくはくのワルツ」が入選した。二〇歳だった。自分の描いたものが印刷されて本屋に並ぶというのが、なんとも嬉しかった。

それから五つのコミックスが『ガロ』に載り、自費出版のコミックス集『BLUES』を創ったのが八一年、ちょうど一〇年前になる。

何かをしたくて、それが何なのかわからなけれど、一番身近にあった『ガロ』への投稿をきっかけに、コミックスを描くようになった。

コミックスは描いていたけれど、マンガ家になろうとは思っていなかった。だんだん一つのコマに色をつけたりシルクスクリーンでプリントしたりしているうちに、コミックスから絵に、自分のやりたい事が変わっていった。これからどんな風に変わっていくのかは、いつもわからないのだけれど、はじまりは、ガロだったわけです。

SAWADA, Toshiki

## 沢田としき

【プロフィール】イラストレーター。1959年青森県生まれ。81年、「BLUES」を自費出版。阿佐ヶ谷美術専門学校を卒業し、デザイン事務所K2に所属するが、84年に独立。著書に「Weekend」（プレイガイドジャーナル社）、「街角パラダイス」（CBS ソニー出版）、「PINK & BLUE」（ビクターブックス）がある。また、86年「CARNAVAL」（原宿 At.Gallery）87年「HEART 1987」（神戸 TAO と大阪 SPONGCLUB）「緑の家から」（ギャラリーいわき）、89年「TOSHIKI SAWADA 1989」（八戸 ONOGallery）、90年「PINK & BLUE」（青森スペース21、弘前デネガギャラリー）などの個展を開く。「A\*ha」の表紙を担当。



『ガロ』  
あつた  
一番身近に





# イラストレーターの挑戦

一九八〇年の事だ。当時の『ガロ』編集長渡辺和博さんの勧めで、ぼくは『ガロ』に漫画を描く事になった。青天の霹靂だった。

イラストレーターとしては既でに十余年やっけてきてはいたが、こっちの方はまったくの門外漢。しかし、『ガロ』には畏敬の念を持つ愛読者であったし、漠然とだがガロ風な漫画が描けたらいいな、なんて事も思っていた。で、楽しさ苦しさを交錯させながら「夏の放課後」という自分の少年時代をモチーフにした一六頁の漫画を何とか仕上げた。ストーリー漫画のノウハウなどまったくわからなかった。ので、好きな安西水丸さんや渡辺和博さんの作品を横に置き、ストーリーの展開の仕方やコマ割の仕方など色々と参考にさせてもらった。制作には二週間ほどかかった。今見ると難点は多々有るが、ぼくにしてみずみずの出来だった。処女作で尚且つ初登

場という分際で、巻頭二色の頁に載せていただいた。一九八〇年の一月号である。面映い気分だった。いいのかな、という不安感もあったが、やはり嬉しかった。

その頃、本業のイラストの方がやっと低迷期から脱出しかかっていた時期だったので、『ガロ』に自分の漫画が載った事は、大変励みになった。可能性の幅が広がっていく気がした。

その後、二年の間に「一中ファイト」というのと「扁桃腺の夏」というのを二本描いた。やはりどちらも少年時代の話である。「扁桃腺の夏」は、あの『木造モルタルの王国』にも転載された。有難い事だ。

本当はもっと続けて描かせてもらうつもりでいたのだが、本業が忙しくなり目先の小金にいつい動かせられ、そのうち描こう、そのうち描こうと思っっている間に、時はどんどん過ぎていってしまった……。

たった三回ではあるが、ガロに漫画を描いたという事を、ぼくは今でも誇りに思っている。

〔プロフィール〕イラストレーター。1944年、群馬県生まれ。青山学院大学中退。セツ・モード・セミナー卒。『ガロ』には、90年11月号に初めて漫画を執筆。



# 私と『ガロ』の

いわゆる愛読者として、白土三平先生や水木しげる先生のでている『ガロ』を買っていたのは、高校生のころだったと思います。

そのあたりの時代の私は、マンガ家になりたいものだと考えておりましたので、いずれいつかは『ガロ』に作品を持ちこむのだと心に決めておりました。

大学に入学してすぐに、ケント紙やら墨汁やらを買って、持ちこみ用の原稿を描きはじめました。ひとつは、キチンと墨入れまでしました。タイトルは、笑われると思いますが、「風流狐風呂」といいます。それが仕上がってすぐに、もうひとつSFもどきのものを描きましたが、タイトルは「さだめ」だったか、「つとめ」だったか忘れしました。こっちのやつは、鉛筆で線を描いて、あとはペンだけというところで挫折しました。はじめて行った砂川という所でのデモで、めっちゃめっちゃにぶ

つは  
ガロ  
など。



ITOI, Shigesato

## 糸井重里

〔プロフィール〕1948年11月10日生まれ。群馬県前橋市出身。67年3月、群馬県立前橋高等学校卒業。同年4月、法政大学文学部入学、翌年中退。75年、TCC(東京コピーライターズ)新人賞受賞、広告プロダクション勤務からフリーになる。79年、東京糸井重里事務所設立、現在に至る。



たれて、それ以来私は学校に寝泊りするようになった人になってしまったからです。

どちらのマンガも、もう失くしてしまいました。未練はありません。つまらんものだったということだけが確かです。

あとは、同じように『ガロ』読者だった湯村輝彦さんとタッグを組んで「ペンギンごはん」のシリーズをやらしてもらいました。あのシリーズは、もっとずっと若いマンガ家の人たちが「子供のころ読んでましたよオ」とか言ってくれるので、とてもうれしいです。

湯村さんと知りあって、つくづく「オレは絵を描く商売にならなくてよかった」と思いました。早い話が、向いてなかったのです。

ほんとうは、もっとたくさんの『ガロ』関係の人たちのことも書きたかったのですが、やめます。長くなるから。

ともかく、『ガロ』じゃなきゃできなかったことや、『ガロ』だからできたことの数々に、あらためて驚き、長井さんはじめ関係者の皆さまにお礼をもうしあげてごあいさつにかえさせていただきます。ホントに。



## ぼくの弟 糸井重里





# NGになった表紙案

「何をやってもいいですよ」という編集長のあまりに無防備な、私にとっては渡りに船の言葉を耳にして、思わず私の内部で全血液が逆流するような興奮を覚えたね。

嬉しくて楽しくて、踊りだしたいくらい感動をもって、私は好き勝手のやりたい放題に、毎号毎号『ガロ』表紙の製作に挑んだよ。

ある時、調子に乗った私は「次号はウンコ」と提案したが、これはさすがにダメが出たね。ホントのところ、私は『ガロ』表紙を、谷内六郎の『週刊新潮』表紙みたいに、生涯の仕事として、死ぬまでやり遂げたかったんだけどさ。ま、世の中、そうは甘くないってことだね。

いずれにしても、『ガロ』表紙は、ホント、自分で言うのもおかしんだけど、私がこれまでやってきた、多くの仕事の中でも、ズバリ!! 大好きな仕事の三本指に入るよね。

YUMURA, Teruhiko

## 湯村輝彦

【プロフィール】1942年11月1日、東京生まれ。多摩美術大学グラフィックデザイン科卒。(株)フラミンゴスタジオを主宰。アートディレクター、イラストレーター。68年に東京イラストレータークラブ新人賞、76年と81年に東京アートディレクターズクラブADC賞受賞。主著に糸井重里氏と共著の絵本「さよならペンギン」と漫画「情熱のペンギンごはん」、作品集「ムーンライト カクテル」「湯村輝彦ヒットパレード」「TERRY 100%」「にっぽんのえ 湯村輝彦作品集」「へたうま略画・図案辞典」「モンスターリミックス」などがあり、ビデオ作品「TERRY 100% CHANNELS」も手掛ける。





3

4

1



めず、自分の世界を確立した表現者たちの貴重な証言を集めてみた。意外にあっ



けなく、すれちがってしまった例もある。この「すれちがい」方も、『ガロ』的なのかもしれない。

## 第6章 憧れの『ガロ』

『ガロ』の放つ魔力は、純真なマンガ青年には、かなりの毒かも知れない。『ガロ』に憧れ、その門戸を叩いた

2



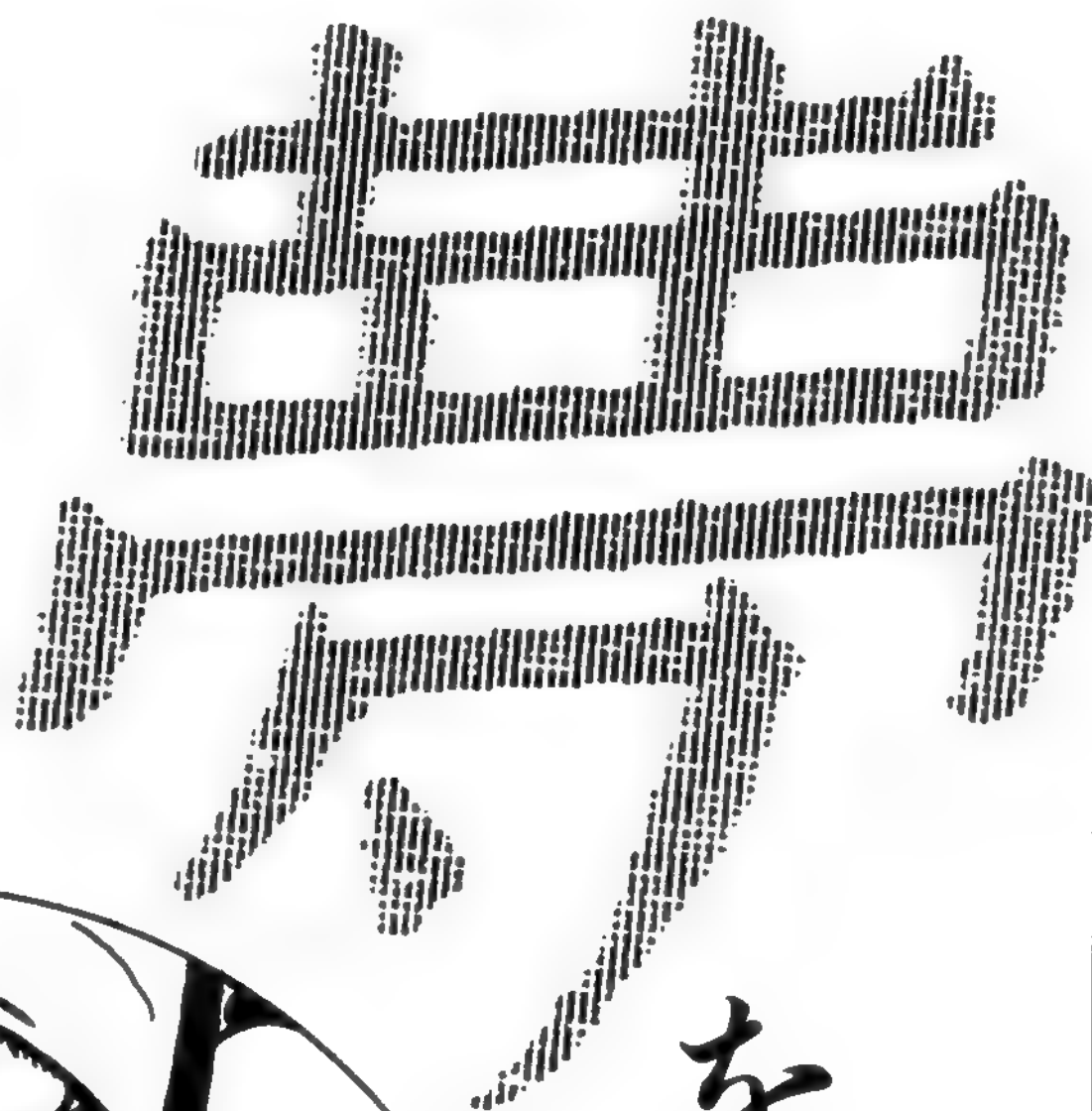
にもかかわらず、すれちがいに終わった人々も少なくない。それでもマンガの道を諦



NAGIRA, Ken-ichi

# なぎら健壱

〔プロフィール〕 1952年4月16日、東京都銀座に生まれる。72年、ファーストアルバム『万年床』を発表。73年に発表したセカンドアルバム『葛飾にバッタを見た』に収録された「悲惨な戦い」が大ヒットし、シングルカットされるが放送禁止になる。77年の大ヒット曲「およげたいやきくん」のB面「いっぽんでもにんじん」の他、子供向けの歌も何曲か歌っている。同年の映画『嗚呼、花の応援団・役者やのう』に薬痴寺先輩役で出演し、日本映画大賞助演男優賞を受賞。映画、TV、ラジオで活躍中。「下町小僧」などの著書がある。



をありがとう

健壱



僕の部屋の押入には、開けられることのないダンボール箱が何箱もあり、その中には六〇年代から七〇年代にかけてのガロが何十冊も入っている。いつかじっくり目を通そう、スペースが許せばそれを本棚に並べようと思うのだが、それも叶わず引越しの度、それらはダンボールに梱包されたまま、ただ移動を繰り返している。

あの頃僕は漫画家になりたかった。

一時期白土三平に感化されて、考えてみればその模写ばかりをしていた。その教科書の一つに『ガロ』があり、それを読む内に僕は知らず知らず、『ガロ』派の人間になっていた。毎日のように古本屋を巡り、奇癖のようにバック・ナンバーを集めた。

そして僕の漫画は白土三平から、『ガロ』の中のいろいろな漫画家の作風に移行して行った。

しかし結局はその情熱に追いつけないまま、漫画家の夢は、夢で終わってしまい、僕はフオーク・シンガーの道を選んだ。

そういえば今はなくなってしまうたが、吉

祥寺に「へぐわらん堂」という、夜な夜なフオーク・シンガー連が集まる、飲み屋があった。そこでよくのぼる話題の一つに、必ず『ガロ』のことがあった。誰とはなしにその話を持ち出すと、決って議論の場となった。ただその場所に、希に長井（勝一）さんや、永島（慎二）さんが表れると、みんな突然押し黙ってしまったのが、懐かしく思い出される。

そうだ、林静一、シバ（三橋乙郷）、コーシン（高信太郎）、翁二（鈴木翁二）、やまだ紫、杉浦日向子の姿も見かけたっけ。その人たちと席を側にしていると、なんだか歌を、イヤ、漫画を忘れた自分がやけにうとましく思えた。

白土三平、滝田ゆう、つげ義春、永島慎二、佐々木マキ、林静一、等々のみなさん、夢をありがとう。

押入のダンボールから『ガロ』が出るとき、僕はあの頃の感動のままにそれらを見ることが出来るのであろうか、あの頃よりだいぶん俺も汚れちゃったからなあ。



# ちがひが！



HATANAKA, Jun

純中畑

“マンガを勉強しているんですけど、要らなくなった『ガロ』を売ってもらえませんか”と、近所の貸本屋に申し出て、引き取り先は決まっているから、と冷たく断わられたのは、忘れもしない一七歳の冬だった。女性に交際を断わられるほどではなかったけど、若い青春の一コマだ。一九六七年、北九州の小倉のことだ。当時のボクは、一枚マンガを第一

とするマンガ家志望者だったが、貸本劇画の臭いの強い『ガロ』と、創刊されてほどない手塚系の『COM』を、やや距離を置きながらも新人の舞台としての有り様に注目していた。それと、マンガは物語りにあらず（青さがいわせていた）、の観点から、白土三平「カムイ伝」の圧倒的な物語りに瞠目した。

翌六八年、ボクは上京してマンガ学校に通い始めている。その年のマンガ界最大の事件は『ガロ増刊、つげ義春特集号』だった。色んな場所でさまざまな人達が、つげ義春の名を囁き合っていたのを鮮やかに記憶している。ボクはといえば、小学生の頃につげさんを好まなかった延長で、相変らず泥臭い貧乏話を描いてるなあ、といった程度にしか受け止めていなかった。おおっ、師匠になんと失礼なことを。

現在の膨大なマンガ出版の基礎は、六〇年代の末に作られたといっていると思う。『なにかコミック』と付けられた大手の青年誌が出揃い、ボクが目差していた『漫画讀本』は風前の燈で『漫画サンデー』は歴史を抱え



ただ分だけ色褪せ『アサヒグラフ』は有力な登竜門でなくなりつつあった。つまり一枚マンガは市場が成立しなくなっていた。ボク自身も一枚モノ絶対の気持ちが薄れ、徐々にストーリーマンガの試作に比重を移していつていく。暗中模索に灯を燈してくれたのは「旅立てひらりん」「喜劇新思想大系」の山上たつひこと、改めて開いた『つげ義春作品集』だった。ボロクズのように疲れ果てた身に「紅い花」が染み込んだ。

『ガロ』は七一年に「カムイ伝」が終了し、つげさんも描かなくなり、ボクと同世代の人達が中心の脆弱な芸術至上主義的誌面に移行していき、数年後には美学校系の面白主義が柱になった印象がある。その頃の『ガロ』には、友人の平口広美が関係している。

ボクは、一枚マンガの自費出版後に描き溜めた作品群の持ち込み先に『ビックコミック』と共に『ガロ』も選んだ。そして南伸坊にアッサリ断わられている。不安を裏返したような自信しかなかったボクは強いショックを受け少々腹も立てた。が、商業誌に行きな

さい、といった南さんの判断は正しかったと思う。

八一年にあるパーティで長井さんに話しかけられたことがある。青林堂のソファアーにステテコ姿で座っておられた長井さんを思い出しながら、実は初めてじゃないんですよ、と持ち込みのことを話し始めたら、プイツと横を向いてスタスタと行ってしまわれた。長井さんに対しては懐かしさと尊敬以外のものは無かったのだけど、ボクの対応下手のせいかな、話をうかがうチャンスを逃してしまった。

七七年頃から『ガロ』は遠くなっていたが、その後のわずかな関わりでいうと、八二年にユズキ・カズの第二作目を友人の編集者に切り抜きで見せられ感心したこと、八四年にスタートした日本文芸社の夜久弘編集による、かつての『ガロ』色の強い『COMICばく』に参加し、成績が悪くてクビになったことがある、くらいのものだろうか。

思えば貸本屋に売ってもらえなかった時から『ガロ』とは、すれちがいのコースが引かれていたのかも知れない。

【プロフィール】 1950年3月20日、福岡県小倉生まれ。74年『それでも僕らは走っている』を自費出版。77年、『月夜』(話の特集)でデビュー。主著に『まんだら屋の良太』(実業之日本社、ふゅーじょん・ぶろだくと)、『百八の恋』(講談社)、『私の村』(話の特集)などがある。



# 和良彦安 『ガロ』 持ち込みの こと

「持ち込み」の経験は後にも先にも一度きりしかない。その相手が『ガロ』だった。今から一六、七年も前のことで、その頃僕は動畫家をしながら原稿仕事に熱く<sup>あつ</sup>飢えていた。「作家」になりたかったのだ。それで憧れの青林堂に向かった。モノは、当時入れ込んでいた秩父事件にネタをとった四〇枚ばかりの一作で、恥に目をつむってそれを応対してくれた初老の編集者に見せた。その方が今にして思うと長井先生であった。先生は「わかり易くて良い。どうもこの頃のカロのモノはムズかしいのばかりでねエ」なぞとソフトに仰<sup>おつしや</sup>った。そして、次号に載せてやるが当社は原稿料が払えない、代わりに本で払うからそこ

いらから好きなのを持っていけと、これまた仰った。意外な幸運に僕は天にも昇る心地だった。そして「次号」を待った。当の次号に僕のは載っていなかったので次の次号も待った。そうして二、三号待ったが結局僕のは誌面に載らなかった。怒りはしなかった。さすがに巧い断り方があるのだだけ思った。原稿の出来もどうもひどいものだったと気づき、その方で納得もいった。で、それからしばし、「作家」への夢はさっぱりと断ってひたすら本業に励んだ。

後年、この件をふと口にした相手は青林堂でアルバイトをしたことがあるという若い同業者だった。彼は言った。

「それ、長井さん忘れちゃったんですよ。そういうヒトなんだから！」

僕はたまげた。

本来ならあるまじき事だ。だが長井先生という方に関しては、それは「また……」というふうなことであるらしい。つまりそれ程の方であるということだ。スゴイのである。やはり全然腹などたたなかつた。よかつたとき



え思った。おかげでどうにか半端な作家にも半端な動画家にもならないで済んだ。不味い「処女作」も人目にふれなかったし、何もかも今となっては深謝の材料である。

因みに、この時いただいた二冊の本は一件の物証として今も書架に在る。虫プロの大先輩村野守美さんの『媚薬行』と亡くなられた滝田ゆうさんの『ぬけられます』である。



【プロフィール】1947年、北海道生まれ。弘前大学中退。虫プロを経てフリー・アニメ作家に。「機動戦士ガンダム」などを手掛ける。現在漫画家に専念し、「ナムジ」「虹色のトロッキー」を執筆中。そのかわり、小説も書く。



# 的 確 な ア ー ト バ イ ー ス を い た だ き



【プロフィール】1955年3月20日生まれ。多摩美術大学グラフィックデザイン専攻卒業。明るくてかわいらしい画風の裏にするどい毒を持つ作品で「宝島」等に登場し若者の支持を得る。84年にスペース唯での「穴展」から「大穴展」「網展」「南極展」、88年H.B.ギャラリーでの「ケダモノ展」まで5回の個展を開く。またグループ展「東京ファンキーデスマッチ」「これがいらすと新世代だまつり」「メディアスクラッチ」「FAKE展」等に参加。著書に「それゆけ小松君」「郵便ポストモダン」「ポッポ・アート(91年夏出版予定)」がある。

Suzy Amakane

スー ジー 甘 金

この度は出版おめでとうございます。

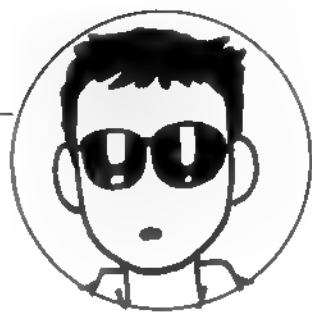
『ガロ』を初めて拝見したのは、確か湯村輝彦さんと糸井重里さんの「安息の夕餉」というマンガが載っていた号だと思います。もう一〇年ぐらい前ででしょうか。その後、蛭子能収さんとか根本敬さんとか出てきて『ガロ』って面白い本だなあと、愛読させていただいております。

そんな私も一回だけ『ガロ』に持ち込みした事があります。今、考えれば、自分の画風もかえりみずによく持っていたなあと、思います。案の定、長井さんにお会いしてお見せしたところ、

「うちは青年マンガ誌だから、『コロコロコミック』にでも持って行けば」

とあけっけなく断られました。その時、私の頭の上の方に、ガーンという石でできた文字が三つほど浮かびましたが、今、思い直せば、的確な判断を下さったんだなあと、有難く思っている次第であります。





TORI, Miki

とり・みき

# 『ガロ』は怖い

『ガロ』は怖かった。

いまでも『ガロ』は怖い。

まず『ガロ』という名前が怖かった。

白土三平さんの「大摩のガロ」シリーズをまとめて読んだのは後年のことだったので、当時の私には、そもいっただい「ガロ」とは何を意味する言葉なのか皆目見当もつかず、それがまず怖かった。そして案の定、ページを開くとそこには怖い漫画が載っていた。

『少年サンデー』と『少年マガジン』にどっぷり浸かっていた私は、だから『ガロ』と『COM』は、特にガロは立ち読みはするけれども決して買って家に持って帰る雑誌ではなかった。小学生の私は「カムイ伝」よりは「カムイ外伝」の方に心をときめかせたし、水木しげるさんは既にメジャー誌の中の大好きな作家の一人となっていた。それでも私の周りには、たとえ立ち読みにせよ『ガロ』を読んでいる小学生は一人もいなかった。

『ガロ』から受けた決定的なショックは、私にとってはやっぱりつげ義春さんの一連の作品だった。『ガロ』に「つげ義春」だった。呆れたことに今でも、『ガロ』と聞いて真っ先に思い浮かべる漫画家はつげさんなのだ。

しかし、それでメジャー誌や少年誌の漫画にあきたらなくなって『ガロ』へ、というようになった。ことには（その後も）ならなかった。メジャー誌の漫画も『ガロ』も同等におもしろがって読む無節操な漫画少年だった。と同時に『ガロ』の漫画はやはり怖く、それらをずっと載せ続けている『ガロ』もあいかわらず怖い雑誌だった。『ガロ』にのめりこむ、なんてことは臆病者の私にはとても出来なかったのだ。結果、私はいわゆるメジャー誌側からデビューすることになる。

何年かたって、その怖い『ガロ』から原稿依頼がきて、だから私は大いにびびった。怖い描き手、怖い読者、怖い編集、そしてなによりも自分に怖い漫画が描けるかどうか……。幸い編集の人はやさしかったが、他の面で私はいまだにびびりつづけている。

【プロフィール】 1958年、熊本県生まれ。79年、「ぼくの宇宙人」(少年チャンピオン)でデビュー。88年2・3月号の「路上観察物件の逆襲」で「ガロ」初登場。主著「とりのいち」(青林堂)、「てりぶる少年団」(小学館)、「愛のさかあがり」(早川書房)など。



KIKUNI, Masahiko

# 喜国雅彦



## 青 の 蹉 跌 の 春

【プロフィール】1958年、香川県高松市生まれ。多摩美術大学卒。漫画家。

著書に、「傷だらけの天使たち」(小学館)、「まんが王」「まんが大王」(竹書房)がある。バンド「大島渚」のベーシスト。現在、2枚目のCDを制作中。

私の「ガロ」BEST3は、以下の通りです。

1. 「マッチ一本の話」(鈴木翁二)
2. 「カムイ伝」(白土三平)
3. 「赤とんぼ」(林静一)

デビュー二二歳、初の連載二八歳(傷だらけの天使たち)その間作品は一年に一作という超スローペース。何故こんなにも遅咲きなのか、マトモな神経を持っているものならば・••とうにマンガに見切りをつけ他の職についているであろう。その原因は『ガロ』にある。『ガロ』さえなければ僕はもっとトントン拍子の人生を歩んでいたはずなのだ。小さい時は漠然とマンガ家になればいいなとは思っていた。アクションマンガ、野球マンガ、SFマンガ、夢は純粹だ。しかし高





校になり、美術大学をめざそうという頃にガロに出会ってしまった。NHKでドラマが放送された「つげ義春」と、寺山修司の単行本の装丁画を描いていた「林静一」の文庫本が小学館から発売されたのだ。

衝撃だった。今まで信用していた物がうすっぺらな物に思え、マス（大衆的）イコール悪、娯楽すなわち低級だと思い、社会に背を向けてしまったのだ。

まずこれがガロの第一の罪であった。

そして大学の時に初めて一本マンガを描く

（当然『ガロ』に持ち込もうと思って描いたものだ）。

『ガロ』を見る。「原稿料は出ません」とはつきり書いてある。

「な、なんだと!? そりゃ俺は大金持ちになんかなろうと思っちゃいない。しかしこっちは就職しないで不安だらけの世界に飛び込むうとしているのだ。少なくとも紙代とインク代ぐらいは手にしないと二作目が描けないじゃないか」

原稿をつかむとすぐさま小学館へ——しかし夜の裏街で娼婦と青年が出会い一夜人生を

語り合う、なんていうマンガが『少年サンデー』に向くはずなどない。

「こんな暗いのダメだよ」

批評はヒトコトで終わった。

そして苦悩の日々が続く。当時『ガロ』以外に『ガロ』無く、『ガロ』では原稿料は出ない。集英社では「君の作品は読者を選んでゐるからダメだ」と言われ、かといって『ガロ』を知った今、脳天気なスポーツマンガなんか描けやしない。鈴木翁二を抱きながら、しりあがり寿とグチをこぼす日々が続く。

すべては『ガロ』の罪である。

人生は不思議なモノである。『ガロ』とは何の関係もない僕がこうやって『ガロ』の本に書かせてもらっている。これでやっと苦しかった日々から解放された気分である。

（追記）

今でもガロでデビューしたというマンガ家に会うとちよっぴり嫉妬してしまう私だが、ただ一つの救いは、てっきり『ガロ』出身だと思っていたみうらじゅんが『ヤングマガジン』デビューだったという事である。

編集部注：みうら氏は喜国氏以外には、正直に「自分は『ガロ』出身だ」と公言している。



# 「ここは まんが道」 の時代か



AIHARA, Kōji

## 相原コージ

【プロフィール】1963年、北海道に生まれる。東京デザイナー学院まんが科を卒業。

「8月の濡れたパンツ」で漫画家デビュー。主著は「ぎゃぐまげどん」「文化人類ぎゃぐ」「かつてにシロクマ」「神の見えざる金玉」（双葉社）、竹熊健太郎と共著の「サルでも描けるまんが教室」や「コージ苑」（小学館）。

一九八二年、まんが家を志す一九歳の私は、とある専門学校の「まんが科」に籍を置いていた。私は自分を、他のクラスメイトとはちがう『ガロ』的な作家だと思っていた。だか

らその夏休みに、一カ月汗だくになって描き上げた『ガロ』的（と自分では思い込んでる）な作品を、青林堂に持ち込みに行った。神保町をさんざん歩き回ったあげく、材木屋の二階にある青林堂を発見した。しかし、いざとなるとおじけづいてしまった私は、路上の自動販売機でビールを一本購入し、それを一気に飲みほしてから、編集部への階段を登っていった。ここは「まんが道」の時代か!?!と見まがう編集部で、編集長の長井さんに原稿を見てもらった。

「もつと読者のことを考えて描かなきゃ」

ガビ~~~~ン!?

まさか『ガロ』に、そんな事を言われるなんて!?

……私は落ち込んだ。自分のあさはかさに涙が出た。真剣にまんが家を諦めようと思った。でも諦めなくてよかった――。

思えば、当時私は少々無理をして『ガロ』を読んでいたのではなからうか? 今は、読んでいない。でも、頭の片隅では、なくなっ

てほしくない、と常に思い続けている。





# 事実上の恩師

高校時代、所属していた美術部の部室の片隅でボロボロになって転がっていた『ガロ』に出会った時、極論すれば私の人生は変わったと言っただけ。そこに載っていた永島慎二氏や増村博氏、菅野修氏等の作品は既にして思春期後期にさしかかっていた私の自意識を粉々に打ち砕いたと言っただけ（逆に余計「青く」なったと言っただけ）。とりわけ鈴木翁二氏の作品——確か「旅の一夜」だったと記憶する——は私のそれまでの漫画観に深刻な反省を迫るものであった。

しかしながら私のその後に決定的な影響を与えた作品となれば、これは一にも二にも嵐山光三郎氏、渦巻龍二郎氏、安西水丸氏その他の共同執筆になる痛快コラム「真実の友」ということになる。

「真実の友」は勿論漫画ではないが、活字もまた漫画以上に漫画たりうるのだということに気付かせてくれた点で、私の事実上の「恩

師」と言っても過言ではない。殊に渦巻氏のカゲキかつインテリジェンスあふるる「エラソー」文体は私の文章に影響を与えることはなはだしく、また嵐山氏の天才的編集センスは私にミニコミを創刊させる決意を促すのに充分であった。その結果高校時代、ミニコミ発刊にうつつを抜かしていた私が大学入試に失敗したことはもとより、ヤクザなフリーエディター稼業に身を持ち崩すキツカケとなった訳であるが、回り回ってそれが現在の「サルまん」へと繋がって行くのであるから、やはり感謝してもしきれぬと言っべきだろう。

漫画のみならず「真実の友」のような常識では判断しきれぬコラムを載せてしまつところ「ガロ」のキャパシティであって、現代のキャバレー・ヴォルテールとも言っべき「ガロ」の「場」としての機能がその後の漫画界（否、出版界）を陰に陽に支えてきたことは改めて私が言うまでもない。「ガロ」を嗤う者は「ガロ」に泣く。百万雑誌の編集者氏よ！ この言葉しかと肝に銘じておかれますことを…。

【プロフィール】1960年、東京生まれ。桑沢デザイン研究所中退。幼少より漫画家を志すも、ある時「結局自分は漫画以上に漫画“雑誌”が好きなのだ」という結論に達し、編集者兼文筆兼漫画周辺業者として今に至る。共著に「色単・現代色単語事典」「サルでも描けるまんが教室」がある。



# 『ガロ』と サツマイモ の由来



AMAKUSA, Masakazu

## 天久聖一

【プロフィール】1968年8月14日生まれ。マンガ家、イラストレーター。現在「ヤングサンデー」「TV Bros」「ポパイ」などにイラストを掲載、連載中。

僕も『ガロ』はときどき読ませていただいております。なぜかというとおもしろいからです。でもお話によりますとあまり売れてないとの御様子。なんとなく分かるような気がします。『なんとなく』といったのは、ほんとに「なんとなく」で、別に「ホントは知ってるケド君を傷つけないから」とか「でもそれをいっちゃうと君の為にならない」みたいな優しい彼氏の思いやりや親切な親心でも全然ないのです。ホントーにただ単に「なん

となく」なのでちゅ。「なのでちゅ」と、少々おどけてみせたのは、なんだか話が深くな方に向かっててちよつとイヤだったからです。

話を続けます。「おもしろいのに売れない『ガロ』」これは僕らヤングに置き換えると、つまり「おもしろいケドもてない彼氏」といえるのではないのでしょうか。このひとこんなおもしろいのに全然もてない。そんな人あなただの周りにもいるんじゃないかしらん。僕の



友達にもいます。田辺公太郎君です。じゃあ田辺くんの様に「おもしろいのにもてないヒト」の理由はどこにあるのでしょうか。ちょっと箇条書きにしてみます。

◇田辺くんのもてない理由

- ・全くつまらない時がある。
- ・ひどく貧乏。なのに無職。
- ・話題が下ネタ（しかも通好み）。
- ・ヤギに似ている。顔が。
- ・カレーの匂いがする。
- ・サイレンの音で泣く。
- ・実は五六歳だった。

うーん。これじゃあもてないのも無理はありませんね。しかしそんな「トンネル内での玉突き衝突」みたいなクライ人生を送る方もいるなか一方ではそれこそ素晴らしいもてモテ人生を歩んでいく好青年もいる訳です。僕です。僕がそうでした。でも田辺くんもそうだけだからと言ってそういうヒト達が僕を見習い僕を目指す、というのは少々のはずれという感がなきにしもあらずではないでしょうか。そこでモテる僕からのワンポイントア

ドバイス。「まず長所を伸ばそう」ということです。それから「短所をあきらめよう」これが大事だと思うのです。自分が短所を気にしていると相手もそこを狙って攻めてきます。プロレスと同じです。相手があきらめるまで知らんぷり。そんなガマン強いけなげな態度がもてないキミ達に必要なだと思っんだな。ボカア。ああ、ハッキリしないな。もういいや。言わせてもらいます。ガロもおんなじ！もてないからって悩んでもいいことはないですよ。もっと前向きに、大きく手を振って歩いていってください。手を大きく振ると歩幅も大きくなっていいですよ。僕は好きな雑誌です。応援してます。

それでは最後にひとつになるお話をしておきます。むかし江戸時代に青木昆陽という学者がいました。このヒトは九州の南の地方（当時のさつま）でつくらせていたイモを江戸にとりよせそこで人々にそのつくり方を教え全国に広めました。つまりさつま地方から来たイモ、ということでサツマイモと呼ばれる様になったんですね。以上。



あ  
り

とても

がたい

い

『ガロ』

高校を卒業して予備校や大学に通っているところに『ガロ』はよく買った。確か湯村輝彦さんが表紙を描いていたあたりの『ガロ』だ。青林堂の単行本もいろいろ買って読んでいた。一般漫画誌には絶対載らないようなさまざまな個性の漫画家がたくさんいるものだなあ、と思っておどろきかつ憧れた。その頃から学生がいやで、でも働くのもいやで漠然と漫画を描いてゴハンを食べていけたらなあ、と思っていたので、「漫画は何描いてもいいんだ。何でもできるのだ」と思わせてくれた『ガロ』の漫画はありがたかった。いろいろな人

YOSHIDA, Sensya

## 吉田戦車

【プロフィール】1963年、岩手県に生まれる。父親は中学校教師。4年前、知り合いのエロ本編集者に頼まれてカットを描いたのがきっかけで、マンガ家になる。「ビッグコミック・スピリッツ」誌に連載中の不条理ギャグ「伝染るんです。」が爆発的な人気を呼び、かわうそ君などのキャラクターもCMなどに登場。91年、文春漫画賞受賞。他の著書に「鋼の人」「くすぐり様」(白泉社)、「戦え! 軍人くん」「いじめてくん」(スコラ)などがある。(左頁カット: ©吉田戦車/小学館「伝染るんです。」より)





が言っていることだが、本当に『ガロ』はえらいと思う。でもそこですなおい『ガロ』に投稿せず、ぼくはお金が欲しくてエロ雑誌でデビューした。ぼくの漫画を使ってくれた高校時代の同級生である編集者も『ガロ』の漫画が好きであり、「ガロっぽい描け、でも少しエッチも入れろ」というふうに、きわめて自由によらせてくれた。エロ本時代に、『ガロ』に憧れたりメジャー誌に憧れたりして描いていた六〜八頁の短編は、なまいきにもコミックス二冊にまとめることができたのだからありがたいやらなんとやらだ。『ビッグコミック・スピリッツ』で描いている四コマも、最初は何をやったらいいのか困ったので、「ええい、『ガロ』のエッセンスに頼れ。一部の人がおもしろがってくればいいのだあ」という気持ちで始めた。いろいろ本当に『ガロ』には恥かしいほど影響を受けている。日本に『ガロ』が無かったら、今の漫画界もなんだか違う形になっていたと思う。ひよつとするとぼくは漫画家になっていなかったかもしれないと思うと、あらためてありがたい。





# もし『ガロ』が なかったら

TSURUMI, Syunsuke

## 鶴見俊輔

【プロフィール】1922年6月25日、東京に生まれる。42年ハーバード大学哲学科卒。哲学者、思想家。49年京大助教授となり、54～60年東京工大助教授、61～70年同志社大教授。雑誌「思想の科学」の創刊（46年～）メンバーの一人。主著に「日常的思想の可能性」「不定形思想」「限界芸術論」「鶴見俊輔著作集」5巻などがある。

もし『ガロ』がなかったら、もし『ガロ』に私が出会うことがなかったとしたら、私は今とかなりちがっていただろう。それほどに影響を受けたと言える。

はじめの頃、驚くほどおもしろかった。白土三平と水木しげる、つげ義春にはじめて出会った。それからしばらくして、ひねりすぎのマンネリづくの時代があった。これで失速するのかな、と思っていたと、盛りかえした。一度衰えてまた盛りかえすというのは、日本では、この一〇〇年になかないことだ。

ことに高度成長、好景気の時代では、一度衰えてくると、気前よく手ばなしてしまっただが、『ガロ』はまさにこの好景気の時代の裏側で奮闘した。

糸井重里&湯村輝彦「ヘンタイよいこ対恥ずかしい根っ子の会」（八二年五月号）のアイデンティティをめぐる戦いなんて、私の知らないこの時代の暗流を思わせて、啓発されました。



1



3

は執筆者に対して原稿料を支払っていないので、『ガロ』にだけ作品を描いていた



4

新人作家にとっては登竜門である「ガロ」は、マスコミ業界人にとっては密かな「愛読書」であり、異色新人

## 第7章 『ガロ』という名の登竜門

のでは生活出来ない。登竜門としての「ガロ」を語るべき、これも重要な要素なのである。

2



作家にツバをつけるカタログとしても機能している、と聞く。現実として、ここ約20年間





# わが批評の 出発点

最初に『ガロ』を手にしたのは、いつであつたろう。創刊のときではないことはたしかで、三、四カ月たったころ、あの白土三平の作品が載っていると耳にして、急いで創刊号から集めたのを覚えていいる。その前年であろうか、私は貸本屋で白土三平の大作『忍者武芸帳』をむさぼり読んでいたから、これを見逃してはなるまいと思ったのである。そして、やはり貸本屋でファンになった水木しげるの作品も掲載されていることに躍り上がって、毎月『ガロ』を読みはじめた。

『ガロ』との出会いから数カ月後、私は大阪から東京へ出てきて、ある書評新聞の編集者になった。その新聞はいまはもう姿を消したけれど、そこでさまざまな体験が、現在に至るわたしのすべてを決定することになったといつてよい。そのなかの大きな一要素として『ガロ』がある。

その書評新聞の編集部には、感性和思想において異彩ならぬ異才を発揮する人物ばかりが集まっ

ていたが、そのうちの一人と私はとりわけ親しくなった。のちに『ガロ』編集部へ移り、いまは北冬書房の主となっている高野慎三である。私は彼と諸事百般について語り合い、じつに多くのことを教わったが、なかでも夢中で話し込んだのはマンガと映画のことであつた。当然ながら毎月の『ガロ』は注目の的で、白土三平と水木しげるに関して、これほど偉大な表現者はほかの分野でもそうはいないという点で意見が一致した。彼が白土三平を日本思想史の文脈のなかに明快に位置づけ、私は私で、日本のシュールレアリスムという観点から長大な水木しげる論を書くぞ、と宣言したことをよく覚えていいる。

そうこうするうちに、つげ義春の「沼」が出現した。忘れもしない、『ガロ』一九六六年二月号である。

衝撃を喰らった。私は高野慎三とこの作品について来る日も来る日も論じ合つて飽きなかった。短篇のマンガ一本をネタに、あれほど熱中してしゃべることができるとは、いま思えば嘘みたいな話である。つげ義春の作品はひきつづき毎月の『ガロ』に登場したから、衝撃の爆弾は何か月も連続して投下され、私たちの談論もどんどん過熱されていった。



ここで、もう一つのことにも言及しておかねばならない。それは映画のことで、一九六五年の秋、加藤泰の『明治俠客伝・三代目襲名』を見たあと、高野慎三と私はやはり来る日も来る日もこの映画の魅力について語り合った。そして、つげ義春の連続爆弾を喰らったのとちょうど同じころ、加藤泰の『沓掛時次郎・遊俠一匹』に接して一段と興奮を高めていた。これら加藤泰作品はともに東映やくざ映画であり、私たち二人はそのころ最盛期にはいる東映やくざ映画の熱狂的なファンであったが、そうした範疇を突き抜けたところで加藤泰の映画にしばれ、熱に浮かされたように論じ合った。より正確にいうなら、やくざ映画であることにおいてやくざ映画たる域をはるかに越え出た表現の素晴らしさを、加藤泰の映画にまざまざと見た、ということになるうか。

つげ義春の作品についても、まったく同じことがあてはまる。マンガ史における位置づけがどうのこうのとか、マンガが劇画かといった区分などにまったく関係なく、ただ一個の表現としての深さと高さと美しさに衝撃を喰らったのである。

約半年後の一九六七年のはじめ、私たちと石子順造と梶井純の四人が同人となって批評誌『漫画主義』を創刊した。第一号はつげ義春特集で、む

ろん私もつげ義春論を書いた。その経緯を私自身なりにいえば、つげ義春ショックが過熱の頂点に達して、なにか行動を起こさずにはいられなくなったのであり、つげ義春の表現の圧倒的な迫力に拮抗するには、こちらも表現行為に乗り出すしかなかったのである。

私はそれまでも文章を書いたことはあるが、そのつげ義春論がちゃんとした形で印刷された最初のものとなった。まだ書評新聞に在籍していたので、編集者としての活動に支障があつてはと思ひ、『菊池浅次郎』なる筆名を用いた。知る人ぞ知る、『明治俠客伝・三代目襲名』の主人公の名である。

こうして私は押しやられるように批評を手がけるようになった。

べつに批評家になろうなどとは思わなかったが、毎号『漫画主義』に書きつづけることで、批評へ深入りしていった。やがて高野慎三と組んで加藤泰の本を出すことになり、長い加藤泰論も書いた。それが私の映画批評のはじまりとなった。

あの「沼」のラストは青年が沼の向こうを獵銃で撃つ後姿で、「ズドーン」と銃声が描かれているが、それはそのまま私の批評活動が火ぶたを切る音であつたということができる。

【プロフィール】1939年、大阪生まれ。大阪外国語大学フランス語学科卒。新聞・雑誌・書籍の編集者を経て批評家活動をはじめ、現在は映画批評専門。主著に『手塚治虫とつげ義春』『映画狩り』『映画が裸になるとき』『日本映画時評』など。





かつて心理学者の波多野完治先生が、自分はひとつの文化が芸術に育ってゆく過程を同時代で見つづけることができて幸福だった、とおっしゃったことがあった。一九二〇年代から熱心なファンとして接してきた映画のことを言っておられたのである。おなじことがほぼ一九六〇年代頃からマンガを熱心に読んできた人々に言えるだろう。じっさい、一九六〇年代のマンガ界にわき起った百花斉放ぶりは目ざましいものがあり、それまで単純に子ども文化だったストーリー・マンガを、一気に、じつに多様で多彩で深味のあるものにしたのだった。その大きな動きの最前衛にあったのが月刊誌『ガロ』で、おおいに愛読したものである。とくに白土三平の「カムイ伝」や、つげ義春の「ねじ式」その他一連の作品が素晴らしく、まさにいま、ひとつの通俗的な大衆文化が芸術の域に高まりつつある

という感動を受けた。まあ、マンガはマンガとしてすぐれていればそれでよく、芸術であろうとあるまいと知ったことではないという立場もあり得るが、あるひとつの分野が、芸術と呼ばれることがためられる状態から、これこそ現代の最もいいしく活力ある表現であり芸術であると言える状態へと、あたかも突然変異のように——実際には満を持しつつあふれ出るように大きく開花してゆくところに立ち合うというのはなかなか感動的な経験だったものである。たぶん波多野完治先生がチャップリンやグリフィスやアベル・ガンスの傑作に接したときがやはりそうだったのであろう。

それにしてもあの、つげ義春のリアリズムと幻覚との絶妙に混交した世界の不思議さはどうだろう。あんなに心の奥深くに何かがあるといたという経験は、文学でも映画でも、そう滅多に味わえるものではない。彼こそ、たんにマンガ界にとどまらず、一九六〇年代、七〇年代の日本を代表するに足る最大の芸術家のひとりだったと思う。

【プロフィール】 1930年10月6日、新潟市生まれ。映画評論家。57年に上京、「映画評論」「思想の科学」の編集長を務め、62年にフリーとなる。映画以外にも芸能、演劇、教育など幅広い評論活動を展開。「映画で世界を愛せるか」など著書多数。



# あの頃の『ガロ』と私

当時、貸本マンガに夢中であった私は、書店で目にとめた『ガロ』にいち早くそのおいをかぎつけたものです。版元の「青林堂」というのも、白土三平の『サスケ』の単行本を出していたし《それが又ふつうの書店で売られているにかかわらず何か貸本ぽかった。》もちろん、あの『忍者武芸帳』を出版していた「三洋社」の後進である事もすぐにピンときました。「月刊漫画」とあるのが中学三年生の私にとっては当時、大人向け雑誌の「週刊漫画」を連想させて、ちよつといけないものという何か秘密めいた感じの雑誌なのでした。

貸本マンガを描くという事が高校に進む頃の私の漠然としたユメで、又そんな気になったのも貸本マンガの中に何か自由で新しいモノを感じたからにほかなりません。ちよつどその頃、秋本昇児という男から「我々はこれ

MITSUHASHI, Otoya

## 三橋乙擲

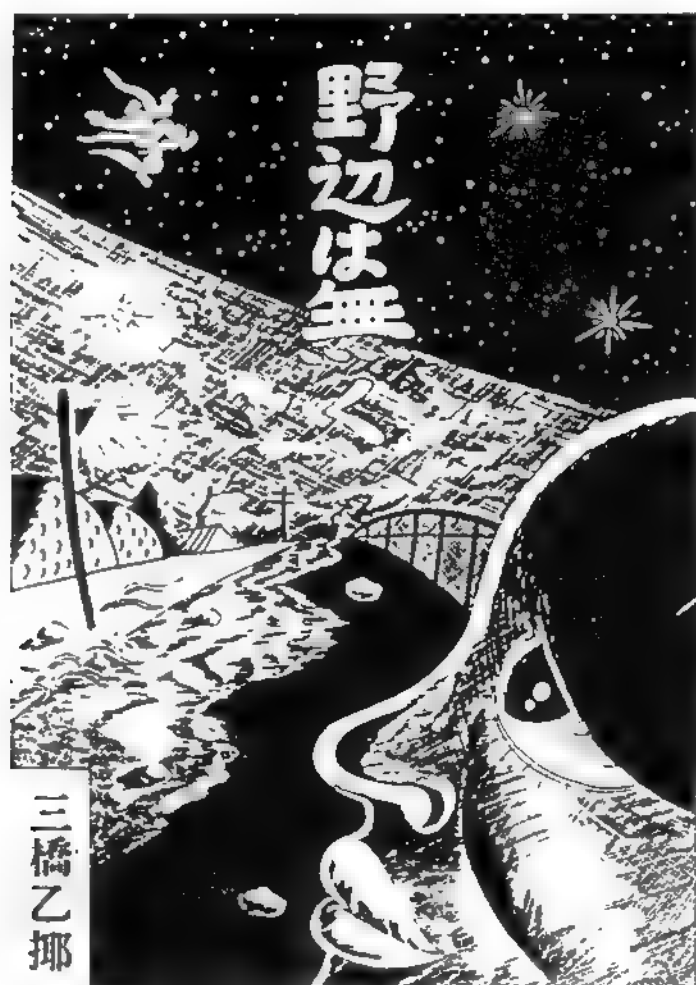
【プロフィール】永島慎二・地獄プロをへて独立、翌々年、「漫画アクション」でデビュー。後、70年中津川フォークジャンボリーにはミュージシャンとして参加。71年のジャンボリーには「武蔵野タンポポ団」としてデビュー。アルバム二枚発表。〈現在CDで復刻〉解散後ソロシンガー「シバ」としてアルバムを三枚発表、そのうち青い空の日（URC）と夜のこちら（キングベウウッド）がCD復刻。その後科学勉強マンガを三冊描きおろす。オリジナル作品集として青林堂より「野辺は無く」北冬書房より「三橋乙擲読本」私家版イラスト集「誰かが何かを待っている」等。



978



から新しいマンガを描いていくのだ。アソビでないグループをつくろうではないか！」という内容の、やけに鼻息のあらいハガキがまゐこんだのです。吉祥寺でバーテンをしている畠大輔という大変絵のうまい男がいる、ぜひ会おう、会わなければはじまらない!!という事で日曜日ごとに、ちよくちよく会ってはマンガを見せあったり熱心なマンガ論を戦わせたりして、いい気になっていたものでした。途中から向後つぐおという背の高いアロハに雪駄ばきの色男も加わりました。その風体



からか、こいつはきつと不良にちがいないと私は思っていました。ところが後になって分かった事ですが、多摩出身の私の言葉づかいがきたないので実は私の事を「やくざの子供」だとばかり思っていて大変こわかったのだと向後から聞かされ、大笑いしたものです。『ガロ』には新人募集の入選作が発表されはじめ、「ふん! このていどなら俺だって」と内心ドキドキしながら投稿のための作品を描きはじめてのは高校一年生の夏頃だったでしょう。

例の四人とは、又ちよくちよく吉祥寺でおち合いました。井の頭公園の池のまわりをぐるぐる回りながら将来のマンガについて果てしない議論に顔を紅潮させ、帰りの電車の中で高鳴る熱いものがこみあげて来るのをおさえながら、落ちてゆく真赤な夕日を見ていたあの日々はいったい何だったのでしょうか。

そして夏も暮れ、又はじまった退屈な高校生活の毎日にうんざりしていたある日、玄関にはさまっていた一枚のハガキが私のそんな気持ちをいっきに吹き飛ばしてしまったのです。



「選考のすえ、あなたの作品が入選と決定いたしました」

青インクのこまかい字で、そんな内容の事が書かれてありました。頭の中がカーツと熱くなり、髪をなびかせたカムイの絵ハガキのやけにペラペラな事や、絵の中の赤い印刷インクの事ばかり気になっていたのを今でもよく覚えています。

「ある日若者は旅立った」というタイトルの三〇枚ほどの作品がその年の一九六五年一二月号に掲載され、一万円という大金が私のはじめての原稿料なのでした。

ところが、畠にはその作品は不評で「あれは俺達の描きたいものではないナ」というのが畠のおおかたの意見だったと思います。しかし後年、長井さんにうかがった話によれば、白土三平氏が強く推したので入選決定となつたとの事でした。さらに私も当時、あれはあれで良いと思っていたのでした。

その後も例の四人で、傾倒していた永島慎二先生宅にお伺いして、たびたび作品を見ていただいたりしました。そのつど、じっくり

とていねいに作品を見ていただいたのが深く印象に残っています。

そうこうするうち、私も高校三年生となり、永島先生は虫プロをやめ、又本格的にマンガの道に入るとの事で、その頃ひんばんに文通していた向後つぐおが、印刷会社をやめて永島先生のアシスタントになりました。そんなわけで私も真剣に、行く末の事を考える様になったのでした。

けっきょく高校を三年で中退して、私も永島先生の内弟子という事でその世界に入っていきました。そして先生の作品をてつだう事で又、『ガロ』に深くかわる事になったのです。

当時、若い私達のマンガ修行のテキストは『ガロ』の楠作品や、つげ作品で、しかも永島先生の一コマ一コマの解説付きという大変ぜいたくなものでした。そして今でも、阿佐ヶ谷にある永島先生のあの六畳間に私達、村岡、向後、三橋のきちつと正座して先生の解説を聞いているうしろ姿が、きつと染みついているのだと思います……。



時代の中……、精神の地下水脈を求めて列車は走る。精神の地下水脈だから何が出てくるかわからない。この列車は地底を走り銀河を駆ける創造の帯だ。都会の谷間を駆け抜ける時、人間疎外と言ふ名の吐息を乗せて来る事もあるのだ。乗客はやたら若い。才能の原質は早熟だ。魂の探究者達は大切そうに袋から鉱石を取り出す。未来と言ふ確かな方向性を孕みつつ、この列車には終着点は無。終着点の無い列車が一本ぐらい走っていてもいいではないか。今日も紫色した眩い鉱石が機関部にくべられる。

「何かいいものが見つかりましたかね」

少年の心を持った鳥取りが尋ねる。

「情熱のあるうちに、思う存分掘らねばなりません」

機関長はやたらに元気だ。ずいぶん時代を駆け上がって来ただろうに、その眼はキラキラと輝いている。

「走れる処まで走ってみよう！」

列車は紫色の燐光をたなびかせながらひたすら走る。この列車もずいぶん走り込んだの

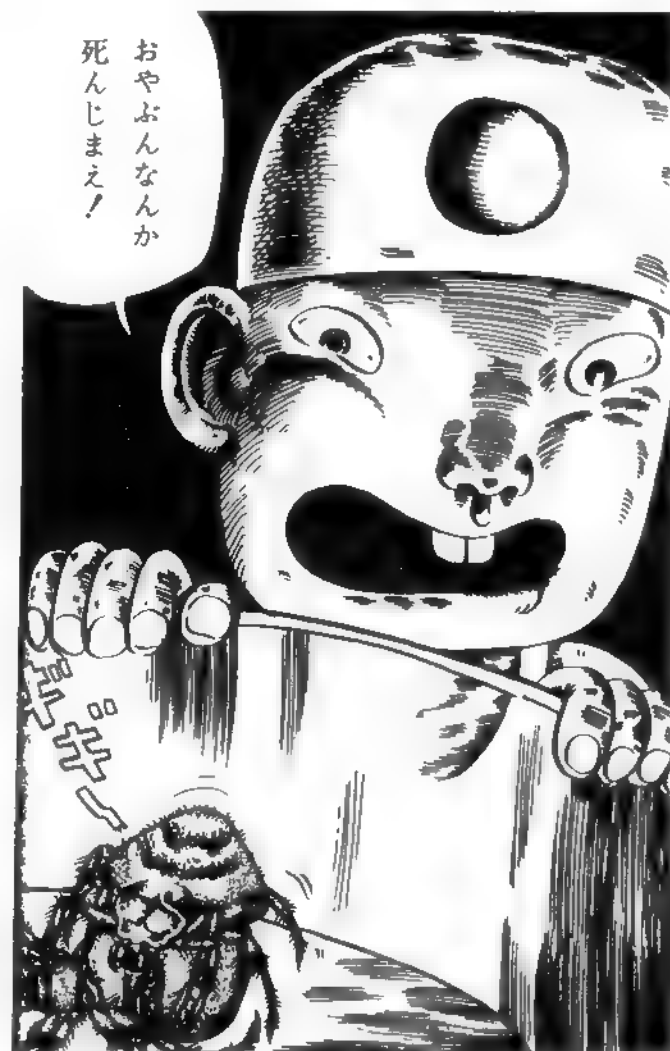
# 『ガロ』 列車 は走る



YODOGAWA, sanpo

淀川さんぽ





だから、少しぐらいガタがきてもよさそうなものなのだが、なんとまあ丈夫なものかびくともしない。

「ほら見てごらんよ。あの時はずいぶんひどい鉱石だと思っていたが、あの峠の辺りが今では一番美しく輝いているじゃないか！」

まるで石英に懷かれた金や銀の混合物。辰砂、メノウに孔雀石。未知のものほど面白い。彼らは成り立ての鉱山技師だ。心を誑かす錬金術師だ！ 彼らが持ち込んだ鉱石は海のものやら山の物やらで分らない。今日も機関長は、映画『白鯨』の中のエイハブ船長のようになぎましく咆哮する。

「運命よ！ 来るなら来て見よ！ 俺は一步も退かないぞ！」

機関助手達はその声に奮い立ち、力の限りシャベルを運ぶ！ 鉱石から立ち登ったさまざまな燐光は、たなびきながら遠くまで、やがて黄金色の真っ直ぐな軌跡を残す。カンパネルやジョバンニ達の夢を乗せた列車は今日も逞しく走り続けるのである！

「ドコマデモ……、ドコマデモ！」

〔近況〕 十数年ぶりに芸事の世界に戻る。神原くみ子が浮浪者集めて芝居をやると聞き、旗揚げに参加。浮かれ狼集団「浮狼舎」の役者連中にそそのかされ、37歳にして初舞台。肋骨を折る。2年前、「60億万世紀の瞑想」を執筆し好評を博す。



# 仏様のようにありがたい『ガロ』

花輪和一

HANA WA, Kazuichi

今、昔を思うと、  
『ガロ』という大変ユニークな  
マンガ誌があつて本当に  
よかったと思う。

当時はまったく気がついて  
いなかったが、そうとう重い  
神経症だった私に、  
『ガロ』以外のマンガ誌に

私の描く  
マンガが採用されたか  
どうかかわからない。





怨念と憎しみに  
とらわれていた、  
クライイ青春  
時代の私のマンガを  
採用してくれた『ガロ』は  
仏様のようにありがたい。

グフグフツツ  
おまえは  
ウシ虫だ！

青春の  
海は  
なかったけど  
『ガロ』が  
あった。

夏

【プロフィール】一九四七年四月一七日、埼玉に生まれる。「ガロ」七一年七月号に「かんのむし」入選でマンガ家デビュー。主著に「月ノ光」「赤ヒ夜」「猫谷」（青林堂）、「コロボツクル」（講談社）、「御伽草子」（双葉社）、画集「無惨絵」（丸尾末広と共著／リプロポート）などがある。現在、札幌在住。





# 魔 神 ガロ

『ガロ』と自分のかわりについて書こうと思ってもさっぱりネタがない。人に聞かせる程の想い出話や裏話があるわけでもない。そもそも自分はガロの作家ではないのだ。『木造モルタルの王国』に自分の作品が収録されていないのも当然である。

自分は『ガロ』に対しては冷たい態度をとってきた。『ガロ』万才!』という気にならない。『ガロ』の独創性至上主義がそもそも俺の気に入らなかった。リングはあくまで赤く丸くあるべし。個性を出す為に白いリングやブヨブヨのリングを描いてどうするのか。問題はリングの個性であって作家の個性ではない。独創性とは呪われた者の課題だ。世の

MARUO, Suehiro

## 丸尾末広



〔プロフィール〕本名同じ。1956年1月28日生まれ。1980年にマンガ家デビュー。「ガロ」には、82年8月号に初登場。主著に「夢のQ-SAKU」「薔薇色ノ怪物」「キンランドンス」「少女椿」「ナショナルキッド」（青林堂）、「パラノイア・スター」（河出書房新社）、画集「無惨絵」（花輪和一と共著／リブポート）などがある。





中には独創性の強制をつける者とうけない者がいる。『ガロ』にかかわりあつた多くの人達は、独創性の呪われた強制をつけたのだ。

最初に青林堂から単行本を出した時から俺の方針は決まっていた。

「ハデにやれ」

といってもこれはせいぜいカバーデザインぐらいの事、中の作品のほとんどはポルノ雑誌に描いたもの。ハデな方が目立つという打算もあるが、何より芸術漫画というありがた迷惑なレッテルをはられたくない為だった。

だから安っぽくなるのを覚悟の上で見世物的なデザインをした。間違つてもモダンアートのマネはしたくなかった。ただでさえガロにモダンアートのしらけた影が忍びよっているのだから。

モダンアートなんて大嫌いだ。

ところで「芸術漫画家」として取材を受ける時、ハンで押したように聞かれる質問。

「この作品を通して何がしたいのですか？」  
笑わしちゃいけねえよ。





# 闇鍋とロールシャツハ・テスト



ITAGAKI, Nobuo

## イタガキノブオ

〔プロフィール〕 漫画家と製版オペレーターを兼業。現在、月刊MOEに「ネコムシ・ストーリーズ」を連載中。「ガロ」には86～88年頃に作品を発表。著書に「ペーパーシアター」「ネガティヴ」(青林堂)がある。初登場。

『ガロ』は闇鍋<sup>やみなべ</sup>です。『ガロ』の読者は闇鍋の愛好家——なんだかわからないものを取りあえず口に放っては、はて、これは滋養になるのかしらん、と無邪気に考える風変わりな人たちです。

実をいうと、ぼくは鍋そのものに愛着を感じてゐるわけではありません。「闇鍋<sup>ガロ</sup>的」というコトバにも「闇鍋<sup>ガロ</sup>の時代」というそれにもさっぱり興味がわかないのです。けれど、ときおり——グラグラの煮汁に泳ぎまわる怪魚を見つけてはニヤニヤし、人恋<sup>ひとこい</sup>しく光る真珠の小粒を見つけてはソワソワし、——そんな人たちに混じっていっしょに唄を唄いたい気持ちになることは、ときおり——どころか、しょっちゅうなのです。なぜでしょうね。

『ガロ』はロールシャツハ・テストです。「これ何に見える？」とばかりに変てこな形をつきつけては、ぼくたちのコンプレックスをあらわにする、ちよつと怖いメートル原器です。実をいうと、ぼくは未だにこのテストを目の前に出されると、不安で落ちつかなくて、ぷるぷるふるえてしまいます。なぜでしょうね。



【プロフィール】本名同じ。1967年4月24日、横浜市生まれ。「ガロ」1986年12月号に入選。現在漫画家としては失業状態で、「ガロ」以外にはどこにも描いていません。

私は漫画家を切望した訳ではないが、とりあえずどこかの雑誌に自分の漫画を送ろうとしていた。

「なら、あそこにだしてみたらどうですか」と、マンガ好きの美術科の先生。半年後大船の本屋で初めてその雑誌をみた。一九を過ぎるまで存在すら知らなかったその月刊誌の存在は圧倒的だった。すごすぎる。

この本には下心がない。全ページに漂う攻撃的な空気が他誌にない密度で圧縮されているのだ。異端を掲げた意識的なマイナー誌が百戦錬摩の読者によってたちどころに抹殺されていく中、この本だけは脈々と躍動していくにちがいない。夥しい才能をドンドン呑み込んでしまう無限の容量と強靱で柔軟な編集の体質をかえない限り、この本に限界はなく、これからも型破りな異端児をボロボロ産み落とすしながら日本漫画業界の中核に君臨するはずだ。メジャー化とかカルト志向なんていうのは、読み手の脳ミソが勝手に決めることだからそれを意識したときは、『ガロ』も死ぬ破目になるだろう。

OHGOSHI, Kotaro

## 大越孝太郎



# 『ガロ』と、私の漫画制作法

『ガロに於ける大越孝太郎の漫画制作法』

地蟲渦蟲ノタクネ廻ル、葛草絡ンダ隠レ沼ノ、底抜ケ底無シヘドロノ中デ、惰眠貪ル脳髓ニ、激ム煩悩血膿ニナツテ、溢レ洩垂レ耳漏レ涎、滴ル毒汁棗ニ溜メテ、混合セ煮詰メタオドロロインク、物ノ怪馮キノ丸ペン浸シ、知ラヌ云ワヌガ仏ニ花ヨト、綴ル阿呆陀羅曼陀羅絵巻。

平成三年度版





# 『ガロ』編集部

初めて編集部を訪れたのは、昭和五八年の夏であった。水道橋で降り、見知らぬ裏通りを行つた。手には投稿原稿、もらったフトンと盗んだ机以外何もない四畳半で描きためた漫画だ。当然一般の鑑賞に耐えうるような代物ではない。カーッと晴れた日で、光と影の部分が妙にくつきりと別れていた。アスファルトはギリギリ照り返していて、まともに目を開けていられない程だが、道ぞいにある町工場の中は真っ暗で、真っ黒い印刷機がガシャコンガシャコンと音をたてていた。ルーテル教会の庭では、油ゼミがやかましく鳴いていた。

左斜め上方に貧相なブリキの看板が見えて来た。「青林堂」……それは廃屋同然の材木屋の二階にあった。日に焼けたブラインドはところどころ縊れて、マバラになっていた。

「出版社」という名前からはおよそかけ離れた雰囲気だ。せまくて急な階段には、置き場に困った出版物が積み上げてあった。流しの三角コーナーには茶ガラがてんこ盛りで、古い木造家屋の日向臭い匂いが漂っていた。「ガロ」の匂いだ。

「ノック無用」と書かれたドアをたたいた。「あのう、電話した山野という者ですが……」化粧合板の壁をブチぬいて、旧型のやたらデカイクーラーが取りつけられていたが、音がうるさいだけで、室温は外とさして変わらなかった。雑然とした空間に六つのスチール机がころうじて納まっていた。そしてその一番奥に温厚な面持ちの長井社長が……。

あれから八年、ガロも発行部数五〇〇万部を越え、二〇階建てのハイテクな自社ビルを持つに至った……というような話は全然聞かない。先日何年かぶりに行ってみたが、激しい地上げの嵐にもめげず、材木屋は残っていた。マバラなブラインドも、効かないクーラーもそのままだ。多分百年後も「健在」であろう、というような気もした。

【プロフィール】 1961年、福岡県生まれ。立教大学文学部卒。著書「夢の島で逢いましょう」「四丁目の夕日」「貧困魔境伝ヒヤバカ」（青林堂）。現在、山野夫人（ねこじる）が絵を担当した「ねこじるうどん」（原作担当）を連載中。



KOTARO

## 許太郎



# 『ガロ』 の 手のひら

『ガロ』にはほんとうに感謝しています。

一〇年程前に作品が入選して以来、振り返ってみれば、よくもまああんな愚作、駄作、拙作群を辛棒強く載せ続けてもらえたものと

思っています。さらに困ったことに、それは今でも続いているのです。おしゃか様の手のひらにラクガキした慢心孫悟空が、その手のひらをいつまでたっても飛び越えられないよなものです。いつになったら人様の目に触れても恥かしくないものが描けるのでしょうか。まさに「石の地藏さん腐るまで」的時間の経過を必要とするのでしょうか。

『ガロ』は面白いし、新しい人の作品には興奮もするし発奮もします。泣きたいときには、志ん生の大津絵だけど、元気をつけたいときはやっぱり『ガロ』です。

そんな訳で『ガロ』にはいつまでも、ゆったり若々しく続いて欲しいのです。少なくともあと半世紀は続いて欲しい。そしたら私も作品のムダを省きに省き、また省き、さらに省いて、ついにはなんのことさらの味もなく、もつれもなく、まるで水か空気のような心安らかな作品ができるでしょうから（そうなるともう在っても無くてもいいようなものでしょうが）。

それまでこの許太郎めを『ガロ』の手のひらにのせて遊ばせておいてください。

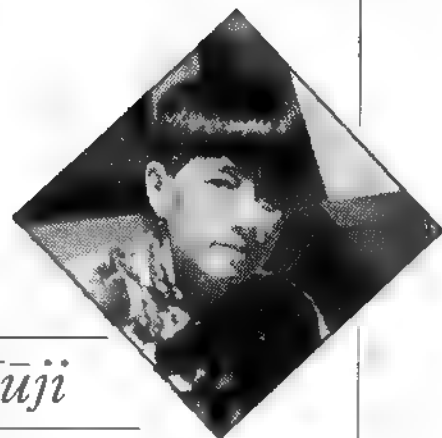
【プロフィール】 1955年3月25日、埼玉生まれ。大学時代に湯村作品と桂文案と古今亭志ん生きるに触発されて漫画を描き出す。  
『ガロ』に投稿し、2〜3度目に入選。本業の傍ら、マイペースに作品を発表。



# 人知れず 『ガロ』 は続く

この本の話を読み、ついこないだ二〇年史が出たばかりなのに、今更ながら時の立つのは早いと思う。数あるマンガ誌の中、『ガロ』は今や最も老舗の部類に入っているのではないか。『ガロ』と聞くとぼくはどうしても、七〇年代の「中央線気分」というか、高円寺、阿佐ヶ谷吉祥寺を結んだあたりのあの頃をイメージしてしまう。あの界限、『ガロ』関係の多くのマンガ家、編集者、ミュージシャン、更には直接関係無くとも『ガロ』っぽい人々がいた。ぼくも高円寺でそれらの人々と直接交

流は無いものの、なんとなく『ガロ』的な空気を吸い、『ガロ』的な物件で暮らしてた。初めてマンガを描き、『ガロ』に持ち込んだ日は雨。長井さんが直に読んでくれて、その場で採用の返事をいただく。「やったぜ！」帰りの中央線の電車、こすった窓から雨の街を眺めながら、当時初めて出来た「恋人と呼べる人」への報告を考えると、ぼくもフットクイ。でもその時ぼくは「これでもうプロになったんだ」となぜか勘違いしてた。それ以来、青林堂さんにはあまえっぱなし、未だに御迷惑ばかり掛けている。



KAMOZAWA, Yūji

## 鴨沢祐仁

[プロフィール] 1952年、岩手県に生まれる。75年、「クシー君の発明」で『ガロ』入選。以来、今日まで散発的に作品を発表。好きなマンガ家は、水木しげるとつげ義春。趣味は、探石、登山、犬。

作品集に、「クシー君の発明」（青林堂）、「クシー君の夜の散歩」（河出書房新社）がある。

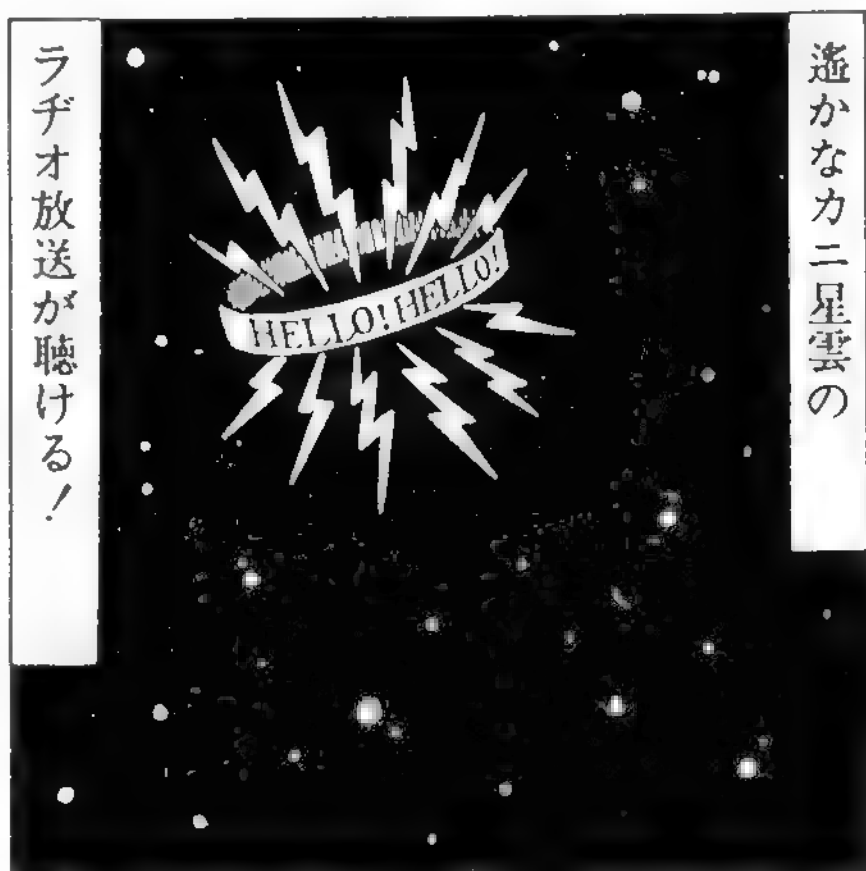


望遠鏡を覗けば



遙かなカニ星雲の

ラヂオ放送が聴ける!



一六年住み慣れた高円寺を離れた今も月に何度か通うあの頃からの店で、先日この本の話をした。若い客はそもそも『ガロ』を知らない。あの頃を知る中年客は皆一様に「えっ、『ガロ』ってまだあるの?」

それから一時『ガロ』談義に沸く。多くのマンガ誌が賞を設け広く門戸を開き、どんな実験的作品も、アバンギャルドなギャグも受け入れられる昨今。やれ『ガロ』の存在意義がどうのと喧しい。そこで『ガロ』がいかに多くの人物を輩出してゐるか、今更説明するのも空しい。いいんだ誰も知らなくても、いや人知れずこそ『ガロ』は続く。そもそも『ガロ』はそんなところを目指してない。とぼく勝手に自分で納得。だって『ガロ』はそれ自体がすでにして「芸術」。定期刊行物という形をとった立派な「トマソン物件」ではないか。二一世紀になっても、全国の書店で夥しい量の図書の中に毎月必ず新しい『ガロ』が一冊二冊潜んでいるだろう。運良くそれを発見した者はこう言うだろう。「何なんだこの本は!」それでいい。それでこそ『ガロ』だ。



# きれない関係

中学生の頃だったか、それまで、夢中で没頭していた少年漫画を卒業し、漫画から遠ざかった時期がしばらくあった。——けれど、ある日、流行のアメリカンポップスを口ずさみながら、気まぐれに、ちよいと銭湯帰りに立ち寄った貸本屋の書棚で、私はまたマンガとバツタリと再会をしてしまったのだ。

棚から何気なく取り出しパラパラめくっているうちどんどんその世界にひきこまれていく自分に驚いてしまった。それまでみたこともないリアルな描写——。首や腕を斬り落とされた体からは血が吹き出し、忍者は体力の限界を競い合い非情な戦いの末、死んでいく、また銃から薬<sup>やつきょう</sup>筈が飛び出し、弾がなくなれば弾倉をこめ殺し屋相手に撃ち合う——。劇画という、その迫力ある描写は、私をその場に釘づけするに十分なパワーをもっていた。

白土三平氏の『忍者武芸帳』との出会いである。これを読み終えた時の充実感と興奮は大きなもので、昨日のことのように憶えている。さいとう・



YOSHIDA, Mitsuhiro

## 吉田光彦

【プロフィール】1946年12月5日、盛岡生まれ。多摩美術大学絵画科卒。69年、日本版画協会奨励賞受賞。72年、スラストとマンガの仕事を始め、75年5月号「殴者・ボクサー」で「ガロ」デビュー。83年より小劇場の舞台美術も手掛ける。主著に「夢化色」（青林堂）、「エンドレスパズル」（河出書房新社）などがある。

たかを氏のハードボイルド「台風五郎」シリーズのスマートなキャラクターは、授業中、私のノートの端の落書きの常連となった。それからというもの、貸本屋通いは再開され、ますます劇画に夢中になっていった。しかし、それからまもなく時代の波におされてか、その貸本屋が店じまいをしてしまい私の第二期マンガ時代も終わりをとげ



てしまふのだ。

ところが、しつこくマンガは、すり寄ってきた。高校二年の時、通学途中にあった小さな書店に何故か『ガロ』の創刊二号がおかれてあった。マンガ雑誌にしては洒落たデザインなのでふと手にとると、表紙には貸本で馴みだった憧れの作家の名前が連なっていた。それはもう大狂喜し買って帰宅した。そして仲間うちで『ガロ』を知っているのが自分のみということにも、ちょっとした気分よさがあつた。発売日になると『ガロ』は、その店に三冊積んであり、必ず完売した。一冊は私あとの二冊はどんな人が買っていくのか興味があつたが結局、わからずじまいだ。

きっと私と同じように、色々な知識や感性、又、表現媒体としてのマンガの素晴らしきを得られたとは思つが……。

その後、私は上京、美大の油絵科に籍をおくことになるが、その間も『ガロ』は、いつも私の横にあつた。卒業後、イラストレーションをまがりなりにも生業なりわいにすることになった頃、とんでもないことに今度は『ガロ』の方が、私に会いに来てくれた。

天象儀館という劇団の打ち上げの席で知りあつた南伸坊氏は、読むことは好きでも描くことがな

かつた私のマンガ第一作目を無謀にも『ガロ』に掲載してくれた。

一足とびに読者側からいよいよ執筆陣になってしまった。私にとって、マンガを考える時に商標のように浮んでくる『ガロ』というキーワード。それは、私にとって、とても大切であり、色々な意味でのステータスでもある。いつでも仕事をおろそかにすることはないつもりだが『ガロ』の二文字は、ことさら、その時、プレッシャーで私を金縛りにした。

それを境に、数も少なく、遅筆ではあるが、マンガを描き続けるようになった。

結局、私にとってマンガは、運命的にどうもお近づきの関係のようだ。つらつら考えても油絵の具を捨て、紙の上に筆やペンを走らせる仕事についたのも、マンガを媒介で知った雑誌などの印刷メディアに興味をもったことが、きっかけのような気がする。

単純な話、自分の想っていることを絵に描いて沢山印刷してくれて稿料もいただける、こんないいことないと思つてしまったのだ。

一枚のイラストから、はみだしたり、拡がっていく想いや物語を当分マンガという手法をかりて描いていきたいと思つている。





# GARO

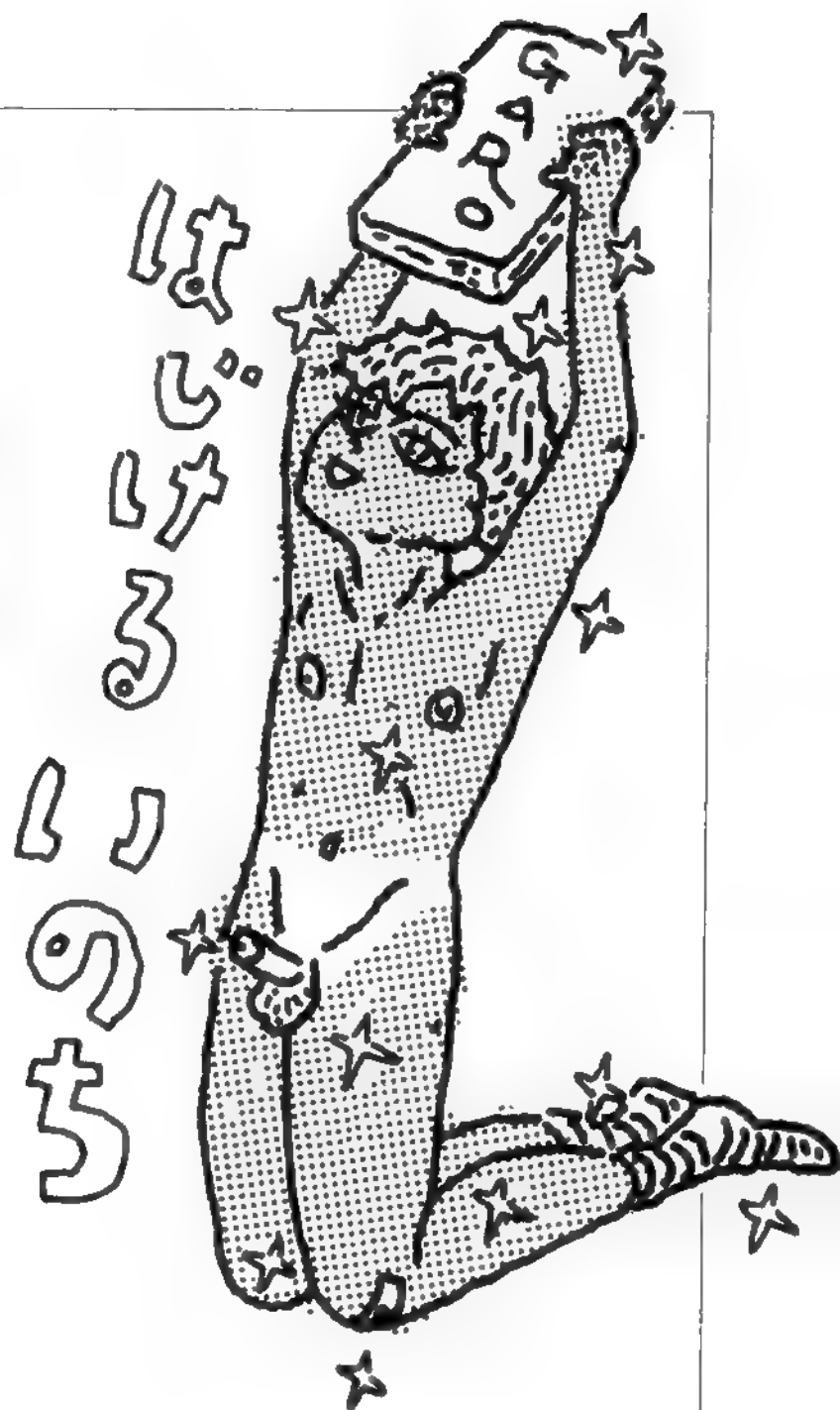
## と僕と

MORIMOTO, Nobuyuki

## 森元暢之

【プロフィール】本名です。1961年2月20日に大阪で生まれました。血液型はAで、魚座です。身長177センチで体重は65キロの右投げ右打ちです。背番号は9です。漫画以外の趣味は考え事、お菓子などの景品の応募です。将来の夢は、まだ考えていません。

(「ガロ」82年11月号で入選)



「あなたのはまだ八割方自分のことだけどせて半分は読む人のことを考えて描かないと駄目です」——僕が初めて青林堂を訪ねたときにいただいた長井さんのアドバイスです。それからずっと青林堂でお世話になります。描くものはあんなですが、載せていただきます。制約も作為もなく、未熟な部分も敢えて作品として扱っていただいています。ありがたく嬉しいのですが、僕はそこが少し怖い気もするのです。

描かせていただいているうちに、自分でちゃんと制約し、充分に作為し、未熟な部分をなくしていつているようです。良し悪しではありません。それは個性や作風とはまた異なるものですが、自分の中の流動的だったものが固定されていく焦りを感じます。

『ガロ』はいつも不安定で、先行き不明の魅力を秘めています。できれば僕もそう在りたいと思います。そうして、潔い漫画を描けて、おまけに生活できれば一等です。



# 決定的瞬間



AZUMA, Gen

東元

一九八五年三月四日、午後。僕はひとつの建物を仰いでいた。僕の不必要なまでに大きな鞆の中には、約二カ月近くかけて描き上げた漫画三二枚が恥ずかし気に、そのくせ早く紹介してくれよとばかりにじっと待機している。「ついに来たで。」アポイントメントはすでに神保町駅の公衆電話から取っておいた。その建物の二階の窓の下には横書きで『青林堂』と標示されている。

いよいよ編集部へ入った。奥から二番目のイスに図々しくも腰かけた。一番奥のイスにはもちろん、長井さんが座っておられる。僕はすかさず三二枚の漫画を差し出した。

決定的瞬間だ。大袈裟ではなく、この数分後には僕の将来が決定されるような、そんな気がしていた。にもかかわらず、僕は意外と冷静で、ぼんやりと編集部を眺め回しながら、読み進んでは規則的にめくられてゆく原稿と、長井さんの手元を目の端で認めていた。漫画というのは描く時には時間がかかるが、読むのはあつというまだな、などとあらためて思った時、長井さんは三二枚目を読み終えられた。と同時に、あのしわがれ声ですかさず「これは今度のに使おう。これからもどんどん描いて、郵便でいいから送ってくればいいよ」とおっしゃった……と思う。緊張するまもなかった。編集部を出て、僕はあの階段を、きつと色々な人達が色々な気持ちで降りし、また今後もそうであろう、あの階段を、ゆっくり降りて行った。

そのずっと後、仕事が全然ない時、長井さんは電話でひと言こうおっしゃった。

「駄目だよ、辞めちゃ。ずっと描き続けなきゃ」

だから、『ガロ』も、ずっと……。

【プロフィール】 1961年1月28日生まれ。京都工芸繊維学部応用生物科中退。91年春、竹書房の新雑誌『ヤングくらぶ』誌上で、竹久夢二を題材に「夢美華」の連載を開始。大阪在住。





# とても広い、 自由な世界

ぼくはガロが大好きです。どうしても、やっぱり好きで好きでたまりません。

それはぼくが始めて『ガロ』という雑誌と出合った中学二年生の夏の日の衝撃しやうげき的な思い出がそのまま今現在までも心の中にありありと残のこっているからなのです。

その夏の日、ぼくが本屋さんで見つけたマンガ雑誌には、根本敬さんという方のマンガが載っていました。何か見開みひらきページにドカーンと大きなおやじが小さな男を踏み潰つぶさんとしている場面がぼくの目に入ってくるなり、「うわー、なんてすごいんだらう。こんなことマンガでやっていいのか!? うわーうわー」と、もつとにかくすごい何ともいえない心の中の何かが燃もえてきて、勇気が湧わいてきたのでした。それが『ガロ』との最初の衝撃的な出会いだったのです。

それからというもの、ぼくはマンガというモノがとても自由な世界、広い広い宇宙のような、何か心がとき放たれるような世界のようとに思ったのです。そんな世界へ飛び込んで、ぼくも自由奔放ほんぽうなマンガを書きたいなアと思い始めたのでした。そんな強い思いがあつて、ぼくはまだまだアマチュアのようなものですが『ガロ』でデビューをさせて頂き、細々ほそぼそながらも今、こうしてマンガでメシを食くえている……なんて嬉しいことなのかと思います。

『ガロ』というマンガ雑誌のとても広い自由な世界に飛び込んで、その広さゆえに自分の小ささを感じたり、それでも限りなく広い世界に翼を広げて飛んでみたいと思ったり、絶えず『ガロ』でマンガの、そして生きることの勉強をさせて頂かせてもらっているように思います。そしてこれからも、もつともつともっと勉強させてください。

『ガロ』と出合えてよかった。本当によかった。ぼくは『ガロ』さん、どうも本当にどうもアリガトウございますと言わせてもらいたいです。アリガトウございます。

【プロフィール】1967年6月30日生まれ。東京生まれ。高校を出て上京、マンガを描き出す。「健康であること」「マンガを続けてゆくこと」「将来小さなオモチャ屋さんを持ちたいなアということ」をいつまでも願っている。



1



手掛けていた。他誌では「冒険」であることが『ガロ』ではどうだったのか。ここで

執筆陣の異色ぶりもさることながら、編集者もユニークな人材が育ち、巣立って行った。イラストレーターと

## 第8章 エディトリアル・アドベンチャー

4



は、編集者や掲載作品以外のクリエイティブ・ワークに関する証言などをまとめてみた。

2



して活躍中の南伸坊や渡辺和博以外にも、マンガ家のますむらひろしも『ガロ』の編集を



# 『ガロ』の頃

MINAMI, Shinbo

南伸坊



【プロフィール】1947年東京生まれ。イラストライター。ガロ編集長を経てフリーに。数多くの青林堂の単行本の装丁も手掛ける。主著に「笑う写真」「チャイナ・ファンタジー」「シンボールの常識」「哲学的」など。

ボクはね『ガロ』の熱心な読者。っていうんではなかったんですよ。高校のころにね、一九六四、五年だと思うけど、白土三平さんのファンがいて、時々学校に『ガロ』持ってきて、回し読みなんかしてた。当時は水木さんのマンガが好きでしたね。一度原稿持ちこんだこともあったな、長井さんモチロン忘れてましたけどね。で、その時、長井さんの高校生に対する応待だけとすごくなくて、いか気持のいい対応をしてくれたんですね。バカテイネイなわけじゃないし、大人がコドモに對するようでもなし、ごく自然にフランク。こっちはオヤジにぶつかってくみたいな意気込みだったから、妙に拍子ぬけした感じでしたね。

「また持ってきてね」って言われてね、まア断わられたんだけど、なんだか期待かけられてるみたいなね、そういう感じがあった。高校卒業した頃から、つげさんの大ファンになってね、図書館に『ガロ』のバックナンバーが置いてあって、つげさんのものは全部さかのぼって読んだなア、一年後くらいかなつげさんの臨時増刊が出たんで、勿論すぐそれは買ってね、気のあった友達に見せて自慢した。

それでも、まだ『ガロ』の定期購読者になったわけじゃないの、まア金がなかったっていうのもあるのかな。結局ひよんなことから、『ガロ』の編集に入っちゃったんだけど、いわゆる熱心な読者の、熱心な入社希望者の人に、なんか後めたいって気持ありましたね。

裏口入社みたいな感じなんですよ、当時、一九七三年だったかな、デザイン会社やめて失業保険もらってたんだけど、美学校の赤瀬川原平クラスの沢井君が、原平さんの紹介で入社してた。で、沢井君の仕事ぶりひやかしにネ、時々あそびにいたりしてたんですよ。

仕事に行つてき、雑談したりしても、全然なんていうか、居心地いいところだね、長井さんも話しかけてきてくれたし、返品くると、一生懸命



手伝ったりしてき、オヤジが早く死んじやったから、なんか長井さんのことをオヤジみたいに思ってたかもしれない。大体的場合は、反抗する方向にいくんだけど妙に「気に入られたい」みたいなところがあったんだと思いますね。

で、長井さんがさ、

「南君ブラブラしてるようだけど、仕事は見つかるのか、予定がないなら明日からウチで働きなよ」って言うてくれてね、で、決まりなの。後で聞いたらさ、入社試験やるとかいいうと、ドツと集まったらしいんだよね。で、『ガロ』が編集募集するの待ってるって人がかなりいたらしいんだ。それが、ロクに読者でもないのがイキナリだからね、なんか悪いなアとか思ってたね。

入社前は殊勝なもんだったんだけど、入っちゃったら、不良社員でさ、毎日遅刻なんだ。普通の会社と違うからさ、家内工業みたいな家族みたいなもんだから、遅刻ってのはマズイんだ。それに勝手に領分以外の仕事に手出すしね、妙なところに凝って、なんだか一生懸命仕事ふやしたりしてる。仕事がおもしろくてしょうがないんだ。長井さんは「やる気のあるヤツにやりたいようにさせろ」っていう、東洋的親分方式の人だからさ、バツといきなり新人にまかしちゃう。こっちは認め

られたと思うから、夜おそくまで、台割りつくったり、写真貼ったり、レイアウトしたりっておもしろくてしょうがない。毎日、自発的残業なの、で、本当は自分の楽しみでやってんだけど、「仕事だ」って本人は思ってるからさ、遅刻しても当然みたいと思ったんですね。困ったもんですよ。

デザインやってたから、レイアウトしたり表紙のデザイン変えてみたりね、そんなことしたからって売れ行きがどうなるってんじやないんだけど、本人は仕事してるつもりでしたね。

長井さんは時々ね、あんまり一人でもって仕事かかえちゃって、滞ってるもんだから、

「南、あんまり凝らないでな」

ってよく言うてましたね。原稿依頼なんかも勝手にね、好きな作家にどんどん頼んで、承知もしてないうちに予告しちゃったりね、ムチャなことしてましたね。長井さんはそばで見てて、きつと口はさみたい時もあったと思うけど、ガマンしてたと思う。

朝、遅刻してって、一五分くらいは神妙にしてんだけど、冗談言って笑ってくれたりすると、そのまま、もうすっかり何もなかったみたいにしちやってね、毎日、毎日なんか、すごく楽しかったって思い出ばかりですね。夏は暑いから、ク



ーラーとかないからさ、あけはなの銭湯行っちゃう。社長以下全員で。で帰りに西瓜買ってきてみんなで食ったりね、家族の思い出みたいでしたよ。

ナベゾ（渡辺和博）が入ってから、また面白かったな。長井さんの満州時代の話や、世界情勢の床屋政談や、毎日テレビ見てるみたいでね、「モーゼルの勝っちゃん」とか「馬賊の痔疾治療法」とかね「ミグ戦闘機北海道飛来事件」とかね、イロイロあった。

青林堂にやってくる「お客さん」も風変わりな人が沢山いてね、バルタン星人の人ってのがかなりインパクトあったね。「わたしはバルタン星人なんですよ」って言うらしいんだ。私の正体を知りたくば、明日代々木公園にいらっしゃい、とこういうことだった。

翌日、日曜日、ナベゾが代々木公園出かけて、物陰からうかがっていると、バルタン星人（のぬいぐるみ）が歩いてたっていうね。まア、変り者が多かったな、読者も書き手も、編集者もね。

持ち込み原稿の応待は、見よう見まねで、長井さんと同じようにするんだけど、長井さんの大胆さみたいなのは、生来のものだと思うね。ボクなんか、なまじ自分で絵描いたりするから、そういうコダワリで狭く見ちゃう。

「絵なんか、描いてれば上手になる」って、長井さんは、才能の見極めっていうか、見出し方っていうのがボクなんかより、ズツと、頭柔かいと思いましたね。

ボクなんか、『ガロ』やめてから「南さんに原稿つきかえされた」とかよく言われましたよ。その人が、ちゃんと後で売れた人なんだ。見る眼、ぜんぜんないですね、ボクは。

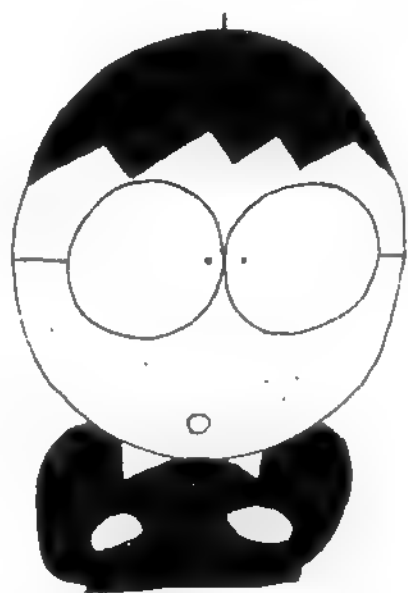
青林堂へは、直接本買いにくる人がずいぶんいて「私もあの頃よく行ったなア」なんて人に会うことがある。「何年ごろでした？」って聞くと、ボクの在籍してた頃なんですよ。

「じゃ、その時顔合わせてたのかなア」って言うのと、いや、覚えてないなア、会ってたらゼツタイわかるよ（その顔だから）って言う。「どんな人がいた？」って聞くと、長井さんに香田さんに、女のコが二人、いや三人だ窓際にブスが一人いた。「それオレだ」（笑）その頃ね、長髪でさ、写真ハリコミん時は、ゴム輪でしばって、さらにアツプにして、アミかぶってたりしたんですよ。

とにかく、ボクにとっては、あそこは職場っていうより、学校みたいところだったんですね。なんかいろいろあったはずなんですけど、楽しい思い出しかないね、今は。



# 夢のような めぐり合わせ



WATANABE, Kazuhiro

## 渡辺和博

【プロフィール】1950年、広島生まれ。イラストレーター。ガロ編集長を経てフリーに。マンガの著作は「タラコクリーム」「タラコステーキ」「たらこ筋肉毒電波」など。他の主著に、日本流行語大賞受賞の(金)で一世を風靡した「金魂巻」や「金魂巻の謎」、「虚ろな愛'87」「物々巻」(主婦の友社)、「診男法」(平凡社)などがある。

僕は南伸坊さんが病気で倒れたのをきっかけに、七八年〜八〇年の約二年間『ガロ』の編集の中心を務めました。

当時の作家で特に印象に残っているのは、峰岸達さんと泉谷しげるさんです。峰岸さんは以前から『平凡パンチ』のイラストで注目していたので、安西水丸さんに紹介してもらい、『ガロ』へ登場を引き受けてもらいました。今でも申し訳ないと思っていますが、結果は峰岸さんにとっても良かったのではないのでしょうか。

泉谷しげるさんは、自ら表参道でお店の改装をしている所に原稿をもらいに行ったりしました。

編集方針、などは総て南さんの引き継ぎでした。『ガロ』が現在まで続いているのは、全く南さんの力が大きいのです。

僕は子供の頃、模型飛行機少年で、兄と二人で『航空ファン』という雑誌を定期購読していました。また、貸本漫画もすごく読んでいて、『ガロ』や水木しげる作品など、日曜日に雨でも降ると、大量に借りてきて一日中読んでいました。その『航空ファン』の二階にかつて間借りしていた、『ガロ』の青林堂で僕が働けたのは、まるで夢のような、不思議なめぐり合わせだったと思います。





## 『たどえば』

## としての青林堂VS私

『マズイ!!』二四歳の秋、青林堂から採用通知が届いた時、私は思わず心の中でそう叫んでしまったのでした。まず採用されるワケがないと思っていたので、募集要項にある二三歳迄という規定に合わせ、ナント私は履歴書を偽造していたのです。

ホントにマズイよこれは……。念願の会社に入社が決まったのに、私の心は不安の念にかられっぱなしで『まったく何という社会人の一步を踏んでしまったのか』と情けなくなっていました。結局、そのままぬけぬけと入社してしまったのですが、やはり一歳サバを読んでいることが気になって仕方がない……。

ええい、それならクビをカクゴで自首するか!! そう決心した私は、まずワンクッション置いて……と、長井さんの奥さんの香田さんに自首することにしたのです(ズルイ、小心者)。

「あの、実は……」

心臓が口から飛び出しそうなほどドキドキしながら、ボソボソと告白する私……。もっくビかもしれない……。カウンターパンチの一コくらいは覚悟していたのです。

ところが、私の告白をきいた香田さんは、「他人に言うトシなんていくつでもいいのよ」という一言でこの問題をかたづけしてくれたのでした。ス

ゴイツ!! 何だかよくわからないけれど、すごく重みのある言葉だ!! 私はモーレツに感動すると同時に、やはり青林堂という会社がタダ者でないことを肌で感じてしまったのでした。

後でこの話を耳にした長井さんも

「そんなコトを気にしていたの? バカだねえまったく。ウチはそんな会社じゃないから」と、笑いながら言っただけでした。

根はマジメなんです、少し調子ノリの所がある私は、このことでパツカリと脳味噌の半分を神保町のドブに落してしまい、そのままはしやぎながら、勝手に青林堂に溶けこんでしまったのであります。

ただ、遺伝子を引き継ぐただけに生まれてきているのかもしれない人間の中で、根があまりにもバカ正直なために、産声と同時に『たとえば』という言葉をおぼろげに覚えてしまった人々のことをフト考えたりします。

『たとえば、手塚能理子というモノは……』と生まれたと同時に言ってしまうと、それからの長い人生の中で、例をあげて自分を説明しなきゃいけないのに、実はそんなことは何も考えていなかったりする、にもかかわらず、とりあえず『たとえば』と言ってしまったとしたら……。



これは取り返しがつきません。物心がついた頃、そんな自分にチラツと気付き、「アレエ!!」なんちやって頭を掻いてみても、もつ遅い。まさに人生行路。それがためにものすごく困ったり、つまずいたり、しかし、それだけに楽しかったりはしやいだりすることもあります。

さらに『たとえば』と言ってしまった手前、わがままも多くなりますが、それを通すワザもうまくなれば、その人の面白味として、反映するのかもしれない。ただその裏には、恥をかいったり情けない思いをすることはつきものですが、それさえ、こっそりと認めていけば、わがままの道もイタイながらも結構楽しめる余地はあるような気がします。

イカれている、と言われてしまえばそれまでですが、そのイカれた部分に集中してわがままを通す、そんな強烈な豪華一点主義的プライドを持つ人って私は大変好きです。だいたいプライドを持っていない人なんて面白くもなんともない。プライドは一種のイカれもんですから、どうせイカれるなら、徹底的にイカれた方が、ずっと面白い。苦労話も隠れてしまふくらい大きくイカれたプライドを持っている人の方が、やっぱり引かれるなあ。ガ口と拘わりを持ってから、そんな素敵なまで

にわがままを正直に通している人達に出会うことができ、私は、そのイカれ具合に、ただただ感嘆するばかりです。時々、その真似をするだけの人もいますが、『たとえば』と言っていない分だけ、迫力に欠けるものがありますね。

私も生まれた時に『たとえば』と元気良く言ってしまったような気がしますが、集中力にいまひとつ欠けているので、強烈な豪華一点主義がなかなか成り立たず。恥をかいったり情けない思いをしたりのかくり返しだけで、あまりカッコ良くありません。

ただ、ハッキリしているのは、この世界に足を踏み入れてから、身内の者に「バカッ!!」と罵倒される回数が増えたことです……。まっいいか。出だしが履歴書偽造だし、もうひとつ、募集の際書いた『現在の出版界における漫画の状況』というテーマの論文も、実は漫画評論の本三冊から、こっそり抜き取ってつなげただけの「盗作」を提出したのですから、自分でも最初の一步から、思いきり踏みはずしていたような気がします。

(入社後『論文の内容はともかく、まず万年筆又はペンで書いたものを残し、あとは面接の印象で決めた』と聞いた時、やはり青林堂の方も何枚も上手で、とてもかなうものではない、とつくづく思い知らされました)。

【プロフィール】1955年10月24日、栃木県宇都宮に生まれる。青林堂に6年間在籍し、その後フリーに。しかしさらに6年後の91年4月1日より再び青林堂の出戻り社員となるという、数奇な運命に弄ばれる。



# 長い階段の 頂上で

YAMANOI, Yasushi

## 山ノ井靖

〔プロフィール〕1961年福島県郡山市生まれ。1984年4月青林堂入社、88年同退社。その後、白夜書房「オトメクラブ」読者ページ担当、レディスコミック編集などを経て、現在、郡山市で女性向け小物販売店を営む。

ぼくが、青林堂にお世話になったのは、一九八四年から約四年間、アルバイト時代もいれると五年間くらいである。

『ガロ』をはじめて見たのは高校の頃。

本屋さんで「わからない人には、わからせるまです。そう、ガロ、二八〇円」というコピーと、太い線で描かれた男の人が素手で石と板切れを壊している絵、が表紙になっている号（一九七七年五月号）であった。

「なんだこれ！」

というのが、最初の印象だ。

漫画の本らしいのはなんとなくわかる。本ならば本屋さんで売っているのも当然だが、『ジャンプ』や『ビッグコミック』と一緒に並んでいるのがなんとなく違和感がある。まるで、喫茶店のメニューの中に、チョコレートパフェやロシアンティーと一緒に、カツ井が混ざっている感じなのだ。なかまはずれのような妙にめだつ。ぼくは、半ば強制されたように、その変なものを買った。それから何年かたち、ぼくは、その本の出版社でアルバイトをする事になる。

なんの事はない、当時つきあっていた女性（今は女房）が漫画家志望で、『ガロ』に入選して何本目かの原稿を届けに行ったときに、長井社長に「誰か、アルバイトをしてくれる人いないかな」と聞かれたのだ。

最初買った時から『ガロ』を読むのが習慣になっていたぼくだが、あの表紙のイラストは湯村



輝彦さんで、コピーは糸井重里さんの手によるものだというのがわかっていたくらいで、本文の大部分をしめる鍵の作家さん達については、何も知らなかった。読んではいいたが、『ガロ』はやっぱり変なものであった。

アルバイト初日、めざす青林堂は材木屋の二階にあった。階段が長かった。

手塚さんが、掃除をしながら自己紹介をしてくれて、そのあと長井さんたちが出社してきた。ぼくの初仕事は、本の配達である。取次の車にその日出荷する単行本を積み込む。

変な本を作っている出版社でも、日常の業務は淡々と流れる。みんなまじめな顔をしながら『私はバカになりたい』とか『かつこいいスキヤキ』とかいうタイトルの本を車に積み込むのだった。ぼくは「会社って偉大だな」となんとなくその時思ったのを覚えている。

そのころの青林堂の面々は、長井さん、香田さん、斎藤さんに谷田部さん、そして手塚さんである。ぼくは、斎藤さんが入院したので、ピンチヒッターとしてアルバイトに入ったのである。

その翌年四月、ぼくは正社員になった。

正社員になるといろいろ仕事が増えてくる。まず、本の配送ばかりでなく本を作らなければなら

ない。営業もやらなければならない。

谷田部さんが「蛭子さんの本つくりなさい」と、編集のへの字も知らないぼくに、蛭子能収さんの連絡先を教えてくれた。蛭子さんは、今、ブラウン管でよく見かけるのと同じように「優しいおじさん」という感じで、何も知らないぼくにはあいそもつかずに、忍耐強く一緒に仕事をしてください。

この時できた本が『ゲイジュツ魂』という本で、協力していただいた霜田恵美子さんやスージイ甘金さん、後にぼくが担当となる根本敬さんらとお会いできたのだった。

蛭子さんと根本さんとは公私共々いろいろお世話になり、根本さんの『生きる』『天然』や、蛭子さんの『馬鹿バンザイ』など、ぼくが青林堂時代に作った単行本の半数近くは、お二方の作品である。

単行本を作る間にも『ガロ』を毎月作らねばならない。

毎日、何本も新人が投稿してきて、長井さんは全部に目を通す。面白い原稿、つまらない原稿。いや、ほとんどが箸にも棒にもかからないものだが、それでも全部に目を通す。百本千本の中の一冊を求めて目を通す。



ぼくは、長井さんの隣に座っていたので、よく「こんなの書く奴いるんだよな」と、送ってきた原稿を見せてもらった。それらは、白い紙にただインクを垂らしただけのものであったり、コマだけ割ってあって、あとは何も描かれてないものであったりするものもあった。

「ひどいよな」と、長井さんは、本気で怒る「こんなの『ガロ』には載っていないはずだけだな」と、原稿を送り返す。

「もう少しで面白くなる」という原稿に関しては「フーンもうちよつとだけどな」と、ちよつとコメントを入れやっぱ原稿を送り返す。コメントは、簡単なものだ「頑張って下さい」くらいなものである。

社員になって少したつと、ぼくが前に『ガロ』に対して思っていた事が変わった『ガロ』が変なのではなく、回りの雑誌が変なのではないか。本来、作家が描くものについて雑誌側で「こういう話を描いてくれ」と注文をつける事こそ、おかしい事ではないか、と。

勿論、ぼくは、商業主義的な漫画雑誌の作り方を否定するものではない。読者が「読みたい」と思った話を供給するのは並み大抵の技術ではないし、そんなふうにして生まれた作品の中にも名作

は多い。

しかし、漫画家と編集者が打ち合せをする時、こういう話は面白い、という観点で話し合われるのではなく、こういう話がうける、または売れる、という観点から話し合われたとき、その作品は創作ではなく、パズルの穴埋めと同じものになってしまうのではないか。

『ガロ』は、頑固なまでに「創作」というもののプリミティブな部分を守り続けている。編集者に与えられた権限は、作家あるいは作品の選択権だけである。雑誌に載ったとたんに、その作品がうけるかうけないかは完全に作家の責任になる。

これは、新人作家にとってはかなりきつい事なのかも知れない。長井さんは、持込みにきた人によくは語らない。面白い面白くないか、いいか悪いかだけである。中には、長井さんにつっかかる人もいる。「どこが悪いんですか」その答えは、「ガロを読みなさい」

まさしくその通りである。

ぼくは一九八八年に青林堂を退社した。

退社したある日、しばらくぶりに青林堂にごきげん伺いに行った。

その時、上りなれたはずのあの長い二五段の階段が、今までで一番長く感じられた。





# 表紙デザインを 担当して

HARAGUCHI, Ken-ichirō

## 原口健一郎

〔プロフィール〕1959年、長崎県生まれ。デザイン事務所を経て、現在フリー。85年に個展「SINKING LINER」、90年に個展「COWBOYS ON THE ROOF」を開く。

僕が最初に『ガロ』と関わったのは、根本敬さんの単行本、『怪人無礼講ラババイ』の装幀の仕事でした。しばらくして、ガロ本誌の表紙のデザインのお話があったときは、嬉しさと同時にかなりのプレッシャーも感じました。

というのは、三〇年の歴史の重みもさることながら、僕自身もやはり愛読者の一人だったからです。はじめて自分で買ったのは高校生のとき、永島慎二さんの絵が表紙を飾っていた頃です。他の漫画誌では味わえない不思議な魅力をもった作品群は、地方に住む一高校生にはとても眩しく感じられました。

そういった思い入れがあまり強いと、失敗につながってしまうのはよくあることです。それをよい方向に活かせるようにデザインすることが、自分なりの課題です。現在の表紙は、『ガロ』の作家の方々のキャラクターを使用させてもらって構成しています。それが、これから『ガロ』と出会う、かつての自分のような人たちに向けての何かしらの合図となれば、とても嬉しいのですが。



# 所沢の皆さん、 お騒がせしました

一九八五年の春から八六年の夏にかけて、埼玉県は所沢市・航空公園に毎月第一日曜になるとな  
にやらへんな集団が現れるようになった。手に手  
にバットやらグローブを持って。そこは公園であ  
るからして、もちろん他に野球をやっているオト  
ーサン達の集団、サッカーに熱中する少年、テニ  
スやバドミントンに興じるカップルといった善良  
な市民が圧倒的ではある。ただ先の集団は、それ  
ら一般の「善良な市民」とは明らかに違っていた。  
皆、歳はバラバラ、学生には見えないし、かといっ  
てマッソーな社会人には金輪際見えない。要する  
に得体の知れない一団。

まず、朝十時になると黒塗りのバットケースを  
下げた、坊主頭に野球帽、口髭もたくましい……い  
や何と言ってもその突き出た巨大なアゴが周囲を  
いやが上にも圧倒する大男が現れる。広場を睥睨  
する大男。多少ジャリ共が遊んでいようが家族が

SHIRATORI, Chikao

## 白取千夏雄

〔プロフィール〕 19XX年7月17日、函館生まれ。高校卒業後上京し、某学校で長井勝一に師事。在学中にアルバイトを経て、青林堂入社。以来、『ガロ』編集部勤務。4コマGAR  
Oや読者サロンのページでイラストやマンガも描き、雑文なども頼まれれば引き受ける、よろずや現役編集者。





弁当を広げていようが一睨みで場所は、あく。そこで男はおもむろにカバンからベース——ボール紙や雑誌を縛って作った——を取出し、ホームから1塁、2塁……と丁寧に配置してゆく。その大男の名は、平口広美。

そうこうしてるうちに、メンバーがぼつぼつ集まり始め、「いやあ、平口さん早いっすね」などと愛想笑いをしながらグローブをはめ、ソフトボールでウォーミングアップを始める。昼近くになっても人数は思ったように集まらない。皆漫画家や編集者といった、世間で最も早起きの苦手な連中だからだ。男は黙々とノックなどをするが業をにやし、先刻自分の一瞥で蹴散らした小市民のオトーサンにソフトボールに加わるよう要請する。誰がこの大入道の「依頼」を断れようか。日没まで結局三試合も付き合わされたりする。ヘトヘトである。動悸、息切れ、眩暈。後で女房と「何で断んないのよ馬鹿」と口論になったりする。明日は会社だというのに……！ この様にして大事な休日をおこの集団に台無しにされた市民は少くないという。

以上が当時、所沢市民を恐怖のドン底に陥れた「謎のソフトボール集団」である。メンバーは、我が編集部のボクと谷田部、「じゃまのい」の三

人男、漫画家では平口広美、蛭子能収、根本敬、やまだ紫、芳賀由香、杉作J太郎諸先生といった常連に加え、ゲストで井口真吾、スージー甘金、イワモトケンチといった方々、さらに元アリス出版の原野さん、元青林堂の斎藤さん、当時E.Uオフィスの菅野、村田、小谷、松本各氏、当時平凡パンチの及川さん等々……といった知る人ぞ知るそうそうたる顔ぶれ。

当時幹事のような事をやっていたボクが連絡すると、皆さん「日曜日に早起きして所沢あ？」などと渋い顔をされたが、その割には結構盛況だったなあ、と思う。スイカ割りもあったし、昼はめいめい弁当を広げて和気あいあい、終われば新所沢駅前の「つば八」に繰り出し、凍ったジョッキで飲む生ビールは最高だった。あのビールは、今でも語り草になっているくらいだ。編集者や漫画家、というと世間では「不健康」の代名詞のように思われているかも知れないが、月に一度とはいえ、ハードなスポーツに興じていたのだ。そんな楽しいソフトボールもいつしか立ち消えになってしまった。寂しい限りである。

……で、今はというと、一部でボウリングに熱中していたりする。



# 背表紙を11曲1双の屏風絵に「見立て」て

『ガロ』を購読し始めたのは、一九七二年の春、大学を卒業した頃からだった。二四歳にもなって本格的に『ガロ』に熱中してしまい、一時は「作品」を發表したいという野望（当時ペン画は嗜んでいた）もあり、表紙のダミ―を作って長井社長に見て頂いたこともあった。

当時も、超厚手の漫画雑誌が書店に溢れて百花繚乱、その巾広の背表紙は、書店先でなにかと気になっていた。「書籍や雑誌の背にあたる部分に、デザイナーとして、何か底抜けに面白いコンセプトを持ち込むことは出来ないだろうか、「当たり前」になっていることを「はずれ横」ぐらいに観念させて、もう一度考え直しても良いのでは……」などと、思い始めていた。丁度その頃、装丁を手掛けていた草森紳一さんの単行本『狼藉集』の中に「本棚は羞恥する」というエッセイがあった。背表紙への思い込みが一層増したのは、その影響もあったかもしれない。

初めの頃は『ガロ』の背表紙を毎号ごとに構成していたのだが、長井さんから「製版代



HARATA, Heiquiti

## 羽良多平吉

【プロフィール】グラフィック・アーティスト。1947年、東京、井の頭生まれ。東京芸術大学工芸科卒。79～80年のYMOのワールドツアーに参加し、ADとプレスを担当。サイバー・エディテクスを提唱し、WXYとEDiXを主宰する。87年、「竹尾パーショウ」のポスターで通産大臣賞と生活産業局長賞、88年「マーキュリーシティ（永井宏著／東京書籍）」で第23回造本装幀コンクール審査委員会奨励賞、91年「一千秒物語（稲垣足穂著／透土社）」で講談社出版文化賞ブックデザイン賞を受賞。青林堂では、81～90年度10年分の『ガロ』の背表紙や「木造モルタルの王国」の装丁を手掛ける。

を工夫してもらえないかな」との相談もあり、翌一九八二年度からは、一年分で一つの絵柄になるように構成することにした。背表紙を「二曲一双」、いや（この頃には年刊一冊だったのだ）「一曲一双」の屏風絵に見立てての試みは、多分これが最初だったように思う。

一九八二年度のものを長井社長はとても気に入って喜んで下さった。それは、写真が入れ子構造に回転しているもので、「春」をテーマにしたその絵柄は、印刷工程でスミ版抜きの刷り出し分を確保しておいたものを使用



# 浪曼の曙

ARAKI, Nobuyoshi

## 荒木経惟

〔プロフィール〕 1940年5月25日、東京に生まれる。「天才アラキー」の異名をとる写真家。63年、千葉大工学部を卒業し、電通に入社。64年、「さっちゃん」で第1回太陽賞を受賞。71年の写真集『センチメンタルな旅』で大反響を呼ぶ。「ガロ」に連載した「浪曼写真」は、マンガではないのにもかかわらず、当時もっとも「ガロ」的だったとも評価されている。

した。改めて、背表紙のために素材を一点一点写真分解をする必要のない、ロー・コストを目的とした方法だった。

後日、編集の谷田部さんから、「各年毎

に、全号揃えたくなくなるという読者の購買意欲を駆り立てるのか、販売に貢献してくれまして」といった主旨の嬉しい話をお聞きした。少しは「ガロ」のお役に立てただろうか。

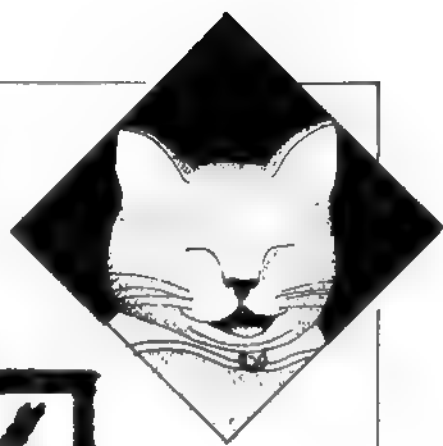
キンバクした「ガロ」を両手で持ってミーティングにやって来たんだ。ドアが開かないってんで、むりやり窓を開けやがった。モロ、真昼の情事を見られちゃったもんね。それで彼を気に入って「浪曼写真」の長きにわたる連載が始まったってわけ。

最近、また昔の人が返ってきてるけど、それだけじゃ面白くないよね。それに触発されて新しい才能が出てくるよう画策しているのはわかるけど。でも、ちよūdいよね。気合い入って。ベテランと、新しい次なる者とのオーラがぶつかり合ってて。

また、面白くなりそうな気運は見えるね。最近、声かけてくれなかったけど、ノリマン（注・手塚能理子）も帰って来たことだし、またオレも登場すっかな。

長髪の頃の仲坊と最初に会ったのは、写真展の時。彼はマンガ以外でも面白いコトやりたがっていたから、声をかけてくれたわけ。「花輪和一のマンガ、好きでしょ？」って感想を「ガロ」に書かされたのが最初だったかな。座談会にも引っ張り出されたしね。昼間、ドアに鍵かけて妻とフアックしてたら、仲坊が古本屋に持っていく感じでヒモで





# 黒の病院

あの頃『ガロ』は、黒の病院だった。患者たちは病室や路地裏で原稿を描き、やがて重症になったり退院したりして行ったが、重症ではない私はその証拠に、『病院職員』を九カ月間やったのだ。しかしその間、長井勝一院長は、「ああ、やっぱりコイツは病室にブチこんでおけばよかった」と、つくづく思ったに違いない。なにしろ私は、しよっちゅうさぼり、マメに休み、そして早引きした。まあ、ヒデヨシを雇ったような苦しみを長井さんは味わったのにクビにもしなかった。今に思えば本当に赤面の至りであるが、あの病院時代は本当に楽しかった。『ガロ』で『宮沢賢治』を知り、透明王とも言うべき超重症患者の鈴木翁二氏のお宅ではモク拾いの

親切も見たし、初めて『ガロ』を買うきつかけになった「軍刀」の安部慎一氏のお宅ではワイセツなアルバムを拝見した。そして巨匠つげ義春氏のお姿も二メートルくらいそばで拝見し、つげ忠男氏のお宅ではアシスタントも体験し、酔っ払って独演する唐十郎氏まで目撃した。

実に楽しき黒の病院だった。そしてあれから一六年たった今、家にたまった古新聞や雑誌をビニール紐で縛る時、その手ぎわの良さに思わず私はジョバンニみたいにホザいてしまふ。

「古新聞縛りなら誰にも負けない。……でも僕は、どこでこのコツを憶えたんだろう」

すべては、病院職員時代に憶えたのだ。あの返本されてくる『ガロ』の山を縛りまくるなかで、私はコツを憶えたのだ。一六年たっても消えない手の記憶とともに、ヒデヨシみたいな私に時々お弁当までくださった長井院長に心から感謝したい。

「むうちやす・ぐらあしやす、せにようる・ながいさん！」

【プロフィール】本名、増村博。1952年、山形県米沢市に生まれる。「ガロ」73年8月号に「1975」でデビュー。代表作に「アタゴオル物語」など。





## 津山週三 TSUYAMA, Syuzo

# 特異な場所

『ガロ』に読者サロンというコーナーがある。掲載された漫画についての批評や感想を読者が自由に述べるというコーナーだが、一般の商業雑誌のようにやたら作品をほめ上げたものばかりが掲載されるのではなく、ときには痛烈な批評、あるいはその批評に対する再批評などが延々と続くこともあり、結構面白い。

私がはじめて『ガロ』を読んだときというのは、ちょうどつげ義春氏の「紅い花」の掲載されていたときだから、創刊数年後ということになる。今思い出してみると読者サロンに掲載される投書内容もずいぶん様変わりしたように思う。その当時は学生運動がもっとも盛んな時期であったせいか、掲載される投書も変に気負ったものが多く、中には何度読み返しても意味のわからないようなものもあり、なかなか面白かった。しかし最近の読者サロンに掲載される投書にはどうもそういう

面白さがなくなってしまったような気がする。作品それ自体に対するべたべたとしたほめ言葉や並べたてるだけならまだしも、その作品の背後の作者にまで興味を抱き、ほめ上げようとする姿勢にいたっては、読んでいて思わず眉をひそめてしまふ。世代が変わったとか、読者層が変わったとかいろいろ理由はあるのだろうが、本当に変わったのは実は『ガロ』そのものなのであろう。『ガロ』がそのような読者層を対象にするような方向に向かいつつあるということであらう。

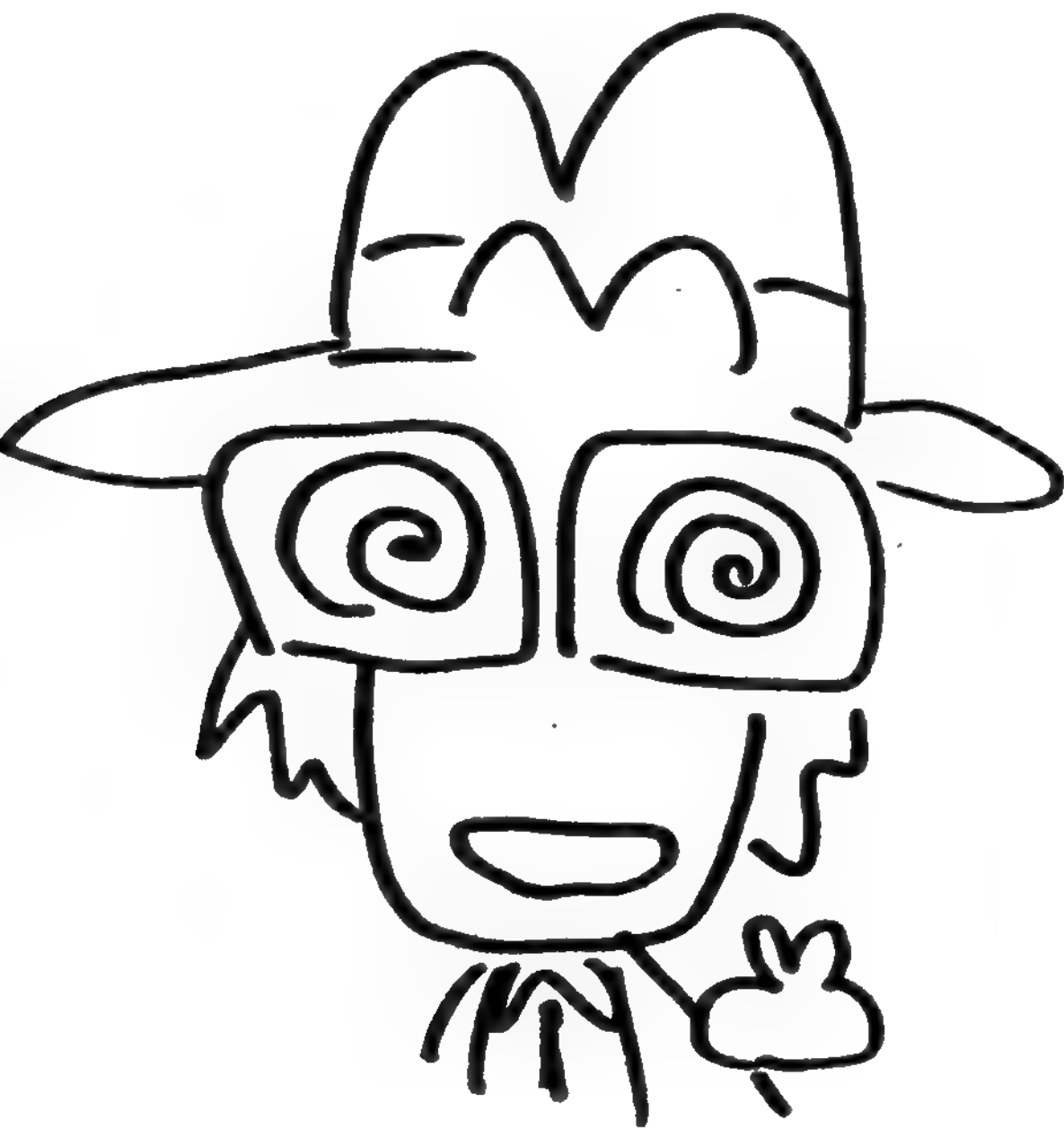
昔の『ガロ』がよかったなどというつもりはない。それでもへんに垢抜けして、少女漫画風の作品がいくつも掲載されているときなど思わず溜息が出てしまふ。『ガロ』には絶対に垢抜けして欲しくないという思いがある。常に適度のやばったさを秘めながら、決して時代の先端を目指そうなどとせず、時代の流れに多少の距離をとりながら、時代をはすかにいながめるような特異な『場所』であって欲しいと思っている。『ガロ』にはそのような立場が似合っているような気がする。

【プロフィール】1949年、北九州市若松区に生まれる。16の時、単身上京。71年、駒沢短期大学卒業。ショーペンハウアー、ドストエフスキーを愛読し、漫画ではつげ義春、東海林さだおの影響を大いに受ける。84年、「伊凡哲次氏の優雅な生活」で『ガロ』に入選。現在は北九州市在住。



# 読者が いけねえ

柚子もいいが香りがいけねえ、というのは  
与太郎のセリフだが、僕にしてみれば『ガ  
ロ』もいいが読者がいけねえ”のである。作  
家がこういうことを言うのが編集部のミナサ  
ンに迷惑をかけるのはわかっているが、本当



KARASAWA, Syun-ichi

## 唐沢俊一

〔プロフィール〕 1958年5月22日、札幌生まれ。双子座。演劇・芸能畑を経て、映像プロデュース業にも足をつっこむ。舞台公演のプロデュースなどをやっていたらお金がなくなりましたので、親をごまかして資本金を出させ、ビデオ・テレビの企画会社を設立しました。ナント“社長”です。ムカシのマンガでは社長というと必ず葉巻をくわえてフンぞりかえり、「チミい、いかんよ」なんぞ言っていたように記憶しますが、なってみるとアチコチ走り回って頭をさげ続けねばならず、いいことはあまりありません。「何でもええ、あなたの好きなもんを作ってみい」とか言って10億くらいポンと出してくれる方を募集中です。



だから仕方がない。ムカシ、『ガロ』の読者欄、あれが大の嫌いであつた。狭量というか依怙地というかヘンクツというかかわがままといか無用の論争好きというか家庭が不幸といかそれとも他になにか言いようがあるか知らないが、とにかくやかましい連中揃いで、それも理論として首尾がととのっているならともかくも、殆どが感情論、やれ誰ソレの作品には真摯な姿勢がないの、あんな作品を載せるとは編集部の見識を疑うの、何某という作家は結局のところニセモノにすぎないの、〇〇よかかる駄作を描き続けるよりは、いっそ筆を折ることを勧めるのと、まあ百家争鳴、喧々囂々、われこそは時流に迎合せぬ真のマンガ読みなり、と信じこんでいるヤカラが放題をヌカして、読むたびごとにハラが立ったものである。以前、男色家向けの雑誌を読んでいたらその投稿欄がこれとまったく同じだったのに笑ってしまった。毛ズネのモデルは使うとか外人がいいとか中学生以上に興味はないから載せるなとか、まるで自分の趣味にあわせてその雑誌が存在しているかの

よつな言い草をしているのである。

思うに彼らは世間から疎外されている分、この雑誌だけがわが味方、という思い入れが強く、それが昂じてここになら何を言っても許される、という、生みの母親にダダをこねてみせるような甘えの快感に酔っているのだろう。どうにも困ったものである。が、不思議なことに、こういう連中が跋扈していたときが、なにか雑誌が（ホモの方でなく『ガロ』であるが）一番輝いていたような気がするのである。雑誌のもつエネルギーのバロメーターは、こういった勝手な意見に対しどこまで包容力を示せるか、ということなのかも知れない。最近の読者欄には、妙なモノワカリのよさというか、『ガロ』に対するいたわりすら感じられる。その心映えは美しいが、はたして『ガロ』自身のためになるかどうかは疑問である。勝手を言うのは読者の権利なのだ。もともと、好き勝手を言うヤツが出てきていいだろう。それを期待しているのである。もちろん、僕の作品に対しては別であるが。



# 天国？



TAKAHASHI, Satoru

## 高橋聡

〔プロフィール〕1962年生まれ。現在、青山ブックセンター六本木店勤務。また、「流行通信オム」91年3月号より「隔月報」の読物を連載。

『ガロ』すなわち「青林堂」について、最前線たる現場から。

棚づくりの中で、世代交代を目まぐるしい程感じるが版元の事情と読者のニーズとのとても大きなズレ程、シンポリックなものはあるまい。ストリートにいうならば、現在一番欲しい本は品切れや絶版のタイトル。

これらは、あの消費税導入の際、「漫画出版」全体で起こった、というより切り捨てとして明確に表面化した事だが。むしろ何よりも、作家自体にすれば代表作が店頭より姿を消したままの状態が長く続いているという事だ。

もちろん、これは版元以上に書店そのものの棚づくりに原因があるといえる。全国的に「ギンタロウアメ」式が蔓延、また専門店を標榜している店の商品構成の中での安易さなど。

現場の棚担当として、書店業界全体の衰退はもちろんな作家、編集、版元と送り手の状況一つとっても、ていねいな仕事を結果として否定する。漫画出版の現況を知る中で、よく表層的な意味での「漫画大国」とのマスコミの表現にアンビバレンツを強く感じている。

めぐる状況は、内実危機的ともいえるがその中で歴史は歴史として、原点にたつ本づくりを希望したい。



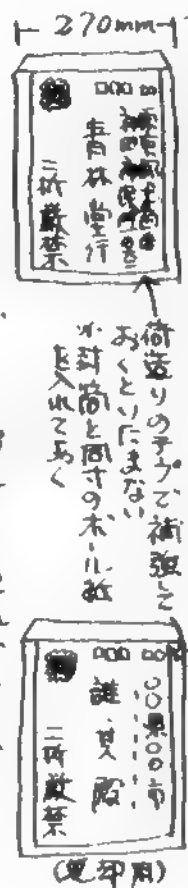
# 「忙人必読『ガロ』投稿作品入選必勝法」

## ガロ投稿作家の諸氏へ

\*ガロへ投稿する場合  
次のことを注意して  
下さい。

- ① 原稿料が払えません……  
当社としてもたいへん心苦しく遺憾なことです。が、当分の間は、無理と申します。この問題は皆様にとっても重要なことと思っておりますのでよく考えてから投稿して下さい。
- ② 返却用封筒(切手貼付)の入っていないものは、返却できません。  
荷造りのテープで補強とおくとりをしない、封筒と同等の木口紙を貼入して下さい。
- ③ 寸法・原稿は必ずタテ27.3cmヨコ18.2cmでお願いします。  
(仕上がりは三倍)
- ④ 墨汁または製図用インク(黒)を使用して下さい。中間の調子が必要な場合は、スクリーントーンを貼り込んで下さい。うす墨によるボカシはさけて下さい。
- ⑤ セリフ・ナレーション(ネーム)は鉛筆で読みやすく入れて下さい。
- ⑥ ページ数は何ページでもかまいませんが30・40とあまり多くなく、本誌のページ割りがむずかしくなってしまうので16〜20ページぐらいが適当かと思えます。
- ⑦ 送り先は東京都千代田区神田神保町一六二青林堂
- ⑧ なぜ投稿するのか、作品を通して訴えたいことは何かをもう一度よく考えて下さい。編集部としては作品が多少未熟であろうとも可能性のあるものは意欲的にとり上げます。ります。皆さんの作品を期待しています。

以上



作◎唐沢俊一 絵◎唐沢なをき

御存知のように、青林堂は株式会社なのだが、株主はそうそうたるメンバー。といっても、水木しげる氏、高信太郎氏といった漫画家の皆様、自ら株主となって青林堂を支えているのだった。他にも、矢口高雄氏、青柳裕介氏、等々。



# 青林堂歳時記①

いつも貧乏青林堂、でも貧乏は風流の元でもある。「とにかく夏は暑くて。一階の陽よけからモロに照り返しが来るんで、そこに水をまいたりしてね。それでもひどく汗をかくから、午後になるとみんなで近所の銭湯へ行くんですよ。で、帰ってきてもう一仕事。」

……なにしろ『ガロ』に投稿するのはマンガ界における出世の早道、印税成金への最短距離と言われているくらいのもので。

そうか？

それをめざして毎月毎月、東京・神田創業30年漫画の老舗青林堂には世界各国から百万作もの原稿が送られてきます。

そうか？

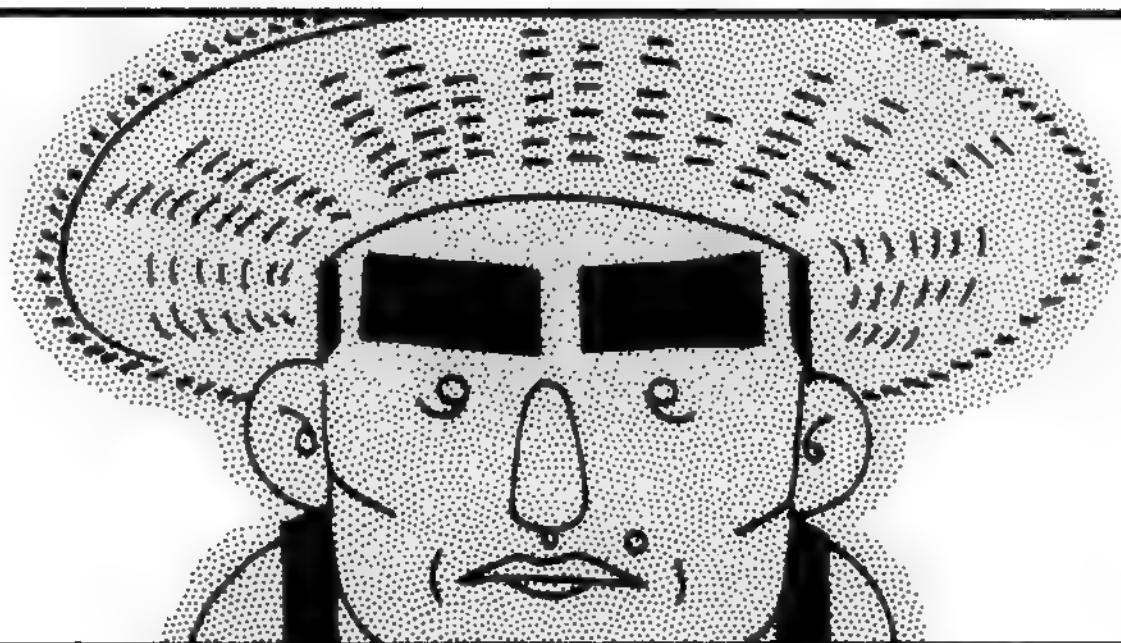
青林堂

そついったこともふくめまして『ガロ』投稿家なんでもしつもんばー最初のおたよりは愛知県の内山健太郎さんからです。

とほほほ。



陳者 私儀当年四十七才  
の農業従事者ですが――



約四、五年前より肛門より3センチ後方、背骨の最下部、俗に言う亀の尾と申す部分に痔疾出来いたし、中央溝の如くなり痒く、排便の都度皮膚が少々落ちますが、このような経験を漫画にして『ガロ』に作品として投稿してよろしきものでしょうか。

尚、人目に出すのが恥ずかしくなりませんからその治療に適した薬品及び治療法も折り返し御知らせください。

敬具

完全内痔瘻

骨盤直腸窩外痔瘻

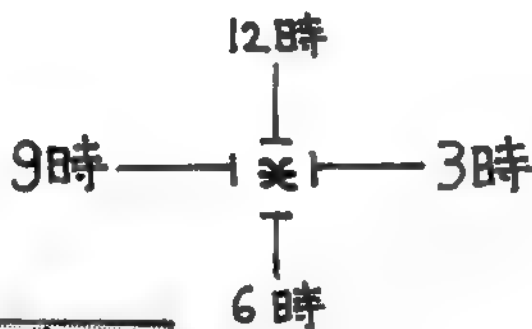
座骨直腸窩外痔瘻

完全外痔瘻

作品にして投稿したらイヤでも人目につくじゃない。

肛門輪部位の名称

腹側



背側

人目に出すのが恥ずかしいって、そんなもん出された日にはこっちの方がたまんねえやな。



／仕事中に銭湯へ行く会社はスゴイですよ。遠くからお客が来ると、まず銭湯へ行ってもらったりもしました。だからロッカーにはいつもタオルと洗面器が入ってる（笑）。みんなで西瓜買ってきて食べたね」と南伸坊氏。打ち水、西瓜、銭湯と正に夏の風物詩だ。



## 青林堂歳時記 ③

「そんなある日、長井さんが言うには、『今年のボーナスなんだけどな、みんなに分けるとホンのわずかになっちゃうんだけど、全部合  
わせるとクーラーが買えるんだよ』中には反対する奴もいたけど、とにかくクーラーを買うことになって。その年のボーナスが、」

排便の後肛門をぬぐったらチリチリとした痛みを感じ、見ると今日も  
血がついていた。おまけに赤黒いただれたような皮膚の破片まで落とし紙に  
付着している。その紙の表面には黄褐色の糞便と共に赤い鮮血がにじみ  
微かに黄色味をおびた浸出液が回りに――



細部にいたるまで  
余人の想像を許さぬ  
リアリズムで描きあげれば、  
人間の苦悩の因って来る  
ところを現実を直視して  
描きあげた傑作として  
『ガロ』入選はまちがいの  
ないところでしょう。

それから、  
マンガ家に痔はつきもの  
ですから治療しても無駄  
です。





次の葉書は、  
埼玉にお住まいの匿名の  
女性の方から――



誠に恐入りますが只今執筆中の  
『ガロ』投稿作品に関する資料として  
左記の事に就て何卒御教授下さい  
ませ。その知識無き為、體をこわす  
ことがあると伺いましたから。

、××は、カ月に何回を適度となすか。  
、月経が平常より遅れた場合、妊娠か  
否か不明の時××して宣しきものか。  
若き妻



これは作品を投稿したいというのは  
ウワベだね。盗っ人の昼寝で  
アテコミがあると見た。シンジツは  
実際の夫婦生活上の知識を知り  
たがっているのだ。これは――

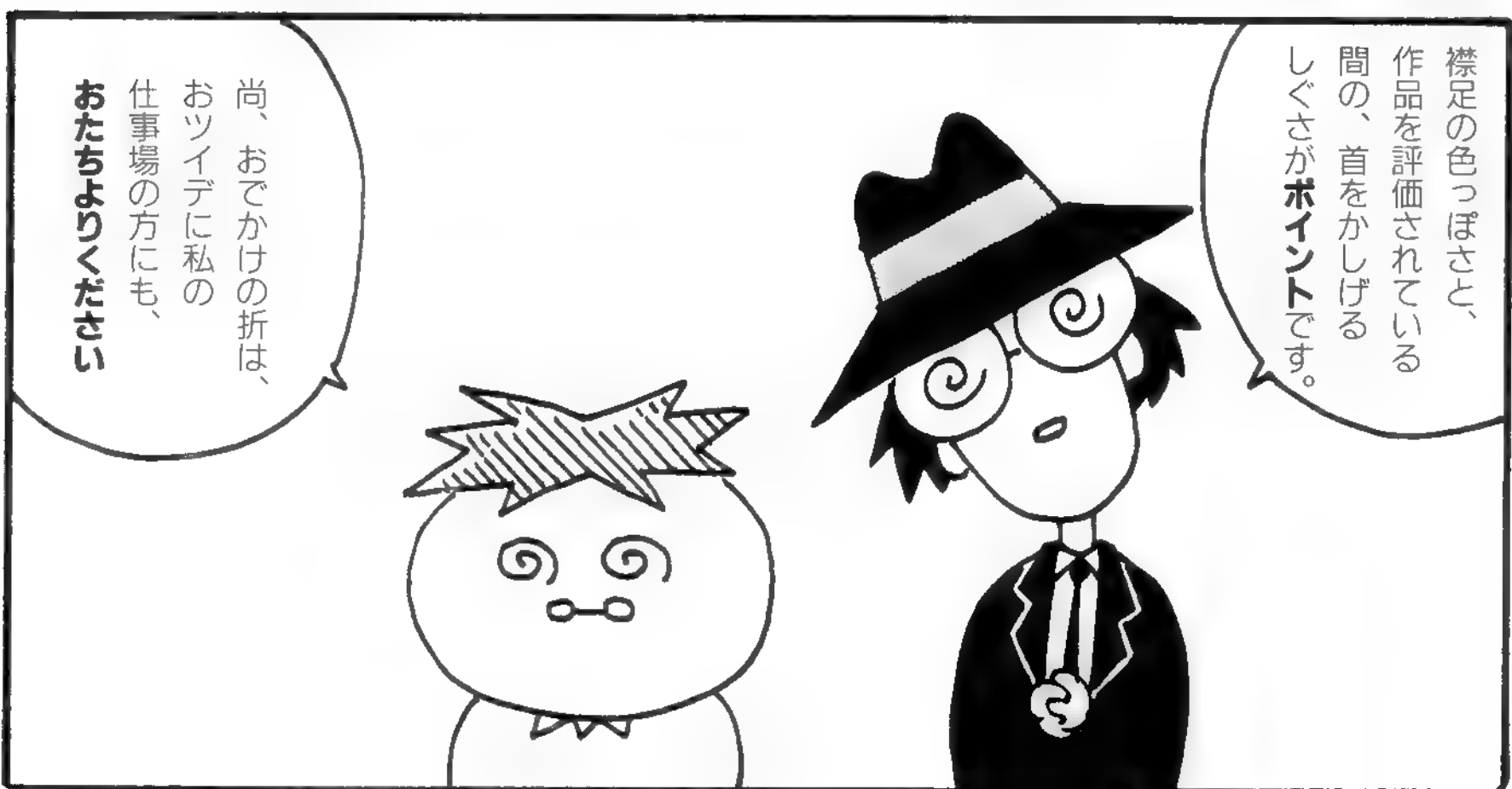
“その知識無き為、  
體をこわす”云々が  
怪しいではないか。

この場合、××の知識  
よりも、むしろ、  
ポイントを最後の  
“若き妻”に置いた  
方が絶対によろしい  
と思います。



# 水木アシスト列伝①

『ガロ』初期の新人達は、水木しげる氏のアシスタントにつき、経済的に助けられ、さらに技術を上げていた。つけ義春氏は別格としても、池上遼一氏、鈴木翁二氏などである。『水木先生はお忙しくて、人物の顔しか描かないようなこともあり、背景どころか、





次のお八ガキは、東京足立区にお住まいの学生、杉田和彦くん22歳から――小さき項周囲の者達の悪習に困って  
 ○○過多に至り、その發育全く不能と相成り、加うるに早漏症となり、包莖は短小となりました。



以上述べたような次第であります、之に対し復活膨大剤として適当な物あらば何卒御知らせ下さる様一重にお願い申し上げます。

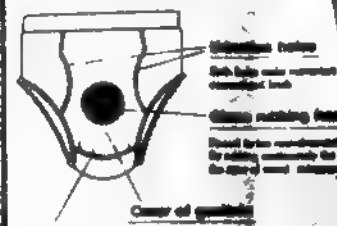
## 水木アシスト列伝②

人物もほとんどぼくらで描いていた」と某氏。でも、この仕事の中で美しいペンタッチを身につけた作家が大勢いるのである。これは内緒の話だが、彼等の中でアシスタントとしては（あくまでアシスタント）あまり役に立たなかったのはS氏という噂も……。

だんだん『ガロ』と関係なくなってきたが、おもしろいのでお答えいたしましょう。

THE STRUCTURES AND FLIP OF OUR VIGOR PANTIES

FRONT ELEVATIONAL VIEW



新発売!

ガーパ

包莖ではモテるワケがない!

女の子は包莖をどうみているか? 出版社のアンケートで次のような結果

包莖・短小・早漏という三拍子が揃っているような天の恵みを、あだやおろそかに思っ治療してしまっはなりません。

パンツ構造図

内面正面図

あなたが背負ってる苦しみ・悩みは、全男性の根原的苦悩に通じます。



これを突き詰めて作品を描き『ガロ』に投稿なせば、必ずや巻頭を飾る大傑作となるでしょう。



長井さん満州話①

青林堂の昼休み、長井勝一氏にせがんで満州の思い出を聞き出していたという渡辺和博氏。「戦争中の話って、誰の話でも面白い。何度も話す中で洗練されているからね。それに昼御飯は楽しく食べた方がいいし。長井さんは満州航空という所にいたんだけど、奥地に、

なにかウレシそう  
じゃありませんか？

必要以上に

ないないっ  
そんなことは  
絶対ないっ

おれ包茎なんだ。

これは何という  
短小さ。

人生にとって  
早漏ってなんなの  
でしょうか



では今日最後のおハガキ。  
東京都新宿区にお住まいの  
ペンネーム「シユラト命」  
さんから

なんでそんなのが『ガロ』  
に投稿しようとするんだ  
よ。



こんな人

先日、某誌にて近來眼科で二重瞼を二重に成形致すこと  
可能の記事を、読致しました。恰も私が、二重瞼の持主であります。  
文化的生活に志す現代女性は、出来ることならば、二重瞼を二重に  
直すのが適当であると思われます。

併しその手術が口に申すほどすべて成功的に行われるもので  
しょうか。或いは失敗ありて取りかえしのつかぬ奇形になる  
ようなことは無きものでしょうか。確定のところを知りたく  
御同情ある返答をお待ち申し上げます。



「文化的生活に志す女性」は  
どうして二重瞼にかぎるん  
でしような。

現代における美容整形技術は  
大変進んでおりまして。



## 長井さん満州話②

・測量に行くのに、虎や匪族（ゲリラ、等）が出て危険だから、護衛に山賊をやとうんだって。でも長井さんにやとわれるような山賊は貧乏だから、こっちで銃を貸してやらなきゃいけない。で、測量が終わると返してもらつ。持たせといて反乱起こされると困るから」



# 長井さん満州話③

「山賊に貸す銃を口バに載せて運んでたって話を聞いて、「俺もやりたい!」と思ったね。でも、満州に居た人ってみんな満州鉄道の駅長だった、とかホラを吹くんだけど、満鉄の駅長って一体何人いるんだろ? そんなに駅があったのか?」と笑うナベソ氏。

二重瞼の製造はもちろんのこと、失敗して奇形になるどころか、通常の顔を整形して奇形のようになおすことも可能なのであります。

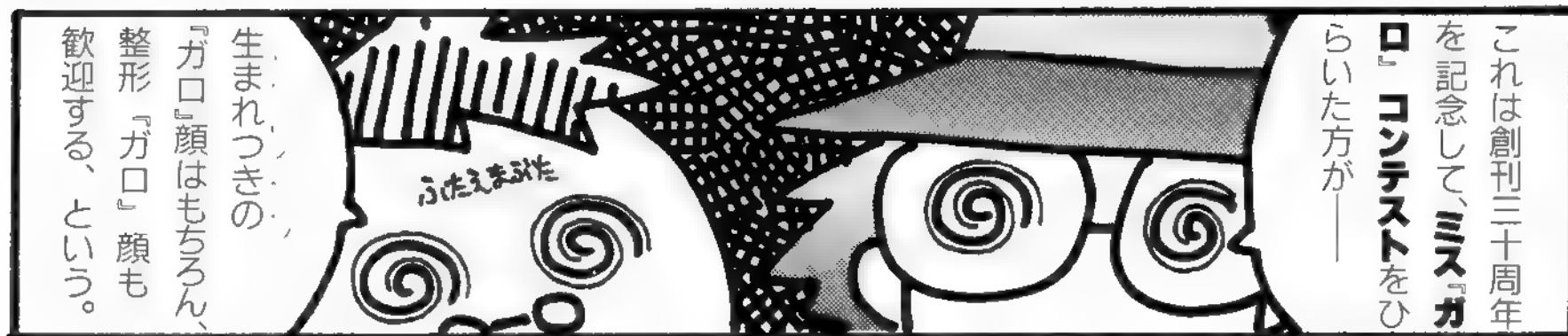
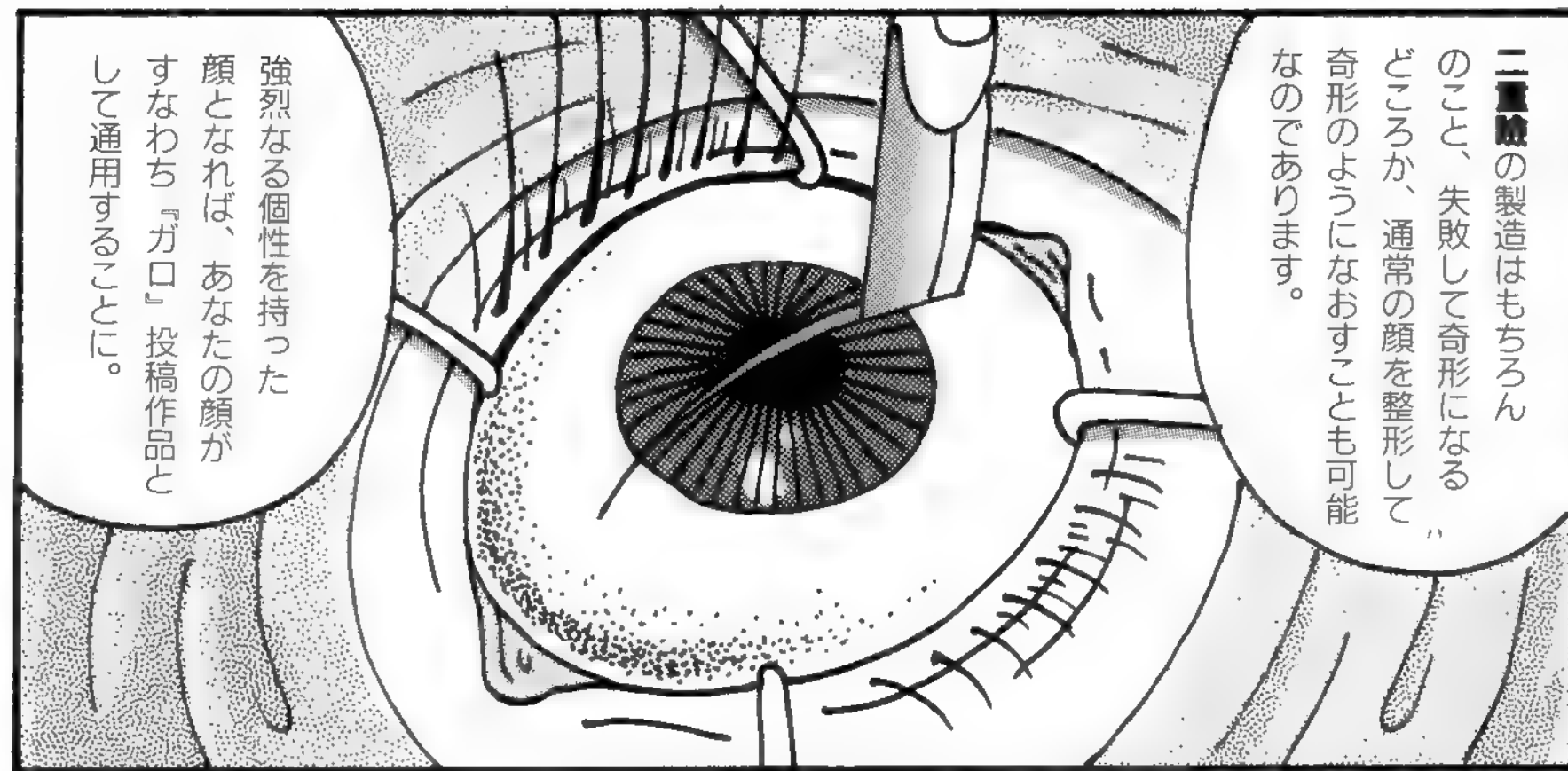
強烈なる個性を持った顔となれば、あなたの顔がすなわち『ガロ』投稿作品として通用すること。

これは創刊三十周年を記念して、ミス『ガロ』コンテストをひらいた方が――

生まれつきの『ガロ』顔はもちろん、整形『ガロ』顔も歓迎する、という。

独創性のある顔であれば顔面が多少未熟でも意欲的にとりあげよう。

講談社に負けるなっ!





3  
1 2 3 4  
パンチザウルス』などの異色マンガ誌が、産声を上げては淘汰されていった。その

平凡パンチとほぼ同時期に創刊された『ガロ』は、三〇年近い歴史の中で常に『ガロ』的であり続けている。

## 第9章 マンガ界の新陳代謝

新陳代謝の様子は、音楽界のそれとも似ているように思われる。

2 3 4  
その年月の中で、手塚治虫の「火の鳥」を軸にした『COM』や、『COMICばく』『NEW



# 時代と 『ガロ』と 僕と……

## 「影響」という 視点での 『ガロ』史

YONEZAWA, Yoshihiro

## 米沢嘉博

【プロフィール】1953年3月21日、熊本県に生まれる。明治大学卒。コミックマーケット代表。マンガを中心とした評論活動が続ける。著書「戦後マンガ史」3部作（新評社）などの他に共著多数。

### はじまりの頃

とりあえずぼくが『ガロ』を四号目から買い始めたことを記しておこう。何故に四号目かというなら、創刊からの三冊は、小学生だったぼくには金を払うことのできない再録雑誌にしか思えなかったのだ。わずかなページ数の水木しげるのためだけに、買うことは出来ない相談だったのである。しかし、創刊号を本屋で見た時に受けた感覚とは、あつ、貸本マンガが売っている、しかも大判だ、というわけのわからない興奮だった。

『ガロ』は当初、明らかに貸本マンガ短編集『忍法秘話』（青林堂）が形を変えたものだった。メンバーはほとんど同じで、当時人気の忍者マンガを内容としているのも同じだった。が、『ガロ』は貸本マンガ本から大きく一步を踏み出していた。それが、B5判というサイズの大きさであり、一般書店で万人が買えるという二点だったのである。それはこの他大きな意味を持っていたのだ。

時はまさに東京オリンピック直前、時代は大きく変わろうとしていた。貸本短編集『影』の創刊から一〇年、一時隆盛を誇った貸本マンガ業界は、六二年あたりから落ち込み始め、危機的な状況にあった。日々音もなく出版社がつぶれ、一冊あたりの部数は三千冊を割るところまできていた。



『ガロ』の創刊とは、貸本マンガ出版社が普通の出版社へ成り上がることを意味していたし、貸本界に見切りをつけた上での冒険とも見えたのだ。

これを見てなのか、日の丸文庫が平田弘史、水島新司、山本まさはるといったメンバーでB5判月刊誌『まんがサンキュー』をこの年に創刊させている。貸本店、小取り次ぎに頼った形の出版から、一般書店へという動きの先陣を切ったのが『ガロ』だったのである。同年には『カッパコミックス』の『鉄腕アトム』が創刊されている。消費社会が動き出し、マンガ本は借りて読む共有する存在から、個人所有のものへと、この年あたりを境に変わっていくことになる。

また『ガロ』は白土三平の「カムイ伝」を发表する場としての意味を持っていた。人気作家のワンマン雑誌というよりは、制約に捉われない「描き手」の為のメディアの創設と受けとめられたのだ。新興勢力である「劇画」にライバル意識を燃していた手塚治虫が自らのファンクラブ誌的性格の『鉄腕アトムクラブ』を発展解消させて『COM』（虫プロ商事）を創刊させるのは六六年末のことだ。明らかに、「カムイ伝」に対抗するものとして「火の鳥」はあった。『ガロ』の劇画に対して『COM』は当初児童マンガという立場をと

った。『COM』は『ガロ』がなければ、なかったかもしれない。そして、やがてこの二つはマンガマニアを二派に分けていくことになっていく。

その頃には、山川惣治が絵物語の再生を目指して『ワイルド』を創刊させ、本当に終息しかかっていた貸本業界では、転身を担った光伸書房（日の丸文庫）が『ごん』『劇画マガジン』『まんがジヤイアンツ』等を次々と創刊させていった。『ガロ』の登場は所謂マニア誌の一つの形を創り、その歴史の始まりとなつたことはまちがいないだろう。また、B5判というサイズが、ドラマ、物語中心だった貸本劇画に、「画」への指向を植えていったと見ることもまちがってはいまい。『ガロ』の創刊とは、この他大きな意味を持っていたのである。

## 七〇年下という時代の中で

水木しげるやつげ義春の作品リストにひかれてマンガ評論誌『漫画主義』を購入したのは中一の時だった。佐藤忠男や佐々木守、上野昂志の文章も含めて、そんなものを読んでしゃべる小賢しいガキは、地方都市において「アカ」と言われた。佐世保闘争から七〇年安保に向けて時代は走り出



していた。『ガロ』はこうした七〇年下の状況に  
対して、マンガ表現としてアクチュアリティを持  
つことに意識的だった。少なくとも、受けとめる  
側は、そこに時代を嗅ぎとっていたのである。

おそらく、『ガロ』に寄る形で展開されていっ  
た『漫画主義』のマンガ評論は、それまでの教育  
者たちによるそれとは違った、マンガ本体に則し  
たものだった。民衆のまなざしとマンガが会う  
ところに生まれる力を読み解こうとする評論、そ  
れは、まぎれもなく、日本における個有の大衆文  
化であるマンガ、の本格的評論の始まりだった。

だが、ここにあった劇画偏重主義は、七〇年代頭  
まで尾を引き、語られるべきマンガとは『ガロ』  
の作品であり、劇画でなければならぬといった  
傾向を生んでいくことになる。

また、こうしたマンガへの「言葉」は思いの他  
大きな影響力を持っていた。七〇年に発表された  
「ねじ式」は、天沢退二郎等、言葉に変換された  
ものによってさらに大きな評価を得ていくことにな  
る。六七年頃より登場していた佐々木マキ、林  
静一といった新人たちの作品も、そこに従来のド  
ラマや物語構造が欠如していたが故に、「言葉」  
が必要とされた。「難解マンガ」あるいは「アン  
グラマンガ」「サイケマンガ」と様々に呼ばれた

それらは、詩人、評論家、作家等を巻き込んで、  
「現代芸術」として語られていくことになる。連  
続するタブロー……それは美術評論の言葉で読む  
ことはできそうにもなかったのだが。

そうした中の赤瀬川原平の誌上への登場は、ま  
さにマンガと前衛芸術の接近と見なされた。後に  
『朝日ジャーナル』でトラブル「桜画報」は七一  
年に『ガロ』に発表されている。『ガロ』は進歩  
的インテリが語ることでできるマンガ誌となり、  
それに応えようとするところも確実にあった。

——それは形を変え、面白主義としての嵐山光三  
郎に受け継がれ、安西水丸と組んだ元祖ヘタウマ  
マンガ「怪人二十面相の墓」、七五年の篠原勝之  
による「糸姫」（原作Ⅱ唐十郎）、ついには湯村輝  
彦による「ペンギンごはん」（原作Ⅱ糸井重里）  
を生むことになっていく。七〇年代に入ってから  
の『ガロ』は意識的に新しい文化を創り出そうと  
していた。

が、一方には『新青年』（大正モダニズムやエログ  
ロナンセンスの）的世界を思わせる川崎ゆきお、淀  
川さんぽ、陰溝蠅児（谷弘児）等の作家がおり、  
また、私小説的な世界を描く安部慎一、鈴木翁二  
等も人気を得ていた。一言で言うならノスタルジ  
ーと四畳半フォーク的な世界である。それらは、



確実に七〇年代に入ってから日本のフォーク、ロックと通底していた。ハッピーエンドの「ゆでめん」は林静一のジャケットが『ガロ』を思わせ、たし、確か遠藤賢一の投書も載ったはずだ。中央線沿線のフォーク喫茶にマンガ家たちが出入りし、永島慎一のアシスタントだった三橋誠（乙瑎）は、やがてシバという名でフォークのアルバムを発表する。あがた森魚の自主製作盤「赤色エレジー」の通販も誌上で行なわれた。『ガロ』は日本のオリジナルなフォーク・ロックに影響を与え、また影響を受けていった。——七〇年とちよつと遅れるが、かつて貸本劇画誌や『COM』に作品を載せた泉谷しげるが久しぶりにマンガを描いたのも『ガロ』だった。

七〇年以降、目標を失った世代にとって『ガロ』の創り出していた世界は、表現の基盤となる疑似ユートピアを感じさせていたような気もする。生や肉体の痛み、そして戻るべき「少年」の風景。イラスト、絵画、唄、コピー、小説……。『ガロ』は表現のきっかけを与え、やがてそれは何らかの形で誌面に還元されていったのである。

## 80年代の展開

パンクとテクノポップが一緒にやってきた頃、

マンガ界ではニューウェーブブーム、三流劇画ムーブメントが起こっていた。仕掛けたのはぼくらなので語りにくいところもあるが、その時『ガロ』でデビューした作家たちがどちらのシーンにもいた。ひさうちみちお、近藤ようこ、奥平衣良、蛭子能収、……。

七〇年代末から八〇年代、はつきり言ってしまうなら『ガロ』はメディアとして、力を持たなくなってしまっていた。七〇年代半ばから進行していった少女マンガ、ラブコメへと至るマンガの動き、マニア誌、専門誌、新青年誌を始めとした、マンガ雑誌の創刊が招いたマンガの氾濫といった中で、『ガロ』はワンオブゼムとなっていたのだ。つまり、かつては『ガロ』でなければ載らなかったものが、現在ではそれは何処に載ってもおかしくないという状況となり、マンガ誌としては数の中に埋没していく結果となったといえるだろう。

が、そこにはまだ見ぬ才能があった。そして新しい才能が登場してくる。杉浦日向子が、たむらしげるが、鴨沢祐仁が、何処かに連れていかれて、メジャーな形で登場させられてくる。『ガロ』は、メディアの為の「メディア」となったと言えるかもしれない。それは作家に留まらない。『ガロ』



の編集者でもあった南伸坊、渡辺和博は、イラストレーター、エッセイストとして活躍する。それは遠く、嵐山光三郎から連なる『ガロ』面白主義の、一般での前面展開だ。一時期世間を騒がせたトマソンやら路上観察学会は、どう見ても『ガロ』を母胎にして生まれてきたものだろう。

八〇年代、『ガロ』はその生み出した才能がマスコミの中で様々に活躍するのを尻目に独自の道を歩んでいった。「カムイ伝」の第二部は『ビッグコミック』で連載が始まり、同誌でデビューした池上遼一、矢口高雄、どおくまん……は商業誌で活躍し、杉浦日向子、内田春菊、蛭子能収等はマンガを超えて話題となっていた。『ガロ』の生み出したものは、メディアに乗って日本の文化の中に一面を占めるようになってしまった。その影響は、深く静かに大きい。——だが、『ガロ』は大きく時代を動かしたことはないし、動かそうともしてきたことはない。あくまで唯我独尊、自らの道をただ歩み続けてきただけなのだ。だから、たぶん、何物からも大きく影響を受けず超然としてこられたのだろう。時代のベクトルと重なり合った時、一時の幻想が生まれはしたが、いま、振り返って確認すると、何時の時代も『ガロ』は『ガロ』でしかなかったことに気付くのである。

それを「生み出す者」「種蒔く者」と捉えることは可能だろう。ただ、常に刈り取る者になりきれなかったことに一面での不幸と、ポリシーがあったと思うのだ。『ガロ』が創刊されて四半世紀が経った。長いようで短い二五年である。毎月毎月、出るのを楽しみに待ち、舐めるように読んだ昔。今、ぼくにはそうした読み方はできない。マンガに対する飢えを失ってしまったのかもしれない。飽食の時代とは、食べ物に関してだけではないのである。総てが過剰に供給される。しかし中身は貧しい、とか言うことは言わない。マンガとは「消費材」なのだ。ミソもクソもいっしょくたにして、マンガなのだ。そうして、つまみ食いも構いはしない。『ガロ』だけがマンガ誌ではない。だが『ガロ』のないマンガ状況とは、ぼくにとつて実に寂しいものになるだろう。——それは『ガロ』の中に未だある「飢え」の感覚が、何処かで呼応するからだ。マンガとは、もっと面白く、何物でもあり得るはずだという、満たされぬ夢想への飢え。それは『ガロ』から発せられたメッセージであり、また読者から『ガロ』へ向けられた無言のメッセージでもあるだろう。その出会いのメディアとして、まだまだ『ガロ』は大きな意味を持ち続けているのである。



# 『ガロ』の サービス 精神



SUGISAKU, J-toro

## 杉作J太郎

【プロフィール】「杉作獣太郎」のペンネームでデビュー。この名前だと女の子にモテないという理由で、数年前J太郎に改名。週刊「NEWパンチザウルス」では、編集も担当。大槻ケンヂが師とあおぐ(?)、さすらいのよろずマンガ家。

マガジンハウス総務部・長田衛の家を根本敬、長戸雅之とともに訪れたときのことだ。

長田は良きマイホームパパであるから、娘を喜ばそうと、

「このお兄ちゃんたちはね、皆、漫画家さんなんだよ。そうだ、似顔絵を描いて貰おうか。いい記念になるよ」

と言って、私たちに娘の似顔絵を描かせたのだ。「動いちゃいけないじゃないか! プロの漫画家がせっかく描いてくれるのに!」

と、長田が娘を怒鳴りつつ、私たち三人は三枚

の似顔を描きあげた。

「さあ、できたよ」

娘は、モデルから開放され、喜んで三枚の絵を長田とともに受け取ったが、娘の顔は一転して暗い顔になった。三枚とも、性別はおろか、年齢も判らない、果たしてこれが少女の顔かいな、という物に仕上がっていたのだ。中でも、根本敬の描いたものは、安達ヶ原の鬼婆のようであった。

「もっと喜ばなくちゃダメじゃないか!」

長田が叱ると娘は泣き顔になった。それを見てとつた根本敬は、

「あつ、そうだ。これはこうなんだよ」

と言って、その鬼婆の絵の傍にサラサラと「五〇年後の望<sup>のぞみ</sup>ちゃん」



と書き加えたのだが、それが何のフォローにもなるはずはなかった。だって、未来図を描くのな  
ら何も不自由な姿勢でモデルになる必要はなかつたのだし、仮りに五〇年後とはいえ、鬼婆ではあ  
んまりだ。もちろん、それはキャバレーのホステ  
スを描いた長戸にしても、ゲゲゲの鬼太郎を描い  
た私にしても同じである。いよいよ娘が泣き出し  
そうになるのを見て、長田は深くうなずくように、  
「『ガロ』の漫画家さんだから……ねえ」

と娘をなぐさめたのだが、まだ小学校にも上が  
らぬ子供に、『ガロ』云々と言ったところで問題  
は解決しないのであった。

まあ、一見、何て言うことのない話である。

が、実は、このエピソードの中にこそ、今日の  
『ガロ』とはなにか？ また、なぜ今日の『ガロ』  
の漫画家が特殊漫画家と呼ばれるかの回答が隠さ  
れているのだ。

それは、こうである。

普通ならば、私たちはその時、娘が喜ぶ絵を描  
くべきであった。可愛らしく描くべきであった。  
実際、その娘は母親似の可愛らしい娘であったが、  
可愛らしいならば、より一段と可愛らしく描くべ  
きであった。

それこそが、モンマルトルの丘の似顔絵描きを

引きあいに出すまでもなく、漫画家のサービス  
精神スピリットというものであろう。モデルが三戸部スエ  
のような老婆なら小川真由美のような熟女に、小  
川真由美のような熟女なら昔のヘプバーンのよう  
なレディに描くのが漫画家のサービス精神スピリットとい  
うものであろう。

だが、少なくともその時、私たちにサービス  
精神スピリットというものはなかったのである。

そして、漫画家に必要不可欠とも思われるこの、  
読者へのサービス精神スピリットが恐ろしく欠如したコミ  
ック誌こそが『ガロ』なのである。よく、私たち  
に他誌の編集者が仕事を依頼する際に、

「『ガロ』じゃないんですから、そこんこヨロ  
シク！」

と付け加えるケースがあるが、これは、

「サービスしてくださいよ」

という意味だと受け取ることになっている。そし  
て、一応、お金を貰う手前、サービスをする（し  
てるつもりだけだったりして）わけである。

さて、ここで何故、『ガロ』の漫画家がサービ  
スしないのだろう、という問題が浮上する。

その理由は、作家の性格的なもの、生きる姿勢、  
ポリシー等、それぞれだと思つが、やはり大原因  
は、『ガロ』という雑誌の持つ性格であらう。



『ガロ』の編集者は、作品に関して注文をつけたことがない。

「読者のことを考えてくださいよ」

などとは、一度も言われた経験がない。これは、今日『ガロ』は原稿料が出ないからだと見る向きもあるが、私はもっと深い考えがあつて注文をつけないのだと理解している。

私も、一時期、フリーの編集者をしたことがあるので、雑誌業というのはサービス業なのだということとは知っている。常に編集サイドで考えることは、読者層の設定であり、その読者層がどうすれば満足するか、ということである。そして、それに失敗すれば、雑誌は廃刊に追いこまれてしまうのだ。

だが、『ガロ』にはそうした読者層の設定もなければサービスも存在しない。また、それは、読者の望むことでもあるらしく、読者欄に載る読者の声も、一言で言えば、

「あんまりサービスするな！」

というものがほとんどである。

話は少々それるが、近頃、『ガロ』以外の雑誌に於いても、『ガロ』的な漫画を目にするようになってきた。私のように専門家（なんじゃそれは）の目から見れば、それらはたとえ『ガロ』的

なふりをしていても、編集サイドと練りあげた「あざとさ」がミエミエなのである。早い話がカルト的読者を狙ってサービスされ尽くした人工的『ガロ』的偽作品なのである。AVで言うところの本番発射モノと疑似発射モノとの違いであると言えれば判り易いだろう（?）。

とにかく、話は一見それつつも言いたいことはバツチリ言ってしまったわけなのだが、つまるところ、『ガロ』は本物である。

何をもつて本物と言うかなどという陳腐な論説はこの際必要ないだろう。

とにかく、本物なのだ。

現代社会が至れり尽くせりのサービス精神<sup>スピリット</sup>の渦の中で、いつしか失ってしまった本物というところが『ガロ』そしてその漫画家の中には息づいているのだ。

そして、さらに言うならば、総てが混沌としてしまった今日の状況下、その出口を握っているのは『ガロ』の持つ本物性、無サービス精神<sup>スピリット</sup>でしかないはずだ。

しかし……子供の似顔絵はやはり良くない。子供は本物の手焼きせんべいよりも、オマケ付きキヤラメルの方が好きなんである。

望<sup>のぞみ</sup>ちゃん、ゴメンね。



# ガロコン 編集者

YAKU, Hiroshi

## 夜久弘

ぼくはおよそ二〇年間マンガ雑誌の編集を職業にしていた。マンガ業界の片隅で過ごした期間は短いものではなかったが、その間、絶えず意識していたマンガ誌があった。それは自らが関わっていた雑誌でも、そのライバル誌でもなかった。

『ガロ』だった。

『ガロ』に対するぼくの意識というのは、コンプレックスといってさしつかえない種類のものだ。つまり「マザコン」のような短縮ことばでいえば、ぼくは「ガロコン」編集者だった。

一九六四年、『ガロ』は白土三平の新作発表の場として創刊された。ぼくが隔週刊のマンガ誌の編集者になったのは、その四年後だった。

当時、青年マンガ誌は雨後の筍の様相を呈していた。次から次へと青年向けマンガ誌は簇生し、おおむね軌道に乗っていった。

突然やってきた青年マンガブームは当然のよ

うに描き手不足の事態を招いていた。

編集者にとってまずしなければならない仕事はマンガ家を確保することだった。

原稿を受け取りに行ったマンガ家の仕事場で編集者同士が三すくみ、四すくみの状態になることはしばしばあった。

かつて貸本マンガの作者だったマンガ家たちは、自らの生産能力をほとんど考慮することなく原稿の依頼を受け入れていた。無理もなかった。つい直前まで貸本マンガの衰退とともに失業を余儀なくされていたかれらは、原稿の依頼を断わるなど思いもよらなかったのだ。

一旦マンガ家のもとへ出掛けると、編集者の帰社は未定になった。マンガ家はわずかな仮眠をとりながら次から次へと原稿を仕上げていった。作品の出来不出来はこの次だった。

あるマンガ家の原稿待ちをしているときだった。マンガ家は手にしたペン先をぶつぶつ言いながらいじくりつづけていた。何をしているのかと訊くと、かれはペン軸にペン先を嵌めたいのだが、二つ重なって離れないのだと答えた。かれの手にはいるペン先はどうみても一つだった。放っておけば、かれは一時間でも二時間でも一つのペン先をふたつに分離しようと無駄な努力を続けて

【プロフィール】1945年、兵庫県生まれ。20年にわたるマンガ雑誌編集長を経て独立。84年～87年、つげ義春を中心にした季刊マンガ誌『COMICぼく』の編集長を務める。現在但馬弘介のペンネームでマンガ原作者としても活躍中。著書に編集者時代の体験を綴った『COMICぼくとつげ義春』、エッセイ『心優しきジョガーたち』（いずれも福武書店刊）がある。



いたに違いない。連日の睡眠不足からくる幻覚が起こっていたのだ。

このころ似たような話はあちこちで聞かれた。机上に用意した二〇枚程の原稿用紙をエンドレステープのように繰り返し繰り返し数えては溜息をついていたマンガ家の話。原稿を描いている姿勢をとりつつ目を開いたまま眠っていたマンガ家の話などだ。そんな状況では作品の質を問うよりにより原稿を入手することが第一だった。

マンガ編集者というのは、マンガ家にへばりついて原稿を取ってくる徹夜要員、もしくは忍耐力働者だナ、と当時認識した。なにしろマンガ雑誌の編集者になりたてで、出合い頭<sup>ガシラ</sup>的に第一次青年マンガ誌ブームに遭遇したばかりにはそういうものだと思うほかなかった。

作品が面白い面白くないかを論じるのはぜいたくだった。作品が印刷に間に合うか間に合わないかで苦悶していたのだ。

そうやってぼくらがつくりあげたマンガ誌を超然と見下ろしていたのが『ガロ』だった。『ガロ』は白土三平の「カムイ伝」を中心に編まれていた。一回掲載分百ページの「カムイ伝」はぼくらが手掛けている作品とは内容の深さにおいてもスケールにおいても桁違いだった。とても同列に論じら

れるものではなかった。当然といえば当然である。過重労働の果てに慢性睡眠不足で苦しまぎれに捻り出した思いつき作品が「カムイ伝」と比肩できるわけがなかった。

ぼくを打ちのめしたのは「カムイ伝」だけではなかった。他のページを埋めた作品のひとつひとつが放つ強烈な個性も衝撃的だった。とりわけつげ義春の作品には毎回目をみはらされていた。一般の商業マンガ誌では考えられない素材がみごとに作品となっていた。こんな世界がマンガで表現されてしまうのか、類型的で作為がみえみえのストリーマンガを送り出すことに汲々としていたぼくは、ただ呆然とそれらの作品を眺めていた。

そして『ガロ』に自分が直接関わっているわけでもないのに、『ガロ』のようなマンガ誌が存在することをマンガ業界にいる一員としてずいぶん誇らしく思っていたのだった。

やがて『ガロ』から白土三平が抜け、つげ義春もブツツリと作品を発表しなくなる。いってみれば『ガロ』の中心的役割りを担っていたスターがいなくなったのだ。このことは『ガロ』の存亡にかかわる打撃だったはずである。しかし、『ガロ』はそれを転機としてむしろ一層その存在価値を高めることになる。



すなわち日本で唯一のマンガ家の才能を発掘し、育成する貴重な雑誌となったのだ。

新人のマンガ家をデビューさせるというだけでなく、マンガ誌も行なっている。けれどもマンガ家の個性を吸収する許容量は『ガロ』とは比較にならないほど小さい。一般商業誌からデビューするマンガ家はどこかブローラーに似ている。個性を伸ばすことよりも商業戦略にのっとった型にはめられてしまうせいだ。それに較べて『ガロ』はとことんマンガ家の個性に着目し、それを開花させることに腐心している。

『ガロ』の誌面には強烈な個性が自在な世界を現出している。先見の明がない三流編集者のぼくは、ときには新しい才能の登場に首を傾げることもあった。だが、いつしか傾げた首は元に戻り、『ガロ』への信頼感を増幅するというふうだった。

『ガロ』からは多くのマンガ家たちが誕生し育った。そして、育ったマンガ家たちは一般商業誌の要請に応じて活躍の場を移行していく。育てるだけ育てて、潔くマンガ家を放出してしまう『ガロ』、なんとも損な役回りに思えるが、それができるのは、青林堂の『ガロ』というよりも日本のマンガ界の『ガロ』の自負があるせいだろう。

ぼくは一九八四年に『COMICぼく』という

マンガ誌を創刊した。つげ義春が長い沈黙の末に描きあげた『散歩の日々』が雑誌誕生のきっかけになったのだった。

『ガロ』が白土三平の作品発表の場として創刊されたように、『ぼく』をつげ義春の舞台とするつもりだった（そのことはつげ自身にとって甚だ迷惑であり、そのために四年間、かれを苦しめることになったのだが……）。

つげ義春の新作を得たぼくは、かれを中心にした雑誌をつくるには、ほかにどのようなマンガ家に原稿を依頼すればいいか頭をひねった。どの雑誌でも読めるようなマンガ家の作品はほしくなかった。AさんがダメならBさん、そんなふうに代替の利く個性の稀薄なマンガ家にも依頼したくはなかった。

つげ義春の作品を入手してから半年後に『ぼく』は書店の店頭に並んだ。読者からいち早く寄せられた声は「往年の『ガロ』みたい」だった。いわれてみればたしかに『ぼく』は遠い日の『ガロ』の匂いを放っていた。

ぼくは意図的に『ガロ』に似た雑誌をめざしたのではなかった。自分の好きなマンガ家に拘わった結果がそうだったのだ。

花輪和一、やまだ紫、近藤ようこ、杉浦日向子、



つげ忠男、創刊号を飾ったマンガ家の大半がかつて、あるいは現在も『ガロ』に深いかわりを持つマンガ家だった。

『ガロ』に似ている、そういわれるとぼくはとても幸せな気分させられた。憧れの雑誌と同じようなマンガ誌をつくっていると認知されるのは痛快でさえあった。だが幸せな気分には同量の後ろめたさもつきまとうた。

それは、たしかに形のうえでは『ガロ』と『ぼく』は似ていたが、本質的な部分ではまるで違っていったからだ。

初期の『ガロ』は日本のマンガの最上質をめざしていた。そしてある時期からは日本のマンガの底辺を拡大し才能の芽を育むことに血道をあげていた。

『ぼく』をつくるぼくには『ガロ』のようなアクチブな目的意識は十分の一もなかった。つげ義春を始めとする異能の士たちに寄りかかり甘えるだけで『ぼく』の号を重ねようとしていたのだ。

新人のマンガ家もほとんど育てることはできなかった。なんとか採算ベースに乗せたいという社内事情があつて新人を育成している余裕がなかったと弁解はできるけれども、やはり編集者として非力だったのだ。

『ガロ』の青林堂とぼくの在籍していた会社は二百メートルほどの距離をおいて同じ通りに面していた。『ぼく』へ原稿を持ち込んでくるマンガ家は決まって『ガロ』へも足を向けた。原稿を断わったマンガ家が青林堂方向へ去っていくのを見送りながら、ぼくはかれが『ガロ』編集部でどう評価されるのかひどく気になった。自分は金の卵を逃したのではないかという不安が残った。そして、かれには悪いけれども自分の評価しなかった原稿が青林堂でも不採用になったのを知るとホッとするのだった。

『ぼく』は一九八七年秋一五号の刊行をもって休刊に入った。ぼくはそれを機にマンガ編集者生活に別れを告げた。

そしていまぼくは『ガロ』の純粋な一読者である。津野裕子、山田花子といった好きなマンガ家がいる。これから好きになれそうなマンガ家もいる。何年後かが気になるマンガ家もいる。こんな『ガロ』の構図は二〇年来一貫している。

最近の『ガロ』はツマらないという声を耳にすることがある。ぼくはこういう声には領けない。最近の『ガロ』は不幸だというなら領ける。『ガロ』が不幸な時代はマンガ界そのものが不幸な時代なのだから――。



# 青年漫画の先駆者

『ガロ』はなつかしい感じのする雑誌だ。私が一番影響を受けたのは手塚先生なのだが、白土先生から受けた影響も強く、その白土先生の「カムイ伝」が載っている雑誌として、まめに読み続けていた。「カムイ伝」によって社会の矛盾、といったものを知り、深く考えさせられたものだ。

同時に、まだデビュー前だった私は、新人の載りやすい雑誌としても注目していた。メジャー誌でデビューできた為、『ガロ』に描く機会はなかったが、いつか『ガロ』でしか発表できないような漫画が描きたくなったら……と考えたことはあった。もしそうしていたら、今の永井豪の評価も少し違ったものになっていたかも知れない。

『COM』の方には、なにしろ手塚先生の本なので、何か協力させてもらおうと作品を発表したことがある。手塚先生や石森先生の描



NAGAI, Go

## 永井豪

【プロフィール】 1945年9月8日、石川県生まれ。石ノ森章太郎のアシスタントを経て、67年、「目明かしポリ吉」(ぼくら)でマンガ家デビュー。68年、「ハレンチ学園」が大ヒット、映画・TV化される。80年、「凄ノ王」で講談社漫画賞受賞。他の代表作に、「デビルマン」「バイオレンス・ジャック」「マジンガーZ」「あばしり一家」などがある。

いていた『COM』は『ガロ』と違って上品だったが(『ガロ』が下品だと云うのではない、言うなれば、台所の汚れが目立つような通俗性が強かったように思うのです……)『ガロ』も『COM』も実験雑誌というか、実に自由な創造の場だった。今にして思えば、この二誌が青年漫画の先駆者だったのだ。



# 『ガロ』の 未来



ISHINOMORI, Syotaro

石ノ森章太郎

『ガロ』は、ワレワレ『COM』族にとって  
は「宿敵」であった。

「宿敵」、即ちライバルである。それも良い  
意味の、だ。

『COM』は、ご存じのようにストーリーマ  
ンガの先駆者、故手塚治虫氏の主宰したマン  
ガ専門誌であり、時代の先駆けともなる実験  
作品なども多く載せていた。拙作『ジュン』  
などもそのひとつである。

そして『ガロ』もまた同じく、というより  
は、『COM』よりも更に過激に、マンガと

は何ぞや、マンガによる表現の可能性等々を  
模索していたように思う。

方法論には多少の差異こそあれ、目的はひ  
とつだった訳で、否応なしに、お互いに意識  
し合わざるを得なかった。当然そこには、次  
代を目指す者たちの活気が生じた。

現在、マンガは時代最高の表現メディアと  
して隆盛を極めている、かに見える。メジャ  
ー、マイナー誌併せて何千万部の量を誇り、  
出版業の70%に近い利潤シェアを占める、と  
まで言われる。

が、果たして、真の意味での「黄金期」を  
迎えているのだろうか？

私見だが、隆盛を極めているのは「量」で  
あって、「質」ではない、ように思える。量  
産という言葉が在るが、機械的に押し出され  
る作品が大部分で、次代を思う熱気も視点も  
不足している、と思うのだ。

だからこそ、『COM』なき後の『ガロ』  
に、期するところ大であり、その存在価値を  
もう一度、真剣に考え直さねばならない。  
今こそ、そういう「時代」なのである。

【プロフィール】 本名、小野寺章太郎。1938年1月25日生まれ。宮城県登米郡中田町石森(いしのもり)出身。高校在学中「漫画少年」に「二級天使」の連載を始め、デビュー。小学館漫画賞・日本漫画家協会漫画大賞など数々の賞を受賞。漫画家生活30年を転機に「石ノ森」と改名。代表作に「サイボーグ009」「仮面ライダー」「ジュン」「マンガ日本経済学入門」などがある。



# ヘタウマの時代

長井さんには、「血染めの紋章」を、青林傑作シリーズという作家の自選シリーズとして出版していただいき、この時は、大変お世話になりました。この作品は、二二六事件を題材にしたもので、掲載誌の出版社が単行本化に二の足を踏んでいたところだったので。

私は、大学時代に描いた劇画が商業誌に認められてマンガ家としてデビューしたので、『ガロ』に登場する機会はなかったのですが、創刊号を手にした高校二年の時から愛読していた雑誌です。既成のコミックの概念を無視した玉石混合の作品群を一冊の中に詰め込んでいたのは魅力的でした。

『ガロ』最大の功績は、七〇年代に渡辺和博さんや蛭子能収さんなどの魅力あるヘタウマ路線を生み出したことだと思います。『ガ

KAWAGUCHI, Kaiji

かわぐちかいじ

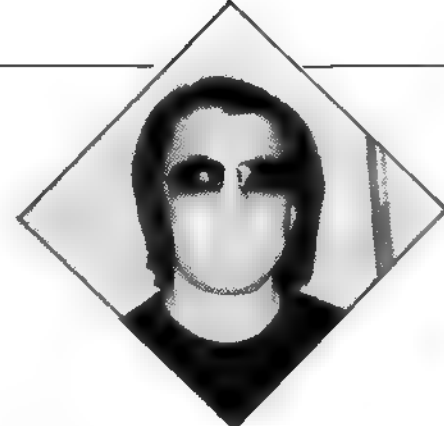
【プロフィール】1948年7月27日、広島県尾道生まれ。67年、明治大学に進学し、漫画研究会に所属。70年、「夜が明けたら」を「ヤングコミック」（少年画報社）に発表して、デビュー。『アクター』と『沈黙の艦隊』で講談社漫画賞をそれぞれ受賞。他の代表作に、『血染めの紋章』『黒い太陽』『プロ』『獣のように』などがあり、現在、話題作『沈黙の艦隊』をコミック・モーニングに、『メドゥーサ』をビッグコミックに連載中。



ロ』という「器」がなければ、このような新感覚のマンガが世間で認知されるのは、大幅に遅れたのは確かでしょう。

実験の場として、大手のマンガ雑誌の編集者は、『ガロ』の発する特異な電波を傍受し、彼らもそこから新人作家を発掘していったのは事実です。この功績はやはり大きいのではないのでしょうか。





# 『噂の真相』

OKATOME, Yasunori

岡留安則

この本の企画はいつてみれば、わが『噂の真相』が創刊一〇周年を記念して別冊で刊行した『噂の真相の真相』のような内容だろう。一冊の単行本としてまとめあげられるというのはそれなりに編集者にとってはうれしいことだろうと思う。それも『噂の真相』のように自社発行ではなく、TBSブリタニカのような第三者的出版社から出版してもらったのだから、うれしさも二倍ということだろう。それにしても、過去の栄光はひとまず置くとしても、万年危機説の中で、あの『パンチザウルス』よりもマイナーなセンスで編集を続けながら雑誌が定期刊行されている事実

については敬服するしかない。まさか新人登竜門のためのボランティアで雑誌を出しているわけではないだろうと思うので、長井勝一さんはエライ。かくいう私も漫画とルポの違いはあるにせよ、編集発行人としてマイナーセンスの雑誌を刊行し続けているのだから、これまたエライということになる（笑）。

『ガロ』と『噂の真相』はマイナー雑誌の相互扶助活動の一環として交換広告を実施している。どう考えても『噂の真相』が『ビッグコミック』や『漫画アクション』と交換広告を実施するわけにはいかないことから見ても『噂の真相』と『ガロ』の間には何らかの共通性があるということになる。それはひとこととでいえば、自立ミニ資本という経営体とアーキーな誌面づくり、ということだろう。最近のSEXマンガ規制ブームにいつさいのことなく、前衛的・実験的誌面づくりに賭け続けて欲しい。そのことこそが『ガロ』の過去の栄光を引きついで漫画雑誌として生き残り続ける唯一の途なのだから。ガンバレ『ガロ』、そして個人的に林静一、根本敬サン。

【プロフィール】 1947年、鹿児島県生まれ。法政大学卒。「マスコミ評論」創刊編集長を経て、79年より『噂の真相』編集発行人。著書に「タブーなき闘い」（木馬書館）、「サングラスの中の女たち」（サンマーク出版）他、他数。

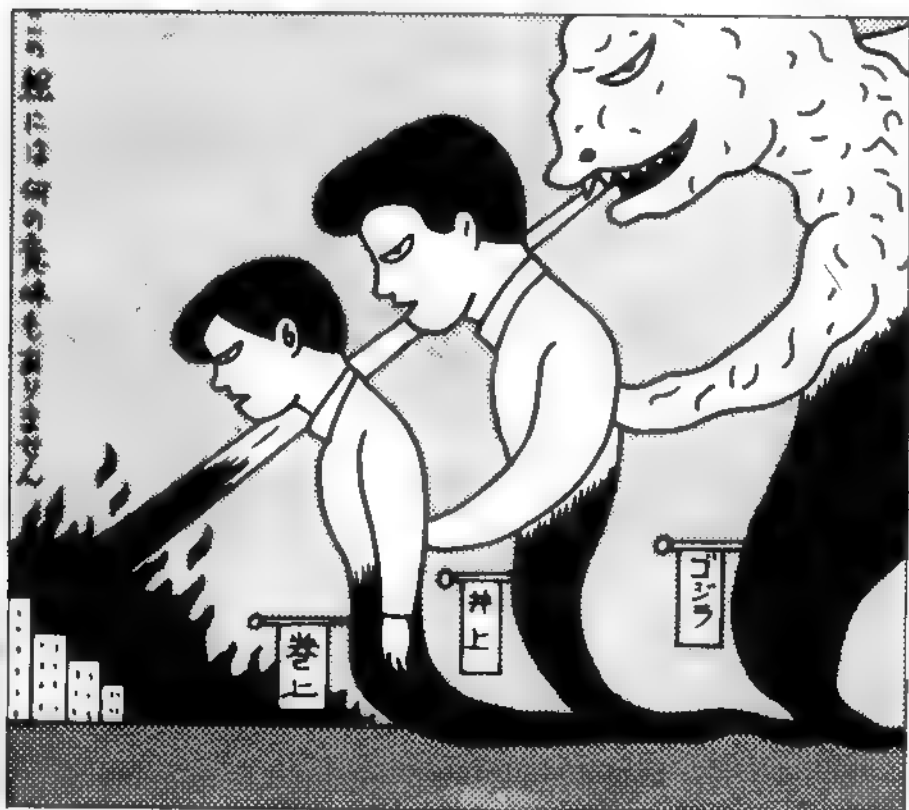


# 僕らの『ガロ』との関わり

MAKIGAMI, Kōichi

## 卷上公一

小学生の頃から読んでいた『ガロ』とは、直接の接点はないけど、『ガロ』出身の方々に



は、ヒカシューを結成してから、何かとお世話になったものだ。

南伸坊さんが、末井昭さんや上杉清文さんと『総合商社HAND-JOE』（命名は糸井重里氏）を結成した時、ヒカシューはそこに事務所を間借りさせてもらったりもした。

また、蛭子能収さんには、もちろん、シングル盤「私はバカになりたい」のジャケット画を描いていただいた。

花輪和一さんには、「浪曲二〇世紀」と題したコンサートの舞台装置を手掛けてもらった。今はなき虎ノ門の久保講堂で、大阪の浪曲師の京山小牛若さんを招き、平岡正明さんに司会進行役をお願いした、とっても妙なイベントだった。

あまりにお客さんが少なかったんで、知っている人は少ないかもしれないけど、花輪さんに描いていただいた巨大パネルは、ともかく凄かった。取っておけばよかったと今でも後悔している次第。ポスターやチラシもやってもらったけど、お会いできなかったのが残念だ。

【プロフィール】 1956年、熱海市生まれ。「ヒカシュー」のリーダー。79年「20世紀の終わりに」でデビュー。「じゃらん」「解決リコーマン」等のCMソングなども歌う、迫力のボーカリスト。作詞、演劇など多方面で活躍中。



# 半畳四 フォーク のように

INOUE, Makoto

井上誠

『ガロ』も『COM』も、創刊間もない頃から愛読していたが、ヒカシューとしての活動を始めてからは、ちよつと疎遠になっていた。そのうち、『COMICばく』が創刊されると、『ガロ』の代わりにそれを熱烈に読んでいたので、ますます『ガロ』から遠ざかってしまった。

優等生的な『COM』は、グループサウンズの衰退とともに休刊になったが、その直後、フォークソングが台頭した頃『ガロ』は圧倒

的に支持されたんじゃないかな。もちろん、『COM』以前に既に『ガロ』は凄いステイタスを確立していたのですが、少年時代の僕にとっては、音楽のムーブメントの移り変わりと両誌をデイズルブさせて捉えていたのでしょう。

面白いことに、シバみみたいなマンガとフォークの両刀使いが出てきたり、あがた森魚さんやハッピーエンドのジャケツトを鈴木翁二さんや林静一さんが描くなど、『ガロ』の持つ不思議な磁力には、ホントに驚かされます。

僕たちも蛭子さんをお願いしたことがあったし、最近では、丸尾さんも筋肉少女帯ジャケツトを手掛けているしね。

こういうことは、『COM』関係者ではあまりあり得なかったはずです。『ガロ』がサブカルチャー誌化していくのも、必然的なことだったのかも知れません。ただ、その無限のキヤパシティも、七〇年代の半畳四フォークのイメージから、なかなか脱皮できないように感じられます。これは永劫に続く「業」なのでしょうか。

【プロフィール】1957年、湯河原生まれ。77年に山下康と2人でシンセサイザーの即興ユニット「ヒカシュー」を結成。78～9年に巻上公一らが加わる。83年にソロLP「ゴジラ伝説」を発表し、好評を博す。





ISHIKAWA, Kōji

## 石川浩司

【プロフィール】1961年7月3日、東京に生まれる。81年頃弾き語りを始め、84年に初めて「たま」の名でコンサートに出演。以降、自主製作カセットやライブ活動を経て、89年に「イカ天」に出演して注目を浴び、90年にメジャーデビュー。「さよなら人類／らんちう」「さんだる」。

# かしまれた。

七、八年程前、あかねという友達の自主製作テープのジャケットに苦雅和さんとまの絵を使いたいと青林堂に行った事がある。とうじ魔とうじという友達とバンドを組んだ時は、アルバムジャケットを根本敬さんに頼んだので知り合いになり、妙な廃盤レコードの話を聞いた。「たま」というバンドを組み、ライブハウスでチマチマと演っている時、お客さんで永島慎二さんが来てくれて、今度家に遊びにきなさいと云ってくれ、山田花子さんは僕のやっていたミニコミ誌にマンガを描いてくれた。三橋乙瑎さんは虫の話をしてくれ、久住昌元さんのバンドとは共演し、サインを書いてもらった。「たま」が売れ出した頃、TVでみうらじゅんさんと顔合わせし、そのTVで氣にいつて招待してくれた山上たつひこさんの家では、とり・みきさんに会った。奥さんが美しかった。「月刊カドカワ」という雑誌で蛭子能収さんと対談をし、妻の実家と同じ団地に住んでいるのでビックリした。てなわけで人生、気付かぬうちに『ガロ』に囲まれてるとは、はは呑気だね。





CHIKU, Toshiaki

## 知久寿焼

〔プロフィール〕1965年2月10日、埼玉に生まれる。81年頃弾き語りを始め、石川と出会い、84年に初めて「たま」の名でコンサートに出演。自主製作カセット時代からジャケットのイラストを担当。90年以降の「ガロ」の目次イラストを手掛ける。



# どうも すみません。

『ガロ』。あ、ぼく『ガロ』買った事ないんです。本当に。よく考えたら……よく考えても買った事ないです。友だちがね、誰かしら友だちが持ってるんで、どっかしらにはあったんで、そういうところで見てました、いつもで、去年から金<sup>カネ</sup>まわり突然よくなって、ガロ買ってもちつとも痛くも痒くも何ともないやって感じになったら、感じになったのに、感じになったとたん青林堂さんからタダで贈られて来るようになりました。それでタダでは申し訳ないとゆうわけで、タダのお礼に目次イラスト毎月タダで描かさせて頂いております。これならいちおう執筆者とゆうことで月一冊タダで送られて来ても当然だもんね。けどその一応執筆者の当然のせいで、いちおうしっぴつしゃの当然としてこの原稿ひきつけざるをえなくなって、文章とっても苦手なぼくは二週間<sup>ニ週間</sup>切りのばしてもらってもこんなしか書けましえんのごめんなさいでした。しよぼん。





OHTSUKI, Kenji

## 大槻ケンヂ

【プロフィール】1966年2月6日（水瓶座）、東京生まれ。“筋肉少女帯”ヴォーカル。87年「高木ブー伝説」でインディーズ・ブームを席卷し、88年6月にリリースした「仏陀し」でメジャー・デビュー。他のアルバムに「SISTER STRAWBERRY」「猫のテブクロ」「サーカス団、パノラマ島へ帰る」「月光蟲」。近年、映画やビデオ作品にも出演。

著書に、詩集「リンウッドテラスの心霊フィルム」（思潮社）、対談集「大槻ケンヂの人生いろいろ」（JICC出版局）がある。

# 負けるな

# 『ガロ』

最近のマンガはすごい。すごすぎる。特に青年誌系の一部のマンガ。そのぶつとびかたたるやアンタ。どないせえっちゅうねん！と

いった勢いである。

例えば吉田戦車、榎本俊二などのギャグマンガが、あるいは、たかもちげんの「祝福王」、曽根富美子の「ファーマー」などのぶつとび方だ。

シュールであったり、超ド級に観念的であったりするこれらの作品が、会社帰りの、ドブネズミ背広の、どうでもいいような若者達に読まれちゃったりしているのだ。

すごいことだと思う。

ちよつと前だったら、それこそ『ガロ』にしか載らなかったんじゃないかなというように、つまり悪く言えば、パワーはあるけどマイナーであったこれらの作品が、今ではメジャー商業誌においてドードー三番、四番バツターとして活躍できちゃうのである。いや、はや南友ゴイスな時代よ平成は……。

しかし、僕は現在の『ガロ』を開くのがちよつと怖い。

はたしてメジャー青年誌よりも強烈なインパクトを『ガロ』は僕に与えてくれるだろうか。がんばれ『ガロ』！ 負けるな『ガロ』！



1



外にも、嵐山光三郎や糸井重里、湯村輝彦らから広がる人脈が『ガロ』を支え、



新しいタイプの女流作家が登場してくる時期でもあったのだ。

南伸坊が編集者時代に唱えられていた「面白主義」こそ、「カムイ伝」以降の『ガロ』の重要な柱であり続けて

## 第10章 面白主義以降のバラエティな面々

2



いる。これまでの証言にもあるように、水木しげる、永島慎二や赤瀬川原平の門下生以



# ベテランも いた、 怪人も いた



GO, Chiei

呉智英

忘年会だの出版記念会だの、『ガロ』関係の集まりが時々ある。そんな時、高名なマンガ家や評論家や編集者たちの交友関係の広さを横に見て、さすがベテランだな、と思ってきた。若僧で未熟な売文業者の私は、『ガロ』関係者の間でも新参者であった。しかし、ふと気づいてみると、未熟な売文業者であることは相変わらずだが、四〇歳半ば近くなった私はもう若僧ではない。新参者どころか、『ガロ』とのつきあいは四半世紀を超えているのである。私と『ガロ』とのつきあいを想

い出話として語れば、それはほぼ『ガロ』の歴史に重なり、『ガロ』が世に送り出した多方面の人材を紹介することにもなる。本書が刊行されるこれを機会に、想い出話でもしてみようと思う。

私が大学進学のため東京に出て来たのは一九六五（昭和四〇）年の春であった。まだ一八歳。前年、東京オリンピックに間に合わせるべく東海道新幹線が開通し、六五年秋から五年間続く「いざなぎ景気」を目前に控えていた。高度成長経済はほどなくピークを迎えようとしていたわけだが、現在から較べれば人々の生活はまだ貧しかった。アパート暮らしを始めた私が住んだ部屋は、四畳半、共同便所、もちろん風呂なしだった。それでも、地方出身の学生としては中の上の生活だった。

受験勉強の煩わしさから解放された私は積極的にマンガを読んだ。他の文学書や思想書も読んだが、それはどの学生でもすることだった。六五年当時、積極的にマンガを読む大学生は多くはなかった。その翌六六年秋、『少年マガジン』が百万部を発行し、大学生がマンガを読むことが社会の話題になり始める。だが、一年の差で、私はまだ少数派だった。マンガを積極的に読んだ理由は長くは述べない。とにかく好きだからであった。

その夏、定食屋のテーブルに置かれた『別冊少

招待されて、2月に帰国。また東京理科大学教養課程でマンガ論の講義をする。著作に、『バカにつける薬』（双葉社）、『読書家の新技術』（朝日文庫）、『現代マンガの全体像・増補版』（史輝出版）がある。



年マガジン』で、暗く陰気なマンガに出会った。青少年に諦めを説くような嫌な短篇だった。題は『テレビくん』といった。この嫌なマンガは、しかし、変な嫌さを持っていた。嫌さの中に不思議な真実味があふれ、その後、忘れたつもりになっ  
ていてもふと思い出してしまふ。それどころか、実に今に至るまで、西武線下井草駅前の定食屋に交通量調査のアルバイトを終えて入った時に読んだという細部の記憶が消えないのである。

暗く陰気な、しかし不思議な真実味があふれるこのマンガの作者は、水木しげるといった。その五年後に資料整理のアルバイトに使ってもらい、以後現在まで厚情を<sup>かたじけな</sup>忝くしている水木しげるとの出会いである。水木は、その『テレビくん』が大手出版社系雑誌の初仕事であった。それまでは貸本誌か、前年の六四年九月に創刊された『ガロ』にしか描いていなかった。そして、当時、創刊一年を経た『ガロ』を私はまだ知らなかった。大学へ入った年の秋、私は、先輩の下宿でマンガ雑誌十数冊を見せられた。青林堂という聞いたこともない出版社で出している『ガロ』だった。一読、衝撃的な面白さを覚えた。一日では読み切れず、何回か先輩の下宿へ通った。創刊号から私もこの『ガロ』が欲しくなった。

読みたい。先輩に譲ってくれるように持ちかけたが、鼻で笑われた。まあ、いいや。私は『ガロ』の新刊を買い続けることにした。同時に、『ガロ』で知った白土三平や水木しげるの作品をもっと読みたいと思った。貸本誌に連載された彼らの作品が新書版として各社から復刻されるのは六六年のことである。まわりに読んでいる者も、もちろん持っている者もいなかった。しかし、滅亡寸前の貸本屋がまだあった。私の通っていた大学の西門を出たところに、大学イモと駄菓子を商う店があった。この店があきらめ顔で貸本屋も兼業していた。学校の帰りに、ここで私はボロボロになった『忍者武芸帳』を借り出し、とびとびにそれを読んだ。全巻揃ってなどいなかったからである。

貸本屋は、私のアパートの近くにもう一軒見つけた。これも新刊雑誌との兼業だった。池袋から西へ一キロ余りの要町交差点にT文庫はあった。ここでも私は貸本誌を借り、ぼつぼつ出始めた新書版のマンガを買った。店の主人は、大学生風の私に親しみを感じるのか、『ガロ』のバックナンバーを取り寄せてくれたり私の読みそうな新書版を取り分けておいてくれた。青林堂へも直接仕入れに行っているらしく、当時入手しにくくなっていた白土三平の『シートン動物記』も取り寄せて

【プロフィール】1946年9月19日生まれ。愛知県出身。土族。早稲田大学法学部卒。評論家。近代思想の限界を根本から問い直す評論活動を展開。マンガ評論も手掛ける。海外からも注目され、第18回アングレーム市国際マンガ祭（フランス）に公式



くれた。青林堂へ直接行くなどということとは、『ガロ』ファンの一学生であった私には明治人が皇居に参入するのと同じぐらいに畏れ多いことで、この主人がまぶしく見えた。ところが、その細君は、私をただの売上げ協力者としか思っていないかった。入荷した本は全部すすめた。〇〇〇の『〇〇』まですすめた。その上、全く無学だった。平田弘史が映画から翻案した『座頭市』を出した時には「ほら、アンタ、これ面白いよ、読みなさいよ、この『ザズキン』ての」と言った。T文庫は一〇年ほど後、道路拡張にひっきり、今では池袋駅近くに移って新刊専門店になっている。

六六年秋、私は大学祭の委員になっていた。講演会の企画会議では、他にない異色の講師を呼びたいという声が出ていた。私ともう一人の委員は、『ガロ』という雑誌で「目安箱」という時評コラムを書いている上野昂志を呼ぼうと提案し、ただちに承認された。私の大学ではその年の夏まで学生たちが五か月間もストライキをやった。いわゆる全共闘運動より二年ほど早いそのハシリだった。上野はこのストライキを好意的に取り上げていたのである。後に論敵兼友人となる上野昂志とは、この時以来のつながりがある。

七〇年初め、その年の春には二度目の落第をす

ることがきまっていた頃、三一書房の新書の企画で私とは別の大学の松田哲夫と知り合った。その新書は学生運動関係イロモノで、赤瀬川原平が装丁し、上野昂志も執筆した。松田は極めて有能なビュロクラット官僚タイプの男で、参謀にしたら百戦危うからずと思わせた。松田の名前は、マンガ評論誌『漫画主義』の執筆者として、少し前から知っていた。この雑誌は、石子順造、権藤晋、梶井純、菊地浅次郎の四人が同人になり、主に貸本系・『ガロ』系の作家に関する「難解な」マンガ評論を掲載していた。彼らのマンガ論に対する賛否は両論ありうるが、マンガに評論が成立することを身銭を切って示した先駆的姿勢は評価されなければならぬ。同誌は投稿も歓迎しており、私も松田も青臭いマンガ論を書いていたのである。

その後、松田は筑摩書房に入社し、いくつものヒット企画を手がけ、今では取締役就任している。前述の水木しげるの資料整理のアルバイトを紹介してくれたのも松田で、七〇年の夏のことだった。松田は今でも時々水木プロに子連れで打ち合わせに訪れる。水木の仕事部屋で悪戯をしてはしゃぎ回る子供をアグネス松田は叱ろうとしないらしい。筑摩書房らしいリベラルな教育方針をもっているわけである。『文学の森』『哲学の森』



シリーズで大当りをとった松田は、次に『しつけの森』を企画するのではないかと言われている。

私が青林堂に出入りするようになったのは、意外と遅く、松田と知り合って二年ほど後である。

南伸坊が入社してほでない頃であった。七二年夏、青林堂で箱根へ旅行することになった。松田や赤瀬川の関係で私も誘われて同行した。この旅行で、当時『ガロ』に執筆していたマンガ家たちと口を聞く機会を得た。その他に何人かの怪人もこの旅行に参加していた。編集者のようなエッセイストのような芸人のような暴力団のような変な男がいた。嵐山光三郎だった。その友人のこれまた全く正体不明の着流しでスキンヘッドの男もいた。銭湯のペンキ絵を描く人で、富士山の脇に巨大なソーセージを描くのだという。こんな説明をされて、その男がどんな人物かわかれないというのが無理である。嵐山たちが、クマと呼んでいたから、熊本とか熊本とか言うのだろうと思っていたら、篠原勝之という名だと後で分かった。鉄製アートやエッセイで有名だが、その時は無名に近かった。

箱根旅行の後から、青林堂へは頻繁に行くようになった。『ガロ』にコラムを連載し始めたからである。担当は南伸坊だった。当時、私は友人の始めた小さな会社に勤めていたが、それは生活の

ためのアルバイトだった。売文業の方は駆け出しも駆け出し、雑誌の埋め草ページを時々書く程度だった。絵と文のちがいはあっても境遇の似ている南と私は話が合い、原稿を南に渡した日はビールやコーヒを飲んで馬鹿話に興じた。少し後に入社した渡辺和博ともよく会った。

コラムの連載が終わってから、神田へ出た時は青林堂へ寄った。お茶をごちそうになり、編集部員たちと無駄話をし、青林堂に寄贈されてくるマンガ誌の不要になったものをもらって帰った。マンガ誌を二〇冊ほどビニール紐でゆわこうとしていると、椅子から南が立ち上がり、「僕がやる、僕がやる」と言っただけの手からひたたくようにして取った。親切からというわけでもなかった。ゆわき終わると「ほら、上手でしょう」と得意気である。「僕、製本屋でアルバイトしてたから」と鼻高々である。おかしな自慢をする奴だと思っていたら、そのうち、自分の顔が面白いと自慢するようになり、またたく間に売れっ子となってしまう。ちょうどその頃から私も単行本が出るようになって忙しくなり、神田界限をうろつく時間がなくなった。八〇年代初めの頃である。青林堂へフラリと遊びに行くということも、ここ五、六年はほとんどなくなった。

(文中敬称略)



# 『ガロ』の最初にして最年少の読者の白画像

—あなたが『ガロ』を知るようになった機掛きつかけを教えてください。

『ガロ』をはじめて手にしたのは一九六四年の暮で、創刊第三号、まだ表紙が厚い紙だったときでした。ちなみに次の四号、「カムイ伝」の連載が開始された号から表紙の紙質が変わって薄くなったことを憶えています。へガロヘガロという名前はその以前から知ってました。近くの貸本屋で『忍法秘話』を読んでいて、そのなかに他心通を極めた大摩のガロなる長身白髪忍者が登場していたからです。なにしろ白土三平に夢中で、似顔絵ばかり描いてましたからね。

ぼくは、一一歳で、中学校受験のため、日曜日になると原宿の社会事業大学を借りて行なわれる進学塾の講習に通っていたころでした。たぶん『ガロ』のもっとも初期からの読者だと、これはちよつと自慢していいと思います。買ったわけではありません。いつも日曜ごとに手をつないで進学塾に通っていた、小学校の同級生の女の子原さ

YOMOTA, Inuhiko

## 四方田犬彦

【プロフィール】1953年、西宮生まれ。大阪府箕面市立南小学校在学中に「ブタ女」「ブタ女の逆しゅう」を書きあげる。教育大駒場中学に進学。同級生と肉筆回覧誌を刊行、白土三平を真似た画風で高野長英伝「夜明け」にとりかかるが、連載第一回で挫折。「COM」に投稿し、生涯最初の（そして決定的な）挫折を体験する。東京大学に進み、大学院生時代に最初のマンガ論「物語から細部へ」（1978）

を発表。以後・映像、文学、比較文化論とともにマンガを批の対象として現在に及ぶ。ソウルの建国大学、東洋大学、コロンビア大学で教鞭をとった後、現在は明治学院大学文学部助教授。著書に「クリティック」（冬樹社）「ストレンジャー・ザン・パラダイス」（朝日新聞社）など。訳書にポール・ボウルズの「優雅な獲物」（新潮社）などがある。



んを通じて、そのお兄さんから借してもらったのです。

原さんのお兄さんはその学年でただひとり麻布中学に進んだという大秀才で、ぼくの代の母親たちの間でファンクラブができるほどに英雄視されていた存在でした。借してもらった号には白土三平の忍者マンガが三編掲載されていて、とりわけぼくは「スガルの死」という作品に強い衝撃を受けました。沼の水面に何本もの日本刀が突込まれ、長い黒髪の女が謎めいた笑を浮かべながら死に赴こうとするようすを、いまでもありありと想い浮かべることができます。これは後に泉鏡花のロマンチックな怪奇譚を読むときに、ぼくの映像の前身として強くはたらいたと思います。そうそう、原さんのお兄さんのことを付け加えておきますと、その三年後に『悲しみに彩られた二二のバラード』という8ミリの発表し、天才少年監督として一躍脚光を浴びました。人ぞ知る、原将人のことです。

『ガロ』の話に戻りたいと思います。

それからしばらくたって、原君とは同じ中学ではないが、ともかく中学に進んだぼくは、自分でも『ガロ』を定期購読しようと決意しました。それからバックナンバーもきちんと揃えておこうと。

六六年の一月だったと思います。「カムイ伝」では利発な正助が下人の身分を脱して、子供ながらに独立した生き方をはじめ、身分下のナナと恋中に陥っていました。聖徳太子の千円札を一枚もって、ぼくは青林堂を直接訪れることにしたのです。当時ぼくは世田谷の下馬町に住んでいて、中学では剣道の練習に明け暮れていました。（ほら、ここにも白土三平の影響があるでしょ）。竹刀の袋を下げたまま玉電（現在の地下鉄新玉川線にあたる都電）に乗って渋谷に出、東急文化会館の前のタ―ミナルでまた別の都電に乗って神保町へ向かったのです。青山から四谷へ、そして九段下へと、小一時間かかったと思います。いつまでたっても神保町という停車場に到着しないのでひどく不安になり、隣の人や車掌さんに尋ねたりしました。着いたときはもう夕暮時でした。それから何人もの人に道を尋ねて、ようやく青林堂を発見しました。今の場所ではありません。すずらん通りの裏の方だったはずです。近くに陸風館とか北陸館という出版社の看板が出ていて、あ、これは小学生のころに繰り返し読んだ、植物図鑑を出しているところだなあと、そのとき思ったのを憶えています。両脇に本が積みあげられている狭い階段を昇って二階の扉を開けると、小柄な中年のおじさん



がいて、あとになって考えてみれば長井勝一氏でした。

「カムイ伝」の第一回からずっと揃えたいのですが、とぼく。

悪いけど、途中の三回分はもうなくなっちゃったよ。それでもいいかい、と長井さん。

それでもいいです。お金はここにあります。ぜひ売ってください、とぼく。

たぶんこのときのぼくは、一九五〇年代のアメリカ映画に出てくるような、ひたむきで、すばしっこくて、一人前に烏打帽でも被って大人の仲間入りをしたくしようがないといったタイプの餓鬼に似ていたと思います。映画ではたいてい、こういう子供は途中で撃たれて死んでしまうものですがね。

おそらく長井さんの方でも、一二歳の子供が千円札を手に、こんな生意気な口をききながらやって来るとは、予想されていなかったと思います。お金を払って一冊ほどのバックナンバーを包んでもらっていると、ほら、これが今日出たばかりの新しい号だから、一冊おまけだよといわれ、白地に青の表紙の『水木しげる特集号』をタダでもらってしまった。

帰りの神保町の交差点はもうすっかり暗くなっ

ていました。渋谷行の都電が来ず、ひどく心細い気持ちでした。都電のターミナル駅だったのでいろいろな系統の電車が通過するのですが、なかなかお目当てに出会わないわけです。ようやく乗った電車の薄暗い車両のなかで、ぼくは手にした紙包みを破いて、『ガロ』を読みはじめました。下馬町の家に戻るまでとうてい待ちきれなかったのです。その結果、包みはボロボロに破れ、一二冊の本をほとんど抱えるようにしてぼくは帰宅しました。

これがぼくの神保町事始めです。一度経路を憶えたぼくは、それ以後古本屋廻りが病つきとなり、当時八〇号くらいまで刊行されていた『SFマガジン』を、一年もたたぬうちにほとんど買い集めてしまいました。当時は一冊八十円とか百円でいくらでも手に入ったものです。マンガの肉筆同人誌をクラス内で刊行し、そこに白土三平タッチの幕末動乱ものを連載しようとしたのはその翌年、一九六六年のことです。これは一回で挫折しました。文化大革命勃発のこのニュースを剣道部合宿先の小諸で聞いたぼくたちは、北京でも剣を磨いている少年たちがいる、ひとつぼくたちも中学剣道部を東京カムイ軍団と改称して、後に続くべきだと真剣に討議しあったものでした。



——白土三平以外では、どんな作家に夢中でしたか。

誰に、というより、『ガロ』に登場したすべてのマンガ家に熱中していました。そして彼らを通して圧倒的な知的刺激を受けました。たとえばつりたくにこ（彼女は惜しくも夭折しましたが）のマンガの科目にその名が引用されていたというだけの理由で、セリーヌの『夜の果ての旅』を求め、これは文字通り後戻りができないほどに決定的な影響を受けました。水木しげるは『ガロ』だけではもの足りなく、知りあいの貸本屋でボロボロになった『墓場鬼太郎』のシリーズを譲ってもらったほどに好きでした。武良茂という、全然聞いたことも何もない人が先生の絵を真似て描いています。けしからんことだと思えますという手紙を調布の水木さんにむかって出したところ、武良茂というのはぼくの本名ですという返事を、鬼太郎の色紙とともに、いただきました。

六八年だったと思いますが、佐々木マキと林静一があいついでデビューしました。年齢的にははるかに年少だったのですが、これはぼくが最初に同時代のアート、というよりアートの同時代性を自覚した瞬間だったと思います。「アグマと息子と食えない魂」という林静一の処女作を読んで、

木版画のような線の太さとブラックユーモアの寓話に強い印象を受けました。それが次の「巨大な魚」では細い線に変わり、因襲に満ちた田舎町での人間の業という主題に挑むわけで、ぼくはしばらく彼の一挙一動に振り舞わされっぱなしでした。

佐々木マキはというと、当時は難解だという評価が圧倒的だったと思います。六〇年代とはまだ人々が物事の深層に隠れ潜んでいる意味とやらの探求に多忙であり、難解であることが価値の微であった時代でした。もっとも佐々木マキ本人としては、解釈すべき晦渋な意味など何もない、ある種のニヒリスティックなノンサンスが主眼であったわけです。このノンサンスは時代の雰囲気でもあったわけですが、文学言語が到達するには七〇年代を待たなければならなかったと思いますね。エドワード・リアとかルイス・キャロルがそれなりに紹介され、読まれるようになったとき、はじめて人は佐々木マキの正しさが理解できたわけです。ぼくが書いた文章でもっとも最初に活字になったのは、何を隠そう、六八年の『ガロ』の読者欄に投稿した佐々木マキ論です。どうしてだか忘れてしまいましたが、矢野武徳という筆名を用いました。状況は緊迫している、もはや躊躇は許されない、というまるでアジビラみたいな口調のもの



です。今回のために久しぶりに読み直してみました。が、十六歳の自分がいったい何を書いていたのか、今では文意が把握なくなっていました。

——あの当時『ガロ』は大学生に人気があつて……。

そうそう、おかしいのは、ぼくの弟に東大生の家庭教師がついていたのです。駒場寮に住んでいて、しょっちゅう包帯を巻いてきたり、眼を兎の眼のように腫らしてきたりしてね。この人がぼくの本棚にキレイに並んでいる『ガロ』を見てね、ぜひ借してほしいと。でこっそり借してあげたら寮中を一廻りしてボロボロになって戻ってきてね。いったい何人のノンセクト・ラジカルの東大生の手に渡ったのかわからないけれど、それが全部高校生の本棚から来たものだというのがちよつとおかしいですよ。

——あなたは現在『ガロ』に「日記」を連載してますけれど、一言でいってこの雑誌をどう思いますか。

うーん、これはどこかで誰かがいつてることかもしれないけれど、『ガロ』というのは永遠にマイナーな位置にあるわけですよ。『ガロ』に入門

し卒業した人は、次々とノジャーになってゆく。

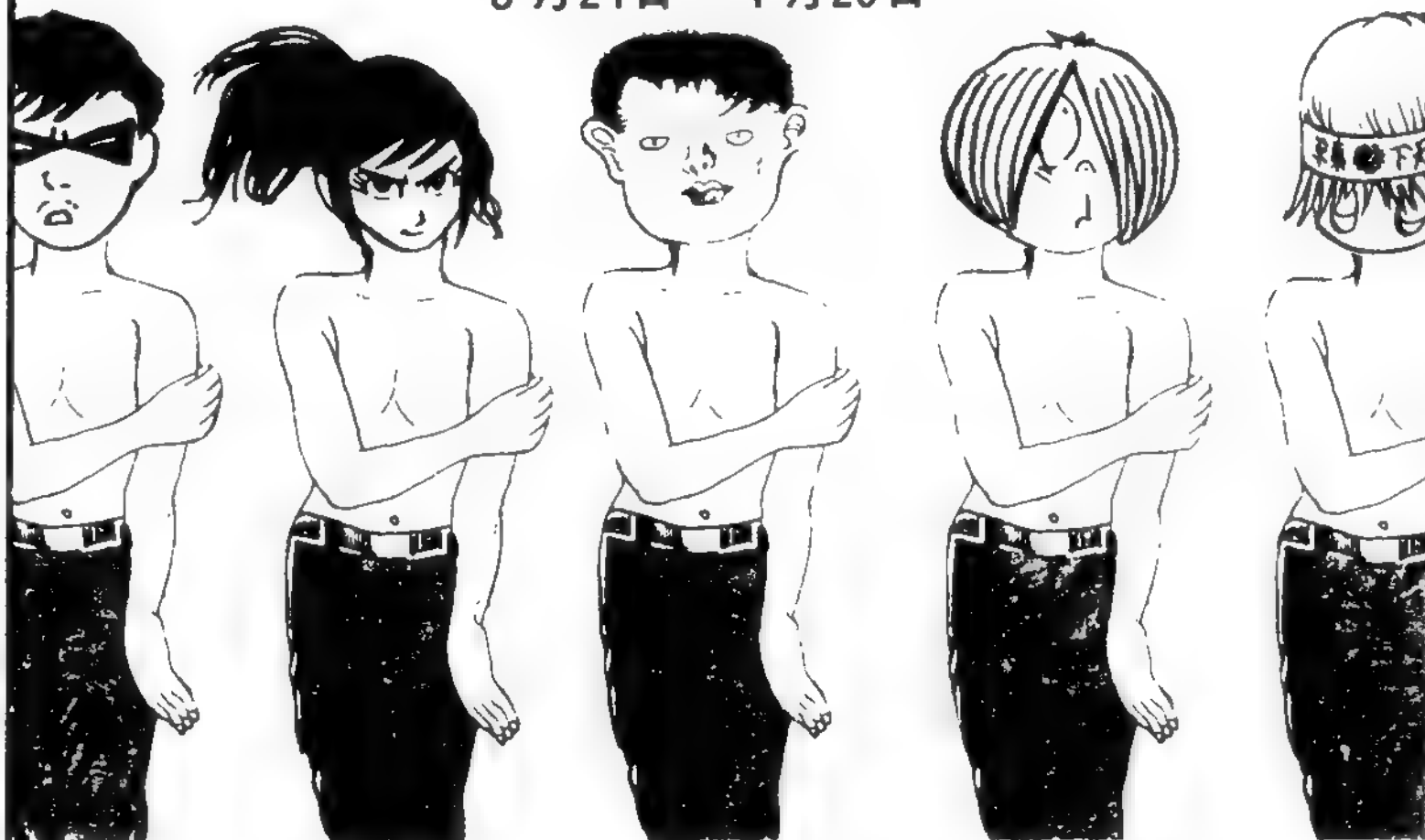
けれども本誌そのものは、どこ吹く風とばかりにいつまでもマイナーな、アンダーグラウンドな位置に留まり続ける。これは今日の東京の大衆消費社会では稀有な、というより唯一の文化現象のようない感じがしますね。『ガロ』が創刊されて三十年近くになるわけですが、今日では「難解」も「前衛」も「実験」もすべて死語となりおおせてしまった。その状況のなかでけっしてメジャーの文化システムの内側に懐柔され馴致されることなく、持続の志を貫いてゆくというのは、これは大変な力業ではないでしょうか。ウォールがいみじくもいったように、地上の誰もが三分間だけは有名になることができる現在というのは、逆に三分間以上真の名声を保ち続けることが何人にとっても困難であるような時代だという意味でもあります。その意味で『ガロ』は一度も名声の犠牲にならず、それゆえに独自のシステムで新人作品をとりあげてきた。生涯を通じてマイナーであり続けることの凄さのようなものを感じます。それは一九六〇年代のように、文化の位階がまだ明確であったころにははつきり見えていなかったことですが、九〇年代の万物斉同時代に互って露わになってきたことではないでしょうか。



—紀伊國屋大コミックフェア—

# ガロ展

3月24日～4月25日



## 漫画はいつも文化だった!!

漫画界の情勢に左右されることなく、常に、  
最良の漫画を追求し続けてきた「ガロ」の歴  
史と、「ガロ」から登場した漫画が一挙  
に展示されます。

新宿紀伊國屋書店 6 F PRルーム AM10:00～PM6:00

1982年、「ガロ」編集長（長井勝一著／筑摩書房）の発行を記念して行なわれた「ガロ展」のチラシ。新宿紀伊國屋書店で開催されたこのイベントは、19年の歴史を追う原画展示や作家諸氏のサイン会、ディスカッションだけでなく、実演「不幸」の公演もあった。



UESUGI. Seibun

# 上杉清文

【プロフィール】1946年生まれ。静岡県富士市在住。日蓮宗成就山本国寺第25世住職、劇作家など。著書「仏の十戒」「ニーチェ遊び」「礼儀正しい思想」「無責任な思想」（北宋社）、「仏の上手投げ」（太田出版）。共著「どーもすいません」（白夜書房）、「天覧思想大相撲」（秀英書房）、「高級藝術宣言」（JICC出版局）。劇作、演劇活動は休止中。現在は宗教活動に専念している。宗教雑誌「な一む」等に仏教論を連載中。趣味のカラオケが上達しすぎて、ボーカリストとして舞台に立つ日も近い、といわれる。ホラを吹き、経をよみ、歌をうたう、一言で言えば、楽しい人である。

## 『腹のガロ』

「私は『ガロ』で大人になった。『ガロ』は珍しくもないような顔をして、人類のどんな種族をも受け入れる。思考のどんな系譜をも拒まない。美のどんな異質をも枯らさない。『ガロ』の魅力は人をつかむ」。

高村光太郎は『暗黒小伝』のなかでこういつている。私もまったく太田同感である。

ことわっておくが、私は嘘つきである。そんな私に連載をすすめてくれたのが南伸坊さんであった。まったく無暴なことをしてくれたものである。当時のことを思い出すと、私は笑わずにはいられない。だが、いつまでも笑っているわけにはいかないので、南さんとのつきあいを川柳に托して語ってみよう。なぜ川柳に托したりするのかといえば、自分で





考えるのがめんどろうだからである。

南さんは執筆の心得をこう説いた。

「何のその面の厚い芸の先<sup>おも</sup>」

小心者の私はこれで図に乗った。だが、野放しは危険だと察してか、ときどき釘をさした。「人仕<sup>づか</sup>ひ慈悲は後に前は鬼」

おむすびから編集の鬼への変身である。

「あの様な者がおこるときついもの」

だがこれも「抜けたるを百にみせたき親心」であるを知り、私は心の中で掌を合せた。

「世の中よ産<sup>うま</sup>せる医者<sup>うま</sup>に流す医者」

南さんが産せて取りあげたのは面白主義である。

これは『ガロ』の歴史のなかで画期的な出来事であったと思う。面白主義の功罪については、ここでは論じない。むろん私の立場は文鮮明である。

「ふかい事地獄合点<sup>がてん</sup>で坊主落<sup>ぼうずおち</sup>」

破戒させた南さんも、そして私も、すべて承知のうえで笑い地獄に落ちるのだ。いいじやないの幸せならば、である。

ところで、これからの『ガロ』に望むことは、「化物と下戸なき山の花ざかり」になつては困る、ということに尽きる。『ガロ』はいつまでも「のつしりと裸丹<sup>たんせん</sup>前土俵入」でいてほしいものである。



# 『ガロ』の発する



《ガロ無くして、今日の私は存在しない》—  
これは決して誇張した表現ではありません。  
もし、『ガロ』という漫画雑誌と出会わなければ、  
長井さんと出会わなければ、私は現在、  
単なる平凡なサラリーマンとして、平凡な毎日を送っていたことでしょう。

NAGATO, Masayuki

## 長戸雅之

【プロフィール】1960年1月生まれ。神奈川県出身。1981年12月号の『ガロ』にて「風呂上がりの一仕事」でデビュー。以降、「怪獣就職情報」「幕末悪人伝」「くたくたアクター」「オムライスな人々」など計30本の作品を発表。その一方で編集者として、『流行写真』『写真探偵団』『B5』『モンスタースーツ』（以上全て三和出版）の編集に携わる。その後、『トラックボーイ』『まんがポテト』（日本文芸社）、『コミックバンバン』（徳間書店）の編集を経て今日に至る。作家活動の方は1989年『まんがくらぶ』にて「オムライスなひとびと」「らちもない」を掲載。現在、編集プロダクション勤務。



里見陽子、職業私立探偵

作／ナガト マサユキ



私が、こうして編集の世界で仕事ができるのも、漫画の世界で仕事ができるのも、これ総て『ガロ』の長井さんのおかげと感謝しております。

さて、私が『ガロ』の熱心な読者となったのは、一九八一年に入ってから。この年の『ガロ』誌面を飾った作家たちは、杉浦日向子さん、管野修さん、蛭子能収さん、みうらじゅんさんなどで、そして同年、泉昌之さんは一月号で、根本敬さんは九月号でデビューしている。

おそらく、この頃より数年間が一番夢中に



なって『ガロ』を読んでいた時期だったんじゃないかと思っています。

私自身も一九八一年一二月号でデビューさせていただき、以来、一九八八年一月号まで、断続的に計三〇本描かせてもらいました。その三〇本は、絵柄、内容などほとんど統一性がなかったように思います。でも、その頃は、とにかく描く、ただひたすら無我夢中で描くことで精一杯でした。

『ガロ』には何か人をひきつける《魔力》があったんです。どうしてもそこに描きたい気にさせる《強力な磁力》を出していたんでしょうね。

そして私は今、編集者として、この世界で生きてます。それも、『ガロ』とは対極に位置するほのぼの四コマ漫画の編集者として。

本当に、『ガロ』と長井さんには、お世話になり改めて感謝致したいとおもいます。

今後、『ガロ』がどう変わろうとも、『ガロ』が私の《生まれ故郷》的存在で在り続けることには変わりありません。



『ガロ』のことって、ぜんぜん客観的に見れないの。一緒に話をする人の年齢とか、状況とかによって、まるで話の内容が変わってきちゃう。

たとえば、えっ、その本聞いたことあるな、まだあるのと言う人がいる。同じく、まだあるの、でも昔はいっぱい読んでたよという人もいる。かと思うと探しに探して毎号必ず読んでいる人や、全部とっておいている人もいる。貧乏で、心のほうが少し可愛そうな漫画家の作品の載ってる本のように言う人もいれば、すごい漫画しか載せてもらえないように思っている人もいる。お金がぜんぜん稼げない媒体のようだが、関わると成功するというジレンマもある。

私の場合は、まず単行本を出しませんかという話を先にもらった。そのとき『ガロ』は毎号読んでいたけど、かまってもらえない世界のよう勝手に思っていたので、とても驚



UCHIDA, Syungiku

## 内田春菊

【プロフィール】 生年月日不詳。長崎県生まれ。慶応大学哲学科(通信制)中退。自らバンドを結成してボーカリストとしても活躍するマンガ家。代表作に『シーラカンス・ロマンス』『闇のまにまに』『しあわせのゆくえ』『凧(りん)が鳴る』『南くんの恋人』(青林堂)などがあり、『もんもん都市』などのエッセイ集も著わす、マルチぶりを発揮中。

を呼ぶ『ガロ』

しあわせ



針でさしたり  
髪をひっぱられたり  
汚くてアナクロい  
言葉をあびせて  
じわじわ たっぶり  
いじめられるに  
ちがいないわ  
あああああ  
あああ



いた。印税がまったくもらえないとかいう話  
だったら考えたかもしれないが、そんなこと  
もないようなのだった。使える原稿は沢山あ  
ったが商業誌過ぎるくらいの商業誌に積極的  
過ぎるほど商業的に描いたものと主観的に  
は思っていたため、どんな本になってどんな  
人が買うのかともしんばいだったが、大丈  
夫だった。これは私が死ぬまでに百万回でも  
言ってやろうと思ってるんだけど、最初の単  
行本『春菊』は、故・手塚治虫先生が「今年  
面白かった三冊」に入れて下すってたんだよ  
う。

私ったら、自分が青林堂で最初の本出して  
てとても良かったと思ってるもんで、ついい  
ろんな人にも勧めちゃうんだけど、もしかし  
たら不幸になる人もいるのかなー。いたら、  
ごめん。でも、聞いたことはまだない。だか  
らやっぱ、幸せを呼ぶところだと思ってるん  
だけど、どうなんでしょうかね。でも貧乏は  
貧乏みたいですけどね。おしやれで金持ちな  
青林堂ってのも、そろそろいいかもって気も  
しますけどね。





# 意識下に 抑圧したものの 発表の場

学生の時、つげ義春やつげ忠男、つげ義春の奥さん（名前を失念しました）の絵日記が好きでした。ふらりと、なんの気なしに買った『ガロ』を捨てられなかった。それは、他の雑誌やマンガ誌にはない、心の内側に巢食うような雰囲気があったからでしょうか。

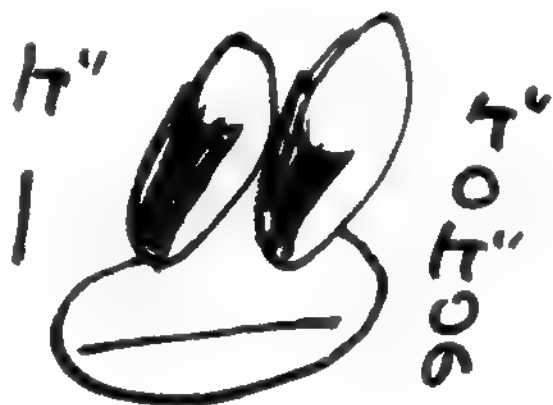
内在化された欲望の一端を、引きずり出される不可思議な活気は、今もずっと脈うっていると思います。私は、『ガロ』を長い間買い続けたわけではなく、ちゃんとした読者ではありませんが、学生の時に買った数冊を読

んだ感じと、今手もとにある最近の十数冊を読んだ感じがほとんど違うことからも、そう思います。

知に汚染されそうな領域をあつかっていて、なおかつ馬鹿やっているというか、そんなところがいいと思います。生命って、本来グロテスクなものだと思うし、健康な市民生活をおくってる人が、意識下に抑圧してしまった過度の感傷とか殺意とか恨み、少女性等々が『ガロ』にはいつきに噴きでている、花開いているというか、そんな感じがします。ただ、もつと徹底して過激に、と思うことはすでに意識的な観念操作であるので、『ガロ』よ、もつともつとと小泉今日子のように私は叫ばない。今のままでいい、中途半端でなんだか形容しがたいマンガがたくさん載っているというんで充分だと思います。

さいごに、最近の『ガロ』とつきあうきっかけをつくってくれたのはやまだ紫さんで、やまださんのマンガにより私の詩が、誌上に載ったのは、とても光栄なことで、私にとってはその数冊は記念碑のようなものです。





OKAZAKI, Kyoko

## 岡崎京子

〔プロフィール〕 1963年、東京・下北沢に生まれる。跡見学園生活芸術科在学中に、漫画界デビュー。男性コミックを中心に活躍。現在では本業に加えて、TV、雑誌をはじめ、コメンテーター、文筆業など幅広い分野で活躍。若者の今をとらえた作風と共感を呼ぶストーリーは人気が高い。

# 私は



# 感じます

『ガロ』は中高生の頃からパラパラと読んでいました。南伸坊さんや渡辺和博さんの編集時代からかな。他の雑誌では決して読めないようなヘンな漫画が載っていて「ありがたい」という感じで読んでいました。

一瞬ですが、原稿を持ち込もうかと思ったこともあります。高校生の時に、『ガロ』か『宝島』か、という感じで考えたのですが、なんとなくなくすしに投稿せずに今に至ります。

青林堂の単行本はいっぱい持っています。

『ガロ』には新人の方ですごく面白い人が出てきてグツと来て、注目していても、それっきりだったりしてそこらへんがニクイ。けっこう作品たまってるはずなのに、なぜ単行本が出ないのだろう、と思う人もたくさんいます（毎月ちゃんと買ってファイルしておくほどマメじゃないので）。

でも、すごく面白いのに一回しか描かないような人もいて、この「一期一会」のようなスリルが『ガロ』の良い部分なのかも。

まあ、こんな感じです。



# 私と『ガロ』 と、今後の 『ガロ』と私

ABIKO, Marie

安彦麻理絵



か似ています。

きつと、『ガロ』に漫画をのせて頂いたと  
ゆーことで、なんか、市民権でも得たよおな  
そんなキモチがしたのでしよう。

さて、私がこれからの『ガロ』に望むこと  
は、といいますと、あたりまえのことなんで  
すが、やはり、「読みおわってから、グウの  
ネもでなくなる」ような漫画を今後もどんど  
ん発掘・掲載して欲しい」とゆうことに、つ  
きるでしょうか。

グウのネもでなくなるような漫画を読むと、  
それこそグウのネもでなくなって何だかつら  
くなったりする反面、「死んでなくてよかつ  
たな」と、生きていることのありがたさを、  
シミジミ味わってしまったりします。

私はそおゆうふうには、不安や恍惚がしよっ  
ちゆうカサナリあつてるような人生がすきな  
ので、とりあえずそれは私の場合、そおゆう  
漫画にめぐりあうとそうなれますんで。です  
から、勝手ながらも、そおゆうお願いをさせ  
てもらってそろそろ、おわりにしたいとおも  
います。おわり。

非常に恥かしい話なのですが、私は『ガ  
ロ』に漫画をのせて頂くようになってから、  
性格がとっても明瞭活発になりました(それ  
までの私は「生きててどうもすみません」的  
なところのある人間でした)。で、どおゆう  
ふうにも明瞭活発になったかとゆうと、クチで  
説明するのはちよっと難しいのですが、でも、  
あえていってみますと、

それは丁度「今まで恋人のいなかった女の  
子がトツゼン初めて恋人ができて、それでと  
っても明るくハッピーになった」のと、どっ

【プロフィール】 本名同じ。1969年生まれ。双子座、B型。「ガロ」89年10月号で入選。それ以降、細々とながらも、「ガロ」  
や他の雑誌に描いたりしている。



1



自身の存在意義が、改めて問われる時期になったのではないだろうか。そして、



今後の「ガロ」はどうあるべきなのだろうか。

## 第11章 新時代の「ガロ」

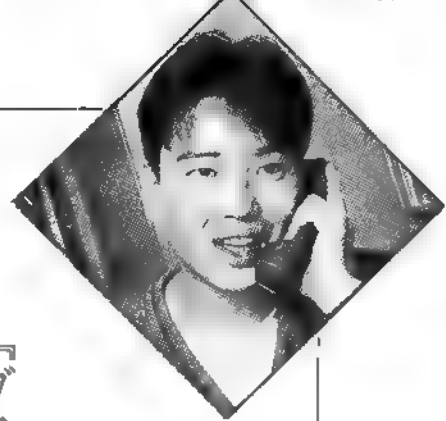
1991年度に入って、通過点だった「ガロ」にベテランも再登場し、「ガロ」自身も少しずつ変わってきてい

2



るようだ。だが、メジャーなマンガ誌で「ガロ」的な作品が大ウケしている現在、「ガロ」





# 老人ボケのロックンロールを…

『ガロ』というと、なぜか、内田裕也」が、思い浮かぶ。そう、あの、「内田裕也」である。

①ロックンローラーである。

②新人に、常に活動のチャンスを提供してきた。

唐突で申し訳ないが、『ガロ』と「内田裕也」の決定な共通点は、右の二点であろう。

①の「ロックンローラー」というのは、社会の『良護』や『商業主義』に媚びずに、好き勝手に動いているような存在、としておきたい。だから、たいてい貧乏でもある。

内田裕也は、家具をまったく持っていないと言っていた。アパートも借りてない。「古着とレコードとカセットテープとCD。それしか持っていないよ」と言っていた。なんてロックンローラーなやつなんだ。もう五〇歳を越えてくるくせに。

②に関しては、内田裕也の場合、自分のミュージシャンたちのプロデュースにうち込んだきた。それは、時には、『ありがた迷惑』なこともあったかもしれないが、それでも、彼が一九七三年以来とぎれることなく『ニューイヤ・ロック・フェスティバル』を開催し続け、新人ロックーたちにステージ活動の場を提供してきた努力と熱意は、

けっして否定できるものではない。

だが、このようにしてきつかけを与えられ、やがて名前も売れだしたミュージシャンたちは、次第に少しずつ、そうしたイベントの場から離れていく。それは、しかたのないことだ。いずれにせよ、内田裕也は、彼のうしろから駆けてきた若いミュージシャンたちが、そうやってどんどん彼を追いつき、走り去っていくのを目にしながら、それでもなお『ニューイヤ・ロック・フェスティバル』への意欲を持続させてきたのである。

それは、いったい、なぜなんだろうか。

しかし、まあ、とりあえず、ここで注目しておかねばならないことは、「内田裕也」というキャラクターは、そうした生まじめなロックンローラーぶりゆえに、近ごろでは、逆に一種の『ギャグ』として取り扱われているということだ。

『ガロ』にしても、その点に相違はあるまい。なにせ、こんな時代に、いまだ刊行を続けているのだからね（おそらく、この点だけで、多くの人を驚かすに十分であろう）。

ギャグでいいのである。そんなことを、いちいち、恐れる必要はない。ロックンローラーなんて、しょせんは、滑稽なギャグなのだ。



内田裕也にしても、『ガロ』にしても、そうした「ギャグ」性を正面から引き受けているだけでも、とっても偉いと私は思う。

さて、ところでこの原稿は、『ガロ』の未来」について書く約束になっている。

話は簡単である。私は、『ガロ』の未来は「老人ボケ」の中にはらませていると、確信している。

これが二七歳の人間の人間ならば、「まだ君は若くていいねえ」とか「これから働き盛りでな」とか、言ってもらふことができる。しかし、創刊二七年などという雑誌は、言つまでもなく、老兵なのである。

そのような老人が、アヴァンギャルドとして輝くには、「老人ボケ」という一発逆転のウルトラCを行使するほかないというのが、自明の理というものである。また、誰もあんまり言っていないことだが、これからは「老人ボケ」が最高にカッコいい。『ガロ』には、やはり、杖をつきながらでも一直線に、アヴァンギャルドへの道を歩んでいただきたい。

そういえば、以前、仕事で、内田裕也に一週間べったり張りついて過ごした折り（どんなにハードな仕事だったか想像してみてもほしいが）、彼は晩年のお母さんの思い出を、こんなふうに話していた。

へ……最後は、ちよつとアルツハイマーっていうか、脳こうそく。たまに見舞いにいくと、歌うたいはじめたり。けど、俺のことだけは、かすかにわかってくれたんだ。俺も、あっちの言ってることがわかるような気がしてき。だから、俺、自分もアルツハイマーかと思っただけどき。俺が帰る時には「バンザイ！」なんてね、やるの。カッコよかったな。真つ白な髪で、短髪で。……」

こういう言葉を、臆面もなく吐ける人間が、私は好きだ。

ヤバイものを「ギャグ」として片付けるしかない、凡庸な現世など、どうでもいい。雑誌としての「まっとうな」脈絡など、どうでもいいのだ。世界のあっち側で酔っぱらいながら、時折り、世界のこっち側に唐突なパンチを返してみせる。そのほうが、よほど自由で、生き生きしていて、楽しそうではないか。

もはや、これからは、破れかぶれに、食欲に楽しんだほうが勝ちである。創刊二七周年の『ガロ』には、いささか早めだが還暦の赤いチャンチャンコを着ていただき、これからの過激な「老人ボケ」への船出を祝することをもって、創刊四五年のシーラカンス雑誌、『思想の科学』編集委員としての祝い言葉に替えさせていただきたい。

【プロフィール】1961年、京都市生まれ。同志社大学文学部卒業。子ども調査研究所勤務を経て、フリーランスのものの書きに。

『思想の科学』編集委員。著書に、『先端・論』（筑摩書房）、『〈竜童組〉創世記』（ちくま文庫、亜紀書房）、『熱い夢・冷たい夢』



九〇年の初頭だったと思う。『ガロ』に描いている複数の漫画家から『ガロ』の部数が低迷、このままじゃ遠からずこの世から消えてしまうことになるとはならない」との話を聞いて、頭がクラクラした。

私はかなりの雑誌好きだが、とりわけ『ガロ』への思いは強い。というのも、『ガロ』はあらゆる雑誌の中で、最も長く購読している雑誌なのである。記憶力の悪さではちよつとした自信があるので、正確にいつから買っているのか、実家に帰って調べないと定かではないが、確か高一の春だったように思う。

小学校四年くらいまでは人並以上に漫画に熱中、当時出ていたほとんどの少年漫画誌に目を通し、姉が読んでいた少女漫画にまで時折手を伸ばしていたが、親に叱られたわけでもないのに興味を失くし、きれいさっぱり漫画から遠ざかってしまっていた私にとって、『ガロ』との出会いの意味は

# 新時代への かけ橋

MATSUZAWA, Kureichi

松沢呉一

〔プロフィール〕 1958年、産院生まれ。マルチ業界ゴロとして、出版、放送、音楽、映像など、各業界でゴロつく。最近、シティロード、ガロに日記を同時連載し、日記家となる。また、アングラ科学者として、怪しい研究にも従事、ノーベル賞を狙っていると伝えられる。ほかに連載として、宝島、クロスビート、ゴメス等があり、テレビ、ラジオの出演も多い。編著書に『ウンゲロ』など。



あまりに大きかった。それまで持っていた漫画のイメージは見事に壊れ、漫画の意味する範囲は大幅に広がり、また深化した。以来、漫画というのはとてつもない可能性を秘めたものであるとの感激を覚えながら毎号毎号ページを繰るのが、オナニーと同じくらいの楽しみになり（中高生の時のオナニーといったら、そりゃあもう楽しかったのナンのって、かつて漫画に熱中した頃の数倍もの思いで発売日を待った。

やがては、生まれて初めて、コマ割までやって漫画を描こうともした。ちゃんと道具も揃え、ストーリーも考えた。デッサン力がなくても面白い漫画は描けるのだと、『ガロ』を見て、妙に自信がついたのだ。高校当時、美術部にいた私は、最低限のデッサン力はあったのだが、最低限の根気がなかったのだ。結局ひとつとして完成はしなかったのであるが、いつかあの誌面に出たいの思いは心から消えることはなかった。

高二の冬には、大学受験の下見に行く親にデマカセを行って名古屋から上京したことがある。もちろん、受験の下見にわざわざ上京する必要などなく、受ける予定などない水道橋の日大を横目で見て受験の下見は済ませ駆け足で青林堂に直行、『ガロ』のバックナンバーや花輪和一の限定本を

長井社長から直々に売っていただいた。四〇冊はあったらう漫画を両手に抱えて実家に帰った程は、「神田でいい参考書を見つけた」とかなんとか親には言って、その参考書の山を何日も読み耽けたものだ。そして、見事にすべての大学に落ちた。『ガロ』は受験の役には立たない。

大学生になると、あちこちの古本屋や古書市に足繁く通って、カムイ伝の増刊号を除くすべてのバックナンバーを揃えた。自選漫画家シリーズも全部買った。決して漫画マニアというわけではないのだが、『ガロ』に対しては堂々たるマニアになる。

以来、三二になるこれまでもずっと『ガロ』とつき合ってきたことになるから、親と過ごした月日とそう変らない。親と『ガロ』とどっちを選ぶかと言われたら、世間体もあることだし、ためらわずに親を選ぶか、まだ生きている祖母と比べると、ちよつとだけためらってガロを選び、一族の反感を買うことになるだろう。

その『ガロ』がなくなるとあっちゃ黙ってはいられぬ。さっそく雑誌のコラムで『ガロ』を買えと力を込めて書いたりしたが、そんなことで読者が増えるほど世間は甘くない。

誌面を強化したり、宣伝をやったりするとなれ



ば、ナンボかの資金が必要である。

その時、私の頭にツアイトの山中社長の顔が浮かんだ。この会社は、コンピュータ・ソフトの会社なのだが、取締役もみなガロのファンで、他の儲けた金を注ぎ込み、採算度外視でつげ義春やさうちみちおのコンピュータ・ゲームを出している会社だ。金のことしか考えないのが会社という組織であって、その意味では「バカ」とか「アホ」と言われても仕方のないことをやっているのである。

小さいとは言え、コンピュータの会社は出版の世界に比べれば規模が大きい。金もそこそこはあるだろう。なにより、『ガロ』を創刊号から持っているというだけで私に一目置くようなわかりやすい社長である。気も弱いので、脅せばイヤとは言うまい。また、涙もろいので、『ガロ』がなくなるかもしれないと言えば、きつとうちに帰って枕を濡らす。泣きながら、私財を投げうつても『ガロ』を続けてみせると決意するに違いない。

さつそく私は山中社長に連絡し、その数日後、青林堂の二人と、ガロ読者にはおなじみの漫画家、井口真吾とともにツアイトを訪れた。

状況を話していくうち、社長は頬を上気させ始めた。やはり今夜泣くなと確信した。

その後の経緯について詳しくは知らぬが、ツアイトと青林堂との間で何度かの話し合いが行なわれ、株主総会も開かれて、話はとん拍子に進んだらしい。こうして私は祖母を殺さずに済んだのである。

そうこうするうち、編集部から日記の連載の話が来て、『ガロ』に文章を書けることにまでなつた。漫画ではなかったことに若干の心残りはあるが、世のため人のために尽くせば必ずいいことがあるものだとも私も布団を濡らした（ことにしておく）。

私は編集の仕事もやっているのので、『ガロ』の編集も手伝おうかと考えもしたが、どうやら私のようなものが口出しするまでもなく、『ガロ』の誌面には活気が見え始めているし、部数も上昇しているようだ。今後は、執筆者として、またこれまで通り、読者として応援し続けようと思う。

今後『ガロ』がどうなっていくのかわからないが、私が受けたような喜びを、それが少ない人数だとしても与えられ続けたい。何百万部ものベストセラーを生まなくても、確実に漫画の意味を拡大、深化させる表現を開拓し続けてくれればいい。そのためには、とにかく出し続けることでは始まらない。



KIMURA, Tsunehisa

## 木村恒久

〔プロフィール〕 1928年5月30日生まれ。大阪出身。グラフィック・デザイナー。62年、日本デザインセンター在籍時代にADC銅賞を受賞。64年に独立し、写真モンタージュで一斉を風靡する。主著に『キムラカメラ』などがある。



# 『ガロ』 という 既視体験

なぜか『ガロ』ではなくて、「ゲロ」と思い込んでいた。多分『ガロ』が突出した頃に流行した風邪薬の「かえる」の広告の「ゲロ、ゲロ」と重なるからだだろう。だから本誌が郵送されてくると、いつも不思議な気分になる。「あれ!! ゲロじゃなかったんだっけ」というわけだ。

「ゲロ、ゲロ」の調子で「ガロ、ガロ」と声を出しても似合わない。やはり「ガロ」ときりつめた調子が良いのだが、しばらくすると、また「ゲロ」に戻ってしまう。

「ゲロ」と思い込んでいるのは、ある種の既視体験にも似た作用だろう。既視体験は、一つの擬法体験でもあって、記憶に残像する特徴のある形が、現実の姿と符号して生じる連想だ。この場合残像された記憶は、多くの場合ピントはずれではっきりした形ではない。そこでの特徴だけが、眼前の形と符号するものである。そういうことで『ガロ』という記号は、次の既視体験を生みだす機能がある。



# 『ガロ』 の 存在 意義

『ガロ』という漫画雑誌は載っている漫画の全部が全部（否、極端な事を云えば一から十まで総て）面白くある必要はないと思います。ここで云う面白い面白くないというのは勿論、『ジャンプ』や『ビッグコミック』その他キオスクの店頭で飛ぶように売れている漫画雑誌一般に見つけられる最大公約数的な通りの良い娯楽性の有無という事です。

で、『ガロ』という漫画雑誌の存在意義は昔も今も、異能とか異端とか、特殊とか、狂人とか、そして時には天才とか世間様に見な

された、最大公約数的な面白さと折り合わない、漫画界の無頼の徒に与えられた貴重な表現の場、という事につきますと思います。

ハッキリいえば、漫画を描く奴なんてものは、一般誌も『ガロ』も問わず、どっかで歯車が狂ってりや宮崎勤氏の如き犯罪的行為に及んだり、精神病院のお世話になる様な奴（他に業が深い、という云い方も可）が圧倒的に多いんだから、そんなのがピュアな心根で漫画表現に挑み、自己探求とか自己鍛練に打ち込めば、自ずと世間とは必ずしも折り合わぬ、奇異な作

NEMOTO, Takashi

## 根本敬



【プロフィール】1958年6月生まれ。東京都出身。『ガロ』1981年7月号「青春むせび泣き」でデビュー。以後『ガロ』をホームグラウンドに、自販機本、平凡パンチ等で活躍。今日に至る。代表作品集は『生きる』『怪人無礼講ララバイ』『亀ノ頭のスーパ』。



# タケオの世界



The world according to TAKEO

風、奇異と呼ぶほどでなくとも、そいつ独自の  
世界が拓けて然るべきもんだと私は思いますね。  
でもそんなのは極端なハナシ、てめえの内臓や  
排泄物を人前にさらけ出す様な部分もあるんで、  
健全なる善男善女には全然喜ばれません。だか  
ら大抵の社会性を備えた漫画家は商売として成  
立せしめ、かつ儲けるためにも、自分自身の澱  
(おり)を、一〇倍二〇倍に水増しして、作家  
活動頑張ってるワケだ。(もっとも最近是最初から  
澱みなどなく、社会への適応力バリバリの奴も多いみたい  
だが)それで大抵の漫画家は目出たく最大公  
約数の面白さの中に収まって、どうにか世間  
との折り合いをつけて行くんだが、中には極  
く少数ながら、資質や美意識がそれを許さな  
かったり、不器用だったり頭がイカれてるた

め(他に業が深すぎる、という云い方も可)  
水増し出来ない奴がいて、そういう漫画家達  
が、『ガロ』に描けばいいのだ、本来。少な  
くとも私はそう勝手に思い込んでいる。

だから、そういった意味で、私は『ガロ』  
に載る漫画は面白い必要はないと云うのだ。

漫画界を病院に例えるなら、『ガロ』は間  
違いなく精神病院です。そしてかつては精神  
病といえは『ガロ』しか行き場がなかったの  
に、ここ数年の間に他の一般メジャー総合病  
院が余裕で精神科を設け、こちらへ来るべき  
患者を持って行ってしまう様になっているの  
で、我が『ガロ』としてもウカウカはしてら  
れない、今日此頃です。

——以上、『ガロ』かくあるべしみたいな  
事を、書きつつ、結局自分の事を書いていた  
のですが、『ガロ』がある限り、自分は漫画  
家でいられ、自分が漫画家でいられなくなる  
時は、『ガロ』廃刊の時であるのは間違いな  
い。と、いう事は自分と『ガロ』は最早一身  
同体である、という事を再確認しつつペンを  
置きます。



# 難解であり 続けられて欲しい 『ガロ』



SHIRIAGARI, Kotobuki

## しりあがり寿

【プロフィール】1958年1月1日、静岡市に生まれる。多摩美術大学グラフィックデザイン専攻卒。某食品メーカー宣伝部に勤務する第2の顔を持つマンガ家。近著に「底抜けカフェテラス」（新書館）、「夜明ケ」「エレキな春」「おらぁ口ココだ」（白泉社）がある。

『ガロ』には大変お世話になりました。なんとゆーかガロは漫画好きの「成人儀礼」みたいなところがあったんですよね。よく南の島の原住民の方々が大人になる証拠に足首にロープを巻いて崖からとびおりたりしますが、なんか漫画書くヤツって、いちおう『ガロ』を読んでないと一人前じゃないってところがあったでしょ。僕自身、最初は『ガロ』を勉強だと思って読みました。おもしろいなんて思わなかったけど、「この漫画がわからないと一人前じゃないんだ。『ガロ』はおもしろいはずだ」と思って読みました。実際むずか

しくてよくわからなかった。でもって最初に「オレも『ガロ』がわかった!!」と思ったのは鈴木翁二の「旅の一夜」でした。ありやすごかった。中学校のとなりの図書館で「ねじ式」読んだ時以来。それからとっつきにくいけどスバラシイ『ガロ』の世界がひらけたのでした。なんつーか僕は、たくさんの楽しいもの、スバラシイものがわかるためにあるテードの勉強や修業は必要だと思います。そーいったわけで『ガロ』には試験の問題が難しい方が価値があるよーに、難しくあってほしいなどと思ってしまっているのであります。





# 『ガロ』の役割

大学を途中でやめた僕にとって、『ガロ』は『大学』だった。

あの頃（六〇年代後半）、大学の授業にでるよりも、『ガロ』の編集部が片隅にいた時間の方が多かった。たまに返品を運んだり、発送の荷造りを手伝ったりしたが、アルバイトなどではなかった。おおむね、ただそこに坐ってボンヤリしてただけで、いわば好きなタレントのそばにいたがるグループピーのようなものだった。

あとから考えてみると『ガロ』編集部の人たちにとっては、邪魔者以外の何者でもなかっただろう。

でも、その後の僕が曲りなりにも編集者としてやってこられたのも、その時、門前の小僧として、『ガロ』編集現場の空気から得たもののおかげだといっても過言ではない。

出版社というものが、どういう仕事をしているか、返品というものがどれだけ大変なものか、まっさらの新人作家への長井さんの向きあい方など、その時はただただ呆然としてながめているだけだった。

あとから、覚束ない足取りで編集の仕事を始めた時、いろんな局面で『ガロ』での見聞が生きた教訓となっていた。

『ガロ』が創刊された三〇年前に比べると、コミックの世界は驚異的な発展を遂げた。しかし、巨大化したコミックの世界は、かならずしも個性化し多様化したとはいえないのも一画の事実だ。

三〇年の永きにわたって、いつも新しい才能を世の中に送り出してきた『ガロ』はその後、さまざまな起伏を経験してきた。

しかし、コミック大発展の糸口になった『ガロ』の役割は、こういう状況のもとで、ますます重要になってきていると思う。

僕の大事な『大学』が、その活力をもちつつ、次代の人たち（漫画家、編集者ふくめて）を育てていくものとして永く永く続いていってほしいと強く祈っている。

【プロフィール】1947年、東京生まれ。都立大学人文学部中退。69年、筑摩書房入社。「現代漫画」「少年漫画劇場」から、雑誌「終末から」をへて、文芸書、人文書をてがける。その後、「逃走論」「宮武外骨・滑稽新聞」などの話題作を世に送り、路上観察学会を設立して事務局長になる。現在、筑摩書房取締役・第二企画室編集部長・ちくま文庫編集長。



## 『ガロ』の魅力



*MATSUMOTO, Michiyo*

松本充代

**【プロフィール】**1982年6月号「糸口」で「ガ口」初登場以来、現在までコンスタントに作品を発表。日経流通新聞、女性自身などにイラストやマンガを描いて生活中。著書に「お・あ・い・そ」「健康不良の学生」「青のマーブル」「ダリヤ・ダリヤ」（青林堂）がある。

八年前、私は長井勝一編集長の、「火の車  
 だけど自腹を切つても漫画を出す」という姿  
 勢に揺り動かされて投稿しました。

今でも『ガロ』を読むと、力のある作家陣に毎日欠くことなく肝を冷やします。他誌では絶対に読むことのできない個性の強いこれらの作品群は、ずっと『ガロ』が持ち得てきた魅力だと思います。

『ガロ』に望むことは、これからも他誌では出来ない事を頑なにやり通していつて欲しい、ということでした。ハラハラドキドキさせるような熱のある作品、作家（新人）を期待します。



コンビニエンスストアで売っていた『ガロ』を初めて買ったのは高校生の頃だったけど、長井社長さんの著書『「ガロ」編集長』を読んで、小学生の頃一日一回は単行本を読み返していた白土三平先生や、ランドセルの名前札を入れる所にマネして描いて入れておいた「釣りキチ三平」の矢口高雄先生などが、『ガロ』の作家だったということを知り、『ガロ』という雑誌は本当に昔から連綿とマンガ界の底を流れる川のような雑誌なのだあと、しみじみ感じたものです。

そんな雑誌に、なんの間違いやら私のマンガなんかを載せてもらっていることに、いつも恐縮しています。

だから私にとって『ガロ』は、書道の時間正座をして何枚も練習したあとの清書を書く時のような気持ちで描かなければいけないと思わせる雑誌なのです。

見開きを描くなんて贅沢絶対しないから、もう少し『ガロ』におじやまさせて頂きたいです。

TSUNO, Yuko

津野裕子



【プロフィール】19歳の時、砂丘に「マンガを描こう」と誓って以来、青林堂さんにお世話になってます。たまーにお仕事をくださる所もあるのですが、十中八九流れてしまって今に至ります。会社に行きながら夜中にマンガを描いているので、なにか古い蛍光灯がついたり消えたりしてるみたいにボンヤリしていることが多いので、人から見た私はたぶん最悪の人間なんだろうなと思うと悲しくなります。今なぜかボーイスカウトの副長というのを、させてもらっているので、これまた忙しいやら、チビッコにキックされるやら無茶苦茶ですが、「これでボーイスカウトのマンガが描ける……」とか思ってます。

緊張かつ  
恐縮して  
います。



# ガロ ガロ 言ってますみません



MIGIWA, Pan

みぎわパン

『ガロ』と愛猫すなは、ずっと前同時にわが家にやって来た。どっちもないと困るんだよ。美術モデルの仕事をサボって自宅で寝ころがっていたところ、電話が鳴って、長井翁から入選のお知らせを受けた。

同日午後、団長夫婦（全日本食通開発公団という、へんな名の劇団で以前、私は芝居の仲間入りをしていた。文中の人物はその団長、高橋龍之助だ）がやって来て猫を押しつけて帰っていった。「すな」と

命名。

以来、『ガロ』に描いてるし、すなは生き続け、今日に至る。

この日、モデルをサボったのは正解だった。ちっちゃい頃に克服すべきだった宿題のようなものが、目の前に山と積まれていて、私はまだ、その山を乗り越えてはいない。

落ち着いて一問一問を見れば、そんな難題ではないはずだから、ちっちゃい子に戻って注意深く、少しずつ崩していくことにした。そのザマを漫画にすると、子供のばんこになる。

子供のばんこを描かせてもらえるのは、『ガロ』だけだ。克服の手だては『ガロ』しかないね。

もし——成人したり、顔にシワができたりしてもまだ、精神面オツムのほうで、ちよいと追いついていなかったときのために、と、天が私のためにあらかじめ用意してくれた、てんぐの抜け穴なのだ、『ガロ』は（『ガロ』があっけ助かったと思う）。『ガロ』と私は同じ年（一九六四）に生まれた。必然だ。

【プロフィール】1985年6月号「ばんこちゃんになろうっ」で『ガロ』初登場。同名单行本その他、『ばんこちゃん』（2冊とも青林堂）の著書がある。



長井さんはヤクザ映画がお好きなようです。  
『ブラックレイン』などは、高倉健サンが出たあたりから身を乗り出して御覧になっていましたし……。

『ガロ』にもヤクザのパワーがあると思います。

犯罪に近い漫画を描かれる先生もいらつしやいますし。(うそ、うそ)

まわりが何と言おうと、パンチパーマがかっこいいと思えるような頑固さも、義理、人情が厚い人でも懐にドスを持っているみたいなどころも『ガロ』にはあると思います。

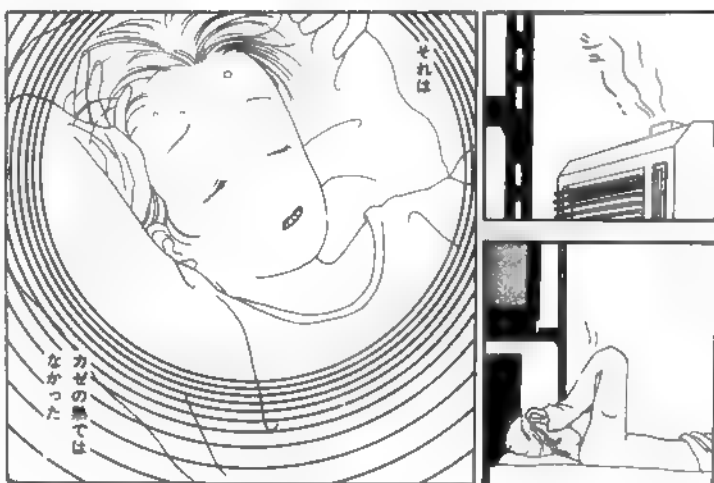
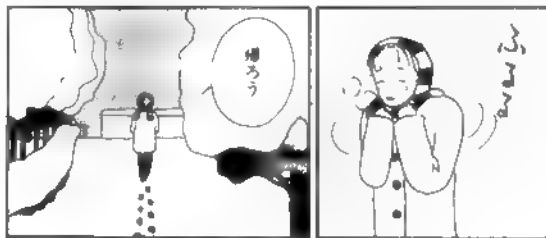
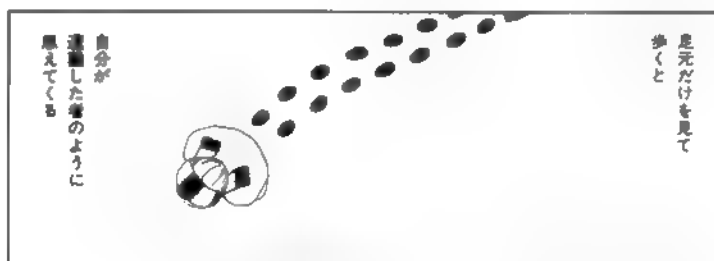
ヤクザっていうのは、「自分達が規則なのだから好きにやっちゃえー！」という感じです。私は、ひっそりと『ガロ』に描かせて頂いている漫画家なので、そこまでのパワーは有りませんが、学生の頃、入選した時も、曲がりなりにもプロになって、再び描かせて頂いている今も、やりたいことを好きにやらせて頂いているので、勝手な不良といったところ



KIMOTO, Hiwako

木元ひわこ

【プロフィール】本名、木元多賀子。1962年5月22日生まれ。82年に「ガロ」入選。86年に「別冊少女フレンド」デビュー。現在、「別冊少女フレンド」「ジュリエット」などにも、時々作品を発表。



勝手な不良



# 『ガロ』の未来のために



TOOJO, Miho

## トオジョオミホ

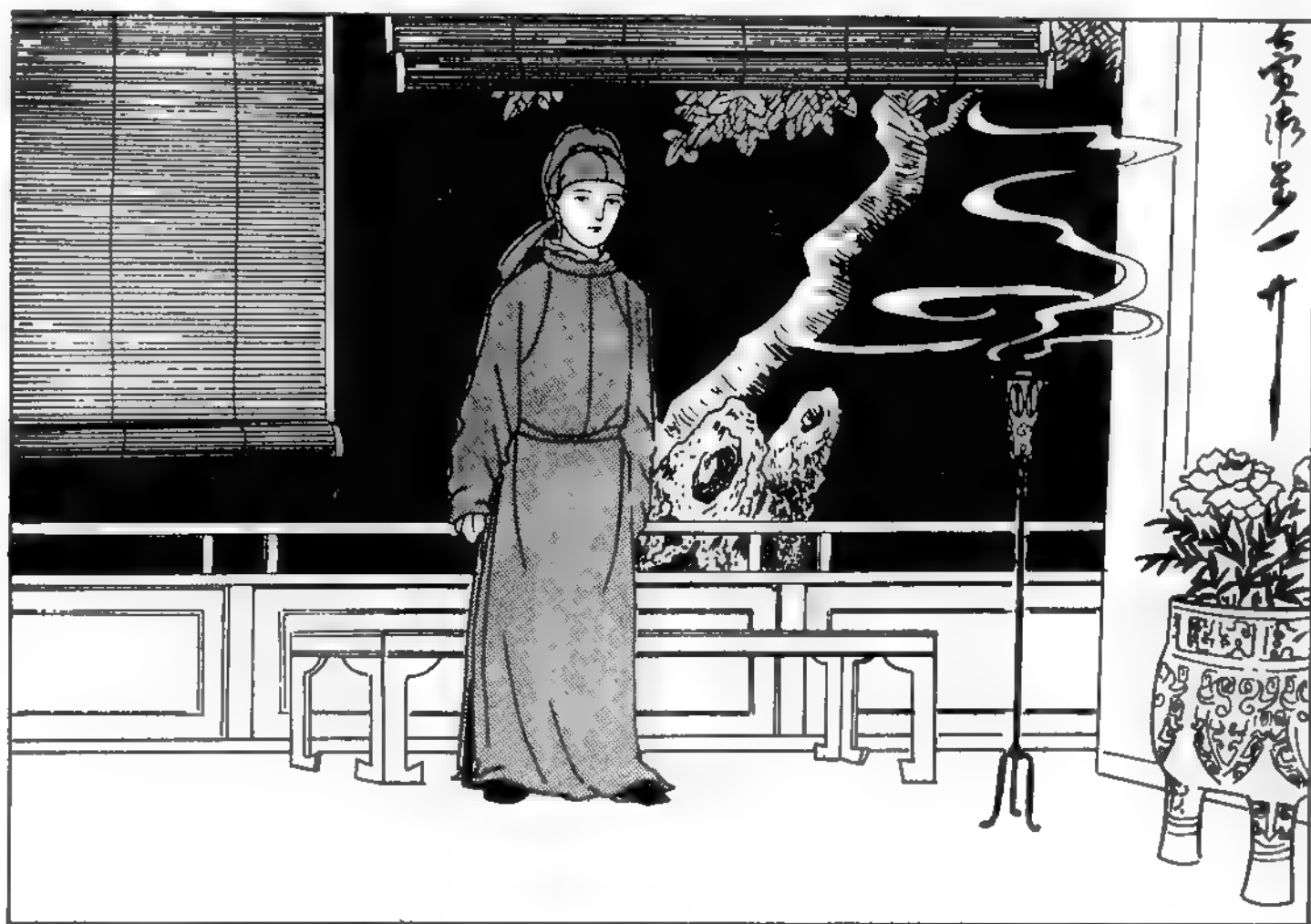
【プロフィール】経歴らしいものは何もないので漫画を描く前にやった仕事の種類を書きます。美術学校の頃はかけもちで新聞配達・家庭教師・焼肉やさん・絵の教室・バブウェイトレス・コンパニオン・土方・シルク印刷などのバイトに明け暮れ、高校のときも皿洗い・街角の似顔絵描き・カトリック教会で芝刈りなどを経験。その後は印刷会社・旅館の女中・バニーガール・事務職・トレース・CADのオペレーション・ゲームメーカーのCGデザイン等、短いところで一年という職業遍歴の後「やっと、ここなら一生いられる！」と思える広告代理店に巡り会えたのにクビになる。遍歴中にできた人脈でイラストの仕事を始め、今もやっています。でも根性も商売っけもなく、世渡りも人づきあいもヘタなので全然儲かってません。

私は今、あんまりバカなことを書かれては困る家族の大変きびしい眼にさらされながらこの文章を書いています。

最初に最も情熱こめて書いた原稿はすでにほうむられ、テーマも二転三転、文体も軽かったのが暗くなったり真面目になったり。内容も、先輩の足跡に負けないスバラシイ作品を描きたいとか、とにかくにも作品発表の場が与えられていることに感謝しています等私的なことから、『ガロ』の未来のためには作家がもっと積極的に関わったほうが雑誌にとっても作家にとってもプラスになるのでは

ないか、その方法としては村おこしならぬ『ガロ』おこしを提言し、青林賞を設けて有力作家陣が審査員となり各界に広く才能を求めるのも一案だし、イベントを開催するのも宣伝効果があるだろう、オリエンタリズムに弱いガイジン相手に海外進出もいいかもしれない、いっそのこと大衆芸術として版画並みに部数を限定出版し、質及び価値を高めスポンサーを捜すというのも、商業漫画に対する反旗をひるがえし『ガロ』のアイディンティティを取り戻すことになるのではないか等、今後のありかたへのアイディア、また何故か





ムイの続きが『ガロ』に描かれないのだろうか、自由を求めて抜け忍となったカムイも資本主義からは逃げ出せなかったというオチかしらんとか、その他もう脳が軟化するほどさまざまなことを打っては消し打っては消し（ワープロを使っているの）したのですが……。

もーうそんなことはいいです！ そんなのは私などより頭のいい実力のある人達が言ったり実行したりするでしょう。それに本当に私が一番考えているのは自分のことだけです。どうしたらもっと面白い漫画が描けるようになるだろうか、どうして早く描ける時と描けない時の差が激しいんだろうか、しかも苦勞して時間がかかった作品のほうが出来が悪いというのはどういうわけなんだろう、いつかは私も、日のあたる場所へ出られるかしら、とにかく描けるだけ描かなくては。おおそうじゃ！ 何よりもそのために、『ガロ』にはただひたすら存続しつづけてもらうしかないではないか！ という普遍的かつ根源的な、皆さんにも納得していただける結論を見るに至ったのであります。めでたし、めでたし。



# 『冥利』 を採して



YAMADA, Murasaki

やまだ紫

〔プロフィール〕1948年東京都世田谷区生まれ。19歳で雑誌『COM』新人賞受賞、同時に『鳳仙花』などを発表。『ガロ』初掲載は71年2月号『ああせけんさま』。以後『性悪猫』『しんきらり』などの作品を次々に連載。現在は漫画の他にエッセイ、詩などの分野でも活躍中。主な著書・漫画＝『性悪猫』（青林堂）、『新編・性悪猫』（ちくま文庫）、『しんきらり』（ちくま文庫）、エッセイ＋漫画＝『空におちる』（河出書房新社）、エッセイ集＝『満天星みた』（大和書房）、詩画集＝『樹のうえで猫がみている』（ちくま書房）などがある。

「原稿料も出ないのに（『ガロ』に）描くなんて偽善だ」若い描き手が聞こえよがしに言った。

『そんな事を言うもんじゃないのになア』と思いつつ、その後も、

「何故『ガロ』なのか」という質問には、ただ「好きだから」としか答えが出ず、そのもつと奥を考えるのが面倒だった。

「そんなもの、ただのマスターベーションじゃないか」と吐き捨てた人もいる。

「タダ働き」に甘んじているという立場の間を、根拠のない高みに立って汚す人の多い





ああ

# せけんさま

入選作品



のには困った。タダを承知で描いているんだからそれでいいじゃないかと思うが、それをアマチュアだとかプロ意識に欠けるとかの秤にかけたがる。

初めて『ガロ』に作品が載ったのはもう今から二〇年も前になる（その頃は稿料が出ていた）。その年月を経た感想としては、他誌で原稿料を貰って描く故の苦痛という点も否めず、ある。

大会社の編集者の中には、「編集者」たり得ない人がいる。彼等は金を払う「会社の顔」になって描き手に会いに来て、会社の意

図した作品を描けと言う。言う様に描けない作家の傷をえぐる様な皮肉を「親しさ」と勘違いして笑う。彼等は「まんが」が好きで編集者になったのではないと言う人が多い。故に「まんが」を現象面でしかとらえていない。描き手はいつでも次の作品を産もうとしているのだが、彼等は前に産んだ子をもう一度産ませようとする。

『ガロ』は次のものが産まれてくるのをいつでもじっと待っている。

何が描きたいか、と何が描けるのか、は別問題であるとはよく言われることだが、その点を一致できれば、描き手としての冥利に尽きる、それがしたくて『ガロ』の人々はいなのだ。打算で『ガロ』を利用した人々は大いに反省すべし。

先に『ガロ』人を偽善者呼ばわりした人も、その後「偽善者」になったので、先の発言はヤケクソであつたかしたのだろう。

『ガロ』は今大きく変わろうとしている。原稿料をもらえてなおかつ冥利も採せるらしい。理想である。





かつてマンガに熱中していた頃、『ガロ』をはじめて読んだのもその頃でした。「奇妙な名のふしぎな雑誌!」と感じた『ガロ』体験は、今も続いています。

一時期、描く側にまわって、長井さんには大変お世話になりました。感謝しております。あれから時がたち、日常性のなかで、毎月いちど『ガロ』を手にする時、なにが飛び出してくるかわからない期待、毒、牙、感傷。根性すえて描いている迫力は痛快です。

新鮮な、時代の表現だと思います。これはクセになる快感です。この世界をいつまでも守り続けてください。

『ガロ』の盛運を祈ります。

# 新鮮な時代の表現

FUJISAWA, Mitsuo

## 藤沢光男

〔プロフィール〕1943年、長野県生まれ。立正大学中退。65年に「ガロ」デビュー。社会福祉法人長野若槻園コロニー勤務。「才能に障害はない」を合い言葉に、障害者の中からアーティストをノと「障害者アートバンク事業」を地域に定着させるための運動をしています。



# 池上遼一

IKEGAMI, Ryoichi

当時私は大坂で貸本漫画を描いていた。働  
きながら漫画を描いては日の丸文庫に持ち込  
みをしていた。読者としては佐藤まさあき先  
生や、さいとう・たかを先生のエンターテイ  
ンメントなものが好きで、私自身もそういう  
方向に進んでいたが、同時に『迷路』という  
短編集にミステリーっぽい作品を描いていた



つげ義春先生も好きだった。

そんな頃、たまたま、初めて手に取った  
『ガロ』という雑誌で、そのつげ先生の「初  
茸がり」を読んでショックを受けた。それは  
今までに見たことのない漫画だった。これま  
でのつげ先生の漫画とも全く違っていたし、  
こんな漫画があっても良いのか、と目を開か  
れる思いだった。

さっそく私も、いわば「ガロ向け」の作品  
を描いて投稿した。これが初入選作「罪の意  
識」である。この作品が水木しげる先生の目  
にとまり、ちょうどアシスタントを探してい  
た水木先生から、長井さんを通じて、「ちょ  
っと東京へ出てきて手伝いをしないか」と誘  
われた。私は東京にあこがれていたこともあ  
り、すぐに上京したのだった。

それから二年、水木先生の所にいた。偶然、  
つげ先生がそこにいて、水木先生を手伝っ  
ておられた。水木先生とつげ先生とは性格的  
には違うが、とても気が合っていたようだ。水  
木先生も、つげ先生も、長井さんも、元来大  
阪人で商売人っぽい人々に囲まれてきた私に

【プロフィール】 1944年、福井県生まれ。65年に投稿作品の「罪の意識」が「ガロ」に採用され、これを契機に上京。水木し  
げる先生のアシスタントを経て、現在に至る。代表作は、「男組」(雁谷哲＝原作)、「フリーマン」(小池一夫＝原作) など多数。



は、大らかで、ひょうひょうとしていて、全く見た事のない人種に見えた。

つげ先生は、仕事が忙しい最中に、一週間も十日もふらりと居なくなってしまうことがあった。水木先生がまた大げさにさわぐのが好きな方で、

「どこかで自殺するんじゃないか？」

などといって大さわぎしたものだ。そうしているうちに、つげ先生はまたふらりと帰ってくるのである。つげ先生が徹夜で描き上げた原稿を、青林堂に運んだこともあった。

そんな中で、何本かの作品を単発で『ガロ』に発表していた。あの頃の私は人間不信というか、若さゆえに何か鬱積うつせきしたものがあ  
り、偽善を嫌い、焦燥感なども手伝って、今から思えば暗いものを描いていた。これは後の短期連載「おえんの恋」にも言えることだ。その一方で、『ガロ』の世界にのみ浸るのを、「恐い」と感じていた。私自身にはマイナーな感情の方が多いのだが、かといってその世界にだけ自分を置きたくなかった。

少年画報社から仕事が来たのをきっかけに、

水木先生の所を出て独立することができた。

私はストーリー作りが不得手なので、原作の方と一緒に仕事をするようになり、今に至っている。白土三平先生がやめた時点で、『ガロ』も難しい本になり、ついていけなくなってしまった。時代が変わって、私などの作品は『ガロ』の世界ではちよつと古くさいものになってしまったのだ。

しかし、『ガロ』はそれで良いのだと思う。最初から商業誌に登場するのは無理だ、という若い人たちが、前衛的なものを描く。いずれは時の流れと共に、『ガロ』に描いていても古くなる。次から次へと若い作者の感性を載せることで、『ガロ』はその時代のニーズに応え、作者にとっては登龍門となる。こうしていろんな才能を生んできたのだ。

将来の『ガロ』は、下手に分りやすくなってしまうかも知れない。売れ行きなどを気にしないで、若い人たちの通過点ステップとして、いつまでも存続してほしい。かつて六〇年安保の時代にも、その無意識さのうちに同調していたのだから。



# 私の場合



私、『ガロ』についてはあまり思い入れ深くは語れなくて申し訳ありません！

以前から手塚能理子さんたちとは知り合いでしたが、『ガロ』や青林堂との正式なお付き合いの最初は、青林堂の山ノ井さんが私の作品を気に入ってくださって、作品集を出す話を持って来てくれたからでした。もっとも最初の作品集はすでに他社から出ていて、二冊目のお話でしたけど。

最近の『ガロ』には私が描くようなタイプの作品も載っているけど、二三四歳の私が

SAKURAZAWA, Erika

## 桜沢エリカ

[プロフィール] 1963年7月8日生まれ。東京都文京区出身。高校時代から自販機本にイラストなどを発表し、高校卒業後、本格的にマンガを描き始める。処女作品集は『かわいいもの』(白夜書房)。「レッツ・ゴー・ラブリー」(青林堂)は2冊目の作品集。近著に『私に優しい夜』『ジャスト・ラヴァーズ』(マガジンハウス)、今年の夏発売予定の『LOVE SO SPECIAL』(角川書店)などがある。

三回くらい描いた八七年頃は、心の内面を追及する重々しいカンジのものが、やはり多かったですね。そういう内容は自分では描けないし、また描く必要もないと思ったので、あまり意識せず、重くなく軽くなってカンジで、結構自由に描かせてもらいました。

それまでも制約なしに描いてたから、特別『ガロ』向けに描いたわけではありませんでしたネ。ま、単行本も出してくださるので、その御礼っていう気持ちも込めて描きました。ただ、あまりギャグには走らないよう配慮はしましたけど。



## 今後の『ガロ』の展望

ここ数年、本当に『ガロ』は部数のジリ貧という危機に瀕していました。そんな中で、どうしたら『ガロ』の灯を消さずに続けられるか、模索し続けてきました。が、今の世の中、何かやろうとした時にネックになるのは結局「資金」でありました。青林堂は「貧乏」と言われ続けて三〇年。もう貧乏に年季が入ってる、とまで言われた会社ですから、どうして現状のままで何か出来るとは思いにくい状態で、とにかく潰さずに続ける、その事だけを考えて土俵際で歯を食いしばるのに精一杯だったのです。しかし、『ガロ』はやはり凄い雑誌でした。『ガロ』が産んだ『ガロリスト』とも言わなければならないいろいろな形で『ガロ』を救おう、と声をあげてくれたのです。『ガロ』は創刊が一九六四年九月号。当時の読者も、連綿と連なる今の読者の方々ももちろん、今は社会の中枢で活躍されている方も多く、あらゆるジャンルに散った『ガロリスト』の方達が、新聞で『ガロ』出身の漫画家の方々を取り上げて下さったり、雑誌のコラムで『ガロ』を救え、と声をあげて下さった

り……。本当に我々も力付けられました。しかし何より原稿料が出ない雑誌に快く執筆して下さっている作家の方々と読者の方々に支えられて来たのは言うまでもありません。

この度、そんな各界の『ガロリスト』の中で、業界は違えど我々と同様に『ガロ』を愛する『ガロリスト』——山中潤の協力を得られる事となり、「経済的には」とりあえず危機を脱しました。しかし、これからが本当の「立て直し」になるでしょう。具体的には、長井の築いてきた『ガロ』という雑誌の「自由な創作活動の場」「独創性のある作品、新人作家の登用」という路線を崩さず、同時に漫画に限らない『ガロ的世界』を発展させたい、と思います。そして何より、再び『ガロ』の灯をもっと大きく、明るく燃やし続けるのが『ガロ』を支えて下さった各界の『ガロリスト』の方達への最大の恩返しだと思っています。長井勝一、山中潤と共に我々編集者一同より、心から御礼を申し上げますと共に、さらなるご支援とご指導を賜りたく、旧にも増して宜しくお願い申し上げる次第です。



<p>海里 香 (りー かお)</p> <p>1983. 4 らぐたいむ★ 7 はなみ</p> <p>1986. 6 HAKKAKU</p> <p>1987. 2・3 風は東へ吹いて居る 幻燈堂</p>	<p>8 二人の海 9 毒電波</p> <p>1981. 2・3 アタシ達の青春 10 リレ・タコ・チュアル</p> <p>1982. 5 お父さんの膜 8 モーゼルのカッチャン</p>	
<p>渡辺安里</p> <p>1972. 10 ♣小学館。組み立て設計図</p>	<p>渡辺和幸</p> <p>1983. 1 当世サラリーマン生活中継</p>	
<p>渡辺一衛</p> <p>1969. 1 ♣絵としてのマンガ 増 7 ♣新宿ジブシーたち</p>	<p>渡二十四</p> <p>1965. 9 真昼★ 1966. 6 悪夢★ 1967. 2 逃亡者 11 終りなき午後</p>	
<p>渡辺和博</p> <p>1975. 8 私の初体験★ 12 公園の夜</p> <p>1976. 1 アトリエ訪問 ①安西水丸 2・3 小学生日記 ②安部慎一 4 私のお父さん ③永島慎二 5 ④高信太郎 6 ルームクーラー ⑤赤瀬川原平 7 水飲み場 ⑥鈴木翁二 8 ぼくのおじさん ⑦岩本久則 9 トランポリン ⑧鴨沢祐仁 10 ⑨川崎ゆきお 11 夏休み ⑩篠原勝之 12 強姦事件 ⑪村野守美</p> <p>1977. 1・2 交通事故 ⑫湯村輝彦 3 ホリデー・ツーリング 4 夢の話 5 夜明けのマルジュ 7 少年たちの夜 9 レッツ・ツイスト・アゲイン 11 林間学校</p> <p>1978. 1 ラブレター 2・3 堺町解剖事件 4 Z燃料のナゾ 6 金魚 7 シグナルGP 8 空港スピードウェイ 9 連発銃の謎 11 お父さんのネジ 12 銀河空港</p> <p>1979. 1 北風の街 2・3 ふたりのクリスマス 5 熊猫人民公社 7 タラコクリーム 8 タラコクリーム2 10 金魚の墓 12 巨大な……</p> <p>1980. 1 私の学校 2・3 ハードキャンディ 5 THE ROBOTS 6 シグナルII</p>	<p>どんとえっせい (絵と文)</p> <p>1984. 1 蛭子能収 「やくざと付き合うのはむずかしいという話」 2・3 みうらじゅん 「生きながらなんぎに葬られ」 4 平口広美 「イヨマンテも泣いた清らかな文通」 5 丸尾末広 「美しい万引き」 6 川崎ゆきお 「夢の成日記」 7 谷弘児 「へんな映画のこと」 8 やまだ紫 「地獄耳」 10 ひさうちみちお 「華麗なる初体験」</p> <p>方言講座</p> <p>1978. 2・3 ①広島弁 (渡辺和博) 4 ②静岡弁 (上杉清文) 5 ③三河弁 (高信太郎) 6 ④千倉弁 (安西水丸) 7 ⑤出雲弁 (水木しげる) 8 ⑦広島弁2 (渡辺和博) 9 ⑧河内弁 (間殿一哉) 10 ⑨盛岡弁 (吉田光彦)</p>	



11	〃	アホウドリ	1982. 5	まゆこ理科室	6	〃	②
12	〃	食の探究者	柚木加非		7	〃	③
1985. 1	〃	蓄膿二代	1971.増2	◆彼女について私が語れる二、三の事柄	8	〃	④
23	〃	白鳥の湖	湯村輝彦		9	〃	⑤
5	ララ物資の秘密		1976. 4	ペンギンごはん (原作＝系井重里)	10	〃	⑥
6	〃		8	ペンギンホテル ( 〃 )	1972. 8 ◆もののけの実態さだかでない……		
7	四丁目の夕日		11	ペンギンシャッフル ( 〃 )	11 よっぱらいも楽し、ルンペンも又楽し(前)		
8	〃		1977. 4	ペンギン主婦 ( 〃 )	12 〃 (後)		
9	〃		9	ホームドラマ ( 〃 )	四方田犬彦		
10	〃		11	キューボラもない街 ( 〃 )	1987. 9 ◆〃犬も歩けば〃(イラスト＝やまだ紫)		
11	〃		1978.23 白鷺城の花嫁		〃	①危険な場所?	
12	〃		8	ペンギンの恩返し	10	〃	②他人の顔
1986. 1	〃		11	明るい夜	11	〃	③メキシカン・キャノト
23	〃		1979. 9	愛がなければ (原作＝系井重里)	12	〃	④卒業試験
4	〃		1980.23	安息の夕飼 ( 〃 )	1988. 1	〃	⑤ニューヨークは楽しいか?
5	〃		9	昼顔ケーキ ( 〃 )	23	〃	⑥キリスト教徒の兄弟
6	〃		1982. 5 ヘンタイよいこ対		4	〃	⑦マリコ
7	〃 最終回		恥ずかしい根っ子の会 ( 〃 )		5	〃	⑧世界で一番うまい寿司
8	ブリの話		夢野浩二		6	〃	⑨帰国直後
9	睡蓮		1975.10	クロス・ローダー★	7	〃	⑩香港のスピード
11	きよしちゃんのおつかい		吉岡さとし		8	〃	⑪丸坊主の学生たち
12	出前物語		1985. 9 メリー・クリスマス★		9	〃	⑫引越し前夜
1987. 4	きよしちゃんの剣道一直線 ヒヤバアカ		吉田昌一		10	〃	⑬やっと夏だ!
9	よしちゃん	紙芝居の巻	1972. 8 北への旅人		11	〃	⑭台北記念日
1988.12	のうしんぼう ヒヤバアカ		吉田光彦		12	〃	⑮九月十九日以後①
山野一(作)、ねこぢるし(画)			1975. 8	殴者(ボクサー) ★	1989. 1	〃	⑯九月十九日以後②
1990. 6	ねこぢるうどん		1977. 6	ピンホール	23	〃	⑰天下泰平
7	〃	かぶとむしの巻	12	フリ子の家出	4	〃	⑱ピン・チョン
8	〃	こてんしゃでゴー	1978. 7	エロティック・イメージ	5	〃	⑲死んだらどうなる
9	〃	さばの天ぷら	12	ズーム・バック	6	〃	⑳香港再訪
10	〃	いいさかな	1982. 9	みじかい夏・ながい一日	7	〃	㉑セックスの欄
11	〃	のぐちひでよ	1990. 5	花物語	8	〃	㉒「気狂いピエロ」の受難
12	〃	へんなもも	6	〃 金木犀綺譚	9	〃	㉓イカ天と明菜
1991. 1	〃	しつこちつこぴゅ しゅ	7	〃 秋花異聞	10	〃	㉔仕事日記
6	〃	かたつむりの巻	8	〃 桔梗さんと薫吾	11	〃	㉕海辺の叙景
山松ゆうきち			9	〃 名は七子	12	〃	㉖何より駄目な東京
1973.12	故郷紀行		10	〃 花屋敷	1990. 1	〃	㉗くたばれ教育アレビ!
1978. 4	こけたりこけたり		11	〃 眩惑の夏	23	〃	㉘余生と生存
1983. 5	私、死ねません		〃	海をみつめる女	4	〃	㉙冬の速度
山本いくお			1991. 5	梅花二輪	5	〃	㉚ハートオブザストーン
1967. 4	スリ		淀川さんぽ		6	〃	㉛豚と引越し
1968.増P	新団体誕生		1969. 9	少年★	7	〃	㉜逃亡と停滞
やまもとみわ			12	身体検査	8	〃	㉝詩人の死
1990. 1	破瓜(前編) ★		1970. 3	シュールな出来事	9	〃	㉞平々凡々の日々
23	〃	(後編)	6	たこになった少年	10	〃	㉟ピョタン町
湯浅 均			12	赤ずきんちゃん(前)	11	〃	㊱祭りとその後
1981.23	炭と灰		1971. 1	〃 (ふと)	12	〃	㊲緑雨の流儀
ユズキカズ			5	怪人Mと少年探偵団①	1991. 1	〃	㊳嫌いなものは嫌い!
1981. 7	シカゴ・パレス★				23	〃	㊴即位の前夜
					4	〃	㊵大戦勃発
					5	〃	㊶戦争集結
					6	〃	㊷「ジフのチンピラ



矢口高雄⇒高橋高雄	6 " ④	12 治郎さんの場合
やすだたくお	7 " ⑤	1985.23 こうして猫が増えたり減ったり
1967. 9 罪の意識	8 " ⑥	4 "
休石ひろふみ	9 " ⑦	6 "
1989. 4 南の島から来た少女★	10 " ⑧	9 "
12 となりのじい	11 " ⑨	11 "
1990. 4 ホットミルクの店	1980. 1 " ⑩	1986. 1 "
12 青春の恐怖	23 " 完	23 "
1991. 6 両国の空	4 立春	5 "
やづちかこみ	5 おくり火	6 "
1985. 11 シャドウ・スター	6 鈍たちとやま猫	9 "
山川直人	7 静かな將軍	10 "
1989. 8 手品師★	8 ししの恋	1987. 1 たいがいにしなさい
うたかたの日々	10 夏休み	6 目ざまし猫
10 頭のいいネコ	12 星見酒	やまだ紫+井坂洋子
山口重明	1981.23 しんきらり①	1988. 6 夢の迷子たち
1966. 7 ◆社会事評、教育体制と社会	4 " ②	7 番人 第一話
山口豊之	5 " ③	8 犬の時間
1969.増7 ◆私見的永島慎二論	6 " ④	9 展望台にて
山田花子	7 " ⑤	10 幕
1989. 8 男心	8 " ⑥	12 朝礼
9 嘆きの天使 待ち合わせ	9 " ⑦	1989. 1 父の胸
" 対人の基本	10 " ⑧	23 ニッシン
10 " 乙女のフルーツ	12 " ⑨	8 トランプ
11 トモダチ	1982. 1 " ⑩	11 着用品
12 嘆きの天使 いちようの実	23 " ⑪	1990.23 1の汚点
1990. 1 " 修羅の図鑑(地上篇)	4 " ⑫	ヤマダリツコ
23 " 絵物語 桃子の初恋	5 " ⑬	1988. 4 平均的な高校生①
4 " イオナ、私は美しい	6 " ⑭	5 " ②
5 " 卒業式(信じる者は救われない)	7 " ⑮	6 " ③
6 みんな燃えてしまえ	8 " ⑯	11 " ④
7 オタンチン	9 " ⑰	1989. 1 " ⑤
8 バチあたり	1982. 11 東京だよお嬢さん	4 " ⑥
9 問題児	12 しんきらり①	5 平均的な高校生の母
10 ナチュラル・キッド	1983. 1 " ⑱	11 平均的な高校生
11 バカの時代(増刊号)	23 " ⑲	12 平均的な中校生
12 馬鹿は死んでも治らない	4 " ⑳	1990. 1 姉弟人義
1991. 1 こども天国 ビーナッツ	5 " ㉑	23 平均的な高校生
23 給食	6 " ㉒	4 "
4 入学式	7 " ㉓	6 東京やまだクラブ
5 日直同志の会話	8 " ㉔	7 平均的な高校生
6 にちようび	9 " ㉕	10 パパは何でも知っている
やまだ紫	10 " ㉖	山根貞男⇒菊池浅次郎
1971. 2 ああ、せけんさま★	11 " ㉗	山野一
1978. 12 ときどき陽溜りで	1984. 1 " ㉘	1983. 12 ハビネス イン ビニール★
1979.23 性悪猫①	23 " ㉙	1984. 1 ブルジョアジーの秘密
4 " ②	4 " ㉚	23 夢の島 タブー
5 " ③	5 " ㉛	7 アルバイト
	6 " ㉜	8 夢の島 DREAM ISLAND
	7 " ㉝	9 " "
	8 " ㉞	10 " 最終回
	9 " ㉟	
	10 " 最終回	



6 いも 7 霊鬼 8 影鬼 9 鯉のジョーズ 10 いつもの道 11 レ・ミゼラブル 12 話うちマック老の場合	1980. 1 遠雷 2・3 今昔物語 4 かわらもん 5 みずすまし 6 シリーズ「かわらもん」春風 7 " っしろの正面 8 " 蛍花火	1984. 1 給食 4 吉田山心中 5 秘密出版 6 夢の金魚 1985. 7 夏休み 8 サーカスの馬 1986. 7 なんでもない① 9 " ② 1987. 5 " ③ 6 " ④ 11 " ⑤ 12 " ⑥ 1988. 2 " ⑦	森本哲弘 1968. 3 汽笛★ 11 白い砂
1980. 1 WIRE NET 2・3 デイドリーム ? Missing 7 阿蘇は見ていた		森町長子 1970. 1 ほっぷすてっぷじゃんぷ	屋我平勇 1972. 6 こんなさわぎ★ 8 こんな人
望月勝広		森本清彦 1970. 4 通路' 70 1973. 10 特色アニマル	八鍬真佐子 1980. 4 ぶいさん村放送局 5 " I 6 " II 7 " 特番 9 " IVたいふう 10 " Vファッションショー 11 " VI収穫まつり
1989. 10 くじら★ ウミウシ タネ ふくらはぎ 12 女工 1990. 1 夏の日の鯉 2・3 鯊 4 傾城魚 (ジェニ・ハニバース) 5 象魚 6 動物園 7 バイク 9 ミロガンダ 10 金魚 11 単色望月図鑑①②③④ 12 トルエン・トレイン 1991. 2・3 竜宮の使い 4 窓の外はドブ溜め 5 鯢 6 観光案内		森元暢之 1982. 11 理想的家庭崩壊劇少年(ゲルマン)篇★ 1983. 8 出口あり 12 彼等の為すべき事 1984. 2・3 マタイ伝第5章44節 8 イチゴ水のむこう 1985. 5 鎖骨とウマトビ 1986. 1 反省しない犬 2・3 放射線ボタン 5 みずから我が墓穴を掘りたまふ日 9 酒池肉林 10 POP DOG (反省しない犬) 1987. 1 なつくさや 4 夏ノ1P (ペンス) 6 美しき青き 10 窓辺のKくん 12 NOBARA 1988. 1 猫ト林檎ト貧乏ト 8 THREE TREES 9 天六文庫 10 めをやまと 11 窓辺のKくん 12 The old woman said "Please take Me to the river" (前) 1989. 1 " (後) 2・3 MAKING RADIO SHOW 4 思春之記 5 " 8 キノサキにて 11 天六文庫 1990. 4 逃走 6 FUTANARI	八鍬真佐子+かじゆこ松島 1980. 12 あらまあ荘ニュース 1 " 2・3 " 4 " 5 " 6 " 7 " 8 " 9 " 10 " 11 " 12 " 1982. 1 " 2・3 " 4 " 5 " 8 " 9 " 10 " 11 " 12 " 1983. 1 " 2・3 " 4 " 5 " 6 " 7 " 8 " 9 "
もと・のりゆき			矢口順一 1990. 7 違う日★ 8 電車 9 PEACEFUL 1991. 1 楽しく無い!! 4 I wanna go out
1973. 11 海★			
森幸雄			
1975. 2 逆恋夢世界★			
もりただし			
1966. 2 前世紀★			
森下裕美			
1982. 4 少年★ 6 ア中少女 7 すききらい 1983. 2・3 恋人 5 少女は動けない 11 金魚			



10 街の詩人たち 11 黒い砂漠 12 ドブ川に死す 1975. 6 作画生活 25 周年記念アンソロジー ①「丸い輪の世界」 ②妖精 ③怪忍 ④島 1976. 7 ガロCALENDAR 1979. 1 日本幽霊館① 2・3 " ② 4 " ③ 5 " ④ 6 " ⑤ 7 " ⑥ 8 " ⑦ 9 " ⑧ 10 " ⑨ 11 " ⑩ 12 " ⑪	8 部屋 9 月の夜のグリグニュ 10 濃霧 12 野辺は無く - 1982. 1 坂の終り 5 冬のこぶし 7 B氏の気がかりな宵 1983. 1 THE KILLERS' 2・3 現代おでん屋気質 4 A SLEEPING DRUG 5 ムーンライト 7 ビューティフルディ 9 前兆 11 キリギリス 12 洋々たる人生 1984. 1 天空より光が ① 4 " ②	武良茂⇒水木しげる  村田絵嗣 1981. 7 入学式★ 9182. 7 人形使い  村沢まさお 1976. 7 惨夢の怪★  村野守美 1974. 3 懸崖 1975. 1 残火 2 旅一座 3 しょうじきしゃふ 4 カタカタ 5 グラグラ 6 しま 7 関白さん 8 ちんちりりん 9 ガラランラン 10 迷子石 11 地獄峠 12 昇り風 1976. 1 ハイ…小学二年生 2・3 ニューヨークの神様 4 キャメラマン 5 さんささかやの 6 " 7 撃沈 8 クワイ河マーチ 1976. 9 それから 27 年 10 せんぼうき 11 マヤヤ (マーヤ) 12 だめ思い 1977. 3 25 メガヘルツ 4 さいごの狼 5 どぶだめ 6 少年の旅 7 少年 A 9 四十六発 11 残桜 12 残り夏 1978. 2・3 チーフ 5 燃えよ篝火 7 楽園喪失 8 秘戯御法 9 けもの道 10 夏嵐 11 白い馬 12 蟬の時間 1979. 1 雪花 2・3 ふいにみななしになる 4 龍神 5 私の愛はかわらない
水沢周 1965. 2 ♣滅亡の中の本質  皆瀬高宣 1984. 8 赤い靴 11 黄金虫  南伸宏 (南伸坊、M・シンボー) 1974. 5 ♣計報・楠勝平氏が急逝された 1975. 10 空飛ぶ円盤の謎 1977. 7 終電車 10 ? 1978. 4 名前はまだない  峰岸達 1980. 11 真夏の放課後★ 1981. 4 1 中ファイト 1982. 11 扁桃腺の夏  三橋誠 (三橋乙擲) 1965. 12 ある日若者は旅だった★ 1974. 6 あの日のリンゴ 8 ビューティフルシティ 1975. 12 秋の気配 1976. 1 ざれ唄・小唄・コスモスによせる 2・3 恋 4 海 8 巨人説 1977. 1・2 N君の夕暮れ 3 新年 1978. 12 銭湯風景 1980. 11 シグナルムーンディ 12 月 1981. 4 蕉 5 Highway 61 6 鳥打帽子をかむったHがおとしたマ ッチの軸	宮内仁 1987. 9 私は深い海に沈んだ漁★ 10 海と虹のための協奏曲 12 風の船 1988. 4 台風 26 号 7 月之ナイフ 12 ウィンチェスター邸迷宮譚 1989. 1 " VOL 2 8 " VOL 3 9 " VOL 4  ミヤガミホトリ 1990. 12 青緑色の夜★ 1991. 4 炭酸水、血液、薄荷  宮谷一彦 1977. 8 生恋 (序) 9 " ② 11 " ③ 12 " ④ 1978. 1 " ⑤ 2・3 " ⑥ 5 冒険王 6 生恋 ⑦  むらおか栄一 (村岡栄一) 1975. 3 少年時 4 肥後守 5 少年時 6 " 7 "  村上知彦 1972. 8 ♣レポート うらぶれ新青年月夜の 歩行	



みぎわパン		水木しげる 武良茂 - ⑩、他に東新一郎名義で「ローター」連載		鬼太郎夜話⑦	
1985. 6	ばんこちゃんになろうっ★	1964. 9	不老不死の術	1968. 1	" ⑧
8	"	10	イボ	2	" ⑨
9	"	11	勲章	3	" ⑩
11	"	12	ネコ忍	4	" ⑪
12	"	1965. 1	神変方丈記	5	" ⑫
1986. 1	"	2	ああ無精	白い旗	
4	"	3	神様	6	妖怪マチコミ
5	"	4	剣豪とぼたもち	鬼太郎夜話⑬	
6	"		イソップ式漫画講座	増 6	▲つげ義春氏との出偶い
7	"		①「どうなってんの」「これはたまらん」	7	" ⑬
8	" (番外編)		劇画小史②	9	" ⑭
10	シアワセ	5	幸福の甘き香り	10	" ⑮
11	ガマの朝	6	こどもの国①	11	" ⑯
12	ストレス	7	" ②くさった国	12	" ⑰
1987. 1	ばんこちゃんになろうっ	8	" ③戦争と平和	1969. 1	" ⑱
2-3	" 人間ふれあい劇場	9	はかない夢	2	" ⑲
4	愚しいばんこ	10	闘牛	3	" ⑳
6	みかんちゃん! カサブタ	11	マンモスフラワー	4	" ㉑
7	マサヲさんのおもいで	12	福の神	1970. 2 未来のトオキョウ	
8	働かなくてもよい生き方		コブ	5	▲近藤勇と国境線
9	燃ゆる火の火中に立ちていこいのみぎわ	1966. 1	カモイ伝	増 5	▲池上青年のこと
1987. 11	明け方のわたしちゃん	2	君富みたもうことなけれ	10	星をつかみそこねる男①
12	日本画のセンセイ	3	墓場の鬼太郎	11	" ②
1988. 1	ちょろりん郵便		チャンピオンと晴着	12	" ③
7	国分寺あいさつ通り		トランク	1971. 1	" ④
9	夏だ! キャンプだ!	4	なまはげ	2	" ⑤
10	ナイトクラブでお唄をうたいましょう	5	未来をのぞく男	増 3	▲辰己ヨシヒロとぼく
11	家庭内文明	6	夢の食糧	3	星をつかみそこねる男⑥
1989. 2-3	ナショナル太陽	7	惑星	4	" ⑦
4	2足めはクラリーノ		一万人目の男	5	" ⑧
5	すてきな夏休みの見本	1966. 8	怪物マチコミ	6	" ⑨
6	" (後篇)		五円玉	7	" ⑩
7	王様が下血をされたわけ	9	丸い輪の世界	8	" ⑪
8	虫の息になったとき、虫は知らせる	10	暑い日	9	" ⑫
10	ばんこがもうひとり		昭和 141 年	10	" ⑬
12	地底人が来たぞ	11	足跡の怪	11	" ⑭
1990. 2-3	オニはそと		深夜のバス	12	" ⑮
6	おもいだす	12	怪奇死人帳	1972. 1	" ⑯
7	もうすぐ昔がやってくる	1967. 1	砂かけ婆	2	" ⑰
8	彼岸ばな		紙魚	3	" ⑱
9	もりくんとばんこちゃん	2	恐るべきライバル	4	" ㉑
10	家畜の象のあそびせ方		死者の招き	5	" ㉒
11	波と睡眠	3	べとべとさん	6	" ㉓
12	睡眠学習	4	錬金術	7	" ㉔
1991. 1	オーシャワシャワ	5	木枯し	8	" ㉕
2-3	あすなろ+はえてくるわいてくる	6	鬼太郎夜話①	9	" ㉖
4	割りきれない十七時	7	" ②	10	" ㉗
5	地球の球根	8	" ③	▲鈴木翁二くん	
6	へそのゴマの花	9	なまけ武蔵	1973. 8	血太郎奇談
			鬼太郎夜話④	11	「チャンピオンと晴着」「トランク」
		10	" ⑤		「これはたまらん」「どうなってんの」
		11	" ⑥	1974. 2	「剣豪とぼたもち」
		12	日本のカミサマたち	9	突撃悪魔くん



10 〃	5 〃	VOL 6. 松本充代	7 頭カラッポ・プロマイド・ポーカーゲーム
1986. 8 大型四駒漫画	6 〃	VOL 7. 石川次郎	8 柴犬と哀愁
1987. 5 〃 其の貳	M・みやはら(国際アニメーション研究所漫画コース生)		9 みうらじゅんのおさえたもの 86
7 でたらめでごじゃる	1982. 2・3 古本と少女		〃 「のんちゃんのエイチコロ人生」
1991. 2・3 霊脳サイバネKID 第1回	みうらじゅん		10 〃 「手塚能理子のにせ者は私だ」
4 〃 第2回	1980. 10 ウシの日★		11 〃 「ノリマンの変態トリノブ」
5 〃 第3回	1981. 2・3 怪獣クラブ		12 〃 「先天性珍語のトチギ」
纏手かおり	8 ゴジラの運搬		1987. 1 ガロ系まんが道「大の日」
1983. 11 愛のデザート★	1982. 11 ホトホトなんぎなパパとママ		2・3 〃 〃 その2
1984. 1 禁断の実	1983. 4 わてが14の春とした		4 〃 〃 その3
4 圧搾艶出機	1987. 6 ベットやくざ		5 〃 〃 その4
10 信シルモノハ抄ワレル	7 ホワッツ・マイケル富岡		6 犬の日スペシャル
1985. 5 ジャックと豆の本	8 源泉徴収トミーとマツ		1987. 7 〃 セックス大
6 愛は死ななきやなおらない	9 野獣デカイ		8 〃 犬のTPO
7 裸のサラリーマン	10 おはようナイスガイ		9 〃
間殿一哉(まどのかずや)	11 ちんかすのだんな		10 〃
1976. 12 運命の男★	12 ボルネオ・マラ		11 〃
1977. 3 丘のむこう	1988. 1 うんこため造		12 〃
6 祭の前	2・3 仮面ライダーあそこがBLACK		1988. 1 〃
10 青目	4 ビデとロザンナ		2・3 〃 おりこん坊犬
1978. 2・3 ねずみの怪	5 ボクとカエルと校庭で		4 〃 えらばれし人々
まりのるうにい	6 イマラチオ山脈		5 〃 危険な犬情事
1978. 4 マシュマロ男爵の冒険	7 What's Michael Tomioka? ②		6 〃 スカ野郎
丸尾末広	8 兼たかかえる世界の旅		7 〃 ㄨのナンパ野郎
1982. 8 せんずり千太	10 What's Michael Tomioka?		8 〃
10 初恋霊千鞭譚	11 肉襲慕情		9 〃
1983. 2・3 月よりの使者	12 ブラボー! 大島くん		10 〃
8 僕の少年時代	みうらじゅん(イラスト)、手塚能理子(文)		1989. 7 じょしこおせえブルース
1985. 9 ウコンゲッポ	1984. 8 恥ずかしい話してみよー		8 心の花束
1988. 7 金の手帳 丸尾末広劇場	〃 「鼻くそです」		9 オシャレカマンボ
愛しの昭和	9 〃 「油性です」		10 うしろの正面① 渡米
1991. 5 耳ナシ芳一(前編)	10 〃 「オナニーです」		11 〃 ② ポ カル
6 〃 (後編)	11 〃 「ジャ ンの世界」		12 〃 ③ 独立
丸山玉子	12 〃 「小間物屋など 般」		1990. 1 〃 ④ 百人
1990. 9 ダメだコリャ	1985. 1 〃 「長髪と宿便」		2・3 〃 ⑤ 左手
1990. 10 〃	1985. 1 〃 「長髪と宿便」		4 〃 ⑥ 13対10
11 〃	2・3 〃 「教養と脳膜炎」		5 〃 ⑦ 自家中毒
12 〃	4 〃 「放屁と陰毛」		6 〃 ⑧ 34 cm
1991. 1 〃	5 〃 「大人のおねしょ」		7 〃 ⑨ カメフ
2・3 〃	6 〃 「妙に童顔のハゲ」		8 〃 ⑩ あくび
4 〃 ひなまつり特集	7 〃 「インテリ」の編集後記		9 〃 ⑪ 半肩
5 〃 ペントを飼おう! の巻	8 〃 「大人げないアイドル大人」		10 〃 ⑫ クラゲ
6 〃 サルゴリッチンパンジの巻	9 〃 「身のほど知らず足クサ男」		11 〃 ⑬ インド人
作家インタビュー	10 〃 「魅惑的香港見聞記」		12 〃 ⑭ へる
1989. 10 塵っ淵談話 VOL 1. みぎわパン	11 〃 「身のほど知らずのBIG野郎」		1991. 1 〃 ⑮ トレーシー
11 〃 VOL 2. 森元暢之	12 〃 「とり残された」ダ たち」		2・3 〃 ⑯
12 〃 VOL 3. 近藤ようこ	1986. 1 〃 「プライド無視の出しゃばりバカ」		4 〃 ⑰
1990. 1 〃 VOL 4. 大越孝太郎	2・3 〃 「生まれつき偉そうな文化ハゲ」		5 〃 ⑱
2・3 あなたの知りたい世界VOL 5. 根本敬	〃 「スマイリー金太」		6 〃 ⑲ V&R
	4 こいつってキテるよねー		三上貞雄
	5 チャーリー・スミス物語		1974. 9 悪夢★
	6 〃		



<p>9 殺し屋稼業 10 坊ちゃん殺し屋 11 生きたい 12 金塊持って 50 年後に行こう！</p> <p>1966. 1 実験 2 ペット 3 死ねない理由 4 正夢 5 最後の一葉 6 カ眼ラ 7 ザ・ゴッド・オブ・デス 9 巷の神様 10 電話友</p> <p>1969. 11 Mime 1970. 1 哲人マサイの悲劇</p>	<p>1979. 11 千光年のリヤカー 1980. 4 無重力都市</p> <p>まつおかさだはる</p> <p>1982. 5 怪人二十五面胴 8 満州帰りのテルちゃん</p> <p>松沢 呉一 (エッセイ)</p> <p>1991. 1 飲尿自転車男業界漫遊記 VOL 1 23 " VOL 2 4 " VOL 3 5 " VOL 4 6 " VOL 5</p> <p>まつのたけし</p> <p>1982. 10 SOUND BREAK★</p>	<p>12 秋ぐち 1987. 1 女の声帯 23 死んでゆくものたち 4 眠れない 5 高校生でいたくない 6 入学 7 「所有物」 8 Masturbation (恋) 9 この世の女子 10 清めのプール 11 木村雪 12 非常口</p> <p>1988. 1 したでにできればつけあがる 23 天上の精神にお約束して 4 愛情のほとんど 5 うめられぬ 6 肉に喰われた痛み 7 あなたとわたしは一心同体 8 遠くに聞こえる 9 かげ 10 " 11 マーブル 12 基本的青春 I, II</p> <p>1989. 1 DREAM OF WEDDING 23 アイ・ラビ・ユー 4 せん 5 IN NEWYORK 8-89 6 過去の恋愛 7 暗い夜に近くなる 8 安城君へよせる想い 9 乳白色の水 10 抱けない理由 11 秋田智世 12 ひらかないころ</p> <p>1990. 1 決められた事 23 赤い日 4 僕の声 5 触らない関係 6 12 歳 7 よるくうき 8 夏のプール</p> <p>1990. 9 盛夏に 10 Aventure 11 叱られる子供 12 1 年の秋</p> <p>1991. 1 叱●の声 2 かい</p>
<p>真崎守 (峠あかね、もりまさき)</p> <p>1974. 1 蛍ゆき</p> <p>升田かずお</p> <p>1967. 6 マンガ革命★</p> <p>増田義忠 (舩田義春)</p> <p>1966. 1 巨塔 1967. 8 見解の相違</p>	<p>松本充代</p> <p>1982. 6 糸口 8 一線</p> <p>1983. 6 先日の事 7 紫煙の空 8 通気 10 自己実現 11 ひま 12 こいびと</p>	
<p>増村博 (ますむらひろし)</p> <p>1973. 8 1975 ★ 11 再会 12 母なる大地の子どもたち</p> <p>1974. 3 GOOD-BYE 1974. 4 春街スケッチ 5 星ふる夜の天使たち 8 アップルタウン</p> <p>1975. 5 ヨネザアド物語 (出発の冬) 6 " 7 " 8 " 9 " 10 " 12 " 1976. 23 "</p>	<p>1984. 1 呼吸法 23 ふたりの時間 4 焦燥 5 流れない 6 性格改善委員会 7 キセイガイネン 8 星の中 9 二十四の私 (おんな) の中に</p> <p>1984. 10 健康不良の学生 11 づくり 12 背景</p> <p>1985. 1 訪問者 23 肉欲 7 私はこうして生きてゆけはするけれど 8 鋼鉄のからだ 9 成人の日 10 午前 4 時～ 11 ユメ 12 "</p>	
<p>マーチン荻沢 (テリー 100%)</p> <p>1981. 12 小さなスナック 1982. 6 希望の明日</p>	<p>1986. 1 曖昧な毎日 4 長い夢 5 小室まさえ覚えがき 6 ゆめ子さんがバラバラになってゆくとき 7 対話 8 貴方と私のこと 9 吸収への憎悪 10 天然の夏 11 ひまなきもち</p>	
<p>松尾ひろし</p> <p>1977. 12 ハリー氏のこと★ 1978. 1 空飛ぶ円盤にのって 23 銀河系にて 4 キノコ国のハリー氏 5 無重力都市 6 成層圏 7 ポリプの奇蹟 11 青写真</p>		<p>マディ上原 (上原摩泥)</p> <p>1985. 5 かぞくのくらし 6 " 7 " 8 " 9 "</p>



11 "	9 "	その四 恐海 "	11 "	④
12 "	10 "	その五 六輪 "	12 "	⑤
1974. 1 "	12 "	その - 島の十字路満月	1977. 1-2 "	⑥
3 "	1974. 1 "	その二 " こくん	1979. 1 "	⑦
4 "	7 水界		1980. 4 ひつじ	
1982. 8 夜の公園	10 イメージSTATION ①		星川忠	
9 シャルマン	11 "	②	1970. 8 捜索者★	
10 煙草	12 "	③	11 立退き	
藤原マキ	1975. 1 "	④	1971. 5 こんにちわきようなら	
1974. 8 絵日記★	2 ある童話のための習作		7 犬!	
船木多佳子	4 .....		8 今月のクイズ	
1985. 2-3 家の話	1976. 4 原始海岸		10 "	
古川タク	5 "		12 抱擁	
1978. 8 コミックスパーラー	6 "		1972. 7 家族	
古川益三	7 ガロCALENDAR		8 家賊	
1969. 7 野風呂	1979. 5 紫の伝説 終章 その		10 なあに	
1970. 2 紫の伝説 ①万燈流し②夜学生	6 " " " その二		11 27年目の死	
3 " ③朝 ④くれない	7 " " " その二		1973. 1 1973年千葉市は	
" ⑤島	8 " " " その四		星川てっぷ	
4 " ⑥湖の鐘 ⑦夜汽車	9 " " " その五		1965. 9 顔の曲がった男の物語★	
" ⑧青葉川 ⑨野草	10 " " " その六		10 殺し屋多吾作	
" ⑩冬夜山小絵詞	11 " " " その七		12 目と戦争	
6 " その一	12 " " " その八		1969. 9 ぶんぶんぶん	
7 " その二	1980. 1 " " " その九		10 タッタカターンズツタッタッタッ	
8 " その三	2-3 " " " その十		堀口寿美	
10 " その四	4 " " " その十一		1972. 5 みなさん信じて下さい★	
12 " その五	5 " " " その十二		本郷正広	
1971. 1 " その六	8 川の中		1991. 5 GOOD★	
2 " その七	9 無羅無羅		6 ジャム	
3 " その八	10 お茶		ほんまりう	
4 " その九	11 空		1975. 7 純愛	
5 " その十	12 忘れ物		前川宇見太	
6 " その十一	1981. 1 釣り		1965. 4 忍者行くところ	
7 " その一	2-3 鐘の音		5 "	
8 " その二	4 街の道		忍者大鳥	
9 " その三	5 みのむし		6 大鳥独り歩き	
10 " その四	6 邪尼曼陀羅①		7 忍者行くところ	
12 " その五	7 " ②		大鳥独り歩き	
1972. 1 " その六	8 " ③		前川かずみ	
2 " その七	10 " ④		1979. 9 灰色の瞳をもつ少年★	
3 " その八	11 " ⑤		12 小さき妖精	
5 " その九	12 " ⑥		1980. 10 ALARM-I	
6 " その十	1982. 1 " ⑦		1981. 2-3 Magicion My tiry Huse	
9 ♣アベとのそのマリアに関するムチャクチャな評論	2-3 " ⑧		マーク・バイヤー	
10 九月一日風沙として	4 えんげきょう		1984. 12 トニーターゲットの強烈な痛み	
12 紫の伝説 その一	5 不安銅羅の…… (パンドラの)		正井しげ魚	
1973. 2 " その二 氷湖	1988. 4 せっしやの修行日記		1965. 7 完全	
3 " その三 寒湖	6 "		8 ゴキブリおやじ	
4 " その四 祭の春陰	紅すー子			
6 " その五 吐月峰噴火	1976. 7 ヒゲにいちゃん★			
8 " その六 S8	8 " ①			
	9 " ②			
	10 " ③			



肥後十三子	日野日出志	ふぐ正
1979. 9 めくら峠★ 12 焚火	1968. 5 どろ人形 9 水の中の楽園 増 9 壇輪の森の伝説 11 ばか雪	1973. 7 雨の流れに
1980. 4 流れ初め		藤井勉
1981. 1 ゴリラの御帰宅 8 たれこみ		1970. 6 万年雪★ 1971. 5 秋にはふたありで 11 きよしあざばんば 1972. 4 ますらおの
1982. 6 昼休み 12 戻ってきた日		藤川治水
ひさうちみちお	平口広美	1964. 12 ♠ スポットライト白土のまんがの面白さ
1976. 8 パースペクティブ・キッド★ 10 ベルサイユの薔薇族	1978. 6 電車を待っていた★ 8 愛のタバコ屋 11 ギョーザ定食の昼	ふじ沢光夫 (藤沢光夫、江口満雄、江口みつまさ)
1977. 1-2 パースペクティブ・キッド② 8 嘆きの天使	1982. 8 歯をみがこう 1983. 1 山に登りて 1984. 6 芸術家は死なず 1986. 4 遠い道 5 アキレスの涙 6 86.4.6 7 アスベスト魂 8 アスベストの海 9 戦うアスベスト 10 " ② 11 アスベスト駆ける 12 アスベストの穴	1965. 3 若草漫步 4 " 5 " 7 " 9 " 11 青空太郎の絵日記① 12 " ② 1966. 1 " ③ 4 " ④ 6 " ⑤ 7 " ⑥ 8 " ⑦ 10 " ⑧ 1967. 1 " ⑨ 12 " ⑩ 1968. 7 ケロリントンリントンタン 増 9 エー漫画寄席でございエーござい! 1969. 9 トッテチッテター 1970. 3 ぶらりよんのー 1971. 11 赤いものなーに 1972. 2 艶夢歌 3 人間動物園 4 ギリヤーク・ふんぐり団① 5 " ② 6 " ③ 7 " ④ 8 " ⑤ 9 " ⑥ 10 " ⑦ 11 " ⑧ 12 " ⑨ 1973. 1 " ⑩ 2 " ⑪ 3 " ⑫ 5 尺取虫 6 ジャリラ 1973. 7 ジャリラ 8 " 9 " 10 "
1978. 5 ラバン・ナジールの愛の冒険 6 愛妻記 7 家庭教師 8 探偵物語	1987. 1 今月は初めての海外旅行の話から… アスベストの夢 2-3 アスベストの善行 4 嵐の中のアスベスト 5 漂うアスベスト 6 空飛ぶアスベスト 7 崖の途中のアスベスト 8 アスベストの欲情 9 アスベストの性交 10 アスベスト爆発 11 藁にもすがるアスベスト 12 アスベストの帰還	
1979. 4 帽子屋と迷路 12 悪魔が夜来る	1988. 4 北海の激情 5 海を見に行くアスベスト	
1980. 1 " 6 断絶の家	ひろき真冬	
1981. 8 やさしい出会い方教室	1974. 4 幻想曲★	
1982. 1 街にふる雨 10 離婚さんいらっしゃい	広瀬克也	
1984. 6 京都市民の休日	1991. 6 ムギ探し★	
1985. 9 粒子開放量一定説	ヒロヲサツ	
1988. 7 托卵 第1話 8 " 第2話 9 " 第3話 10 " 第4話 11 " 第5話	1969. 5 思えばとおく	
1989. 1 " 第6話 2-3 " 第7話 4 " 第8話 5 " 第9話 6 " 第10話 7 " 第11話 9 " 第12話 10 " 第13話 11 " 第14話 12 " 第15話	深見春夫	
1990. 1 " 第16話 2-3 " 第17話 4 " 第18話 5 " 第19話 6 " 第20話 7 " 第21話 9 " 最終回 12 迎を待つ人	1973. 8 前衛食堂★ 1975. 7 再出発 9 靈感 1977. 9 円筒 10 ワニ 1978. 1 ファンタジー 2-3 耳	
1991. 2-3 唄の上手な娘		
聖一朗		
1968. 増5 ペシミストの死		



野村重男	10 薄荷の諧楽 11 雲母王子	11 花の紋章① 12 " ②
1965. / ◆水木しげるの漫画	1989. 2-3 SPANGLE	1969. / " ③
野本三吉 ⇒ ◆目安箱(56)(59)(62)(64)(65)(67)(68)	1990. / Midori 4 Midori Act II 精霊二人 7 月長石譜 8 紅切子、青更紗 9 Blue bell Knoll 11 リリー、ランタン、ロータス	2 花の詩① 3 " ② 4 " ③
芳賀由香	1991. / 人魚の膝 2-3 青絵の骨 4 孔雀料理 6 Limonea	5 花さく港 7 まっかつかロック 8 赤地点 9 赤い鳥小鳥 11 赤いハンカチ
1983. 2-3 はびー・ばーすでい★ 8 るうにいちゃんの夏休み 10 変身する人々 11 有難い寺 1984. / くだんののみや 2-3 涙の食卓 6 おとうさんはここにいて——終末から 7 やってくる日 8 ひとり旅 9 おくちはじょうず 10 ピクニック 11 スクール・オブ・マリッジ 12 るうにいちゃんのおひっこし 1985. / るうにいちゃんのSpecial Night 2-3 佐藤さんのこと 4 ようこそミス・ボイス 5 シーサイド・ハウス 6 るうにいちゃんとのこぎり屋の少女 7 むかしむかし…… 8 わたしのむすめ 9 入道雲 10 さと子ちゃん 11 鈍行通信 12 " 1986. / そんなこんなでクリスマス 2-3 A RAINY DAY 5 へそまがりなカノン 6 " 8 " 9 " 10 " 1987. / " 2-3 " 4 " 6 " 8 "	花輪和一 1971. / 7 かのむし★ 11 見世物小屋 1972. / 5 肉屋敷 6 蘭 9 赤ヒ夜 10 獵人 11 箱入娘 ◆ナイコー的の直し方 1973. / 1 醜惡ゴキブリ男 2 かいだん猫 5 戦う女 6 因果 9 暑い 10 思い出の夏休み 1974. / 3 寒い 4 怨獣 7 帰還 8 進展なき事態 9 神に誓う子 1980. / 10 帰還 1983. / 10 猫になりたくないから 1984. / 11 因業地獄女“倉” 1986. / 1 心の影 8 慈肉 1987. 2-3 へそひかり 1988. / 5 生霊 12 唐櫃の中 1989. / 4 猫谷 7 ギボゴヤ	1970. / 1 赤色エレジー① 2 " ② 増 2 大道芸人 「吾が母は」「巨大な魚」「赤とんぼ」「山姥子守唄」「花ちる町」「花の紋章」「花さく港」 3 赤色エレジー③ 4 " ④ 5 " ⑤ 増 5 ◆ダメな女とダメな男 6 赤色エレジー⑥ 7 " ⑦ 8 " ⑧ 9 " ⑨ 10 " ⑩ 11 " ⑪ 12 " ⑫ 1971. / 1 " ⑬ 8 桜色の心 10 黄金花粉① 11 " ② 12 " ③ 1973. / 3 D夫人 7 あめりか生まれのせーるろいど 9 光あれ 1974. / 2 花ちる町 1975. / 2 あぶちつく 1976. 2-3 ガロCALENDAR 1991. / PH 4. 5 グッピーは死なない① 2-3 " " ②
橋高雄⇒高橋高雄	林静一	林のぶかつ&ぬかだ屋本舗
鳩山郁子	1967. / 11 アグマと息子と食えない魂★	1988. / 11 ミセス・エイリアン★
1987. / 10 もようのある卵★ 1988. / 4 タチエガラス工房 5 アイネ・クライネ 6 ローレライ 7 ロマンティカ 8 銀輪の心臓 9 セルリアン・ベリテ	1968. / 2 おお、暁の光に 4 吾が母は 5 巨大な魚 6 赤とんぼ 9 山姥子守唄 増 9 あめりか生まれのせーるろいど 10 花ちる町	1982. / 11 パワフル教室★ 1984. / 10 ザ・シンプルライフ 1985. / 1 タンタロスの街 原田孝子 1968. / 7 ブチ★ 春野彰夏 1989. 2-3 週末フィッシング★



1988. 1 " vol.5 6 オムライスな人々 7 くたくたアクター vol.6 9 オムライスな人々 10 " 11 里見陽子 職業私立探偵	1976. 1 水遊び 西村朋子 1982. 7 日常茶飯事の息子 ニシムラタカヨ 1985. 5 お年寄りは大切に 6 一足分の性倒錯 10 超能力トシちゃん そのいち 1986. 7 立体小僧	11 " ⑦ 1986. 1 " ⑧ 2,3 " ⑨ 4 " ⑩ 5 " ⑪ 6 " ⑫ 7 " ⑬ 8 " ⑭ 9 " ⑮ 10 " ⑯ 11 嵐を呼ぶ負けず嫌い 12 天然①
中西章文 1982. 10 夢の中 1983. 9 ちょっと殺人気分 1984. 7 真実 1986. 4 記憶の断片 1987. 2,3 ある夜の出来事 8 現象学 1989. 1 不安の概念 5 了解 (前篇) 6 " (後篇) 11 カンキリ 1990. 9 概念の形成と編成	沼田元氣 1991. 5 熱写真帳① 6 " ② ねこぢるし(ねこぢる)⇒山野 一の項参照 根本敬 1981. 9 青春むせび泣き★ (共作—高木順) 10 生徒の思想 " 11 大東京の虹 " 1982. 2,3 GOGOむこうみず " 6 アッコの親孝行 " 7 ママと呼ばれて3ヶ月 " 8 負けず嫌いの逆襲 " 9 貞操の光 " 10 男の街角 " 11 涙の中の純情 " 12 村田対星親子 " 1983. 1 ドルフィン " 4 ツッパリの初恋(前) " 5 " (後) " 6 世界ぼうふう画報 7 ハニーハニー人生讃歌 8 パパの日曜日 9 福祉の燈火 10 哀しみはたそがれの中で 11 老人と子供のボルカ 12 続・鳥の生活 1984. 1 父さんは星になった 2,3 パチンコ屋のない街 4 人間昆虫記 5 エジプト 6 この道が続くかぎり 7 象から生まれた孝行息子 8 無口なモンゴロイドM 9 茶ノ間の成熟 11 私は歩く肛門です 12 愛情ブルース 1985. 5 天然① 6 " ② 7 " ③ 8 " ④ 9 " ⑤ 10 " ⑥	1987. 1 " ⑥ 2,3 " ⑦ 5 " ⑧ 6 " ⑨ 7 " ⑩ 8 " ⑪ 10 " ⑫ 11 " ⑬ 1988. 1 " ⑭ 2,3 " ⑮ 4 " 最終回 1989. 2,3 怪人無礼講ララバイ 6 タケオの世界 7 " 中篇 8 " 後篇 9 " 完結篇 10 続・タケオの世界 11 新・タケオの世界 12 金・タケオの世界 1990. 1 王・タケオの世界 5 ミクロの精子團① 6 " ② 7 " ③ 8 " ④ 1991. 1 未来精子ブラジル① ブヤングしゅうゆ焼きうどん (土原政範・鷹番太) 2,3 未来精子ブラジル② 4 ベントーはんとでっち井(+マディエ原) 5 未来精子ブラジル③ 6 " ④
中野豪 1980. 8 もやもやワールド★ 10 " 1981. 4 "		
永野久江 1966. 3 どうしてもとびらをあけてそとへ でることができない!★		
ながみねゆみこ 1988. 8 TOMOMI IWAKURA NO RETURN★		
中山不可 1988. 11 HAPPY★		
夏草しげのぶ⇒秋山しげのぶ		
並木達二 1966. 7 コマ★		
鳴海幸保 1966. 3 愛して…愛して…愛しちゃったのよ!!★ 5 ある殺人者…!★ 6 魂B…!★ 7 復讐鬼だぞよ…!★ 10 悪の華!!		
ナルモトマサト 1977. 11 再会★ 12 悪夢の終り 1979. 4 都会		
南波健二 1967. 5 戦場		
西たけろう 1970. 1 悪夢 1971. 12 リンボレロン		
		野田史朗 死にゆく者への祈り のなかゆかり 1990. 5 チキン・ジャングル・グルグル★ 10 うれしいこと 12 ペールグリーン・ペールブルー 野間吐史 1973. 12 ねぼけ堂異聞★



1974. 1 " ①	6 " ②	11 "
2 「ふるやのもり」	7 " ③	12 "
3 旅人くん①	8 " ④	1985. 1 "
4 " ①	9 " ⑤	23 "
5 " ①	10 " ⑥	4 "
6 " ①	11 " ⑦	5 "
7 " ①	12 " ⑧	6 "
8 " ①	1980. 1 " ⑨	7 "
9 " ①	6 旅人くん①	8 "
10 " ①	7 " ②	9 "
11 " ②	8 バラと猫とパイプの日々①	10 "
12 " ②	9 " ②	11 オオカミのはなし
1975. 1 " ②	10 人コマの世界	12 さまよえる夜昼 (完)
2 " ②	11 "	
3 " ①	12 ♣嘘つきの日記①一九八〇年・春	
4 そのぼしのぎの犯罪①	1981. 1 " ②一九八〇年・夏	中條辰雄
5 " ②	23 " ③一九八〇年・初秋	1984. 5 THE WALKING CHURCH★
6 " ③	4 " ④一九八〇年・晩秋・上	7 王と魔術師と……
7 " ④	5 " ⑤一九八〇年・晩秋・下	永田トマト
8 " ⑤	6 " ⑥一九八〇年・冬	1983. 8 FLASH BACK
9 " ⑥	10 一郎君の長い旅①	9 ロケット・マン
10 オーッテンチンの唄	11 " ②	10 BUTTER MAN
11 自殺のすすめ	12 " ③	
12 そのぼしのぎの犯罪⑦	1982. 1 " ④	ながたはるみ
1976. 1 " ⑧	23 " ⑤	1978. 1 ハギ
23 " ⑨	4 " ⑥	7 キク
4 " ⑩	5 " ⑦	永田真人
5 " ⑪	6 " ⑧	1978. 12 街をきれいに★
6 " ⑫	7 " ⑨	お遊び
7 旅人くん	8 " ⑩	長戸雅之
8 " ⑪	9 " ⑪	1981. 12 風呂がりの一仕事
10 おしゃべりなトト	10 人生激情外伝 雪の夜の出来事	1983. 5 ノイローゼ
12 そのぼしのぎの犯罪①	11 一郎君の長い旅②	7 モゴモゴ書店 (長戸&早川義夫)
1977. 1-2 " ⑫	1983. 1 " ⑫	12 ケンネル・ボーイ
3 " ⑬	23 " ⑬	1984. 2-3 サエコとハルポー
4 " ⑭	4 白い一日	4 モラトリウム
5 " ⑮	5 まんが新むかし話	5 逆襲する団子虫
7 " ⑯	6 "	7 怪獣少年登場
8 " ⑰	7 "	8 怪獣幻想曲
9 " ⑱	8 "	10 怪獣就職情報
11 " ⑲	9 "	11 コックローチ
12 " ⑳	10 "	12 怪獣歳時記 秋の巻
1978. 1 " ㉑	11 "	1985. 1 孤独なカウンセラー
23 " ㉒	12 "	10 日本のパンクスについて
1978. 4 " ㉓	1984. 1 " ㉔	1986. 4 江戸プロフェッショナル
5 旅人くん	23 " ㉕	5 幕末悪人伝①
9 そのぼしのぎの犯罪②	4 " ㉖	6 " ②
10 " ㉗	5 " ㉗	7 " ③
12 " ㉘	6 " ㉘	8 " ④餐
1979. 1 漫画小劇場①	7 " ㉙	10 " ⑤
23 " ②	8 " ㉚	1987. 8 くたくたアクター vol 1
4 " ③	9 さまよえる夜昼	10 " vol 2
5 まんが人間学入門①	1984. 10 " ㉛	11 " vo. 3
		12 " vol 4



1990. 5 君に徹底	1985. 4 8 Wの快楽	中里春平
峠あかね (真崎守、もりまさき)	1985. 7 兵隊さんよ ありがとう	
1969.増7 ◆カンダリラの発想い	1986. 1 草葉の駅 7 ラーメンの代金	1984. 1 ゆき★ 1985. 1 龍宮 6 花らんまん
トオジョオミホ	1987. 4 唐辛子の瓶詰 7 空中温泉	長沢正芳
1988. 9 奥様の異常な愛情★ 11 ろまねすく	富岡県	1974.10 ひねもす跳ねて 1975. 1 世界のどこかで
1989. 4 スキップ・ステップ 6 3つの短い奇々怪々 7 あっというまNOトゥナイト 8 紫陽花の変わる頃 9 バイオレット曜日 10 夏の約束 11 風水譚 其の一 12 " 其の一	1972. 9 某月某日早朝のこと 1973. 4 帰り道 1974. 1 玩具 3 誘蛾燈 6 あるオブチミストの痛ましき治療と転生 7 "	永島慎二
1990. 1 " 最終話 4 グッドバイ 前篇 5 " 後篇 6 春街姑娘 9 イロケ 10 呉老師 (Woo Ralo Shi) 11 " 1991.2,3 " 5 井戸の怪	富永聖一郎	1967. 5 仮面 6 生命 7 アシスタント 8 かかしがきいたかえるのはなし 10 はえ 11 禁じられた遊び
唐仁原教久	1966. 6 偽りの絵★	1968. 1 ちいさな世界 増 9 風っ子 10 おそめこのへんか 11 ふるやのもり
1974. 4 王道楽土★ 11 " 愛之旅路	巴義	1969. 1 つる 2 はなたれこぞう 5 かさこじぞう 7 うらしま 増 7 ク・ク・ル・ク・ク・パロマ 「生命」「仮面」「アシスタント」 「かかしがきいたかえるのはなし」 「禁じられた遊び」「ちいさな世界」 「少年の夏」「おそめこのへんか」「ふるやのもり」 新・雨月物語 11 漂流者たち
1975. 3 隠れん坊	1969.12 巴義作品集★	1970. 3 笑わないで下さい
十川四郎	どや一平	1971. 7 ◆新連載にあたってのことば 8 四畳半の物語① 9 " ② 10 " ③
1990. 4 人魚姫は王子を殺せ★	1964.11 玉すだれ① 1965. 1 " ② 2 " ③ 3 やわら武蔵① 4 " ②	1971.11 " ④ 1972. 2 " ⑤ 3 " ⑥ 4 " ⑦ 8 斑鳩鉄平 9 白いバラ+◆阿佐ヶ谷の怪人 11 雨の季節
得松省二	とり・みき	1973. 3 旅人くん① 4 " ② 5 " ③ 6 " ④ 7 " ⑤ 8 " ⑥ 9 " ⑦ 10 " ⑧ 11 " ⑨ 12 " ⑩
1979. 8 ハーバー・ライト・ストーリイ★ 1982. 6 セクシャル・バイオレンス 9 シネマディクトファンシーパーティ 1983. 5 鍊夢術遊戯 1984. 7 Cinema Friend 1985. 6 ザ・ギャンブラー	1987.12 路上観察物件の逆襲 1988.2,3 " 6 リルケの王 11 さいばーな人々 1989.2,3 ガロの予感 6 コマ流るる果てに (entropy II) 11 玉 1990.2,3 蝶子 5 サエキさんの午後 10 象の魂 唄う人 1991. 1 増殖の谷 5 穴	
どくまん (どおくまん)	仲佳子	
1974. 8 粗相★	1968.10 海ほおずき★ 11 養子 1969. 2 新吉の散歩 6 若草 10 港町十三番地 11 白い鳥 1970. 2 白い顔 7 ちちくり長屋 1973. 7 たこつぼ	
豊島雅男	中井寛	
1967.11 不眠症★	PARASI TOLOGY★	
戸高久智		
1986.2,3 煙が目にしみる★		
苦雅和 (とま雅和)		
1982.10 愚の骨頂★ 1983. 6 呼子鳥 8 青い訓戒 10 完定 12 はぜの天ぶら		



<p>6 ほんやら洞のべんさん</p> <p>増 6 ねじ式</p> <p>◆密航</p> <p>「運命」「不思議な絵」「沼チー」</p> <p>「初茸がり」「通夜」「山椒魚」</p> <p>「李さん一家」「海辺の叙景」</p> <p>「紅い花西部田村事件」</p> <p>7 ゲンセンカン主人</p> <p>8 もっさり屋の少女</p> <p>1970. 2 やなぎ屋主人 (上)</p> <p>3       "       (下)</p> <p>増 5 ◆純情で義理人情にあつく</p> <p>6 ◆京都ブラブラ記</p> <p>1971. 増4 蟹</p> <p>「やなぎ屋主人」「オンドルハ屋」「もっさり屋の少女」「ゲンセンカン主人」「ほんやら洞のべんさん」「二岐溪谷」「長八の宿」「峠の犬」</p> <p>1974. 2 「長八の宿」</p> <p>7 大場電気鍍金工業所</p>	<p>1988. 1 Merry Merry Christmas</p> <p>23 落日は雲の奥 その2</p> <p>4 テンリトルプリンセス</p> <p>5 人畜無害</p> <p>6 あなたにはかわいいシマシマちゃん</p> <p>7 噴水少女</p> <p>10 やってきた魚男 第4の倉庫①②③</p> <p>12 水晶内反射角度の神経音楽</p> <p>1989. 1 咲き忘れた花にも約束の目印</p> <p>6 紋のある白いチョウ①</p> <p>7 自分の熱②</p> <p>9       "       ③</p> <p>10 糸をもたないアリアドネ①</p> <p>1990. 1       "       ②</p> <p>23       "       ③</p> <p>4 遠き山に日は落ちて</p> <p>8 "ザ・ウーマン"イン・ザ・ムーン</p> <p>12 岩波君の夢 (前)</p> <p>1991. 1       "       (後)</p>	<p>8 諸行無常有響</p> <p>10 ナンセンス</p> <p>11 女</p> <p>12 こんな話</p> <p>1967. 2 アンチ</p> <p>3 生きるための闘争</p> <p>4 あがき</p> <p>7 ジンロク</p> <p>8 六の宮姫子の悲劇</p> <p>9 それから (続・李さん一家)*</p> <p>10 栄光への脱出</p> <p>11 狂人日記</p> <p>1968. 2 マダム・ハルコ①悪徳の不幸</p> <p>3       "       ②美徳の栄え</p> <p>5       "       ③宇宙人国旅行記</p> <p>1969. 3 音</p> <p>6 溝</p> <p>7 壮烈無土国血戦記 上巻</p> <p>8       "       下巻</p> <p>1970. 1 アルマジロ</p> <p>7 災難</p> <p>増12 彼等</p> <p>「風と共に去りぬ」「福の神」「女」「こんな話」「アンチ」「ジンロク」「マダム・ハルコ」「六の宮姫子の悲劇」「栄光への脱出」「溝」</p> <p>1971. 8 スケッチ</p> <p>12 ジャムの壺</p> <p>1974. 4 僕の妻はアクロバットをやっている</p> <p>5 ロビンソンクルーソーの7度目の漂流</p> <p>7 MONEY</p> <p>10 憂子の日々</p> <p>11 空は青空雲一つ</p> <p>1975. 1 MAX</p> <p>1976. 12 トントンのお姉さん</p> <p>1979. 4 墓</p> <p>6 巡礼</p> <p>7 夜</p> <p>8 ある亀の話</p> <p>10 住人</p> <p>1980. 7 おにごっこ</p> <p>12 海蛇と北斗七星</p> <p>1981. 23 アール</p> <p>4 ディオゲネス</p> <p>5 極寒</p> <p>7 達人</p> <p>11 帰路</p>
土橋とし子	つのだまさひこ	
<p>1985. 12 ふくろのおっさん</p> <p>1986. 1 ハイキング</p> <p>23 完治さん</p> <p>1990. 6 青空脳天満腹画報</p> <p>" ①洋式トイレの巻</p> <p>7 " ②私はテレビと仲良しです</p> <p>8 " ③赤道アフリカの仮面展 他</p> <p>9 " ④秘湯「夏油温泉」をゆく</p> <p>10 " ⑤オノボりさん万歳 上野の巻他</p> <p>11 " ⑥大阪・ダイナマイトナイトは～</p> <p>12 " ⑦私のお気にいり</p> <p>1991. 1 " ⑧嗚呼カフオケBOX乗初体験の夜</p> <p>23 " ⑨最近の私の身辺の面白い話</p> <p>4 " ⑩変な人に会うための傾向と対策</p> <p>5 " ⑪BOWLING</p> <p>6 " ⑫大阪特派員報告</p>	<p>1986. 11 回想★</p> <p>津山週次 (津山週三)</p> <p>1985. 10 実存主義応用による伊丹哲次氏の優雅な生活★</p> <p>11 伊丹哲次の優雅な生活「深夜の火事」</p> <p>12 首つり自殺</p> <p>1986. 4 流転輪廻の炎</p> <p>5 積極的な胃袋</p> <p>8 親の問題</p> <p>9 控目な腹痛</p> <p>11 陽気な白あり達</p> <p>12 失業者一家の特殊な海・水浴(2 C)</p> <p>1987. 1 まごころ</p> <p>5 新・首つり自殺</p> <p>7 熱烈歓迎 自殺◎楽部</p> <p>10 奇妙な隣人</p> <p>1988. 5 緊張と唾液</p> <p>6 ひとの道</p> <p>12 記念写真</p> <p>1989. 4 熱烈歓迎！自殺◎楽部②</p> <p>5 努力を断つ！その他の人生</p> <p>10 聖書とともに生きる若王子兄弟の高貴な信仰生活</p> <p>11 OHAYO・NIPPON その他の棺桶</p> <p>12 脱普遍的！目ざめよ焼き鳥</p> <p>1990. 23 聖家族的</p>	
筒井康隆		
1975. 5 超能力		
津野裕子		
<p>1986. 5 冷蔵庫★</p> <p>デリシャス</p> <p>11 ペプラム</p> <p>12 私には居留守をして下さい</p> <p>1987. 23 シタールの夜</p> <p>4 落日は雲の奥</p> <p>6 少女と激情</p> <p>7 星と蟬</p> <p>9 ドルック・バ</p> <p>10 サンドイッチまんが</p> <p>11 時の墓場</p> <p>12 赤の広場</p>	<p>つりたくにこ (=つぎ宛春*)</p> <p>1965. 9 人々の埋葬／神々の話★</p> <p>1966. 3 風と共に去りぬ★</p> <p>4 狭き門★</p> <p>5 福の神★</p> <p>7 レ・ミゼラブル</p>	<p>鶴見俊輔</p> <p>1968. 5 ◆水木しげるの漫画</p> <p>手塚能理子⇒みうらじゅんの項参照</p> <p>寺田桐子</p> <p>1989. 8 月夜の紋切型★</p>



女装 いとしのモンキー 洗い屋 東京うばすて山 酒場ざる 鍋育 うなぎ 9 じんましん 11 熱い煙突 12 鳥葬 1972. 1 みのむし 2 望郷 3 大砲 (前) 4 " (後) 7 蛍火 1973. 1 月見湯のくじら 10 札幌の女 1974. 5 ぶつつけ本番 6 花いちめ 7 コップの中の太陽 8 小さな故郷 9 夜汽車で走れ 1974. 10 オッサン車券を買う 11 おかえりパパ 1975. 1 みちくさ女 1984. 9 肉食魚	8 " ③ 9 " ④ 12 夜の徘徊者 1980. 2-3 気海 8 カクタス・カントリー 1981. 5 PHANTASMAGORIA 6 " 12 " 1982. 4 " 1983. 5 " 1984. 1 " 1985. 8 THE CUBIC WORLD 1986. 2-3 結晶星 1989. 2-3 Metaphysical Night 4 " 5 " 6 " 7 " 8 " 9 "	9 いざ歌謡曲 10 野の夏 11 夜よゆるやかに 1971. 2 与太 3 うらにしの里 増 5 「丘の上でヴィンセント・ヴァン・ゴッホは」「懐かしのメロディ」「昭和ご詠歌」「きなこ屋のばあさん」「河童の居る川」「二人三脚」「或る風景」 6 無頼の街 残菊編 8 " 寒菊編 9 " " 10 そして山田六郎さんは…… 11 ある鯉の話 12 桃色遊戯 1972. 1 道化 2 荒唐無稽譚 3 冬の街 5 血しぶき仁義 7 ヘビの雨宿り 8 アスファルト舗装 9 100 キロ重量 12 青岸良吉の死 1973. 5 リュウの帰る 11 熱風① 12 " ② 1974. 2 懐かしのメロディ 8 風来 1975. 10 無頼平野① 1975. 12 釣り好き 1976. 1 無頼平野② 9 狼の伝説 (二) 1984. 9 近頃のこと……
タナカ憲	陳志明	
1966. 6 少年の詩シリーズ★	1965. 9 おチョコで呑まない酒★	
棚瀬哲夫	司野大	
1971. 3 はじめに漫画的でないものとして	1972. 10 ローカル線にて★	
1972. 11 傾斜のあとに	1977. 3 彗星の時代	
DANNY (絵)、相沢正一郎 (作)	塚崎祥	
1990. 2-3 食卓の上のふたつの紅茶茶わん★	1971. 増5 ♣荒廃と風化に耐えて	
谷川晃一	塚本俊昭	
1972. 11 ♣死相のマゾヒズム	1974. 10 鷹は飛ぶ★	
谷口正和	つぎ宛春⇒つりたくにて	
1970. 3 タイトルはない	拓殖茂晃	
谷口正洋	1966. 8 アメーバ★	
1980. 11 ずる休み★	つげ忠男	
谷弘児⇒大谷弘行	1968. 12 丘の上でヴィンセント・ヴァン・ゴッホは	
たむらしげる	1969. 1 懐かしのメロディ	
1977. 12 ネズミ族★	3 青岸良吉の敗走	
1978. 5 フープ博士の月への旅①	4 昭和ご詠歌	
7 " ②	5 搜索	
9 " ③	6 きなこ屋のばあさん	
1979. 2-3 森の生活	8 雨季①	
4 サイレントビーチ	9 河童の居る川	
6 水晶狩り①	10 雨季②	
7 " ②	12 " ③	
	1970. 1 二人三脚	
	2 或る風景	
	4 とぶ街①	
	5 " ①	
	6 " ②	
	7 " ②	
		1966. 8 囃の武士 10 西瓜酒 12 運命 1966. 1 不思議な絵 2 沼 3 チーコ 4 初葎がり 9 古本と少女 12 手錠 1967. 3 通夜 5 山椒魚 6 李さん一家 8 峠の犬 9 海辺の叙景 10 紅い花 12 西部田村事件 1968. 1 長八の宿 2 二岐溪谷 4 オンドル小屋



12 葬る雨	3 おこつの狂想曲	武田謙
高松翔	4 ラララの恋人	1986. 9 伏狐★
1989. 4 斎藤博士の研究室★	5 孤独な島 日々是好日 最後の錨掛屋	1987. 11 西遊記 第一回
高山和雅	6 すちゃらかちゃん	1988. 2・3 李三老 5 好内 9 西遊記 第一回／其之貳
1980. 1 落差★ 5 夜行 12 未知	7 剃製の館	11 性線 12 着靴
1981. 8 楽観	8 神父の休日 本番	1990. 8 西遊記 第一回／其之参 11 〃 其之肆
1982. 2・3 百眼の巨人 (前) 4 〃 (後)	9 さんりんぼう ワラッテ!!	
1983. 1 ラストゲーム 4 ノアの末裔 5 〃 6 〃 7 〃 9 〃	増 9 あいつ 太陽は西へしずむ 10 豆蔵屋ブルース 諸行無常 11 後巻咲子の決断 彼女の世界 12 寺島町奇譚① ざんなかし	
1983. 11 ノアの末裔 12 〃	1969. 1 〃 ② おはぐろどぶ 2 〃 ③ げんまいパンのホヤホヤ 3 〃 ④ 日和下駄 4 〃 ⑤ エジソンバンド	
1984. 2・3 〃 6 〃 9 〃 11 〃	増 4 〃 (番外) 玉の井界限 0 番地 用心棒暁に死す 月は上りぬ 女の宿 同志諸君 隠密無情 参加 まるごし会談 涙の連判状 マイゴーストタウン 海 まじめなまじめなまじめな世界 インボの法則 ドレイタイマー 「あしがる」「しずく」「あいつ」 「ラララの恋人」「彼女の世界」	
1985. 2・3 〃 4 〃 5 〃 6 〃 (第一部完)	6 寺島町奇譚⑥ 花あらしの頃 7 〃 ⑦ うぬぼれ鏡 8 〃 ⑧ 萬古屋事件始末 9 〃 ⑨ えんがみみとんがった 10 〃 ⑩ カンカン簾 増 10 カンバスがそこにあるから…… 11 寺島町奇譚⑪ ぬけられます 1970. 1 〃 ⑫ 定九郎の口紅 2 平凡死 7 揚げば尊し	
1986. 7 サイレント! (むせい) 10 パープル・マジック	1970. 12 ◆ゴミタメ無宿の一匹ワンワン	
1989. 10 高山和雅イラストシアター① 1990. 6 〃 ② 8 〃 ③	1974. 2 玉の井界限 0 番地	
高山英男	たぐちともろを	
1964. 12 ◆ネガの魅力	1980. 8 熱海の夜★	
滝田ゆう		
1967. 4 あしがる 5 しずく 6 かわりみ 7 赤飯 8 ふえあぶれい 9 風法師 10 星の流れ からまわり 幕尻 まきぞえ 11 昼下がりの妄想 くちおいしい 四右衛門失踪 12 死に急ぎの記録		
1968. 1 浪曲師ベトナムに死す 長い道 2 三算陸尉凹山三助の憂鬱		



<p>食卓の水 10 けいこちゃんの好きなビールに ついての一考察 11 サーカスのころ 秋の負債 12 軌条の脇道 1975. 2 海のキラキラ 3 ギリシアの光 4 赤いゆびをしたSILHOUET-TE 5 旅の一夜 8 夢は方南にあり 1976. 7 ガロCALENDAR 9 絵物語 天使と月と 10 彼等の涼む窓〈露台〉 12 手帖 1977. 5 薫 6 むべ咲く哉 7 日暮サーカス団 9 水道眼鏡殺人事件 11 OJI'S ILLUSTRATION 1978. 1 麦畑 野原 2-3 まばたきブック 4 " " 5 海のタッチ 7 日の毒 10 夜の楽しさ① 11 " ② 12 " ③ 1979. 2-3 " ④ 10 こくう物語① 11 " ② 12 " ③ 1980. 1 " ④ 2-3 " ⑤ 4 " ⑥ 病気 5 " ⑦ タベの辻 6 田舎の話 7 こくう物語⑧ 10 " ⑨ ウソソキ 11 " ⑩ この世で候 12 無可有町まで 1981. 2-3 こくう物語⑪ 4 " ⑫ 空を歩いてゆく 5 " ⑬ いざかれん 6 " ⑭ 私達ののぞみ 9 " ⑮ 歌の巻 11 " ⑯ 海 12 " ⑰ 満ち汐 少年手帖抄 1989. 11 少年存在学ノート 12 " ガロ用NO② 1990. 1 少女と神さま 2-3 少年存在学ノート ガロ用NO⑤</p>	<p>4 " " ⑥⑦⑧ 5 " " ⑨ 6 " " ⑩ 電気の世界 7 少年存在学ノート " ① 8 " " ② 10 " " ③ 11 " " ④ 1991. 1 " " ⑤ 2-3 " " ⑥ 4 " " ⑦ 鈴木茂 1966. 8 祖国は誰のものぞ★ 鈴木清順 1971. 12 ♠'71、10月20のじけん (イラスト=林静一) 1972. 1 ♠幽霊、銀行の追い出す 2 ♠ぼー・すゞき 3 ♠犬の顔をした水鬼 4 ♠だるまに夜叉面 5 ♠役者(一) 6 ♠ " (二) 7 ♠アラカルト 8 ♠三流斎どん山(一) 9 ♠ " (二) 10 ♠夏と暴力 11 ♠敗戦の日 12 ♠九月は革命の月 1973. 1 ♠頼み頼まれ栄光へ 2 ♠それなら私は…… 3 ♠暮がたき 鈴木岬一 1973. 4 ♠コップ霊との対話① 5 " ② 6 " ③ 7 " ④ 8 " ⑤ 9 " ⑥ 10 " ⑦ 11 " ⑧ 12 " ⑨ 1974. 1 " ⑩ 鈴木漁生 1980. 8 スバル恋歌★ 諏訪栄(小島剛夕) 1964. 9 海原の剣① 10 ② 11 ③ 12 ④ 1965. 1 ⑤</p>	<p>関口シュン 1979. 10 暗い岩がみえて来た 1980. 10 DY-28 せと・みづみ 1968. 4 太陽の詩 蒼太郎 1988. 9 SIMPLE KNIFE★ ソウマケンジ 1990. 5 安全思想セイフティファヴァーズ 7 " 「安全な人生」INNOCENT GIRL(禁句) 10 ニノキン 11 HABIT MAN 高木順(→根本敬の項参照) タカ・ユキ 1965. 11 古パン★ 高竹京子 1985. 10 DOOL (ドール)★ 11 妖子さんのおそうじ 12 音楽 1986. 4 月の踊り 5 氷の下 8 マリア様の涙 1987. 1 影を売りに来た男 5 散歩 1989. 5 ひみつの妖子さん 9 話のバナナ 1990. 1 楽園 2-3 考ヘル妖子サン 5 妖子さんの近況 たかつじゆきこ 1990. 8 眠っている間に★ 高野幸雄 1965. 5 ノッポとチビは星を見た 高橋高雄(橋高雄、矢口高雄) 1969. 4 長持唄考★ 7 ひとつねた★ 12 赤んぼの里 1970. 4 狐の棲む里 9 みなぐろ 高橋照香 1979. 8 こどもの世界★ 高橋わたる 1968.増9 恋 高部恵市(高部晴市) 1980. 9 ザリガニ</p>
--	---	---



1970. 2 " ⑫	1985. 12 やまあり	松本清六シリーズ①
3 " ⑬	杉作獣太郎 (杉作 J 太郎)	5 " ②
4 " ⑭		6 " ③
5 " ⑮	1985. 6 真実の日	7 " ④
6 " ⑯	7 放課後の男	8 " ⑤
1970. 8 " ⑰	8 太陽のかけら	9 " ⑥
9 " ⑱	9 太陽の消息	10 " ⑦
10 " ⑲	10 放課後のエメラルド	11 " ⑧
11 " ⑳	11 水色のクレヨン	12 " ⑨
12 " ㉑	12 真珠色の雨	1991. 1 第4次元の漫画
1971. 1 " ㉒	1986. 1 訣別のノクターン	ギャンブル新聞①
1971. 2 " ㉓	2・3 卒業	2・3 史上最大の万引ロック①
3 " ㉔	4 春色の窓	ギャンブル新聞②
4 " ㉕	5 ティーンエイジ・ラバーズ	4 史上最大の万引ロック②
5 " ㉖	6 反逆のプレリュード	ギャンブル新聞③
6 " ㉗	7 反逆のバラード	5 ギャンブル新聞④
7 " ㉘	8 五時限目奇譚	6 SF! ハードロマンに死す
	9 天空の全裸美女	ギャンブル新聞⑤
城アカイ	10 宇宙の囁き	
1988. 6 マダムとスイマー★	11 耳地獄・濡れた蹉跎	寿し・寧
1989. 8 ボールペン	12 レッツゴー協調路線	1972. 1 マー坊★
ウォッチ	1987. 1 たむしの兄弟	鈴木翁二 (カルメ・コウチ*)
白山宣之	2・3 二度と逢えないかもしれない	1969. 11 庄助あたりで
1976. 6 ライオン★	6 その後のワイルド・ターキーメン	1970. 2 少年夢遊篇
しりあがり寿	8 誤算が裁かれるとき	3 タマゴラメグル
1986. 6 満員電車とエーデルワイス	9 傷 (前)	10 むこうのラムネ庵
1991. 1 ポンちゃんは人気者	10 " (完結篇)	1971. 6 五点やの狸
杉浦日向子	11 " ( " ㉙)	10 透明通信*
1980. 11 通信室乃梅	12 巨人の黒星	12 雨の色*
1981. 1 ぼうずのざんげ	1988. 1 死んだ男①	1972. 2 街道の町
4 塵	2・3 " ②	4 遠方日記
5 ヤ・ケ・ク・ソ	4 " ③	5 懐かしの夜
6 駆け抜ける	5 " 最終回	6 星の栖家
8 二つ枕	7 空に惑星があるかぎり	7 マッチ一本の話
9 "	8 男の墓場	9 思い出物語+◆三角形の肩甲骨
10 "	9 "	10 緑色の翅+◆雨とガラス器
11 "	10 "	11 詩人の部屋
12 吉良供養 (上)	11 "	12 夜
1982. 1 " (下)	12 "	1973. 1 サーカス
2・3 袖もぎ様	1989. 1 "	2 酔いの客人
5 花景色巷談	2・3 "	3 オートバイ少女
6 忠信最期之事 (ふろくまんが)	4 日下部完次シリーズ第2部	5 哀愁生活
7 合葬①	市民社会学①	6 懸垂
8 " ②	5 " ②	8 ギター懐かし浮かれた
9 " ③	6 " ③	9 幽霊と青蛙 その他
11 " ④	7 " ④	1973. 10 夏休み
12 " ⑤	8 " ⑤	11 君と旅行する
1983. 1 " ⑥	9 " ⑥	1974. 1 あの島影行
2・3 " ⑦	10 " ⑦	3 工作者の散歩道
4 " 最終回	11 " ⑧	5 東京グッドバイ
9 湯治場にて	12 " ⑨	6 夢を見た人
1984. 8 鏡斎まいる	1990. 1 " ⑩	7 幻迷記
	2・3 " ⑪	9 夕立ちの在処から
	4 市民社会学第2部	丘



6 スキット大佐の記録 7 J・J・ピカール氏の話しの続き①② 8 旅の天使	1980. 5 メモリモテール 11 CLOSING TIME 12 ROOK'NROLL CAN NERERDIE	1964. 10 無三四 11 スガルの死 鬼 妙活 幻の犬 12 カムイ伝①
佐藤梅吉	沢田ともひろ	1965. 1 " ② 2 " ③ 3 " ④ 4 " ⑤ 5 " ⑥ 6 " ⑦ 7 " ⑧ 8 " ⑨ 9 " ⑩ 10 " ⑪ 11 " ⑫ 12 " ⑬
1985. 2-3 熱海死闘編	1966. 11 反発の平和★	1966. 1 " ⑭ 2 " ⑮ 3 " ⑯ 4 " ⑰ 5 " ⑱ 6 " ⑲ 7 " ⑳ 8 " ㉑ 9 " ㉒ 10 " ㉓ 11 " ㉔ 12 " ㉕
佐藤忠男	しいびいくらぶ	1966. 1 " ① 2 " ② 3 " ③ 4 " ④ 5 " ⑤ 6 " ⑥ 7 " ⑦ 8 " ⑧ 9 " ⑨ 10 " ⑩ 11 " ⑪ 12 " ⑫
1964. 9 ♠白土三平さんのマンガ 10 ♠「 " 」	1986. 12 犬★	1966. 1 " ⑬ 2 " ⑭ 3 " ⑮ 4 " ⑯ 5 " ⑰ 6 " ⑱ 7 " ⑲ 8 " ㉑ 9 " ㉒ 10 " ㉓ 11 " ㉔ 12 " ㉕
1968.増6 ♠つげ義春論	1990. 1 シャッフルビート 2-3 " ① 5 " ② 9 " ③ 10 " ④ 11 " ⑤	1966. 1 " ⑥ 2 " ⑦ 3 " ⑧ 4 " ⑨ 5 " ⑩ 6 " ⑪ 7 " ⑫ 8 " ⑬ 9 " ⑭ 10 " ⑮ 11 " ⑯ 12 " ⑰
佐藤雅彦	塩川直	1966. 1 " ⑱ 2 " ⑲ 3 " ㉑ 4 " ㉒ 5 " ㉓ 6 " ㉔ 7 " ㉕ 8 " ㉖ 9 " ㉗ 10 " ㉘ 11 " ㉙ 12 " ㉚
1984. 8 KIT★ 12 TOPY	1990. 10 ぼくたちの瞳★	1966. 1 " ㉛ 2 " ㉜ 3 " ㉝ 4 " ㉞ 5 " ㉟ 6 " ㊱ 7 " ㊲ 8 " ㊳ 9 " ㊴ 10 " ㊵ 11 " ㊶ 12 " ㊷
佐藤義昭	茂谷いずみ	1966. 1 " ㊸ 2 " ㊹ 3 " ㊺ 4 " ㊻ 5 " ㊼ 6 " ㊽ 7 " ㊾ 8 " ㊿ 9 " ㋀ 10 " ㋁ 11 " ㋂ 12 " ㋃
1973. 4 旧友★ 7 村八分 11 最も信用ないゲーム	1978. 8 K子の朝★ 11 K子の坂 1979. 5 K子とM 12 K子の風景 1980. 4 事故	1966. 1 " ㋄ 2 " ㋅ 3 " ㋆ 4 " ㋇ 5 " ㋈ 6 " ㋉ 7 " ㋊ 8 " ㋋ 9 " ㋌ 10 " ㋍ 11 " ㋎ 12 " ㋏
1974. 1 一人芝居 3 カスト 4 じごうじとく 5 各駅停車で 6 X月X日のセットオフ 8 春と乙女	篠原勝之	1966. 1 " ㋐ 2 " ㋑ 3 " ㋒ 4 " ㋓ 5 " ㋔ 6 " ㋕ 7 " ㋖ 8 " ㋗ 9 " ㋘ 10 " ㋙ 11 " ㋚ 12 " ㋛
1975. 7 結婚式 8 "	1975. 11 糸姫 (原作・唐十郎) 1976. 8 におい横丁	1966. 1 " ㋜ 2 " ㋝ 3 " ㋞ 4 " ㋟ 5 " ㊱ 6 " ㊲ 7 " ㊳ 8 " ㊴ 9 " ㊵ 10 " ㊶ 11 " ㊷ 12 " ㊸
1977. 6 LADY 8 チョコレート 9 パーマネントウエイヴ 10 思い出 11 家庭	清水聡	1966. 1 " ㊹ 2 " ㊺ 3 " ㊻ 4 " ㊼ 5 " ㊽ 6 " ㊾ 7 " ㊿ 8 " ㋀ 9 " ㋁ 10 " ㋂ 11 " ㋃ 12 " ㋄
1979. 4 煙草の面影 1985. 1 薬屋の娘 1989. 5 クレンザー 1990. 9 マークのついた子供達 11 自転車ドライブ 12 僕たちだけがいつまでも人間のま	1979. 4 長靴をはいた猫★ 6 プライベートライフ 8 奇蹟 1980. 1 血まみれの恋はおしまい 8 空中緬婦 (独裁者のサーカス) 11 エデンの南	1966. 1 " ㋅ 2 " ㋆ 3 " ㋇ 4 " ㋈ 5 " ㋉ 6 " ㋊ 7 " ㋋ 8 " ㋌ 9 " ㋍ 10 " ㋎ 11 " ㋏ 12 " ㋐
1991. 1 奥さんの見た夢 5 〜だのミサラ	志水喜三郎	1966. 1 " ㋑ 2 " ㋒ 3 " ㋓ 4 " ㋔ 5 " ㋕ 6 " ㋖ 7 " ㋗ 8 " ㋘ 9 " ㋙ 10 " ㋚ 11 " ㋛ 12 " ㋜
左右田本多	1981. 11 飛ぶな……★	1966. 1 " ㋝ 2 " ㋞ 3 " ㋟ 4 " ㊱ 5 " ㊲ 6 " ㊳ 7 " ㊴ 8 " ㊵ 9 " ㊶ 10 " ㊷ 11 " ㊸ 12 " ㊹
1968. 8 ♠つげ義春への遠方からの手紙 10 ♠鬼太郎は何度生まれ変わるか 1972.増2 ♠マンガ体、またはテロテロ	志村光男	1966. 1 " ㋚ 2 " ㋛ 3 " ㋜ 4 " ㋝ 5 " ㋞ 6 " ㋟ 7 " ㊱ 8 " ㊲ 9 " ㊳ 10 " ㊴ 11 " ㊵ 12 " ㊶
さらいまるこ	1973. 9 CO 16 号の場合 1974. 3 線香と花束	1966. 1 " ㊷ 2 " ㊸ 3 " ㊹ 4 " ㊺ 5 " ㊻ 6 " ㊼ 7 " ㊽ 8 " ㊾ 9 " ㊿ 10 " ㋀ 11 " ㋁ 12 " ㋂
1985. 12 午後の会話	下城忠雄	1966. 1 " ㋃ 2 " ㋄ 3 " ㋅ 4 " ㋆ 5 " ㋇ 6 " ㋈ 7 " ㋉ 8 " ㋊ 9 " ㋋ 10 " ㋌ 11 " ㋍ 12 " ㋎
澤広明	1980. 4 非行聖女★ 5 受験型 7 家族	1966. 1 " ㋏ 2 " ㋐ 3 " ㋑ 4 " ㋒ 5 " ㋓ 6 " ㋔ 7 " ㋕ 8 " ㋖ 9 " ㋗ 10 " ㋘ 11 " ㋙ 12 " ㋚
1991. 1 ネコカン	白土三平	1966. 1 " ㋛ 2 " ㋜ 3 " ㋝ 4 " ㋞ 5 " ㋟ 6 " ㊱ 7 " ㊲ 8 " ㊳ 9 " ㊴ 10 " ㊵ 11 " ㊶ 12 " ㊷
沢田としき	1964. 9 ざしきわらし 赤い竹 陽忍 くぐつ 1964. 10 傀儡がえし 無名	1966. 1 " ㊸ 2 " ㊹ 3 " ㊺ 4 " ㊻ 5 " ㊼ 6 " ㊽ 7 " ㊾ 8 " ㊿ 9 " ㋀ 10 " ㋁ 11 " ㋂ 12 " ㋃
1979. 2-3 ことはくのワルツ★ 7 マリー 9 スモールチェンジ		1966. 1 " ㋄ 2 " ㋅ 3 " ㋆ 4 " ㋇ 5 " ㋈ 6 " ㋉ 7 " ㋊ 8 " ㋋ 9 " ㋌ 10 " ㋍ 11 " ㋎ 12 " ㋏



坂口尚	佐々木守 (小説)	
1973. 7 (無題) 8 ( )	1965. 1 日本忍法伝① (イラストー岡本颯子) 2 " ② 3 " ③ 4 " ④ 5 " ⑤ 6 " ⑥ 7 " ⑦ 8 " ⑧ 1966. 6 " ⑨ 7 " ⑩ 8 " ⑪ 9 " ⑫ 10 " ⑬ 11 " ⑭ 1967. 1 " ⑮ 2 " ⑯ 3 " ⑰ 4 " ⑱ 5 " ⑲ 6 " ⑳ 7 " ㉑ 8 " ㉒ 9 " ㉓ 11 " ㉔ 1968. 2 " ㉕ 3 " ㉖ 4 " ㉗ 5 " ㉘ 6 " ㉙ 7 " ㉚ 8 " ㉛ 9 " ㉜ 10 " ㉝ 11 " ㉞ 12 " ㉟ 1969. 1 " ㊱ 2 " ㊲ 3 " ㊳ 4 " ㊴ 5 " ㊵ 6 " ㊶ 7 " ㊷ 8 " ㊸ 9 " ㊹ 10 " ㊺ 11 " ㊻ 12 " ㊼ 1970. 3 " ㊽ 4 " ㊾ 5 " ㊿ 6 " ㋀ 7 " ㋁ 8 " ㋂ 9 " ㋃ 10 " ㋄ 11 " ㋅	12 " ㋆ 1972. 1 " ㋇ 2 " ㋈ 4 " ㋉ 5 " ㋊ 10 「日本忍法伝第四部」連載にあたって 11 ジャパンの東(日本忍法伝第四部)① 1972. 1 " ㋋ 2 " ㋌ 4 " ㋍ 5 " ㋎ 6 " ㋏
サクマエミ (さいとうえみ)		
1983. 4 朝顔日記 9 小説家ださい先生 10 " 11 " 12 オジソー 1985. 1 小説家ださい先生 2.3 シンデレラ・ノ・ナコ 12 すぶりんぐ 1986. 2.3 人癪綺譚 4 小説家ださい先生 5 " 8 " 9 盆の夜 11 姉妹 12 マノン・かわいや 1988. 1 純愛 4 パラレルワールド 9 いいかげん野郎 1989. 5 Paralleil World		
桜井昌一		
1968.増6 ♣つげ義春氏のプロフィール 1971.増3 ♣迷える子羊を救いたまえ 11 劇画風雲録① 12 " ② 1972. 1 " ③ 2 " ④ 3 " ⑤ 4 " ⑥ 5 " ⑦ 6 " ⑧ 7 " ⑨ 8 " ⑩ 9 " ⑪ 10 " ⑫ 11 " ⑬ 12 " ⑭ 1973.10 風 1973.11 死神		
桜沢エリカ		
1987. 8 Little Yellow Watermelon 9 猫とあたしの一 11 捕らわれの姫君		
笹川弥太郎		
1971. 3 ♣このごろどうしてるう?		
佐々木マキ		
1966.11 よくあるはなし★ 1967. 2 見知らぬ星で 11 天国で見る夢 1968. 4 アンリとアンヌのバラード 7 殺人者 8 セブンティーン 9 まちのうま 増 9 うみべのまち 10 ぼうや、かわいいぼうや 12 (無題) 1969. 1 ベトナム討論 2 かなしいまっくす 3 選ばれたヒツジは 4 巨大な象 5 " ㉟ 7 ナンニモナカッタワナンニモ…… 8 LOVE CHIME 9 サマーコース 10 エアーポケット 11 港のマリー 1970. 1 素浪人錯乱 8 砂漠の眼球 9 へんてこ絵本 11 チーチー☆ハット 1971. 8 ピクルス街異聞 9 ディン・ドン・サーカス 1972. 1 たわごと師たち 古典的あべこべロック 3 ぼくのデブインコちゃん 4 フクロウと仔猫ちゃん 1972. 8 ♣もののけドキュメント 13日の土よう 日 1973. 2 曲解以呂波哥留多 10 思い出の夏休み 1974. 2 ピクルス街異聞 ディン・ドン・サーカス 9 6月の隕石 1976.2.3 ガロCALENDAR 1977. 4 バッド・ムーン 5 道徳マンガ		



8 "	後藤清	小山千恵
9 "	1983. 9 ストロベリー・ティ★	1984. 12 ローマン・メカニズム★
10 "	12 コカ・コアラ	小山春夫
11 "	1984. 2,3 虚の中	1969. 3 おゆき
12 "	4 ナマケモノ・ドリーム	権泰年⇒宇原泰年
1985. 1 "	6 パンダフル・ストーリーズ	権藤晋（高野慎三）
2,3 "	8 "	1970. 増2 ◆林静一への華麗なる質問
4 "	10 "	1971. 増5 ◆廃墟と疾風
5 "	11 "	1977. 10 ◆リアリズム論を残して
1989. 7 ジャックと同居人の欲望のあいまいな豆の木	1985. 1 "	近藤ようこ
12 ダンス天国と地獄	4 "	1979. 5 ものろおぐ★
1990. 5 昇天ソファ	6 "	1982. 4 わたしの人形
12 腎部歌合戦	8 "	6 白粉小町
1991. 4 藤に酒	10 "	9 蟬丸
呉智英（評論）	11 "	12 放課後
1973 3 劇画列仙傳①水木しげるは天才である	1986. 1 "	1983. 2,3 夏は来ぬ
4 " ②露骨の人	2,3 "	8 さめた肌
5 " ③ロマンの技法	5 "	10 紅蓮 ①
6 " ④大陸幻想	6 "	12 " ②
7 " ⑤非超人譚	7 "	1988. 9 HORIZON BLUE①
8 " ⑥明暗交々	9 "	10 " ②
9 " ⑦武蔵 慥 イフスト=幸伸彦	10 フルムーン・コンプレックス	11 " ③
10 " ⑧もう一人の武蔵	1987. 1 北よりの使者	12 " ④
11 " ⑨ナイフと拳銃	2,3 USAGI-1999	1989. 1 " ⑤
12 " ⑩生のさなかに	4 性悪大熊猫	2,3 " ⑥
1974. 1 " ⑪凄惨絵	5 ダルマ爺の話	4 " ⑦
3 " ⑫堅固な優しさ	6 ダルマ爺の話	5 " ⑧
4 " ⑬暗さは暗さのまま	7 劣等雀と燕尾服	6 " ⑨
5 " ⑭がんばれヤスジ	8 ヒマワリ・ボーイ	7 " ⑩
6 " ⑮ふてぶてしい	9 孤独なライオン（前）	8 " ⑪
7 " ⑯遠野物語	10 "（後）	9 " ⑫
8 " ⑰そだちのよさ	10 カモメサマー	10 " ⑬
9 " ⑱恐怖のハッピーエンド	11 ハルニレの秘密 コンタとボンタの物語	11 " ⑭
10 " ⑲恐怖のハッピー エンド	12 "	12 " ⑮
11 " ⑳自明の逆説	1988. 1 "	1990. 1 " 最終回
12 " ㉑餓鬼と修羅	2,3 "（最終回）	西光被斬⇒◆目安箱⑫
1975. 1 " ㉒投資指南	4 撫	斉藤章一郎
2 " ㉓早すぎた埋葬	5 "	1990. 11 Sacchan!!★
3 " ㉔この人を見よ	12 世紀末死生存亡論 F1と山崎ハコ	佐伯慎一
4 "（番外）貧乏クジは俺が引く	1989. 1 F-1と山崎ハコ	1972. 9 雨の少女★
5 " ㉕戦慄と哄笑	2,3 '88日本グランプリ観戦レポート①	11 ぼくのさくぶん
6 " ㉖出藍の誉	4 " ②	12 小雨の街
7 " ㉗老人は獅子の夢を見る	5 " ③	1973. 1 和子
8 " ㉘われらがわざおぎ	6 " ④	境川一穂
9 " ㉙深いやさしさ	7 " ⑤	1985. 1 Bの悲劇
10 " ㉚肉と心	1989. 8 " ⑥	榊原廣之
11 " ㉛計算されたナンセンス	9 " ⑦	1991. 5 高校生日記★
12 " ㉜智慧の悲しみ 終わりに臨んで	小林のりー（小林のりかず）	
1984. 7 漫画閑話 ギルゴ13	1979. 11 青春の汗は苦いぜ！	
8 " ファイト について	1980. 2,3 あけみさん	
9 " 石森章太郎について	1986. 11 新しの番組	
10 " 傍点について	コモリマコト	
	1967. 9 妙薬TCM	



5	"		10	"	電奇談	9	通じなし
6	"		11	"	天狗のおじさん	10	日本チャンバラばなし
7	"		12	"	茂 郎狸	11	"
8	"		1980. 1	"	悲しきキリギリス	12	日本チャンバラ伝
9	"		2・3	"	山丸の穴	1988. 1	"
10	"		5	"	壁の穴	2・3	"
11	"		6	"	饅頭殺人事件	5	まげものがたり
1973. 12	イエスノーマンガ		8	"	早草	7	"
1974. 4	サボテン男		10	"	菅原のおふよ姿	8	"
5	"		11	思誓の彼方に	パートII	9	"
6	"		12	幻想の明治	燃える観音①	12	うさぎとかめ
7	"		1981. 1	"	" ②	1989. 1	"
9	"		2・3	"	江戸狸	2・3	"
10	"	(最終回)	5	"	おとよ	4	"
11	広告まんが		6	五人だまし		6	平成日記
12	夢泥棒ドロボー		7	榎本多吉		7	"
1976. 1	"		1981. 9	開化のゆうれい		8	"
2・3	コーシンのユメドロボードロボー		10	小山田退屈男		9	"
	空飛ぶなにがし①		12	道黄武士伝		10	"
4	"	" ②	1982. 2・3	異空間児		向後つぐお	
5	"	" ③	4	猫の恩返さず		1969. 3	ひとつぶのなみだ
6	夢式飛行		6	南の鐘……		6	ゆきがふる
7	タイム・トイレット		7	代理のゆうれい		1969. 7	おおきな手
8	黒ネコのしっぽ殺人事件		8	ガロ人情噺	長井の勝一	9	花火は上がらず
9	長靴をはいた少年		9	幻想の明治	不思議大ソゾキ	11	哀れふるさと
10	変態望遠鏡		10	"	飛んだ温泉 寒中の井戸	12	春の盗賊
11	カップドリーム①		1982. 11	ラッキーさん		1970. 2	陰火
12	"	②	1985. 1	"		7	ひとつ目
1977. 1・2	懐かしい街		4	たのもう		1975. 4	梅子の訪問
3	アタマガイケの原理		5	コーシンの4P		澁 太郎	
4	つばめ返し		6	むむっ		1981. 9	海のお話★
5	ミナミトラリアングル①		7	できる!		1982. 5	あまりに遅過ぎた帰宅
6	"	②	8	なに!		7	河童の恋
7	這う巢①		9	ショック死!		9	サイコロト坊の冒険
8	"	②	10	日		10	バグチヌ
9	波斬り丸の咆哮		11	日本		11	"
10	"		12	日本語		12	"
11	バナナブレッドマン		1986. 1	日本語マ		1983. 1	"
12	タイガーバー夢		2・3	日本語マン		2・3	"
1978. 2・3	火星人来襲		4	日本語マンガ		4	"
4	金色夜叉		5	幻		5	"
5	ざ・まねえ		7	幻想		6	"
6	鯛鯉記		8	幻想の		7	"
7	ティラノ・サウルス		9	幻想の明		8	"
8	ネコウォーズ		10	幻想の明治		9	"
9	"		11	くずおはらい		10	"
12	"		12			11	"
1979. 1	按摩金三郎		1987. 1	なんだか		1984. 1	"
2・3	雀義なき戦い		2・3	ボクサー		2・3	"
4	家宝の由来		5	忍者無情		4	"
5	幻想の明治	元猫	6	すいませんでした		5	"
6	"	金次郎蘇生	7	恐ろしきフルムーン		7	"
7	"	待った兵衛	8	われ思うゆえにわらわれる			



1972.	1	〃	④
	3	〃	⑤
	4	〃	⑥
	5	〃	⑦
	6	〃	⑧
1973.	1	山ちゃんがなじんだとき	
	2	ある男	
	3	彩雲に舞う	
	4	中床清吉	
	5	恩の恋	
	6	とし	
	9	ゴゼの流れ	
	10	毒	
1974.	2	おせん	
	6	あらさのさあー	
1974.	6	名刀	
		暮六ツ	
1977.	5	蛸	

## 楠精示

1985.	11	達者バンパイヤ★
	12	ぐあはははっ
1987.	6	アニマル☆ハウス

## 久住昌之（おならブー太）

◆クスミのお楽しみ箱			
1984.	8	〃	特集・泉昌之
	9	〃	特集・江ぐち
	10	〃	江ぐち話 その2
	11	〃	特集・江ぐち
	12	〃	特集・ハ ベストの肉
1985.	1	〃	特集・久住秀夫
	2・3	〃	滝ちゃんの魅惑の渋谷千円コ ス
	4	〃	特集・敷嶋素
	5	〃	特集・石田直也
	6	〃	その後の江ぐち
	7	〃	へんな思い出
	8	〃	幼年期のMK
	9	〃	インモ 図書館の巻
	10	〃	I・H君の事
	11	〃	イラストでお金をもらいはじめた頃の話
	12	〃	自販機本に文章を書いていたんですね
1986.	1	〃	うんこの名称
	2・3	〃	生まれ！ ノン・ジョコウ
	4	〃	ボクの音楽史
	5	〃	今月は今までの人生で最も忙しいといえる
	6	〃	戦慄！ 死なない男
	7	〃	幼い時好きだった本
	8	〃	モダンヒップメンバー紹介慣用句ノ人
	9	〃	ステージで仕事しちゃう！！
	10	〃	夏日記
	11	〃	この 年をふりかえって
	12	〃	近所のおいしい店大集合
1987.	1	〃	ソ テイの仕事

2・3	〃	じじいの店	
4	〃	おいしかった話	
5	〃	ブラインドレモンの事	
6	〃	レンアイの事	
7	〃	ボク達の言葉遊び	
8	〃	原稿	
9	〃	立体ビデオ	
10	〃	「マズしんぼ」の巻	
12	〃	日本語はムズカシイかもしれない	
1988.	1	◆絵にも描けない泉	
	〃	第1回 ヤな話	
2・3	〃	第2回 ビデオできとータイトル集	
4	〃	呼びにくい、聴きにくい名前	
5	〃	挫折中の原作より	
6	〃	漢字の事など	
7	〃	「パチンコ」原案	
8	〃	「骨」を聴いた日	
9	〃	ボクがいない	
10	〃	医者の話は面白い	
11	〃	ゴマの正体	
12	〃	おじいちゃんの事	
1989.	2・3	〃	QBBの事など
1989.	4	〃	センス・オブ・QBB
	5	〃	トワイライトの残り物
	6	〃	高校1年。バイト中にオバサンにナンパされた思い出
	7	〃	泉昌之読者の面白お喋り集
	8	〃	なんとなく純文学な一日
	9	〃	ボクのUFOとお化け体験
	10	〃	ボクと墜落
	11	〃	トウトウと私
	12	〃	ゴッドファザ になろう
1990.	1	〃	深夜の大痴話ゲンカを聴きつつ
	2・3	〃	「マンガのビデオ化」について
	4	〃	もしも私が店をやるならば。
	5	〃	電話原稿
	6	〃	散歩三昧
	8	〃	桑田改造計画
	9	〃	こんな夢を見た
	10	〃	ハワイ～インド～福島の旅
	11	〃	永久保存版・オトコとオンナとオナラ
	12	〃	21 センチュリー - ポーズ
1991.	1	◆横道一直線 ストレスの嵐①	
	2・3	〃	②
	4	〃	③
	5	〃	④
	6	〃	⑤
1985.	12	コイズミくん	
1987.	2・3	ヤマダ怒りの朝	
1990.	6	ほにほ	(「おならブー太」名義)
	7	消火魔	(〃)
	9	ジンギスカン・ブラウンの夢	(〃)
	12	夏の思い出	(〃)

## Q.B.B（久住昌之＋久住卓也）

1989.	1	不思議な日曜日
	2・3	ロスアンゼルススのクリスマス
	4	戦争の鳥 “A Tombi”
	5	幼稚大先生 タケマン
	6	ハッパチャン
	7	毒実験
	8	サルになった兄
	9	軽井沢にて
	10	南十字星とホテル
	11	つりぼり
	12	みかん毛太郎
1990.	1	宇宙中央線
	2・3	霧姫さま
	4	パジャマ岡崎
	5	栄三飛行術
	7	アンマきくん
	8	ダム
	10	ひるねの王様
	11	どばんじょ家族ロビンソン
1991.	1	バイオリン犬
	5	よく泣く日
	6	幼年時代

## 久納徹

1972.	7	灰色の鎖★
-------	---	-------

## 熊谷堅治⇒大熊賢二

## 栗栖憲治

1980.	6	課題作品★
	7	空想少女
	12	夢幻堂
1981.	9	三等身の曲説
1982.	1	就寝の時間
1983.	6	「カコイ」の中

## 栗田由美

1981.	10	アルファ★
-------	----	-------

## 黒川新⇒目安箱①～④（イラスト形式）

## 桑原茂男

1972.	10	◆影絵の写真師
-------	----	---------

## Kevin Quigley（ケビン・クイグリー）

1991.	5	Is Paul Dead?
	6	Little Georges Rouault

## 高信太郎

1972.	9	怪人二重面相予告編
		◆慎一女学生気分（イラスト宮谷一彦）
	10	かにもうせなぼう
	11	平家物語
1973.	1	じりりいん
	4	長者のきいたひょうたん話



1983. 1 つきばしくるわし 2-3 孤独 4 ゲットボールを投げるとき 5 出稼ぎの夜 8 牛のいる風景 9 美しき兄弟 10 変死体 空には円盤がでていた 11 なによ! あんたバカじゃない 12 PIKK BOX	1972. 1 " 25 「博徒斬り込み隊」 2 " 26 「男はつらいよ」 3 " 27 「先天性淫婦」 4 " 28 「子連れ狼」 5 " 29 「追いつめる」 6 " 30 「関東緋桜一家」 7 " 31 「わらの犬」 8 " 32 「昭和女博徒」 9 " 33 「木枯し紋次郎」 10 " 34 「人生劇場」 11 " 35 「八月はエロスの匂い」 12 " 36 「木枯し紋次郎」	6 木天夢野原 1990.2-3 ある日一人でコンサートへ行った 4 とってもいいきもち 6 サキソフォン 8 ハンバーガー・レディ 1991. 1 絶対零度の微熱
1984. 1 汽車と家族 4 眩暈 5 粘土の女 6 反射		清宮政子
1984. 7 人魚 8 馬腸の中の男 10 犬印 11 訪問者の孤独 12 空に星、地に血	キサモリクニヒコ	1978. 8 TRIAIGLE ZONE★ 9 不可解人物列伝① 11 " ② パジャマゲーム
1985. 1 悟 2-3 純怒 4 ナイルの幻影	1989.12 読書の秋のドッグショー★	1979. 4 クローン 5 大東亜戦争肯定論 7 MELLOW YELLOW
1988.10 和子の部屋の暑い夏	如月珊瑚	九喜良作
1990. 6 鶴膝と鮎パン 6 まぼろし	1985.12 天国列車	1966. 4 勝利者★
菊地浅次郎 (山根貞男)	岸田ますみ	楠勝平
1968.増9 ◆ふじ沢光男論	1976. 9 主婦の絵本	1964.10 仙丸① 11 " ② 12 " ③
1969.増4 ◆身すぎ世すぎに追いまくられて 11 ◆活動写真1 「私が棄てた女」 12 " 2 「ワイルド・パンチ」	北川由紀子	1965. 2 " ④ 3 " ⑤ 4 " ⑥ 6 " ⑦
1970. 2 " 3 「おんな」 3 " 4 「野獣の復活」 4 " 5 「やくざの横顔」 5 " 6 「エロス+虐殺」	1970. 4 子守唄★ 7 少年と少女	1966.10 名刀 11 いざかや 12 おせん
増 5 ◆やさしさとは殺意の別名 6 ◆活動写真7 「豹は走った」 7 " 8 「アコ」 8 " 9 「君が若者なら」 9 " 10 「驚と鷹」 10 " 11 「反逆のメロディ」 11 " 12 「鉄火芸者」	1971. 1 蟬の鳴く	1967. 1 殿さまとざらざらした味 2 喧嘩 3 鎧 5 冷たい涙 6 参加 7 どろ棒とこん棒 9 茎 (前) 10 " (後) 12 赤水 (前)
1971. 1 " 13 「ジャックの刺青」 2 " 14 「風の天狗」 3 " 15 「高校生さすらい派」 4 " 16 「博徒外人部隊」 5 " 17 「真剣勝負」 6 " 18 「望郷」	きたじまさるお	1968. 1 " (後) 5 臨時ニュース
増 5 ◆裏切られる沈黙 7 ◆活動写真19 「関東幹部会」 8 " 20 「緋牡丹博徒」 9 " 21 「戦争と人間II」 10 " 22 「栄光のロマン」 11 " 23 「黒の斜面」 12 " 24 「さらば掟」	1978.10 共鳴箱★	1969. 7 チェッ 10 石匠
	きとうよしお	1970. 1 盗っ人 5 大部屋 増 8 「臨時ニュース」「名刀」「いざかや」「茎」「殿さまとざらざらした味」「喧嘩」「冷たい涙」「参加」「どろ棒とこん棒」「おせん」
	1981. 1 おもて★ 4 昇華	9 暮六ツ 1971. 2 あらさのさあー 4 まめ 6 梶又衛門 9 ぼろぼろぼろ ① 10 " ② 12 " ③
	鬼童譲二	
	1965.10 走る殺意★ 11 なんじゃもんじゃ! 忍者	
	木村潔	
	1980.12 蠢く★	
	木村重男	
	1973.12 風呂あがり★	
	木村恒久	
	1977. 7 図象の学習塾①新しきものの終末 8 " ②権力と群衆 9 " ③肖像 10 " ④地図の日本 11 " ⑤肖像② 12 " ⑥ " ③ 1978. 1 " ⑦ " ④レーニン 2-3 " ⑧ " ⑤アインシュタイン(終)	
	木元多賀子 (木元ひわこ)	
	1982.11 キュービーBOX★	
	1983.2-3 家族崩壊	



<p>9 大東京有名人鑑 10 なんかこわい話 11 古書街エレジー① 1991. 1       "       ② 23       "       ③ 4 甘党の怪人 5 日本能天気本全集内容見本① 6               "       ②</p>	<p>4 我突撃す 5 瀬戸内海大海戦 1976. 6 絵空事 7 獵奇王 月夜の暴徒 8 獵奇の館 9 獵奇王 百鬼夜走る 10 黄金偶話 11 地獄を見た男 12 路地裏の散歩者 1977. 12 地獄の士男 4 強打者 5 遠い昔、獵奇男は…… 6 俺たちに夢はない 7 号泣女高生エレジー 8 復讐の一寸法師 10 ロマンよ静かに死ね 11 怪傑紅ガラス 1978. 1 袋小路の恋 4 大阪のロマンス 6 ロマンの日は遠く 8 あした休む人 10 闇のバトス 1979. 1 獵奇の証明 23 東通り 5 獵奇のレトリック 6 月面人來襲 7 どあほエレジー 8 川崎ゆきおの夏(初夏、夏よ、宝さがし) 9 大団円 10 塔の恐怖 1980. 23 獵奇が原 5 どあほエレジー 1981. 8 獵奇の迷路 1982. 11 古ビル 12 貧環蝕 1983. 1 影を見た男 23 仮病の家 4 便所の秘密 5 アホ・走る 6 快人達 7 もののけ 8 社怪人 9 怪盗ルンペン 10 海人伝説 11 化物 1986. 9 散歩狩り 1988. 10 獵奇王通信 11       " 1991. 23 もののけ君①妖怪のびて 4       "       ②大貧乏神 5       "       ③大仏君 6       "       ④猫町奇談</p>	<p>川本コオ 1979. 11 忘れな橋 ガンケ・オンム 1973. 2 あいちゃん 神田巖 1984. 10 雨RAIN★ かんだろか 1980. 6 傾城仇競★ 菅野修 1973. 6 星の夜の物語★ 1975. 5 煙草のけむり 7 桜桃エレジー①雨の次には狂人が出る 8       "       ②海の893 9 Jazzの帰りにむらさきを見た 1977. 3 独りの人格 1978. 10 ブラック・コーヒー 1979. 1 ロンサム・サムの夢 4 最後の薬 5 神無川の岸辺で 6 櫻の頃 8 慢酔浮夜 9 金魚と猫と憂鬱 10 ブランコ 11 天狗にな少年 12 R夫人の欲求 1980. 1 風流壺くらべ 7 少年の目 9 イルカの顔 10 笛 12 好摩の東 1981. 1 鬼 23 予感 4 冬の海 5 黒猫 7 郵便ポスト生活者 8 剣 9 雨 10 夏の感傷 11 金魚のフン 1982. 1 創作民話 ①赤護子 23 あの人…… 4 続・あの人…… 5 愛夜哀歌 6 月が笑う夜 7 愛夜哀歌 8 ローカル線の午後 9 賢治の忘れもの 10 失業中 11 犬泥棒の夜 12 休日</p>
<p>唐十郎(原作⇒篠原勝之の項参照) 1968. 増6 ◆笑わぬおかっぱの少女論 カルメコウチ⇒鈴木翁二 川崎ゆきお 1971. 10 うらぶれ夜風★ 1972. 1 獵奇の果 3 古い記憶 4 新青年 5 御意見無用 6 夜走る 7 夏草夢のあと 8 しがらみエレジー ◆手記 われわれはこのようにものける ◆もののけ一派によるその全貌表 もののけプロ作品リスト 9 獵奇は夢は夜ひらく 10 獵奇王 復讐一番勝負 11 悪いやつほどよく走る ◆獵奇のダイゴミ もののけプロ 12 竹藪の女 古い月 1973. 1 大東京獵奇の夜 2 ロイドメガネの男 3 闇に蠢く 4 浪花博徒 5 昭和探偵伝 6 古壺は夕映えに砕けた 9 便所バエの悲劇 10 あの子もこの子も 残った一本 海の家 11 どあほエレジー・場末流れ歌 1974. 11 サバク 12 二魔人 1975. 1 悔恨の彼方へ 2 大阪は燃えているか 3 路地のナゾ 4 帰らざる町 6 天地無用 9 浮浪の果 12 日本三文神話 1976. 1 ゴジラの最後 23 金豚伝説・黒色エレジー</p>		



4	"	22	4	勝又進作品集●	1981. 1	"
5	"	23	5	"	2・3	"
6	"	24	6	"	5	"
7	"	25	7	"	1982. 10	虎次郎河童
8	"	26	8	"	1984. 9	瀧蔵
9	"	27	10	"	1985. 4	川越夜船
増 9	"	28	12	"	5	椿島
10	"	29	1973. 1	"	7	鯨と世間師
11	"	30	2	"	11	ナガトロ気分
12	"	31	3	"	1991. 4	見沼通船掘
1969. 1	"	32	4	うしの刻	加藤久雄	
2	"	33	5	勝又進作品集●	カタストロフィ・ストーリー★	
3	"	34	6	かんのこ	加藤寛宗	
4	"	35	7	勝又進作品集●	1981. 5	いぬちゃん★
増 4	"	36	8	牛兵衛	門倉言央	
▲滝田ゆうの「禁じられた遊び」			9	勝又進作品集●	1969.増7	▲詩と漫画と人間
5	勝又進作品集①		10	"	かねこ未来	
6	"	38	11	"	1981. 11	首が飛ぶ話
7	"	39	12	狸	上中治	
8	"	40	1974. 1	勝又進作品集●	1980. 2・3	思春期★
9	"	41	2	木の葉経	6	ビンの中
10	"	42	3	勝又進作品集①	8	キスについて
増 10	かっぱ郎		4	"	上村一夫	
11	勝又進作品集②		5	"	1972. 9	▲精悍論
12	"	44	6	▲追悼・楠さんのこと	鴨沢祐仁	
あーほ			8	勝又進作品集●	1975. 4	クシー君の発明★
1970. 1	勝又進作品集①		9	"	9	プラトーンシティ
2	"	45	10	残夏の候(作品集●)	10	ムーンライト・シネマ
3	"	46	11	" ( " ●)	1976. 1	流れ星整備工場(上)
4	"	47	12	" ( " ●)	2・3	ガロCARENDAR
5	わら草子		1975. 1	" ( " ●)	4	流れ星整備工場(中)
増 5	▲ある日の池上一家		3	勝又進作品集●一	5	チキンボット氏の土星旅行
6	勝又進作品集①		5	"	9	流れ星整備工場(下の前)
7	"	50	6	冗狸	12	おとうさんのクリスマスツリー
8	"	51	10	残暑御見舞	1977. 9	流れ星整備工場(下の後)
9	"	52	1976. 11	たのまの参次	1978. 4	ラムネ水は月の光
11	木の葉経		1977. 10	気になるヤツラ	1985. 7	クシー君の夜の散歩
1971. 2	猫の墓		1978. 8	四コマ世間	8	クシー君 NOISE COLLECTIONの巻
3	勝又進作品集●		9	"	唐沢俊一(作)、唐沢なをき(絵)	
かんだ3月			10	"	1988. 5	河童の味
4	冬の海		11	"	6	ミミツク小僧ノバウケン
5	酔いどれ唄		12	"	7	段吉の怪
増 5	▲柘植大介氏のこと		1979. 1	"	8	電気傾城
6	末摘花		2・3	"	9	鋼鉄人間 28号 大塚署長自身の事件
7	勝又進作品集●		4	"	11	原子馬鹿襲来
8	つるべ心中(前)		5	"	1989. 10	ぐるっと回ってジャガーの眼
9	"(後)		6	"	1990. 6	人生一行知識
10	勝又進作品集●				7	古本市血笑旅
11	霧の中				8	あわびねこ
12	勝又進作品集●					
1972. 1	"	53				
2	猫騒動					
3	春の霊					



6 ジェレミイ・ジョーンズの危険な反抗 7 骸之魅魂（降霊魔法） 8 女戦士・セアラ 巨根塔の怪物の巻 9       "       " 10       "       " 12       "       " 1983. 1       "       " (完) 5 和小路伯爵のトラブル 12 聖夜の冒険 1984. 2,3       " 4       " 5       "	<b>小川小</b> 1974. 5 結婚します！★ 離婚します！★ 1976. 8 ガード下のギャグみがき <b>沖名克彦</b> 1989. 1 第二次ベビブーム世代★ <b>奥平衣良（奥平イラ）</b> 1979. 6 モダン・ラヴァーズ★ 8 ロボッツアワー 9 ジオメトリックラブ 11 デジタルライフ 12 MUSIC FOR FURNITURE 1980. 2,3 レイジークレイジーブルース 5 BEAT 6 PLASTIC AGE 7 FURNITURE MUSIC (YLA'S TECHNO SHOP Vol.3) 8 テクノの国のアリス 9 OCEAN EXOTICA CORKTAIL 10 BIGGER SPLASH 11 SAXOPHONE 1981. 6 地図と記号 1982. 4 ドリグル 1983. 7 セラビー／療法	1974. 6 ◆追悼 楠勝平さんのこと 1980. 5 マングの眼①小多魔若史の作品は！ 6       "       ②大友克洋の作品と読書 7       "       ③勝又進の四コママンガ 8       "       ④つげ義春の新作 9       "       ⑤ドラえもののポケットの中 11       "       ⑥徳南晴一郎「人間時計」 1980 1       "       ⑦東海林さたおの「アサッテ君」 2,3       "       ⑧世界・現実のなかの瞬間的な落差 6       "       ⑨「窓の手」を読み 7       "       ⑩「人肉料理」の味 8       "       ⑪ひとコマに生きる 10       "       ⑫石井隆おんなの街 1981 1       "       ⑬おそろべき背景 2,3       "       ⑭「青春」の甘きかおり 4       "       ⑮「フリエンくん」のクールな感覚 5       "       ⑯若い作家たちの活躍 6       "       ⑰やまだ紫の転向論 7       "       ⑱「落差」のおかしさ——泉昌之 9       "       ⑲「マルクウ兵器始末」——湊谷夢吉 11       "       ⑳「ええな〜っ、夢があつて。」
<b>大塚浩司</b>		
1980. 1 夏日記		
1981. 1 秋日記		
<b>大西裕子</b>		
1990. 12 終わらない話★		
<b>大森暎児</b>		
1969. 5 ◆北の群像		
<b>大山学</b>		
1969. 1 遭難 6 化石の森 1970.増5 ◆永遠の少年 1971. 2 きょうの予感 11 あしたの思い出① 12       "       ② 1972. 1       "       ③ 3       "       ④ 5       "       ⑤ 6       "       ⑥ 7       "       ⑦ 8       "       ⑧ 1974. 6 ◆追悼、楠勝平氏の走馬燈	<b>尾沢敏明</b> 1982. 6 四つ谷のこう <b>尾沢敏和</b> 1982. 7 ライター★ <b>おざわゆうじ</b> 1982. 12 タルの恋★ <b>織田靖</b> 1972. 11 ◆悦虐の世界 <b>おならブー太⇒久住昌之</b> <b>影丸（上野昂志）⇒目安箱(12)〜</b> 1964. 9 ◆妥協排す孤高の理想家 10       「       "       」 1970.増2 ◆光と闇 12 ◆つりたくにこ／食パンの耳を！ 1972. 10 ◆白い道 <b>影丸譲也</b> 1965. 6 目撃者 <b>陰溝蠅児⇒大谷弘行</b> <b>加治一生</b> 1965. 11 馬糞物語 12 愛 <b>梶井純</b> 1971. 9 ◆魅惑の図書館（つげ義春流れ雲旅）	<b>かしまのぼる</b> 1967. 12 漂流 <b>片山健</b> 1972. 11 ◆ルリ病の記憶 1973. 2 曲解以呂波哥留多 10 思い出の夏休み <b>勝又進</b> 1966. 6 勝又進作品集①★ 7       "       ②★ 8       "       ③★ 9       "       ④★ 10       "       ⑤ 11       "       ⑥ 12       "       ⑦ 1967. 2       "       ⑧ 3       "       ⑨ 4       "       ⑩ 5       "       ⑪ 6       "       ⑫ 7       "       ⑬ 8       "       ⑭ 9       "       ⑮ 10       "       ⑯ 11       "       ⑰ 12       "       ⑱ 1968. 1       "       ⑲ 2       "       ⑳ 3       "       ㉑
<b>おがわあきら</b>		
1965. 7 戦いある限りに① 8       "       ② 10       "       ③ 1966. 3 大空と雑草の詩① 4       "       ② 5       "       ③ 6       "       ④ 7       "       ⑤ 9       "       ⑥ 11       "       ⑦ 1967. 1       "       ⑧ 2       "       ⑨ 1968. 3 青春の墓 1970. 1 永い冬		



<p>23 南極物語</p> <p>4 うなぎの日</p> <p>5 春雨旅情</p> <p>6 好青年の異常な行動 (前)</p> <p>8 " (後)</p> <p>9 日本の友人</p> <p>10 秋がそこまでやって来た</p> <p>12 田舎に向かって走れ</p> <p>1988. 1 正月号だから四コマだ!!</p> <p>23 冬の旅人</p> <p>4 グルメを斬る!!</p> <p>6 長崎物語 第一回</p> <p>7 " 第二回</p> <p>8 " 最終回</p> <p>10 私立探偵 松尾</p> <p>11 " 第2回</p> <p>1989. 1 " 第3回</p> <p>23 " 第4回</p> <p>4 " 第5回</p> <p>5 " 第6回</p> <p>6 " 第7回</p> <p>7 " 第8回</p> <p>8 " 第9回</p> <p>10 " 第10回</p> <p>12 会社のある街</p> <p>1990. 1 悲しきギャンブラー</p> <p>7 欲望の白い町</p> <p>1991. 23 君と僕の帰る道</p> <p>4 狂った雀荘</p> <p>5 必死の女 (ひと)</p>	<p>1975. 4 未納原稿</p> <p>5 466 びょう</p> <p>10 草野球</p>	<p>大田善文</p> <p>1976. 10 鯨の日★</p>
<p>絵夢</p>	<p>大越孝太郎</p>	<p>大谷弘行 (陰溝蠅兒、谷弘兒)</p>
<p>1983. 8 夜桜★</p> <p>10 めじろ</p>	<p>1986. 12 アカグミノカチ★</p> <p>1987. 6 第三資源</p> <p>9 Mr. MOONLIGHT</p> <p>「浪人生に贈るイメージ」</p> <p>11 白雪姫物語</p> <p>12 惑星X</p> <p>1988. 1 帝共乃黙示録</p> <p>4 S市63街区</p> <p>5 ウタへ現実ノ唄ヲ</p> <p>6 "</p> <p>7 櫻田家の嫁</p> <p>9 織垣家の嫁</p> <p>10 WARNING</p> <p>1989. 1 溪 第一部</p> <p>23 " 第二部 死んだ犯人</p> <p>4 " 第三部 少女</p> <p>8 WARNING2 90'S DOGMA</p> <p>9 " 3 SORRY</p> <p>12 差出人をみたら匿名希望だこりゃ</p> <p>1990. 23 ベルナデッド</p> <p>1991. 6 悪夢の森の満開の下</p>	<p>1970. 2 流星—ながればしー★</p> <p>4 風—こがらしー</p> <p>7 炎</p> <p>8 暗黒同盟</p> <p>10 零</p> <p>1971. 1 黒少女</p> <p>3 董—すみれ— (前)</p> <p>4 " (後)</p> <p>6 夢幻城殺人事件①</p> <p>7 " ②</p> <p>8 " ③</p> <p>10 蝙蝠横丁①序、天使飛翔</p> <p>11 " ② "</p> <p>12 " ③Ⅰ、二人鉄仮面</p> <p>1972. 1 " ④ "</p> <p>2 " ⑤Ⅱ、幻男爵</p> <p>3 " ⑥Ⅲ、墜落天使</p> <p>4 幻少女</p> <p>5 密室</p> <p>6 月光鎮魂曲</p> <p>7 エルヴェとアダリー</p> <p>8 闇黒の貴公子</p> <p>10 どんじゃらぼうや</p> <p>11 闇小路家の密室</p> <p>1973. 2 ジギル博士の真実の顔</p> <p>7 悪の決算</p> <p>1974. 4 妖夢の園</p> <p>11 アンジェラ&amp;アンジェロ</p> <p>1977. 1-2 夢幻荘の怪</p> <p>1978. 9 地獄のドンファン①</p> <p>10 " ②</p> <p>11 " ③</p> <p>12 " ④</p> <p>1979. 1 " ⑤</p> <p>23 " ⑥ (最終回)</p> <p>1980. 9 怪傑壺気楼・怪獣Xの巻①</p> <p>10 " ②</p> <p>11 " ③</p> <p>1981. 5 檻の中の密な愉しみあるいは近頃変わった私の生活</p> <p>6 薔薇と拳銃 (1)</p> <p>7 " (2)</p> <p>9 " (3)</p> <p>10 " (4)</p> <p>1981. 11 " (5)</p> <p>12 " (6)</p> <p>1982. 1 " (7) 完結</p> <p>23 女探偵ハニーサテン</p> <p>4 霧の中</p>
<p>えんどけいきち</p>	<p>大澤正明</p>	
<p>1966. 6 秘剣</p>	<p>1981. 9 K★</p> <p>10 秘密</p> <p>11 源さんのこと</p> <p>1982. 1 秘密 (2)</p> <p>23 スター</p> <p>5 スリ師六さん</p> <p>6 秘密 (3)</p> <p>7 陥穽或いは墜跌</p> <p>8 愛しのマリー</p> <p>10 君に恋する</p> <p>11 15才の感傷</p> <p>1983. 23 夢を売る店</p> <p>4 哀愁天使</p> <p>8 ノビ師の告白</p> <p>9 我が家族</p> <p>1983. 12 放課後</p> <p>1984. 1 何が変わった</p> <p>23 熱烈家族の不道德のすすめ</p> <p>4 屋上にて</p> <p>7 知恵の小箱</p> <p>8 小学時代</p> <p>10 待つ男</p> <p>1985. 23 小学時代</p> <p>4 テレパス・トーク</p> <p>6 お見合い</p> <p>8 大金持ちになる方法</p>	
<p>大黃菜春子</p>		
<p>1987. 8 孝子さんの弁証法的青春★</p> <p>9 どっちがおトク?</p> <p>10 まーるくなる</p> <p>11 おなかが泣いている</p> <p>12 倦怠少女の日々</p> <p>1988. 1 夢見ることがつい楽しくて</p> <p>23 みんないろいろあるわよね</p> <p>5 HE SAID SHE SAID</p> <p>6 悪いヤツではないんだけど</p> <p>7 たかが夕陽を見にいくだけで</p> <p>1989. 6 愛の暮らし</p>		
<p>大熊賢二 (熊谷賢治)</p>		
<p>1974. 12 9月23日★</p> <p>1975. 2 ふぁんとま</p> <p>3 ながいよる</p>		



<p>23 " 日本一のくつ下オジさん</p> <p>4 " 6cmバカのヒミツ</p> <p>5 " 日欧タイプのハデ</p> <p>6 " もんじゃ</p> <p>7 " 一ーカイ野郎</p> <p>8 " サスペンス劇場のナゾ</p> <p>9 " 親切オバさん</p> <p>10 " ーコ ーおじさん</p> <p>11 " 玄関先の怪</p> <p>12 " 仕事熱心な文房具</p> <p>1986. 1 " 特大いなりののろい</p> <p>23 " エレキでビックリ</p> <p>4 " シルバー・シートの正しい使い方</p> <p>5 " おならの曲り角</p> <p>6 " 吊り草とバリ島</p> <p>7 " 引越しとふすま</p> <p>8 " 怒りの招待状</p> <p>9 " 楽しいのぞかれ方</p> <p>10 " 小便野郎</p> <p>11 " ほめられ上手</p> <p>12 " 湯豆腐の季節</p> <p>1987. 1 " 山はいらんかね</p> <p>23 " 日本一のハゲ</p> <p>4 " とんだ舌自慢</p> <p>5 " 自分の話だけの男</p> <p>6 " 開きなおりの美学</p> <p>1987. 7 " ノーテンカチクリ幸せ者</p> <p>8 " 世の中みんなアートだ</p> <p>9 " 井ノ頭で膝カソクン</p> <p>10 " 五年越しのホラ道場</p> <p>11 " (番外編)ああ本国寺は富士にそびゆ</p>	<p>7 サマータイム①</p> <p>8 " ②</p> <p>9 " ③</p> <p>10 " ④</p> <p>11 " 最終回</p> <p>1988. 1 しゅふとせいかつのようなもの</p> <p>23 社員旅行は二泊三日</p> <p>4 波のまにまに③</p> <p>6 " ④</p> <p>8 " ⑤</p> <p>10 " ⑥</p> <p>12 " ⑦</p> <p>1989.23 " ⑧</p> <p>5 " ⑨</p> <p>7 " ⑩</p> <p>9 " ⑪</p> <p>11 " ⑫</p> <p>1990. 5 対称のカミナリ(内田&amp;朝倉世界一)</p> <p>6 愛しい根っこ</p>	<p>1981. 6 地獄のサラリーマン</p> <p>8 芸術家は怒った</p> <p>9 なんとなく左翼</p> <p>11 地獄のサラリーマンPART 2</p> <p>12 自立する女</p> <p>1982. 1 鼻は詰った</p> <p>4 CM漫画——私はバカになりたい</p> <p>5 禁じられた遊び</p> <p>7 美しき死体</p> <p>8 怪しい女</p> <p>10 ハエと人間</p> <p>11 続・美しき死体</p> <p>12 美しき死体(完結)</p> <p>1983.23 私は音痴漢だった</p> <p>4 悪徳の栄え</p> <p>5 私は何も考えない</p> <p>6 天国の門</p> <p>7 忍者の性格</p> <p>8 明るい町</p> <p>9 やくざ魂</p> <p>10 私は真剣な話が嫌いだ</p> <p>11 やくざ魂II</p> <p>12 " III</p> <p>1984.23 村田の首</p> <p>4 ポルノだけは描きたくなかった</p> <p>5 芸術は死なず</p> <p>7 人生の別れ道</p> <p>8 孤独の地下</p> <p>9 地獄を見た男</p> <p>10 時には子供を教育する親</p> <p>11 失われた世界</p> <p>12 "</p> <p>1985. 1 "</p> <p>23 "</p> <p>1985. 4 神経科のコピーライター</p> <p>5 失われた世界</p> <p>6 芸術と革命</p> <p>7 失われた世界</p> <p>8 渚にて……</p> <p>10 終電車</p> <p>11 汝よインテリに泣け!!</p> <p>12 出世払い</p> <p>1986.23 兄弟仁義</p> <p>4 怪奇あまのじゃく</p> <p>6 時にはボートを漕いで</p> <p>7 出会い・そして別れ</p> <p>8 春めざめ</p> <p>9 ハードボイルド無風地帯 (実験映画祭1位入賞作品)</p> <p>10 ヒッピーの王者</p> <p>11 犯罪帝国</p> <p>12 忠誠課長</p> <p>1987. 1 いなぎの大群VS仮装行列の群衆アメ横の闘い</p>
上原摩泥⇒マディ上原		
内田春菊		
<p>1985. 9 おそろしいかえる酒</p> <p>10 退屈なシーラカンス</p> <p>12 ブルーベビーに紅い花</p> <p>1986. 1 父の血はパステルピンク</p> <p>23 恐怖三話</p> <p>4 ブルイ・ドン</p> <p>5 奥さん渡辺です(前)</p> <p>6 " (後)</p> <p>7 わたしという人間</p> <p>8 かいだん</p> <p>9 波のまにまに</p> <p>10 南くんの恋人 その1</p> <p>11 " その2</p> <p>12 " その3</p> <p>1987. 1 " その4</p> <p>23 " その5</p> <p>4 " その6</p> <p>5 " その7</p> <p>6 " 最終回</p>	<p>1964. 9 ◆動物百科①</p> <p>10 " ②</p> <p>11 " ③</p>	
内海敏彦		
1979. 1 河岸に★		
宇原泰年(権泰年)		
<p>1972. 4 狐奇塔★</p> <p>11 風のうめき</p> <p>1973. 5 人外ノ恋</p> <p>7 満月うどん之夜</p>		
江口みつまさ(藤沢光夫)		
<p>1982. 11 ローカル</p> <p>12 待つ人</p> <p>1983. 1 テレホン</p> <p>23 冬山</p> <p>7 アンパン</p> <p>1984. 1 遠い春</p> <p>5 オメデタ女子大学“地方の人”</p>		
えぬくらいおた		
<p>1983. 10 さあっ!★</p> <p>1984. 10 パンツ.そしてパンツ.またパンツ</p>		
蛭子能収		
<p>1973. 8 バチンコ★</p> <p>1974. 1 競艇時代</p> <p>3 仕事風景</p> <p>5 仁義なき戦い</p> <p>8 超能力</p> <p>1975. 4 勝手にしやがれ</p> <p>12 疲れる社員たち</p> <p>1976. 7 愛の嵐</p>		



<p>泉谷しげる</p> <p>1977. 12 2000ワットのツイストで</p> <p>1978. 1 オスマントルコの夜は消えて</p> <p>23 あの娘が作った資本主義</p> <p>4 テストドライバー</p> <p>5 時にはアキレスのように</p> <p>6 ランニング・カプセル</p> <p>1979. 11 F・E・S</p> <p>1981. 23 戦争の犬たち</p>	<p>伊藤美代子</p> <p>1983. 8 サージェンスレディ★</p> <p>いばら美喜</p> <p>1970. 7 勝利者</p> <p>岩田三郎⇒目安箱(55)(58)(61)(67)</p> <p>1971. 増3 ◆無念さを自覚する心</p> <p>岩田雄一</p> <p>1985. 12 デインジャラス・ニッポン★</p>	<p>11 それからの岩本武蔵</p> <p>12 雨の日に……</p> <p>1978. 1 狸山</p> <p>23 笛吹き兄さんを見た男</p> <p>4 ロンリーマン</p> <p>5 草むらの猫</p> <p>7 窓があつて……</p> <p>9 嘔吐</p> <p>10 怪説</p> <p>1979. 1 眼</p> <p>3 雷やこんこん</p> <p>5 バードウォッチング</p> <p>1980. 4 風力漫画</p> <p>5 //</p>
<p>イタガキノブオ</p> <p>1985. 4 写真記★</p> <p>6 ネガティブ・ストーリーズ</p> <p>8 闇夜の海から</p> <p>9 ネガティブ・ストーリーズII</p> <p>10 幽霊河原少女譚</p> <p>11 電気仕掛けのヤジロベエ</p> <p>12 ネガティブ・ストーリーズIII</p> <p>1986. 23 アリジゴク・エレジー</p> <p>4 フライング・マシーン</p> <p>5 ネガティブ・ストーリーズIV</p> <p>6 義手と義眼</p> <p>7 プラナリアの話</p> <p>1986. 8 電球譚</p> <p>9 スタンプ・シティ</p> <p>10 カメレオンが錆びた日</p> <p>12 鉄道員</p> <p>1987. 1 ネガティブ・ストーリーズV</p> <p>4 グレイ・コクーンの見る夢は</p> <p>5 ネガティブ・ストーリーズVI</p> <p>7 処刑台にて</p> <p>8 冷たい部屋の三葉虫</p> <p>9 ネガティブ・ストーリーズVII</p> <p>12 黒猫</p> <p>1988. 1 毒の時</p> <p>23 人体倶楽部</p> <p>4 硝子人異聞</p> <p>1989. 1 星とペテン師と</p> <p>4 今宵コンパスキャットここにあり</p>	<p>岩本久則</p> <p>1972. 9 鳥巢鶴鶴という名の男</p> <p>10 岩本武蔵</p> <p>11 あじさいの花をチョッキンチョッキン</p> <p>1973. 1 ブカリトピア①</p> <p>2 //</p> <p>4 //</p> <p>5 //</p> <p>6 //</p> <p>7 //</p> <p>8 //</p> <p>9 //</p> <p>10 //</p> <p>11 //</p> <p>12 //</p> <p>1974. 1 //</p> <p>3 //</p> <p>4 //</p> <p>5 //</p> <p>6 //</p> <p>8 //</p> <p>9 //</p> <p>10 //</p> <p>11 //</p> <p>12 //</p> <p>1975. 1 //</p> <p>2 飛べ! 鷺次郎</p> <p>3 //</p> <p>4 //</p> <p>5 //</p> <p>6 //</p> <p>8 //</p> <p>10 //</p> <p>1976. 12 //</p> <p>1977. 3 ししの湯</p> <p>4 電話線</p> <p>5 旗と茶と</p> <p>6 犬神家の人々</p> <p>7 ベタベタ兄さん</p> <p>8 松喰い虫</p> <p>9 老いたる力士の物語</p> <p>10 夏……</p>	<p>上杉清文</p> <p>1975. 5 ◆警察手帳①</p> <p>8 //</p> <p>9 //</p> <p>上杉清文と手塚能理子</p> <p>1982. 5 ◆わかつちやいるけどやめられない</p> <p>ラッキーカムカム (イラスト=南伸坊)</p> <p>6 //</p> <p>7 //</p> <p>8 //</p> <p>9 //</p> <p>10 //</p> <p>11 //</p> <p>12 //</p> <p>1983. 1 //</p> <p>23 //</p> <p>4 //</p> <p>5 //</p> <p>6 //</p> <p>7 //</p> <p>8 //</p> <p>9 //</p> <p>10 //</p> <p>11 //</p> <p>12 //</p> <p>1984. 1 //</p> <p>23 //</p> <p>4 //</p> <p>5 //</p> <p>6 //</p> <p>7 //</p> <p>8 //</p> <p>9 //</p> <p>10 //</p> <p>11 //</p> <p>12 //</p> <p>1985. 1 //</p>
<p>板坂剛</p> <p>1973. 6 ◆書評(遺稿 森恒夫)</p> <p>10 ◆映画時評(山口組三代目)</p> <p>糸井重里(他に⇒湯村輝彦作品の原作)</p> <p>1977. 5 ぼくの弟</p> <p>いとうひさえ</p> <p>1986. 7 摩訶マッコイ★</p> <p>8 //(二)</p> <p>11 //(二)</p> <p>12 //(四)</p> <p>1987. 1 //(最終回)</p> <p>1988. 12 チンキさん</p>		



10 Zガーデン 1991.2.3 Z CHAN 2-22 4 " ピンクのねずみちゃん 5 " おかしなカトウ	8 学生老人 9 博多の恋の物語 10 柔の道 11 " 第二回「新たなる敵」 12 " 第三回「審査委員長は誰が」 1988. 1 " 第四回 2.3 " 第五回 4 " 第六回おまけ 5 柔の道 第七回おまけ 6 柔の道 (最終回) 4 コマ かずこちゃんと犬 ドクター 9 の果てしなき挑戦 おまけ 7 みいんなじろうちゃん 8 " 9 " 10 " 11 " 12 "	1969.増4 ◆徹底的にヤクソクを買いて 1970.増2 ◆目で唄われる花の命について 1971.増3 ◆真昼間の都会に出現する亡霊 増 5 ◆実際……どうでもいいかなア 9 ◆白土三平論①自然論(一) 10 " ② " (二) 11 " ③ " (三) 12 " ④ " (四) 1972 1 " ⑤英雄論(一)老雄の場合 2 " ⑥ " (二)女性の場合 3 " ⑦ " (三)続・女性の場合 5 " ⑧ " (四)男性の場合 7 " ⑨ " (五)続・男性の場合 8 " ⑩ " (六)子どもの場合 9 " ⑪ " (七)子どもの場合 10 " ⑫ " (八)母の場合 11 " ⑬ " (九)続・母の場合 12 " ⑭ " (十)続々・母の場合
池内誠 1967. 6 反乱★		泉昌之 (作=久住昌之、画=泉晴紀)
池上純司 1977. 3 いつかギラギラする夏★		1981. 1 夜行★ 5 ウルトラの星 6 ロボット 7 スーパーウルトラジャイアントキング G 9 怠惰な日 1982. 4 最後の晩餐 5 ポーズ 6 ウルトラLOVE 7 普通の夜 9 ARM JOE 11 プロレスの鬼 1983. 6 " 1984. 1 ウルトラの夏 8 変則ヘンタイ漫画エラH 1987. 1 豪快さん物語 4 SUGKGII グレートII スーパーウルトラジャイアントキング 5 国際ゲイジツ先生 6 アイツとペア 7 嵐のカツ井 8 日本が危い 9 レッツゴーナーバス 12 一見の客 1988. 1 宴会の日 2.3 狂った肛門 5 意志を売る 6 隣の客 8 島太郎 10 お父さん久し振りに銭湯へ行く 11 過激な好々爺 1989. 5 " 中の巻 6 " 後編 1991.2.3 パーティの鬼 前編 4 " 後編
池上遼一 1966. 9 罪の意識★ 1967. 8 夏 9 11 禁猟区 12 三面鏡の戯れ 1968. 2 風太郎 ジャンジャン横町の風が立っている 4 " ②無風時間 8 " ①片目男の独白 増 9 ぼやけた世界 10 トモ子とハトさん 11 すばらしき世界 1969. 2 電動式義手 6 白い液体 10 かげろう 11 雪国 1970. 3 スリップ 増 5 「夏」「地球儀」「スリップ」 「白い液体」「かげろう」「禁猟区」 「雪国」「ぼやけた世界」「風太郎②③」 12 風の日の出来事 1972. 2 おえんの恋① 3 " ② 4 " ③ 5 " ④ 6 " ⑤ 7 " ⑥ 8 " ⑦ 1974. 2 「地球儀」	1989. 1 ドンちゃん、ほんまごめんない 2.3 山本さん一家の1日はこうして暮れる 4 鉄田太郎のみごとな変身 三本勝負(授業参観日、C・C、安らかな衛星) 5 悲しきじじとばば たったこれだけのために 6 じろうちゃんの自由大好き！ 7 " 8 " 9 過去形の夢物語 10 ミゾがない 11 三年前の四コマ漫画 1990. 4 おやじのうみ 5 Freshじろうちゃん 6 disrution 7 ちくびとふともも 8 4コマ100本 9 歩 10 激烈家族 11 4コマ一本 12 Liveシブがき隊	
井坂洋子 (⇒やまだ紫の項参照)	石黒清 1980. 9 砂★ 0985. 5 ボーシャンお帰りのさい 0986. 4 遅刻 1990. 7 蜥蜴	
伊沢和平 1980. 9 施毛虫★	石子順造 1966.12 ◆庶民という匿名の存在 1968. 2 ◆つげ義春論ノート、存在論的反マンガ 4 ◆滝田ゆう論ノート、モラリストの大家像 増 6 ◆沈黙へ向かう抒情	
いしいひさいち 1982. 6 スラップ・スキップ		
石川次郎 1986.11 鳥人間★ 1987.2.3 糞真面目な人 4 旅立ちの日はいつも曇っていた 5 タバコは地球を救えるか？ 6 潔癖症 7 豪傑とはなんだ！		



4 // スケ 1 マシのメウエイ	12 // 秋だからゲージュツ	2 冬まつり
5 // 縄師・洋平	13 // ミモザ館の女 (最終回)	3 春の時代
6 // 自鳴琴	1986. 10 アラーキー、シブヤをアッジエする	4 荒れた海辺
7 // 無論 100 %	1987. 11 浪漫写真外伝 愛の部分	5 裏庭
8 // オレは激子に激怒している	新倉たけじ	6 汽車
9 // 真夏の夢の無情、そして終戦記念日	1988. 12 青年の散歩★	7 天誅蜘蛛
10 // 圭子	嵐山光三郎(⇒真実の友、安西水丸の項参照)	8 黄トンボ
11 // 我母かほる、たとえば中国の娼婦	1972. 2 ♠嵐山の人生相談①	9 終夏鉄道
12 // 水瓶座のふたり	3 // ②	10 花物語
1981. 1 // 黒色エレジー	4 // ③	11 小倉町美学
2・3 // ユーミンの文章	5 // ④	12 冬町
4 // ヘルズベルト夫人の生涯	6 // ⑤	1976. 1 冬レンズ
(題=糸井重里)	7 // ⑥	2・3 まがり道
5 // 偽結婚	8 // ⑦	ガロCALENDAR
6 // ミレメの詩	9 // ⑧	4 停滞前線
7 // 写真論	♠逆光の青春日記	5 テンテン天丸のドロン漫遊記
8 // 熊ん子美智子 (短歌=上杉清文)	10 ♠嵐山の人生相談⑨	6 //
9 // 第1回アフキネマのヒロイン明香	11 // ⑩	7 //
10 // 遺写	12 // ⑪	8 テンテン天一のホロ放浪記
11 // 亜佐美	1973. 1 // ⑫	9 // めでたしめでたしの巻
12 // 第2回アフキズム宣言	2 // ⑬	10 よいどれ雲
1982. 1 // 演技指導	3 // ⑭	11 北風放浪
2・3 // 能理子純愛路線	4 // ⑮	12 野火
4 // 突然の恋人	5 // ⑯	1977. 1・2 魚の家
5 // 多絵哀し	6 // ⑰	3 西風の吹く町
6 // 美登利	7 // ⑱	4 春はやて
7 // ボクらはハッピー ポッケ団	8 // ⑲	5 雪どけの頃
8 // 新宿御苑で	9 // ㉑	6 東京エレジー①
9 // 多美子	10 // ㉒	7 // ②
10 // 突然の恋人PART2・ソバキハウスのシンデレラ	11 // ㉓	8 // ③
11 // サトミのサマ タイム	12 // ㉔	10 // ④
12 // 流行考現学	1977. 6 ♠真実の友番外編	1978. 1 自転車屋
1983. 1 // ビデオLOVE宣言	中産階級の冒険出版記念	6 ライオン
2・3 // フロムン	荒畑忠幸	1979. 1 きよし
4 // 少女S	1979. 11 ドント・ウォーリ・ベエビ★	6 キツネ狩り
5 // 螺旋派	1980. 4 エンドレス・サマー	1980. 4 ウィンドブレーカー
6 // 赤坂の女	8 実録陸軍特別攻撃隊	1981. 1 暗室
7 // み・ちろうファンク	11 BORN TO RUN	12 寒い日
8 // Smile	1981. 9 SUKEKOMASHI	井口慎吾
9 // 京都にて京子	KAKUKATARIKI	1983. 6 ステキな水族館★
10 // 紫衣名	蟻田邦夫	1984. 2・3 Silent Night
11 // 文子・15才の夏	1974. 7 浮雲★	12 Afternoon children
12 // 愛の不毛	11 円盤に乗った男	1985. 9 Z-CHAN
1984. 1 // 指想家アラキ	12 乞食男	1988. 8 The Z CHAN
2・3 // パンドラパンドラ合田佐和子	1975. 2 ジェライ	1989. 9 Z CHAN
4 // 今年からの写真	安西水丸	10 //
5 // 二千年院京子浮	1974. 9 怪人二十面相の墓<前編>(原作=嵐山)	11 //
6 // 少女世界	10 // <後編>( // )	12 // DIAMOND
7 // 女陰美人 流水女	11 ひきしおの頃	1990. 1 //
8 // ノストルジアの夜	12 変笛	2・3 // FOOL (バカ)
9 // カルマンという名の女とハナガ寝	1975. 1 少女ロマンス	4 // BROTHER SISTER NIPPON
10 // エゲ海のマドンナ		5 // UNDER THE CHERRYTREE
11 // 浴衣美人		7 GUCCI (好き好き青ネズミちゃん)



3 海岸都市 4 森の野帳 5 関節泳法 8 脱臭樹林に熱いクワベラ 9 朝日町 11 絶対休日 12 無題 1975. 3 外食 4 空の下から 5 赤い自転車	1990. 5 路上売春 6 おじょうさまかんごふ 9 南の島 10 先生と私の異常な愛情 11 かくも長き低迷 12 子宮摘出 1991. 1 作文の不謹慎的展開におけるうんぬん 2・3 愛本家の実態 4 楽しい家と孤独の劇場 5 SAKURA SAKURA OKAPPA 6 村の神童	天野としお 1970. 9 今日もどこかで……★ 荒木経惟 1972. 10 ◆フェラチオ陽子の死 1975. 3 ◆沖縄での感傷 1976. 1 浪漫写真 女優 関村妃 2・3 // 美少女6人 4 // 失恋 5 // 新人モデルの千恵ちゃん 6 // ウィークエンド 7 // 春の撮影風景 8 // 私のアリスたち 9 // 両手に花の旅日記 10 // 城の崎にて 11 // 私の初体験 12 // 偏りの恋 1977. 1・2 // 女友達 3 // 東人形 4 // 冬の中の女たち 5 // 噫婦系図湯島の紅梅 6 // 街は春情している 7 // 教室の女たち 8 // カルメンマノー'77 9 // 紫陽花の庭 10 // 夏日記 11 // 後悔 12 // 東京ホテル 1978. 1 // 虚実再生処女膜論序 2・3 // 夏のころはまだ青かった 4 // 愛の手紙 5 // 愛の嵐 6 // 尾道の人 7 // 旭川の女 8 // 月子 9 // 美智子の雨 10 // 恋の季節 11 // 処女喪失 12 // 続・処女喪失 1979. 1 // 夏の少女 2・3 // アラウキ派の女たち 4 // 紫色遊戯 5 // 続・紫色遊戯 6 // 母に送る妻の写真 7 // 早春婦 8 // 離婚 1979. 9 // 開けてみれば愛と同じくらい孤独 10 // 窓の風景 11 // 美保子の片想い 12 // O嬢物語 1980. 1 // 浅草カルメンと王女キョコ 2・3 // 美保子淫ら、美智子涙
あくも雅志 1989. 6 お父さんの未来に乾杯★	安部慎一 1970. 5 やさしい人★ 1971. 3 美代子阿佐谷気分 11 軍刀 1972. 4 無頼の面影 6 阿佐谷心中 9 正しき人 10 川 11 静かなピンク 12 落下傘 1973. 1 ピストル 2 恋愛 3 月 4 天国 5 日の興奮 6 キス 8 巨人 9 村上の休む日 10 トマト 11 よし子の幸福 12 悲しみの世代① 1974. 1 // ② 3 // ③ 4 // ④ 5 // ⑤ 6 // ⑥ 7 // ⑦ 8 // ⑧ 1974. 9 // ⑨ 1975. 1 愛蓮の家族 7 石田キヌの妊娠 8 // 9 // 10 // 11 // 12 // 1976. 1 // 2・3 築豊居合道 4 // 1979. 7 友達からの手紙 1980. 泣き虫金太 (劇画家残酷物語) 8 心のカルテ	
浅葉克己 1978. 6 ◆同名人 あしべつおさむ 1967. 10 自転車泥棒★ 東元 1981. 10 老人天国★ 1985. 5 夢妻華 6 出勤前 7 ダンサー 8 ガソリンガール (前) 9 // (後) 10 それから プロローグ 11 // ゆみちゃんのそれまで 12 // ペコちゃんのそれまで 1986. 1 // 日常 2・3 // 其ノ最後 4 ステッキガール (前) 5 // (後) 6 大学は出たけれど 8 鎌倉夫人 からくり 9 女給の張り方 10 レヴュー・ガール (前) 11 // (後) 12 だるま座 1987. 4 ふたり 5 ケンドン・ガール 7 ステッキ・ガール 月子の巻 9 ヌード・マネキン (上) 10 // (中) 11 // (下) 1988. 2・3 悲願華 6 女給——早夜子の場合 10 ILLUSION イリュージョン 12 だるま座 1991. 4 月影ささやく夜に 安彦麻理絵 1989. 10 おんなのこである条件 11 アダルトビデオをみた日には		



青木敏	8 ◆超芸術の窓①	8 "	①
1966. 5 映画、とべない沈黙	8 "	9 "	①
赤坂一郎	9 超科学紙芝居(改題)⑥トナック工場	10 "	①
1968. 8 月子観音★	10 ◆石子さんに会ったこと	11 "	①
10 風鈴の木	10 超科学紙芝居 ⑦靈魂農場	12 "	①
赤坂竜也	11 "	1978. 1 "	①
1985. 2・3 イノセント・ビーブル★	12 "	2・3 "	①
6 ノーマンズ・ランド	1978. 1 "	4 "	①
1987. 5 イノセント	2・3 "	5 "	①
明石明	4 "	6 "	①
1979. 6 伸助君のあるばいと★	5 "	7 "	①
赤瀬川原平	6 "	8 "	①
1970. 6 お座敷	7 "	9 "	①
1971. 5 桜画報 予告編	1982. 1 ガラリ	10 "	①
6 "	秋山清	11 "	①
7 "	1970. 8 ◆はるかな夢、竹久夢二の世界①	12 "	①
8 "	9 "	1979. 1 "	①
9 "	10 "	2・3 "	①
10 "	11 "	4 "	①
11 "	12 "	5 "	①
1972. 1 "	秋竜山	6 "	①
8 ◆川崎ゆきおとヌケヌケプロを警戒せよ!	1972. 1 マッコおじちゃんの嘆き	7 "	①
◆今月の夢①	2 小満嵐	8 "	①
9 "	10 ナンセンスの街話①	9 "	①
10 "	11 "	10 "	①
11 "	1973. 1 "	1980. 1 "	①
12 "	3 "	2・3 "	①
1973. 1 "	6 "	4 "	①
2 曲解以呂波哥留多	7 "	1980. 5 "	①
2 ◆今月の夢⑦	12 "	6 "	①
3 "	1974. 1 "	7 "	①
4 "	3 "	8 "	①
5 "	5 "	9 "	①
6 "	7 "	10 "	①
7 おざ式	9 "	11 "	①
8 ◆今月の夢⑫	10 "	1981. 2・3 "	①
9 "	1976. 2・3 "	9 "	①
10 "	4 "	10 "	①
11 "	5 もう一つの世界	11 "	①
12 "	6 ウーン ウーン①	1982. 1 "	①
1974. 1 "	7 "	2・3 "	①
12 電話原稿	8 "	10 "	①
1976. 1 UFOヒューマニズム	9 "	1982. 1 "	①
2・3 ガロCALENDER	10 "	2・3 "	①
6 空飛ぶファシズム	11 "	10 "	①
1977. 3 人生設計	12 "	11 "	①
4 UFO反射望遠鏡 ①円盤からの手紙	1977. 1・2 "	12 "	①
5 "	3 "	1974. 1 "	①
6 "	4 "	2 衰弱旅行	①
7 "	5 "	3 地方大学バカ者パーティ	①
8 "	6 "	4 ひすてりい宣言	①
	7 "	6 地方大学水中時間	①
		7 白曜日	①
		10 海綿体はかい 夏草しげのぶ	①
		11 つべるくりん反応	①
		12 ソラ色地帯	①
		1974. 1 レンアイ海岸季節風	①



# 作家別『ガロ』掲載全作品リスト



(1964年9月号～1991年6月号分)

- ◎マンガ作品を基本(無表記)に、作家別に作成。
- ◎エッセイやコラムは、題名の頭に♣を表示。
- ◎再録作品は、『 』で表示。
- ◎『ガロ』以外からの転載作品は、初出と見なした。
- ◎「入選作品」は、題名の最後に★を表示。
- ◎作者名は、基本的に初登場時の名前で、作品を整理。  
複数のペンネームがある方は、初登場の名前の項目で整理。
- ◎対談や、カットなどは、完全に網羅できておりません。



## 『ガロ曼陀羅』図版使用図版出典一覧

- P 19 ©水木しげる「君、富みたもうことなかれ」より  
 P 20 ©つげ義春「紅い花」より  
 P 21 エミー賞の盾  
 P 22 ©つげ義春「李さん一家」より  
 P 23 ©青柳裕介「よさこい節」(青林堂刊)より  
 P 24 ©村野守美「昇り風」より  
 P 26 ©佐々木マキ「ビルクス街異聞」より  
 P 27 © 〃 「よくあるはなし」より  
 P 28 ©安部慎一「無頼の面影」より  
 P 29 © 〃 「やさしい人」より  
 P 31 ©杉浦日向子「二つ枕」より  
 P 35 ©矢口高雄「長持唄考」より  
 P 40 ©永島慎二(自画像)／「漂流者たち」より  
 P 44 あがた森魚主演・監督作品「僕たちは天使じゃない」より  
 P 46 ©鈴木翁二「床助あたりで」より  
 P 47 © 〃 「雨の色」より  
 P 48-9 ©赤瀬川原平「円盤伝説」(青林堂刊)より  
 P 50 ©岩本久則(描き下ろし自画像)  
 P 52 ©久住昌之・泉晴紀「夜行」より  
 P 56 ©勝又進「勝又進作品集」より  
 P 58 © 〃 「かんたろ月」より  
 P 59 ©佐藤義昭(描き下ろし自画像)  
 P 69 ©白土三平 赤目プロ「カムイ伝」予告より  
 P 81 ©つげ忠男「きなこ屋のばあさん」  
 P 83 ©とま雅和(描き下ろし自画像)  
 P 84 ©菅野修「ローカル線の午後」より  
 P 88-9 ©近藤ようこ(描き下ろし自画像)／「ものろおぐ」より  
 P 96 ©つげ忠男「雨季」より  
 P100 ©蛭子能収「私はバカになりたい」より  
 P103 ©辰己ヨシヒロ「さそり」より  
 P107 ©マディ上原「電腦サイバネ KIDS」より  
 P109 ©高信太郎「勝手にコーシン」(青林堂刊)より  
 P110 ©平口広美「ぎょうざ定食の屋」より  
 P111 ©谷弘児(描き下ろし自画像)  
 P113-4 ©篠原勝之「糸姫」より  
 P115 ©古川益三(描き下ろし自画像)／「邪尼マンダラ」より  
 P116 ©ひさうちみちお(描き下ろし自画像)  
 P117 © 〃 「パースペクティブ・キッド」より  
 P119 ©川崎ゆきお『夢伝説』(青林堂刊)より  
 P121 ©土橋とし子(自画像)／「青空脳天満腹画報」より  
 P122-3 実演「不幸」より  
 P136 ©安西水丸「荒れた海辺」より  
 P137 ©奥平イラ「モダン・ラヴァーズ」より  
 P141 ©糸井重里「ぼくと弟」より  
 P141 ©糸井重里・湯村輝彦「ペンギンごはん」より  
 P142 ©湯村輝彦(描き下ろし)  
 P144 ©なざら健吾(描き下ろし自画像)  
 P149 ©安彦良和(描き下ろし自画像)  
 P150 ©スーゾー甘金(自画像)  
 P151 ©とり・みき「路上観察の逆襲」より  
 P152 ©喜国雅彦「MAHJONG まんが大王」(竹書房刊)より  
 P156 ©天久聖一(描き下ろし自画像)  
 P158 ©吉田戦車(描き下ろし自画像)  
 P159 © 〃 「伝染るんです。」①(小学館刊)より  
 P165 ©三橋乙椰「野辺は無く」より  
 P169 ©淀川さんぼ「台風小僧」「かなぶん」より  
 P170-1 ©花輪和一(描き下ろし自画像)  
 P173 ©丸尾末広「耳なし芳一(前編)」より  
 P176 ©山野一「貧困魔境伝ヒヤバカ」(青林堂刊)より  
 P177 ©計太郎(描き下ろし自画像)  
 P179 ©鴨沢祐仁「クシー君の発明」より  
 P180 ©吉田光彦「梅花二輪」より  
 P182 ©森元暢之(描き下ろし)  
 P189 ©渡辺和博「夜明けのマルジュ」より  
 P200 ©ますむらひろし「再会」より  
 P202 ©唐沢俊一(描き下ろし自画像)  
 P203 ©唐沢俊一&なをき「古書街エレジー③」より  
 P232 ©蛭子能収「AudioLife」より  
 P235 ©知久寿焼「ガロ」目次イラストより  
 P238 ©南伸坊(呉智英似顔絵)「週刊宝石」より  
 P249 ©南伸坊(上杉清文似顔絵)  
 P250-1 ©長戸雅之「里見陽子・職業私立探偵」より  
 P251 © 〃 「くたくたアクター Vol.6」より  
 P253 ©内田春菊「波のまにまに」より  
 P255 ©岡崎京子(描き下ろし自画像)  
 P256 ©安彦麻理絵「SAKURA SAKURA OKAPPA」より  
 P265 ©根本敬「タケオの世界」より  
 P266 ©しりあがり寿「ポンちゃんは人気者」より  
 P268 ©松本充代「糸口」より  
 P269 ©津野裕子「デリシャス」(青林堂刊)より  
 P270 ©みざわバン「ばんこがもうひとり」より  
 P271 ©木元ひわこ「絶対零度の微熱」より  
 P273 ©トオジョオミホ「井戸の怪」より  
 P274-5 ©やまだ紫「性悪猫」「ああせけんさま」より  
 P276 ©藤沢光男(描き下ろし自画像)  
 P277 ©池上遼一(描き下ろし自画像)

本書の実現にあたり、青林堂の皆様や、TBS ブリタニカの西脇礼門さん、堀井春比古さん、図書印刷の相川裕一さん、その他多くの方々にご尽力いただきました。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。(『ガロ』史編集委員会)

Thanks to: ビッグコミック・スピリッツ編集部(小学館)、シティロード編集部、COMIC BOX 編集部 中野書店(神田)、はなのまり、吉岡宏、中野書店(神田)／PHOTO: 木村太郎、斎藤純二、青林堂、執筆者各位



## 執筆者&証言者の方々

相原コージ  
赤瀬川原平  
青柳裕介  
あがた森魚  
秋竜山  
安彦麻理絵  
安部慎一  
東元  
天久聖一  
荒木経惟  
安西水丸  
池上遼一  
井坂洋子  
石ノ森章太郎  
石川浩司  
石川次郎  
泉晴紀  
泉谷しげる  
糸井重里  
井上誠  
内田春菊  
イタガキノブオ  
岩本久則  
上野昂志  
上杉清文  
蛭子能収  
大越孝太郎  
大槻ケンヂ  
岡崎京子  
岡留安則  
奥平イラ  
小野耕世  
勝又進  
鴨沢祐仁  
唐沢俊一

唐沢なをき  
唐十郎  
かわぐちかいじ  
川崎ゆきお  
川本三郎  
菅野修  
喜国雅彦  
木村恒久  
木元ひわこ  
久住昌之  
黒川創  
高信太郎  
香田明子  
澁太郎  
呉智英  
近藤ようこ  
斎木しげる  
さいとう・たかを  
サエキけんぞう  
桜沢エリカ  
佐々木マキ  
佐々木守  
佐藤忠男  
佐藤義昭  
沢田としき  
実相寺昭雄  
篠原勝之  
志村勝紀  
白取千夏雄  
しりあがり寿  
杉浦日向子  
杉作J太郎  
スージィ甘金  
鈴木翁二  
高市真紀

高取英  
高野慎三  
高橋聡  
滝田順子  
竹熊健太郎  
辰己ヨシヒロ  
谷弘児  
たむらしげる  
知久寿焼  
つげ忠男  
つげ義春  
土橋とし子  
津野裕子  
津山週三  
鶴見俊輔  
手塚能理子  
トオジョオミホ  
とま雅和  
とり・みき  
長井勝一  
永井豪  
永島慎二  
長谷邦夫  
長戸雅之  
なざら健彦  
根本敬  
畑中純  
花輪和一  
林静一  
原口健一郎  
羽良多平吉  
ひさうちみちお  
平口広美  
藤沢光男  
古川益三

巻上公一  
ますむらひろし  
松沢呉一  
松田哲夫  
松本充代  
マディ上原  
丸尾末広  
みうらじゅん  
みぎわパン  
水木しげる  
三橋乙擲  
南伸坊  
南端利春  
峰岸達  
村上知彦  
村瀬春樹  
村野守美  
森元暢之  
矢口高雄  
夜久弘  
矢崎泰久  
安彦良和  
谷田部周次  
やまだ紫  
山中潤  
山ノ井靖  
山野一  
山根貞男  
湯村輝彦  
吉田戦車  
吉田光彦  
淀川さんぼ  
米沢嘉博  
四方田犬彦  
渡辺和博



『ガロ』史編集委員会スタッフ

企画-----株式会社 イオン  
構成・編集-----高貴準三  
編集スタッフ-----林 慶樹  
土屋梨影子  
カバーデザイン-----南 伸坊  
本文デザイン-----溝口 活  
協力-----株式会社 青林堂  
株式会社 ツアイト

## ガロ曼陀羅

1991年7月17日 初版発行

編 者-----『ガロ』史編集委員会  
発行者-----坂本幸雄  
発行所-----株式会社 ティビーエス・ブリタニカ

〒102 東京都千代田区三番町28番地1

秀和三番町ビル

電話 販 売 (03)3238-5721  
お客様相談室 (03)3238-5711  
振替 東京 1-131334

印刷・製本-----図書印刷株式会社

©TBS-BRITANNICA,1991

ISBN 4-484-91222-8

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします



心の色さがし

ジェリー・ローズ／スー・ティム  
金子一雄訳

英国のビジネスコンサルタント夫婦がお届けする、性格判断・相性判断の数々。豊富なチャートがあなたを変える！ 定価一五〇〇円

ビジネス・ヒーローへの旅

ロブ・ルポー  
——若きビジネスマンよ、君はどう生きるか 植山周一郎訳

猛吹雪の中を下るデンバーへの車中。転職に悩むジョンに、思いがけない助言が……。ノベル仕立ての新ビジネス書。 定価一二〇〇円

おしゃべり用

心理ゲーム

パキラハウス

話につまってシーンとした場を必ず楽しく切り抜けられる、話しだしたらとまらない、会話のきっかけ三五篇。 定価一〇一〇円

おしゃべり用

心理ゲーム

パキラハウス

ベストセラーとなった前作にまさるともおとらないおもしろさ。楽しいおしゃべりは、まだまだつづく…… 定価一〇〇〇円

つつきの巻

おしゃべり用

心理ゲーム

パキラハウス

いろんな人の、さまざまな秘密をいっぱい詰めて……。さらにストロングなもりあがり、圧倒的なシリーズ第三弾。 定価一〇〇〇円

こわいの巻